

第  
6  
章

---

敗戦前後と引き揚げ

1944(昭和19)年7月、日本が「絶対国防圏」としていたマリアナ諸島のサイパン島が米軍に占領されると、日本の敗色はいよいよ濃厚になり、東条英機内閣は総辞職に追い込まれた。大本営発表の戦況と、海外から入電するニュースの乖離かいはりはますます激しくなり、本章冒頭の座談会「空襲下の同盟本社」では、当時の編集幹部が「(海外の報道への)対抗上、うそのニュースでも書かなくちゃならない。：向こうは『勝った』と放送するので、こっちも『勝った』というニュースをデッチ上げて放送していた」と、フェイクニュースを対外発信していたことを証言している。

海外から入って来た日本に不利なニュースは、国民はもちろんのこと同盟内部でも共有されることはなく、極秘の「敵性(特殊)情報」として、一握りの政府や軍幹部に提供されていた。

45年になると米軍による本土空襲が激しさを増し、3月の東京大空襲では一夜で約10万人が死亡。4月には米軍が沖縄本島に上陸した。軍当局は本土決戦に備え、長野県・松代に大本営を移転させる計画の準備を始めたため、同盟も長野県蓼科山ろくを開拓して食糧生産などの準備を始めた(『通信社史』546頁)。同盟職員による「開拓隊」も組織された。

45年8月は広島・長崎への原爆投下、ソ連の対日参戦、ポツダム宣言受諾という、終戦に至る出来事が相次ぎ、一つ一つの局面において同盟が果たした役割を知る上でも、本章の証言は重要な意味を持つ。ポツダム宣言の受諾は同月9日から10日にかけての御前会議で決まり、同盟は10日夜の米州向け放送でこれを伝えた。しかし日本国民は15日

の「玉音放送」まで知らされなかった。このあたりの経緯は本章第5節の各証言で詳しく触れられている。

海外に展開している同盟職員も「玉音放送」を耳にすることができた。電波の状態が悪く、聞き取りに難航したとの証言もある。日本軍関係者が示した反応も興味深い。台南(台湾)では憲兵隊長が「目を潤ませ」、参謀が「大声で泣き崩れ」、情報将校は「特に感情を示さずに帰って行った」という。

この時期を振り返る座談会として、『報道報国の旗の下に』には「太平洋戦争と南方(1)(2)」とは別に「終戦前後の比島」が収録されている。司会者によると「フィリピン関係だけは悲劇その他もあることなので、独立して別個にやることになった」という。戦いあるところに悲劇は付き物だが、フィリピンの場合、特に激しかった。マニラ近郊の山地で自決に追い込まれた支局員の肉親による手記は、「聖戦という名の下に踊らされ、国のためにと、非業の死を遂げた」兄への思いを巡らす。

「苦難と危機を乗り越えて―マカッサル支社局の記録(1991年刊行)」は、マカッサル(インドネシア)支社局管内の元メンバーが「後世の史料の一端」になればとまとめたものだ。南国の楽園が米軍の攻撃で一転、地獄に変わる様子などが克明に記されている。

南方各地で終戦を迎えた同盟職員は、抑留生活を送る間にも、邦人社会に向けて新聞を発行するなどの活動続け、同盟記者としての本領を発揮した。

抑留生活の誰もが待ち望んだ引き揚げ。米国から貸与された引き揚げ船のデッキから祖国を目にした際の描写は、読む者に感動を与える。船内でコレラが発生し「故国の緑を目の前にしながら」1カ月間の船内監禁を余儀なくされたとの体験談もある。

# 第1節 同盟本社で

## 座談会 空襲下の同盟本社と戦争末期から終戦まで

1965(昭和40)年2月16日

(出席者)

大平安孝 (編集局長)

田中正太郎 (連絡局長)

大森吉五郎 (調査局次長)

井上勇 (報道局次長兼社会部部长)

加藤万寿男(ますお) (戦時調査室米州部長)

長林密蔵 (経済局参事)

福岡誠一 (南方総社長)

板垣武男 (経済局長)

佐々木健児 (中華総社総社長)

船木重光 (総務局次長兼人事部長)

藤井信次郎 (地方部長) 司会

(注) 役職は大平、長林が1944(昭和19)年4月、それ以外は45年

9月時点。

❖ ❖ ❖

司会 今日(9月)は戦争末期から終戦までの間の本社の活動をいろいろと伺いたい。昭和19(1944)年6月にサイパン島に米軍が上陸し、7月には守備隊が玉砕している。これで米軍の航空基地ができて、直ちに日本が空襲にさらされることになる。その頃、東条英機内閣の総辞職が起こるわけだが、その頃から話を始めていただきたい。東条内閣の総辞職は7月18日だ。これはサイパンを失ったことが直接の原因になっているが、その前から東条内閣ではいかにという重臣、その他の動きがあつて、ついに総辞職して小磯(国昭)になった。総辞職に絡んで同盟の役割とか活動で、今まで知られていないことで話しておいた方がよいと思われることをお話し願いたい。

大森 東条内閣総辞職のとき、僕は政経部長をやっていた。あの頃は死んだ萩野(伊八)君も健在で、2人で夜中までよく働いた。長谷川(才次)、井上(勇)両君が外電関係の仕事をやっていた。非常に難しい時で、「特殊情報」<sup>183</sup>を中心とした仕事をやっていて、内閣方面でもその種の情報を非常に重視し、情報を中心にしていろいろ考えたり判断したりしていた。われわれ政経部自体は「日本は勝つ。勝たねばならぬ」という立場をとつ

ていたので、終戦後の処理などということは、当時は少しも考えなかつた。従つて東条内閣を代えなければならぬという事情にもかかわらず、

実際には「内閣は改造しないで一億総決戦<sup>21</sup>をやらなければならぬ」という方向に進んでいた。われわれは非常に苦しい立場から編集していた。

小磯内閣ができて、ヘナヘナとそのまま行つてしまわないように進めなければならぬという雰囲気、特に僕の立場から面白い話はない。

**司会** 東条内閣の倒閣運動といえ、いろいろな陰謀があつたわけですが、その辺の情報は大体入っていましたか。

**大森** 4月あたりから、われわれの所にいろいろな情報が入つていた。東条内閣では駄目だということで、いろんな運動があるというニュースは入つていた。7月では遅いということだった。僕は内閣更迭は5月と考へてやつていたが、井上君なんかは、もっと早いと言つていた。

**井上** われわれは日本が負けているニュースばかり受信していたものだから、自然、消極的にならざるを得なかつた。

**司会** 戦況が日本に不利になり、旗色が悪くなつてから出たニュースは本当に当てにならなかつたということを戦後言われた。本当の戦争の様相はどういうふうで、どの程度、同盟は把握していたのか。同盟、新聞社関係は分かつていたのか。

**井上** 海外から入ってくる傍受電信は1日に3万語くらいあつたと思う。それを僕が朝早く出社して大体8時ごろまでに目を通して分類し、発表できるものは外信へ回して翻訳する。発表できないものは留め置き、整理して印刷、「特殊情報」とする。それを参考に海外放送のプランを立てるといふのが欧米部の私たちの仕事だった。ニュースはミッドウエー海戦あたりから悪くなる一方だった。大本営発表と外国の発表が食い違うようになり、こちらで黙っているニュース、もしくは発表のないニュースを向こうがどんどん発表する。海外放送で看過できないことがしょつ

ちゅう起こる。

対抗上、うそのニュースでも書かなくちゃならない。僕なんか支那の漢口の作戦の戦況なんか自分の紙上作戦でやつたものだ。向こうのニュースはどんどん入つてくる。こちらは何も発表しない。向こうは「勝つた」と放送するので、こっちも「勝つた」というニュースをデッチ上げて放送していた。

「特殊情報」はそういうことはしないで、向こうからのニュースをそのまま整理して確か6部刷つた。保存用が1部、参謀本部、軍令部、高松宮家だと思つたが、特別注文でやつた。外務省にもやつた。翻訳はせず原文のまま渡した。社内では編集の主な局長、部長に私から口伝えで向こうの状態を伝える。その後、情報局<sup>14</sup>に出向いて当時は井口貞夫氏が第3部長だつたと思つたが、陸、海軍を集めて僕と大屋<sup>久寿雄</sup>が説明し、どういふふうに取り上げるか検討するわけだ。

私の仕事の大半は対外放送だから放送にどういふニュースを注ぎ込むか、陸、海軍の意見も入れ、こちらの意見も言つて一応の方針を立てた。社に帰つて欧米部で放送の原案をつくり、それを華文に直し、英文やフランス語に直して放送した。5、6カ国でやつていたと思つた。

**加藤** 英語、フランス語、スペイン語、それだけだった。

**大平** 対外放送について参考意見を聞くため有田(八郎)らを集めたね。あれはいつ頃か。

**井上** 帝国ホテルで古野さんが議長を務めて有田、井口、伊藤文吉、浅野(良三)を集めてやつた。

**大森** 18年の初めごろだね。

**井上** 相当長い間やつていた。

**大平** 学者もいた。

**井上** 矢部貞治。

大平 戦争は勝つんだということを書いたから、終戦と同時に新聞に4段抜きで「同盟にはこういうけしからん者がいた」とやられたね。

大森 僕とそいつをうのみにした社長だということを書いていた。

司会 小磯内閣はどうなんです。戦争をやめようということを組閣の時に考えていたのか。

大平 当時のニュースは平常と同じような方法で各クラブやなんかで取材していたが、情報局で編集局長会、政治部長会、社会部長会、経済部長会があり、そこで（政府側が）おおよその方針や何かを説明、報告していた。

月に1回ぐらいは朝日、毎日、同盟の編集局長を集めて軍務局長が戦況を報告していた。例えば「日本は今まで苦しんでいたが必ず勝つ。どいう方法で勝つか」と言うと、中島飛行機で4発の飛行機ができたので、ニューヨークに爆弾を落としてドイツに送り込むことになった」という話があったが、そういう飛行機はいつまでたっても出てこない。4発の飛行機はできることはできたが、そこまでは進めなかった。机上計画だけで勝てる、勝てるという説明をわれわれにしていたわけだ。

### 戦況不利で検閲が厳重に

司会 当時のニュース取材は、大平さんが言われたように情報局に各社の幹部を集めてやったということから、新聞界の編集部会あたりが大きな役割を果たしたわけです。ニュースの取材と同盟から出すニュースの仕組みはどういうことになっていたのですか。同盟と情報局などの意見の食い違い、行き違いがあつて、困つたと思います。

田中 戦争が激しくなるまでは、「検閲要領」みたいなものを週に1回、とうしばん謄写版刷りにしてわれわれに回してくれていた。毎週水曜日だったと思

うが、各社の整理部長を情報局に集めた。現在、兵庫県知事の金井（元彦）さんが内務省の検閲部長兼情報局の検閲関係の課長になってからは、こういう方向で原稿を見てくれとか、いろいろ注文があつた。

われわれは大体、要領をのみ込んでいるから新聞原稿を検閲に回すことはなかった。だが、戦争が激しくなるにつれ、検閲に出す原稿量が増えてきた。最後には情報局の検閲では間に合わなくて、陸軍や海軍の報道部へも同じものをすべてコピーを取って回さなきゃならない状態になった。

情報局がOK出しながら5、6分もたつと大本営から「あの記事を止めろ」などと言ってきた。地方紙に保留や取り消しを連絡したり、そうこうして2時間ぐらいしてから使ってもいいとか、ゴタゴタした時代が相当長い間続いた。最後には整理部長一人では到底仕事ができなくなつたので、各社とも査閲部長という専門の係を置くようになった。同盟では藤川（佐吉）君が専任になつてやつていた時代がありました。

朝日、毎日でも整理部長の他に査閲部長を置き、陸、海軍、情報局との折衝を専門に担当した。最後には「この記事を何段階扱いにしろ」という命令的なものまできた。地方紙からは「この記事はどのくらいに扱ったらいいだろう」と相談をかけられ、専用線に引つ張り出された。こっちは素人なんて分からないが、地方紙の整理部長も迷うわけだ。出来上がった新聞を見て、翌日叱られるわけですからね。

福岡 叱られた面白い話はありませんか。

田中 藤川君が叱られて謝りに行ったら「お前では駄目だ。長谷川（才次）を連れてこい」と言われ、長谷川君を連れて謝りに行ったこともあるそうだ。

佐々木 長谷川君はどういう関係があつたのか。

田中 外電関係の責任者。コピーを取って検閲に回すと、早いものは15

分くらいで、「あれでいい」と電話で言ってくるが、長いものは随分時間がかった。その時に「2段扱い。トップはいかん」とか言ってくる。大本営と相談するのだと思うのだが、戦況の扱いは特にそういうのが多かった。

**司会** それは東条内閣時代ですね。小磯内閣の時はどうでした。

**田中** 戦況が不利になるにつれて検閲が厳重になったということだ。

**福岡** 僕ら離れて見ていると、小磯内閣になったら少し変わるかと思ったら、かえってひどくなつたような印象を受けた。

**井上** 負けるまで変わらなかつた。

**福岡** 戦況が悪くなるにつれてひどくなつていった。

**大平** 20年春、石黒(忠篤)さんが農林大臣だったころ、古野さんは僕に命令を出した。「戦争に勝つには食べ物だ。食糧増産以外にわれわれの仕事はない。お前は食糧の増産を一生懸命やれ」ということだった。

**井上** われわれもよくその話を聞いた。

**大平** そこで関東地方の各県を歩いて地方新聞に座談会を開かせ、サツマイモの増産をしまきやいかん、今からでも遅くないと督促した。5割ぐらい増産になつたかな。

**福岡** 大した功労者だね。

**大平** 俺一人じゃない。社を挙げてそういう記事を扱っていた。それに石黒さんが農林省から3万円よこした。その金を古野さんは八ヶ岳の高原の農場に高原農法を奨励するため寄付した。古野さんは「日本全国の7割何分は山なんだ。耕地にしないで遊んでいい。この7割を耕すことによって食糧増産できる」ということをしよつちゆう言っていた。高原農法を奨励しなければならぬという考えを持っていた。

**司会** 田中さんにお伺いしたいが、ガダルカナルあたりから戦局が思わしくなく、非常時局に直面したというので、同盟も非常体制で通信、報

道活動を始め、市政会館の塔の下に非常連絡本部を設けた。いつごろから、こういう非常体制を敷いたのか。爆撃があつてからか、20年になつてからか。

**田中** それよりも1年ぐらい前だね。

**大森** 朝日館という旅館に田中さんと交代で先任者として泊まることになつて、完全に2組になつた。

**司会** 各部長も泊まつたね。

**田中** 1日置きに宿屋に交代で泊り、いつでも社に駆け付けられる体制を取つた。中には家が焼けてしまつて泊まり込んでいた人もいたが、そういう人は別としてあの宿屋が本部だった。

**井上** 外電は日比谷ホテルを使った。

**司会** 19年6月に疎開が始まり、家族も疎開する人が出てきて、同盟学寮を「疎開やもめ」に開放したと『通信社史』にある。『通信社史』には家族疎開者に補助金を出したとされているが、出しましたか。船木さんどうですか。

**船木** 覚えがないね。

**司会** 僕も疎開させたが、もらった記憶がない、一時疎開を奨励したことがあるが、その頃のことだろうか。

**大平** 学寮を独身者に開放したのはずっと後で、宿屋を借りたのはもっと早いんだ。それが焼けた。

**司会** 独身者を麻布の学寮に入れたのは『通信社史』によると19年6月になつている。

**田中** 飼手(かいて)君(なかし)の家では家族全員が疎開したので、東亜部の連中を下宿させた。そういう者に多少補助を出したんじゃないか。

## 空襲下、地下室で作業

**大森** いざというときにはすぐに社に集まってきた。空襲時には100人くらいいつも集まった。そのため市政会館は助かった。特に5月25日の大空襲の時は、僕も田中さんもいたが、このかいわいにいた人たち150人くらいが集まった。市政会館の地下室は奈落になって泥水がたまっていた。それを一列に並んでジャンジャン運んで掛けたので助かった。

**大平** 3月にもこの辺に大空襲があったね。

**大森** 3月の大空襲は10日で、この辺が中心だった。日比谷公園が真っ赤になってしまった。5月25日の空襲では都新聞が焼けた<sup>46</sup>。

**大平** その後間もなく海軍が日産会館に引越してきた。昼だったが、大きな爆弾が落ちたような音がして、「海軍が襲われた」というので慌てて見に行ったら、ボンベの破裂した音だった。

**司会** 日比谷公園に爆弾が落ちた日、古野さんが回ってきて、編集局がゴタゴタしているのを見て非常に怒った。「こんなことをしては、いざというとき、えらいことになる」と言った。それから空襲というと要員が塔の下に行くことになったと思う。それまではあそこには行かなかった。海軍の技術本部の人に来てもらって、日比谷公会堂はどのくらいの爆弾に耐えられるか見てもらった。公会堂はがらんどろになっているから何<sup>キ</sup>かの爆弾一発で参ってしまうという。塔の下なら何とかいいというので、田中さんが中心になってやったと思う。

**田中** あそこには全部ではなく、連絡局の通信部の専用線を引っ張り、スイッチ一つで切り替えられるようにしておき、空襲警報が出ると要員が地下の特別の部屋へ行って作業をした。地下のエレベーターの片側に小さな部屋があるので、それを2部屋ほどつぶして使った。これははず

と後のような気がする。

**大平** 僕は5月の大空襲のときはいなかった。海軍の鹿屋特攻隊を見てくれというので、海野(稔)君と鹿屋へ行ってた。1カ月くらい鹿屋にいて、それから九州、広島を回った。鹿屋にいたら、田中さんから僕の家が焼けたという電報をもらって帰ってきたが、家は焼けずに助かっていた。

**田中** そんなことあったかね。

**大森** 塔の下には1年といなかったように思うね。

**田中** 地下室は空襲になると常時使われていたと思う。安全かどうか分からなかったが。

**司会** 『通信社史』で見ると、当時キャッチしていたのはロイターの極東向け、南米向け、米国向け、サンフランシスコからのU.S.I.S、A.P、重慶、延安からの放送、沖繩からのサンフランシスコ向けなどとなっていますが、大体こんなところですか。

**井上** それらが主力だっただろう、上福岡と愛宕山<sup>あたご</sup>の両方で受信していたんじゃないかね。

**司会** 愛宕山も、ある時期に焼けた。

**井上** 焼けたかもしれないね。最も使っていたのはA.P、U.P、ロイター、アパス<sup>77</sup>。タスも受信していたし、D.N.B<sup>238</sup>があったね。

**司会** 最後まで絶やさなかったのか。

**井上** 最後には受信状態も悪くなった。人員も足りなくなりました。分量がすぐあつたと思う。大きなところは最後まで受信していた。

**加藤** 終戦まで受信していた。

**井上** 声の方はNHKでとって回っていたと思う。NHKに人を出して協力してやった。

**司会** こちらからの放送はどこが聞いていましたか。



井上 どこが聞いていたかは分からないが、ポツダム宣言受諾のときなんか、出してすぐ反響があったね。放送してほんの少力で、日本が降伏したというのが放送になって出てきた。

福岡 はっきり覚えているが、8月10日の午後8時だね。昭南(シンガポール)から人が来るので(サイゴン現ホーチミン)のオフイスで待っていた。そうしたら8時の英文だと言って持ってきたのを何の気なしに見たら、いきなりそのニュースだった。

井上 僕らは出す場合に困った。南方に伝わったら困る。敵の耳にだけ入ってほしいというんだから非常に苦労した。どのような時間に何語で出すかと。

福岡 立派な英語で来たからしようがない。ちょうどロンドンの正午で、オフイスはランチタイム。みんな外へ出ていて、ピカデリーの電光掲示にそれが出た。受け取った時間が非常にはっきり分かる。それが僕らのところに同じシステムで入ってきた。

大平 陸軍もそれを聞いた。俺のところは親泊(朝省中佐が「お前のところはけしからん」と言って来たので、長谷川君に会ってもらった。あれは11日だったと思う。来たのは昼ごろだった。

大森 とにかくうるさかった。

司会 普通ならうるさいぐらいで済むわけがないんだが、陸軍も力がなくなっていたんだろう。

井上 覚えているが、あの時、ウイスキー3本もらって編集室の陰でこっそり飲んで、われわれの仕事は終わったと言っていた。

## 「敵性情報」を配布

司会 前に戻って加藤さんひとつ。

加藤 僕ら戦争は米国で迎えて、17年の夏だったと思うが帰ってきた。そのうち海外局が18年にできて対外宣伝の仕事をやっていた。松本(重治)さんが局長で、僕は次長、井上君とか安達(鶴太郎)君とか部長がたくさんいて英語、フランス語、スペイン語で対外宣伝をやっていた。膨大な人数で、(日系二世もたくさんいた。戦後この人たちはAPやUPに散らばったが、NHKがそういう人を一番集めていた。東京ローズも同盟にいた。膨大な組織だった。NHKと密接な関係を取り、人間の交流もやったと思う。

しかし最後の頃になって、古野さんに「思想が悪い。自由主義者」と叱られ、海外局から追っ払われ、19年に戦時調査室へ行った。常務理事が親方で、「敵性情報」を各方面に配っていたが、取り扱いは非常にやかましかった。参謀本部、外務省、軍令部なんかをやっていた。板垣(武男)君なんかに言わせると、(海外局からは)懇慫に外されたという。支那へ旅行させて留守中に外された。

戦時調査室は、僕が関係した後に世論調査をやった。国内の動向、遺族の動向とかで、資料は何年か前まで持っていたが、堀田善衛氏が小説に書きたいというのでそっくり提供したら、彼の家が焼けて全部なくなった。惜しいことをした。

司会 『真空地帯』(野間宏)に載っている。

加藤 いろんな調査をやっていた。国民は戦争に対してどういう反響を示しているかなど際どい、危ない調査です。どのくらい敗戦の空気がみなぎっているかとかやっていたわけです。

福岡 内容を具体的に覚えていないか。

加藤 資料集めは西村(二郎)君がやっていたような気がする。

佐々木 調査は支局も使ったのですか。

加藤 支局もいろいろ使った。

大平 終戦後「赤旗」の整理部長に行ったのがいたね。

加藤 憲兵隊に引っ張られて帰ってこなかった人もいた。20年になってからだと思うが、戦時調査室のやる仕事は終戦処理であると提案したところ、一番食ってかかってきたのが長島又男だ。戦意高揚をやるべきだと言ってね。納得しない。それで僕はひそかに終戦処理の方法を2回くらいまとめて各方面に配った。これは同盟でなければできないことだ。外国の真実を調べる、国内の真実を調べるといのは自由主義の世界だ。戦時中に「敵性情報」を傍受していることは各社のそねみだった。同盟がいろんな世界情報を持っていた。対外放送と外から受信するのは同盟だけで、よそはやれなかった。

井上 朝日が「敵性情報」を取ったことがあるが、軍に見つかりにらまれた。

加藤 世界の情勢を一応同盟は知っていた。秘密保持のため、知っていたのは同盟の中でも限られていたが、戦争中最も国家的な仕事もやってきたわけだ。

井上 芦田均氏が毎週1回、社の裏口へ来てコソコソ俺を呼び出し、戦争はどうなっているかと聞きに来た。

大平 兵隊が来て外信部に座ったことがあったね。同盟が軍に占領されたと宣伝されて弱った。

井上 あの頃、同盟が持っていた情報は大したものだった。僕はフランス関係だけスクラップにして取っておいたら、すごい量になった。それを使って4冊本を書いた。

加藤 戦時調査室がやった調査は、国民の思想動向、戦争に対する思想動向、戦争に飽きてきたとかの世論調査だが、一人一人に会うのではなく、調査方法は考えてみるとかなりズサンだったかもしれない。うわさとかも印刷して配った。そういう情報を集める仕事は他ではできなかった

ただろうと思う。

大森 帝国ホテルの会合には古野さんを中心にあなた（加藤氏）も出ていたのでご承知だが、有田八郎、井口貞夫氏らが口をそろえて悲観論を唱えていた。古野さんはその場では一言半句も悲観的なことは言わなかった。僕は政経部長という立場で戦争に勝たなきゃならないという姿勢を取っていたので勝つ方のことばかり言っていたが、加藤さんは負ける方を言っていた。

全部引き揚げて古野さんと2人きりになったら「君はあれでいいんだよ」と言ったら後は何も言わない。負けたときに辞めればいいんだから。政経部長の辞任などはもちろん問題ではなかったが、社長も1年以上も前から負けたときの処理を考えてやっていたんだね。いろいろな人を使って同盟は実に多彩な活動をしていた。

加藤 僕らは「敵性情報」を扱い、古野さんに「負けに向かっているから窓口を開けておかなくてはいけない」などとゴタゴタ言ったが、上に立つ人は慎重なんだね。僕は経営者ではなかったから、その頃は分からなかった。ずいぶん分からず屋だと思った。

最後に一つ言いたい。僕は早く戦争を終結したらどうかと思っていた。それは同盟の仕事だと思っていた。「特殊情報」なり、国内の情勢から、このままでは国民感情からいっても終戦できない。それで陛下に勅語ではなしに口語で国民に訴えて戦争を終わらせなきゃならないと、宮内省の松平（慶民）式部長官に話に行った。松平さんだけでは危ないと思ひ、若い人に働き掛けようと、吉川（式部官）という松平さんの娘婿にも話をした。宮内省だけでなく各方面から働き掛けてもらおうと、古野さんにも話をしに行った。

松方（三郎）氏が満州から引き揚げてきて古野さんの部屋にいた。あれは8月の初めのような気がする。そこで松方さんにも古野さんにも話し

た。当時、宮内大臣だった石渡莊太郎氏の所に行ってくれと古野さんに頼んだが、行ってくれたかどうか分からない。僕が1人でそういうことをやっていたとは思わない。そういう人が何人かいたかもしれない。「敵性情報」を見てみると、世論から見て終戦は近いと思いい、そういうことをやった。これは初めて言った。

**大平** 負け戦になってきた頃、憲兵隊が同盟にもいろんな調査にきた。陸奥(陽之助)はどうしてもスパイだと言う。「彼をあなたの方で監視してくれなきゃ困る。彼は毎日帰るところが違う」と言うんだ。「彼は伯爵の御曹司だし、お金もある。男ぶりもいいから方々に帰ったっていいじゃないか」と言っても「絶対にはスパイだ」と言ってるね。

**加藤** それから彼は病気で休んだが、至る所に家があった。

**大平** 敗戦論者ではあった。

**板垣** 敗戦論者というのは誤解を招くよ。

**大平** 負けるといふ人は当時、敗戦論者という言葉を使っていた。

**司会** 井上さん、対外活動関係でもう少し。報道委員会の件はどうですか。

**井上** あれは随分前ですよ。私が欧米部長になってからすぐです。毎朝1時間、役所が始まると同時に井口の部屋でやった。井口の下にカナダ公使をやった稲垣という人もいた。陸、海軍から誰が出ていたか分からないが、和気あいあいの会で、言いたいことを言っていた。

**福岡** 「敵性情報」はどういうふうな受け取られていたのか。

**井上** われわれが知っている範囲では、どうしろとか、ああしろとかは言わんです。

**司会** 「敵性情報」の話が出たが、社内でも毎朝、井上さんが各部長を集めてレクチャーする。20年ごろ私が地方部長当時、地方紙の支局長を集めて私からその話をしろと言われたが、社内の部長に言うようにあか

らさまには言えないので、際どいところは抑えて話した。地方紙といえども商売だから、矛盾のあるところは突っ込んできて弱った。

はっきり日は覚えていませんが、おそらく8月10日ごろだと思います。警視庁から警部が来て地方部長に会いたいというので、情報でも聞きたいのだろうと思って会議室へ行くと、忙しいところ済まないが警視庁に同行願いたいという。私はその時、敵情を新聞社の連中に話したのを連中が漏らしたと思って頭にきた。

日本は手を上げて戦争が済むということが分かっていたから、今まで以上に臆病になって、ここで放り込まれたらいかんと思いい、田中さんにこういうわけで警視庁へ行くが、こういうことになるか後の結果を頼むといって行った。検閲課長が出てきて、「実は警視庁の外事課の担当者今非常に忙しいので私が頼まれた。同盟通信は日本がいよいよポツダム宣言を受諾して終戦に持ち込むことに決まった」という情報を地方に流したそうだが、現在非常にデリケートな時、そういう情報を流されると日本全国が大混乱を起こしてひどいことになる。どうしてそういうことをやったのか」と言うのだ。

「それは僕の責任範囲外だし『敵性情報』じゃない。そんな大きな問題は一地方部長の関与するものじゃない」と言う、「それじゃ誰だ」というので、そういう事実はないと思いいけれど、もしそういうわさが出た実情を知っているとすれば編集局長でしょうと言うと、それじゃ編集局長に連絡してもらおうと言って私は帰され、田中さんにそういう話をした。その後どうなったか聞きもしなかった。

これには後日談がある。共同通信になり、私が初代仙台支社長になると、仙台管区警察の本部長、部長ら幹部が、共同通信とは今後ともいろいろ連絡を取りたいと言うので、一緒に飯を食った。大野総務部長といろいろ話をしたら、終戦時、随分同盟にはお世話になったという話が出

た。当時栃木県の警察部長をやっていた人で、同盟の受信所が小山にあったので、警察でも人をやっているいろいろ連絡を取っていた。

いよいよ日本がポツダム宣言を受けることになったという外電を聞いたらしく、警察部長にえらいことになったと報告した。警察部長は「大変だ」というので、そうなった時に地方の治安をどう維持するか警保局に指示を仰いだ。中央では大騒ぎになった。警察部長は自分たちが直接外国からそういう情報を知ったとは言えない。短波の受信資格を持っていたのは法律によって同盟だけだった。従って同盟からその情報を聞いたという形でやったらしい。それが回り回って僕が引っ張られたということだ。

大平 さつき加藤君から終戦の際、古野さんに天皇陛下に申し上げてもらったという話、その後は知っているだろう。宮内大臣を務めた牧野伸顕<sup>あき</sup>から申し上げたということ。

加藤 それは知らない。

大平 武見太郎がしょっちゅう古野さんのところに来ていた。古野さんは彼に相談して、武見を通じ牧野から天皇陛下に申し上げてもらったんだ。天皇は非常に喜んで聞かれ、終戦を決意する動機になったという話だ。

長林 同盟が牧野に車を貸した。

司会 武見はだいぶ前に『文芸春秋』に当時のことを書いている。

## 敗戦論者ナンバーワン

司会 20年5月、(同盟の職員が)建設隊と推進隊の二つに分けられ総大将が古野さん。推進隊の方は同盟本来の仕事で、第一部隊長が山口で総務関係、第2が田中(内信)、第3が長谷川(外信)、第4が板垣(経済)、第5

が福井(連絡)。建設隊は第一部隊長が石部、第2大平、第3加藤、第4沼佐(隆次)となっている。私は空襲の後片付けの問題もあったかもしれないが、もっと別の背景、事情があったと思う。誰かご存じないだろうか。

加藤 僕はよく穴掘りをやらされた。麻布の学寮の方へは随分行った。仕事もなくなつたし、一つの所にみんなを集めておいては空襲のとき危ないので、半分くらいは仕事、半分くらいは穴掘りなんかやらせたんだらう。

船木 空襲や万一の場合、半分の間でもやっていきたいという古野さんの意向だった。

井上 うちの隊長は長谷川君だったが、一度も出なかった。

加藤 僕はいいところに行つた。麻布の学寮の近所には米大使館がある。あの辺には空襲はないと言っていたが、本当になかった。

佐々木 『通信社史』に片りんも出ていない事実を報告する。私は20年5月末、打ち合わせのため本社に来て、7月の終わりまで帰る飛行機の便がなく2カ月余りいた。そのときの話では、本社は空襲で通信網が非常に被害を受けて、無線の送受信に支障を来している状態にあった。

古野社長は敵の本土上陸作戦は9月から10月と想定し、本土が分断された場合、通信が途絶えないよう、相互連絡が絶えないよう、「貴様やれ」という命令があって、中華総社長<sup>あき</sup>兼本社連絡局長という内命を受けた。国通(満州国通信社)から宮沢貞男君が上京してきており、彼とも相談して、国通と中華総社間の送受信機で転用できるものは全部内地に送り届けるという方針を立てた。同時に当時、松代(長野県)に地下大本営が建設中だったので、松代へ行って連絡局の臨時本拠地というか、そういうところを一応手当てしていこうということになり、宮沢君を連れて松代に行つた。



空襲で焼けた同盟通信別館跡地を片付ける同盟の建設隊＝1945（昭和20）年7月上旬

松代に真勝寺しんしょうじという寺があり、宮沢君の菩提寺ぼだいじであった関係から住職に会い、必要な場合にはお寺をそっくり同盟に貸してくれという談判をして承諾を取り付けた。いつでも無線機を運び込みさえすれば、松代の真勝寺で商売を始められる段取りはできた。ところが不発に終わった。私が北京までたどり着いたのが7月の終わり。北京に管下の総支局長を招集し、後の打ち合わせなどを終え、本社からの迎いの飛行機を待つばかりになっていた。8月10日か11日だったと思うが、塚本松哉、パイロット君の同盟機が迎えにきてくれ、私は翌朝乗るつもりで直ちに準備に取り掛かったが、夜になって「塚本をそのまま帰らせ、貴下はとどまって万事後始末よろしく」という社長の暗号電報が届いた。それで日本もいよいよ終わりということを知った。中華総社長兼本社連絡局長という前代未聞の辞令は不発に終わった。

板垣 本当に松代へ行くつもりだったのかね。私も信州行きを申し渡されて行つた。畑も耕したし、農作物もとつた。現在時事がやっている「世界週報」、「同盟情報」は「信毎」（信濃毎日新聞）に紙を運んで刷っていた。松代は第一線で穴の中は総本部だと言っていたが、何言つてやがると思つて仕事をしていた。

福岡 18年に大東亜会議22があつて東京へ帰つてきた。チャンドラ・ボースも来ていた。僕が古野さんと2人だけになると、古野さんは「何て人間というのばかなことをやるんだろう」と言っていた。18年の秋にそういうことを言っていた。

板垣 「戦争は負ける」と言えば敗戦論者と言うなら、古野さんは敗戦論者ナンバーワンだ。絶対勝つてつこないということだったからね。

井上 僕は豪州を占領したらシドニー支局長という辞令があつた。

加藤 福岡君が南方総局長の19年9月ごろ、岩本（遺）君を引張つた。昭南かマニラに來いとね。僕は岩本さんに、昭南へ行きなさい、昭南へ行つたら何とかなるが、マニラへ行つたら死ぬと言つたんだ。なるべく昭南へ行けと言つたんだが、マニラへ行っちゃつた。死ぬと思つたから遺族のために彼の手紙をとつておいたが、終戦になって帰つてきた。君（福岡氏）も殺生なことをすると思つていた。

司会 加藤さんはミズーリ号での終戦の締めくくりの降伏文書調印式に新聞界代表で行つたのか。

加藤 米軍の厚木上陸以来、一連の動きがあつたが、取材は同盟が一切をやつた。厚木のときは海軍だったが、乱暴防止に警備をやつたが危なかつた。降伏するのはまだ早いと治安がよくなかつた。同盟関係から4、5人、他社からも来ていて、確か10人くらいで行つた。マッカーサーが来る前に米軍部隊が来て、マッカーサーが来る日も厚木にいた。マッカーサーが飛行機から降りてきたニュースは木下（秀夫）が翻訳した。僕

は行っただけだ。

ミズーリ号はその後だが、同盟関係の間は明峰(嘉夫)と僕と宮谷(長吉)というカメラマン、現在、フジテレビのカメラマンの牧島(貞二)の4人だけ。『通信社史』にその辺のことは書いていない。同盟が代表してやったと書いておいたらいいと思う。ミズーリ号に行く前夜、横浜へ行って支局の机の上で寝て、翌日、米駆逐艦でミズーリ号まで行った。われわれの食料は堅パンにサケの缶詰だけだった。他のことは何にも覚えていないが、コーヒーのいい匂いがプーンとしていた。いつも言われることだが、人間って食べ物の記憶が一番はっきりしているらしい。士官がコーヒーはどうだというので、駆逐艦でごちそうになって感激した。ミズーリ号での降伏調印の記事は、僕と明峰の名前で全国の新聞に出ている。あれは明峰が書いた。マッカーサーはシャツ姿で、兵隊もシャツ一枚。みんな同じような格好で、日本では想像できなかった。不思議でしょうがなかった。

**福岡** 兵隊と将官の見掛けが違っていると、狙われるからだ。安全のためだね。

**加藤** 一番びっくりしたのは、厚木で飛行機の中からジープが降りてきたことだ。みんなびっくりして圧倒されてしまった。僕はあの頃むくれていた。終戦までは狂人扱いされていたのが、戦争が終わった途端、「あそこへ行け」、「ここへ行け」と言うんだからね。

**司会** ミズーリ号ではどうでした。

**加藤** 同盟が降伏条約の調印に新聞記者を1人出すということで僕も行く気になっていた。千葉の疎開先からパナマ帽や一番いい洋服を持ってきて、それを着て行った。ところが今写真を見ると、ダブダブの洋服を着て並んでいた。兵隊たちがジャップ、ジャップというので気持ちが悪かった。

**板垣** 「敵性情報」の話が出たが、今もって(朝日、読売、毎日)3社が共同通信に反感を抱いているのは、同盟が「敵性情報」を独占していたことが尾を引いている。「敵性情報」を読めるように工作したのが古野さんなんだ。通信社が一つしかないから新聞代表として許されたということなのか、どうも分からない。その点を解明する必要があると思う。「敵性情報」は3社や地方紙には出していないかったのかね。

**加藤** 新聞社には一切提供しなかった。

**板垣** 内容を話してやらなかったのは手落ちだと思う。新聞社の代表としての通信社に与えられた特権なのだから。朝日、毎日といった特定の新聞社には許されない。国家の力じゃやれない。(政府が)同盟に「できるか」と言ったから同盟がやったのだ。

**加藤** 戦時調査室に他社の人も入れればよかった。

**司会** その点、手落ちだったと思う。

(新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」)

## 同盟中枢の松代移転計画

宮沢貞男(元満州国通信社着信部長)

昭和20(1945)年7月末、満州国通信社(国通)理事長塚本義隆さんから私に「至急同盟本社に出頭せよ。用件は先方で聞け」とのこと。米子飛行場に不時着して、夕刻やっと羽田に着いた。

日比谷の市政会館にある同盟本社で中華総社長佐々木健児さんにお目

にかかり、私の上京の用件を明かされた。それによると、軍の首脳は大  
本営の信州松代町（現長野市）への移駐を進めている。大本営が移駐す  
れば、同盟の連絡業務の中樞も、松代に移す腹である。君は私のもとで移  
転設営から移転後の連絡運営に助力してほしい、とのことであった。

8月2日、佐々木さんに従って、長野市の信濃毎日新聞社を訪問、今  
後の援助を依頼。翌3日、松代町を訪れ町当局に家屋の借り入れなどを  
お願いした。幸い松代には私の生家の菩提所真勝寺があり、住職を佐々  
木さんに紹介。通信機器類は寺の本堂、要員の寝泊まりは庫裏の3間を  
借りることにした。折衝を終えた佐々木さんは、大本営の位置を知りた  
いとのこと皆神山の工事現場に向かったが、途中、憲兵の尋問に遭い、  
引き返さざるを得なかった。

ところがどうしてかぎつめたのか、宿に特高氏が来訪。特高氏の情報  
で、佐々木さんも腹いっぱい日本酒にありつけた。えびす顔の佐々  
木さんの顔が昨日のように思い出される。佐々木さんは、北京郊外の通  
信所で稼働している同盟の無線電信送信機の撤収、本土移設その他で、  
ひとまず中国に帰任されるので、私も新京経由で手伝いのため北京に出  
向した。しかし8月9日、状況急変。松代移転計画は消滅した。

〔新聞通信調査会報〕第285号 1986年8月1日発行

## 蓼科高原に農場を建設

永田君人（元同盟通信通信部長）

ある日、古野伊之助社長に呼ばれ、「戦争は激しくなるだろうが、通  
信を止めることはできない。いざというときは山中に避難しても通信社  
の使命を貫かねばならない。君は信州が郷里だ。どこか適当な地を選ん  
できてくれ」と命令された。

私の郷里は中央線茅野駅から約4<sup>キ</sup>東の田舎であるが、4、5<sup>キ</sup>北に  
は蓼科高原がある。高原だが川もあり、近くには温泉旅館もあるよい所  
区有地であり、区長の顔も知っているので、行って交渉すると、天下の  
同盟通信の社長さんからの話、ぜひ社長さんのお顔を見てから決めた  
と田舎から区長や村役が同盟にやってきて古野社長に面接した。即座に  
契約、同盟第一の疎開地ができることになった。

借りた開拓地は蓼科湖<sup>26</sup>まで含む広大なものだった。直ちに同盟蓼科農  
場建設隊が編成され、社会部長の栗林農夫が隊長、副が私で、大村主計、  
三枝治市郎老、牛腸、岡田ほか20人、それに外務省から1人書記官が同  
行、蓼科に繰り込んだ。幸い本部となる空き家を手に入れ、布団などは  
休業の旅館や茅野町で購入。主食の米は蓼科高原入り口近くの北山村役  
場に人名登録し、受け取りには私と岡田君が山を下り、配給の米と大豆  
を背負って登ったのだった。草地を開墾、畑を作り、鶏を飼い、牛も2  
頭か3頭飼った。一体それらの会計は誰がやったのか、今思い出せない  
が、三枝老ではなかったか。栗さんだったか。

ペンを持つ輩<sup>やから</sup>が、鎌や鋤<sup>くわ</sup>を持って、能率が上がるわけではないが、本部  
の前の空き地には畝ができ、畑ができた。牛は夏であるから放牧で手間



長野県・蓼科高原に建設中の同盟通信蓼科農場=1945(昭和20)年8月



蓼科農場建設に従事する栗林農夫=1945(昭和20)年8月

はかからなかった。しかし大豆入りの飯は、入れる大豆が少ないものの、作業を嫌うものには、腹下りだの腹痛だのとの仮病の因ともなり、作業を休む者もいた。能率は上がらない。秋が近づく。栗林隊長の労苦は大変なものだった。

持参の短波ラジオは大きいだけで、そんなに精巧なものではなかったが、外国波が辛うじて聞けた。外務省氏は、いつも聞いていた。「ポツダム宣言を日本受諾」「日本負けた」は早く知り得た。さあ大変。すぐ、「帰る、帰る」の大騒ぎ。終戦の放送を聞いた次の日にはほとんどのがわれ勝ちに帰京。残ったのは栗林、永由、三枝、岡田の4人。帰りた。だが栗さんは「牛を放牧のままではいけない、小屋を作って帰ろう」。三枝さんは老人、岡田はどこかに隠れ家を見つけて出てこない。

結局、栗林、永由の2人で後始末の作業だ。唐松の樹を切り、青茅かりやすを刈り、柱を立て、棟や梁はりを縄でゆわえて、それに青茅を載せた屋根。ともかく牛2、3頭を入れる小屋ができ、後に残ると言う三枝老、岡田に後事を託し蓼科を下ったのは8月20日を過ぎていた。

帰途、私の生家に1泊、栗さんも親父も俳人で気が合い、俳句談義に



杯を干し合った。そのとき一石路いっせきろの書いた画仙が田舎のわが家に今もある。一石路は栗林農夫の俳号、氏は荻原井泉水の「層雲」の同人だった。新傾向の優れた俳句を残している。

〔新聞通信調査会報〕第288号 1986年11月1日発行

## 河川敷開墾し、ジャガイモ畑

田崎与喜衛よきえ（元同盟通信富山支局長）

「すぐに社へ帰ってください。社長から直々にお話があるそうです」「どうせ疎開荷物のことだろう。いつ発送されるのか、荷物は何個だか、聞いておいてくれ。おれは今忙しいんだ」「駄目です。どうしてもあなたにすぐ来いというご命令です」という交換嬢の電話。大敗していた麻雀がつかけていたときである。手を抜くのは残念だったが、社長命令とあればやむを得ない。私は本社へすっ飛んだ。総務局の部屋に入ると、総務局長の山口巖いわさんと、人事部長の浅野豊さんが待ち構えておられる。「田崎君、遅かったな。すぐに社長室へ入ってくれ」。両氏に引き立てられるようにして社長室に入ると、古野伊之助社長は、うつむいたまま飼手かいてたかし菅四、後藤丙午両君に何か訓示されている。「近く敵軍が上陸し、本土分断は必至です。そうなると、同盟はバラバラになるだろうが、その際、各支局は独立して業務を継承し、他日の統合に備えなければならぬ。君たちはその役目を引き受ける第一陣である。従って君たちの任務はきわめて重大……」

そのとき、古野さんはひよいと顔をあげて私を見つけた。そして山口さんに言った。

「巖さん、いったいこれはどうしたんだ。何のために田崎をここに連れてきたんだ」

「社長、とぼけては困りますよ。ゆうべの会議で、みんなの反対を押し切って、あなたは無理やり、田崎を富山支局長にお決めになったじゃありませんか」

「それはうっかりしてたな。ところで、田崎、お前は支局長が務まるか」

「自信はありませんが、まあ、人にやれることならできないこともないでしょう」

「そうか、それならひとつ富山支局長をやってくれ。お前には難しい注文はつけない。確か、お前は百姓の出身で、百姓の経験もあると言ってたな。富山支局には17人の支局長がいる。その連中を飢え死にさせないうつ、お前が先頭に立って開墾してくれ。お前の役割はそれだけだ」

「社長、敵が上陸して富山にやってきたときは、どうすればいいんですか」

「そうだな。富山と、お前の故郷の新潟とは隣り合わせだから歩いても帰れるな。敵がやってきたら故郷へでも逃げて帰れや」

私が現れたため、古野社長の高次元の訓示はたちまちおかしな方向へ脱線してしまった。が、誰も笑わなかった。そのとき、多分私が固辞するだろうと期待されていたらしい。山口さんと浅野さんの苦り切った顔が今でも目に浮かぶ。この素っ頓狂野郎、とんでもない失敗をしでかすのではないかと案じておられたに違いない。

それはさておき、私が富山に赴任すると間もなく終戦。どうやら逃げ帰らなくて済んだものの食糧難はいよいよ深刻となった。

私は古野さんの命令を忠実に守り、神通川の河川敷開墾に精励した。翌年にはかなりのジャガイモ畑を作り、2、3日中に収穫しようと思っていた。ところが、それが一夜のうちに全部盗まれてしまった。それから何を作っても盗まれるばかり。私も社員たちもすっかり畑作に興味を失い、もっぱら闇買いに専念した。そして焼け野原の富山も住めば都、気がついたら6年近く長居した。おかげで古野さんに開墾談を復命する機会を失ってしまった。それが今も悔まれてならない。

(「新聞通信調査会報」第203号 1979年11月1日発行)

## 本土決戦に備える

三輪啓(元同盟通信経済局内経部)

敗色いよいよ濃厚となった昭和20(1945)年1月半ばの寒い朝だった。古野伊之助社長のお供をして、板垣武男部長とともに有楽町まで歩いたのは。連れて行かれた場所は、毎日新聞会館の地下2階。げげん顔の私に社長は「市政会館が爆撃され機能を失ったときは、ここが同盟通信社の中枢、いわば第二本社である。だが、連合軍の本土上陸は、もはや必定。東部(防衛)軍が山梨の山中で岩山をくり抜き、司令部を築造しておるそうだから、一つご苦労だが、行って同盟通信社の一室を確保してくれんか」と。翌日、甲府支局に立ち寄り、頼んでおいた案内人と、急な山道を自転車を押しながら、蓼科や八ヶ岳農場を組み込んだ同盟の本土決戦態勢に想像をめぐらせたのだった。

当時、私は経済局内経部に所属し、表向きは金属記者だったが、部内が産業別専門通信の発行や、相次ぐ社員の応召で、ネコの手も借りたいほどの忙しさだったから、取材は申し訳程度で、産業別通信の校正・原稿取りや、戦時調査室から回ってくる資料の校正など、何でもやらされた。また、空襲が日常茶飯事となる19年末ごろからは、板垣部長の推挙によると思うが、社長の私設秘書的な仕事まで仰せ付かるようになった。しかし、1月27日の銀座爆撃、3月10日の下町大空襲を機に、産業別通信の編集・印刷は一部、地方に疎開することになり、私も「重工業版」と「軽工業版」の編集を任されて3月中旬、甲府支局へ出向を命ぜられ、焼夷弾しょういだんの洗礼を受け荒野と化した甲府で終戦を迎えた。

(「新聞通信調査会報」第295号 1987年6月1日発行)

## 米ス。ポークスマン、ザカライアスとの対話

井上勇(元同盟通信欧米部)

太平洋戦争中の同盟通信社の欧米部というのは、現在の各社の外信、または欧米部とは違って、海外向け放送を担当した部門で、いわば、日本のマウスピース(代弁者)だった。NHKの言葉による各国語放送と同盟のモールスによる外国語放送が当時、相携えて日本の物の考え方を海外に伝えていたのだった。

その放送の原稿作りの仕事を半年ばかりやっているうちに、戦局は次第に苛烈となって言論の統制はいよいよ厳しく、ニュースも機密ものが

多くなって、発表に手加減が必要となりだした。それは海外から入ってくるニュースに対して、特に甚だしく、今までのように、手放して右から左へ海外ニュースを流すことは不可能となり、ニュースを濾過する必要が生じてきた。同盟では情報部がその濾過の仕事を任せられ、海外ニュースについては、私が専任でこれに当たることになった。

そのころ、同盟が独占していた海外通信社のニュース受信量は大変なもので、1日何十万語あったか。正確には数えたこともないが、目分量で20万語を下る日はなかっただろう。それを早朝出社して一通り目を通し、発表できるものと、できないものを区分して、発表できるものは外信部で翻訳、編集して国内用に新聞社、放送局に流し、発表不可能なのは、幹部社員を集めて毎朝私から報告した。これを同盟社内では「井上レクチャー」と命名され、みんなから便利がらわれていた。

それが済むと、私は同僚の大屋久寿雄君と情報部の第3部に出掛けるのが日課だった。大屋は社会部出身で、今の東京タイムズの岡村二一氏の秘蔵弟子であり、大戦勃発当時はイスタンブールでバルカン探題をしていたが、帰国すると同盟からNHKに転向して海外放送の顧問をしていた。頭がかみそりのようによく切れ、洞察力と計画性に富んだ敏腕の記者だったが、惜しいことにまだ若くして、終戦後間もなく、過労がたたって世を去った。私とは無二の親友だった。

情報部第3部は海外宣伝を主管する部門で、井口貞夫氏(戦後駐米大使)が部長であり、右腕として稲垣一吉氏が采配を振るっていた。ここで毎朝、陸、海、外務、放送局、同盟通信の五者連絡会議があり、私から、その日のニュースを披露して対策を皆で討議した。

私は、その仕事のほかに、その日のニュースのうち発表しない、ごく重要なものを集めて、「未発表ニュース」を編集し、確か15部を増写版にして外務、陸軍、海軍、参謀本部、それに特に注文があつて高松宮だつ

たか1、2部配布する仕事をしていた。ときには100部を超える大冊になることもあった。

あれやこれやで、自慢すれば私は当時、こと海外のニュースに関して、日本一の通であり得たはずだった。事実は、そうではなかったろう。今もよく覚えているが、芦田均氏などよく社まで足を運ばれて、私たちから情報を聞いていかれた。きょうはまさか、と思われる大雪の日ですら、来社された熱情にうたれた記憶がある。

このような仕事をしているうちに、確か終戦の年の6月ごろだったと思う。アメリカの放送に国務省スポークスマン、ザカライアス氏が登場した。昔、東京のアメリカ大使館にいた武官ではないかという、かすかな記憶はあつたが、確かなことは誰も知らなかった。

ザカライアス氏は、日本の敗戦の必至を説いて、連合国は日本国民を敵視するものではなく、無条件降伏が、日本を救う唯一の道であることを繰り返して、繰り返して説いていた。もちろん、これは「未発表ニュース」に採録されて関係方面に配布され、情報部の打ち合わせ会でも、取り上げられて論議されたが、初めは放任されていた。

しかし、ザカライアス氏は諦めなかった。こちらはうるさくなってきた。敗戦の覚悟は、もうとつくにできていたが、私たちの微力をもっては、なんとも仕方がなかった。最悪の日の到来を首の座について待ちながら、確信のない悪態をついているだけだった。

そのとき、大屋久寿雄が言い出した。「よし、ザカライアスを利用して、アメリカの本当の腹を探ってやろうじゃないか。井上、貴様やれ。放送局はおれが引き受ける。情報局は、稲垣が何とかするだろう」

そういうことで大屋、稲垣、井上の3人で話し合った。3人の意見は一致した。情報部の打ち合わせ会では、その話はしなかったが、井口部長は諒解したと、稲垣氏から報告があつた。

こうして7月初めか6月の終わりにNHKの1階奥のスタジオで、技師と大屋と私の3人きりで、対ザカライアスの論戦の序幕が切って落とされた。第1回は元気づけに、稲垣氏がくれたウイスキーの度が過ぎて、いささか、べらんめえ口調になり、そのために予定時間におさまらず、大屋が苦い顔をして「これから貴様は禁酒だぞ」と脅されたのを覚えている。

私たちは、この対米問答を通じて、ポツダム宣言の意味するものが分かったと思った。ザカライアスは私との対談が回を進めるにつれて、言葉遣いが打ちとけてゆき、友情が深まって行ったようなことを書いているらしいけれど、私は、それを意識したわけではなかった。

私はこの放送の話を、当時、秘密にする必要を感じていたわけではなかったが、触れ回る必要も感じなかった。仲間3人は、向こうから回答がある度に、次の返事をどうすべきか相談した。井口部長は、もちろん、干渉がましいことはひと言もいわなかった。軍部の方でも、知ってか知らずか、何も言っただけでなかった。

そして、ポツダム宣言受諾の方針が決まり、対米回答が発せられた。折り返してのアメリカの返事に対する日本側の回答が遅れて、米国側はいろいろしだした。ザカライアスは、日本は果たして無条件降伏をする意思があるのかどうか反問してきた。

私はそれに対して、歴史あつて初めて敗戦の悲しみを味わう日本国民の感情の激動と、事態を平静のうちに取り運ぼうとする政府の苦衷を訴えた。確か8月12日だった。アメリカの週刊誌「タイム」が引用したのはこの放送で、私とザカライアスのテタテ(フランス語で一対一の対話のこと)は、これで終わった。

ザカライアスとの問答は、多分10回ぐらい、1回30分ずつ続いたであろう。正確なことは覚えていない。話した内容も大体の感じが残ってい

るだけで、事実は忘れてしまった。ザカライアスの著書には記されていると思うが、今さら、それを読んでみる気持ちにもならない。

この話は、大体、今述べた通りのいきさつで、そこには「英雄的」なものもない。私としては、アメリカの国務省スポークスマンを相手に、ありのまま正直に、私の理解する日本の国民感情を語り、互いに誤解を避けようと努めてみただけのことであり、これが日米の終戦に、どのような影響を持ったか、持たなかったか考えてみたこともない。

ただ、8月12日の放送を終わって、私は、日ごろ信頼していたある陸軍少佐の事務所、今アメリカ大使館が使っている旧満鉄ビルを訪れた。日本の敗戦、降伏の事実を教えてやろうと思った。単なる親切気だった。しかし、相手は、そうは取ってくれなかった。私はたちまち部屋に鍵をかけられ、監禁されてしまった。番兵がつけられた。3時間もたつて、少佐は悄然として帰ってきた。そして「陸軍省に行ってきた。君は帰れ」と言った。このエピソードが、ただ一つ、そうか、私のしていたことは、危ないことだったのかもしれないと私に思いつかせた。

(「新聞通信調査会報」第2号 1963年2月1日発行)

## 第2節 大陸撤退へ

### 終戦で单身者は日本料理屋跡に収容

西井武好(元同盟通信華北総局写真部)

私が北千鳥従軍から命からがら同盟通信東京本社へ帰ってきたのは昭和19(1944)年12月。東京は毎日のように空襲警報が鳴り響いていた頃であった。無事帰還し、まだ1カ月もたないのに、今度は北京へ行ってくれとの社命が出た。女房、子供は高知県の方へ疎開中だし、東京も連日の空襲。どこで死ぬのも同じだ、「人間いたるところ青山あり」と決心し、単身行くことにした。

下関から関釜連絡船に乗る前夜、当時福岡支社勤務だった同僚、飯山秀徳カメラマンが飛び切り上等の食事をごちそうしてくれたことを忘れられない。朝鮮半島を縦断、南満州鉄道に乗ったとき、領事警察官が車内臨検と称して威張りちらし、乗客を虫けらのように扱っていたことも忘れられない。

北京に到着したのは20年の1月初旬、寒い朝だった。東堂子胡同19号にあった同盟通信華北総局に赴任した。当時の総局長は鈴木幸次郎さん、編集部長が宮本基さん、通信部長が芳賀勇さん、総務部長が猪俣芳雄さん

ん、写真部長は寺尾順佑さん。

写真部には私のほかに大坂藤太郎さん、それに中国人のカメラマンと雑用係の中国人少年がいた。職場も住居も同じ敷地内。職場にはストーブがあったが、住居にはなんの暖房設備もなかった。土壁に囲まれた細長い部屋にベッドと木机が置いてあるだけ。

### 老河口作戦に従軍

在勤中は北京近郊へ精力的に取材に出た。万寿山、玉泉山など。太原へ行く途中は、列車が八路軍(現在の中国軍の前身)の襲撃を受けるかもしれないと緊張したものだ。そして5月、おそらく日本軍の中国での最後の作戦行動だったと思われる「老河口作戦」に従軍した。リポーターは石崎龍君だった。

北京を出発し、列車で鄭州へ向かう途中、すれ違いの列車に同僚カメラマン石井彰君(後に富士フィルム宣伝部長)の姿を見た。大声で名前を呼んでみたが、通じなかった。やがて河南省へ。鄭州が近付く。夕暮れ迫るころ、黄河鉄橋を渡った。初めて見る黄河。満々と水をたたえた大黄河。水面に輝く夕日が美しく映えて見えた。

鄭州で降り、軍用トラックで最前線へ向かったとき、電通時代の先輩

山本清さんと出会った。さて前線へ出たものの、日本軍の行動は制約されていた。当時の中国での制空権は在華米空軍に握られ、日本軍の昼間の行軍は全くできなかった。夜間行軍の連続だった。トラックで移動中、突然米軍機の機銃掃射を受けた。その度にトラックから飛び下り、麦畑へ身を潜める。全く生きた心地はしなかった。そのような状況の中でも、作戦目的の老河口空軍基地奪取は達成することができた。

作戦を終え、北京へ帰還したのは6月下旬だった。そのころは既に、「沖繩で激戦」「本土決戦」などのニュースが相次いでいた。やがて8月15日、ついに終戦。「玉音放送」は総局で聴く。

戦争には負けたが、当時、身に迫る危機感はなかった。それというのも蒋介石総統が、在華日本人の生命の保証をいち早く声明したからであった。ソ連軍に占領された旧満州地区にいた日本人の情報が入る中で、われわれは幸運だったかもしれない。しかし、敗戦国民の屈辱はやはりいやというほど思い知らされた。第一は、同盟通信華北総局が接收される時、昨日まで同盟の指揮下にあった中国通信の記者が土足のまま社内に入り、居丈高にわれわれをアゴで使い始めたこと。全く主客転倒で、つくづく敗戦国新聞記者の思いであった。

終戦後、数日が経過。われわれ単身赴任男子十数人は、北京市内の「一楽」という日本料理屋跡に收容された。一楽での生活は手持ち無沙汰の毎日が続いた。夜間外出は禁止されたが、昼間は自由に行動できた。近くの東安市場、王府井<sup>ワンフーヰン</sup>などへ遊びに行き、<sup>チヨビ券</sup>（当時の日本軍票<sup>19</sup>）を持っていれば何でも買うことができた。

一応收容の形ではあったが、比較的のんびりした生活だった。ところがある夜、中国人兵士が乱入しようとする騒ぎが起きた。一楽には日本人芸者が何人かいた。それを狙って乱入しようとしたのだ。われわれの仲間にも勇敢な男がいて終始これに抵抗し、堅く門を閉ざしたまま、つ

いに防ぎ通した。

そのうち日を追うごとに中国での敗戦処理も進み、やがてわれわれは北京郊外の西郊へ移動することになる。ここには北京にいた日本人のほとんどが收容された。家屋はバラックの2階建て。広い学校の教室のようなところへ、みんなごろ寝の毎日だった。

幸い、9、10月の秋の陽気で、暑さ寒さの苦痛はまだなかった。食料もそんなに不自由しなかったと思う。同盟社員の生活の面倒は当時の鈴木総局長らが責任をもってみてくれた。收容所の周囲は有刺鉄線でガードされていたが、そのバリケードの隙間から中国人が米や肉類を売りにきていた。ここでもまだチヨビ券は通用していた。

西郊收容所で同盟通信は、やはり情報屋らしく瓦版を出していた。短波無線機でニュースを聴き、これを編集してガリ版印刷し、所内に配った。編集責任者はたしか高雄辰馬さんだったと思う。私はガリ版書きを手伝った。杉田栄三さんはそのときでも中国服を着て、毎日のように北京市内へ情報収集に出掛けていた。

## ハワイ放送から同僚の声

そのようなとき、たまたまハワイ放送が短波無線機に入った。何と高橋義樹君の「日本人捕虜の話」が聞こえる。彼は同盟通信から海軍報道班員としてマリアナ諸島へ従軍していたのだが、捕らえられてハワイに連行されていた。まだ終戦を知らないで抵抗を続ける日本軍への投降を呼びかけるべく、米軍の強制でマイクの前に立っていたのだ。「同盟通信の高橋義樹です」とはつきり聞きとれる声であった。後日、直接モクちゃん（高橋君の愛称）から聞いたことだが、マリアナ諸島では私の同僚、日野晴雄君と一緒にだったという。玉砕が間近く投降を勧めたが、日野君

は同意せず、惜しくも戦場の露と消えたとか。

西郊の收容所生活もいよいよ終わりがきた。12月初旬、そろそろ北京の寒さが身にしみるところ、まず男子単身者だけ内地送還ということになる。西郊から無蓋貨車に乗せられて天津に着く。太沽から米軍のLST(輸送船)に乗り、日本へ。12月13日、佐世保港に到着した。

「ああ、無事に祖国に帰ることができた」。さすがにうれしさがこみ上げてきた。佐世保港に入った時、目の前に停泊している旧日本海軍の軽巡洋艦の艦首に、黄金の菊の紋章が見えたのが印象的だった。

(「新聞通信調査会報」第365号 1993年4月1日発行)

## 一晩で上海の街は一変

友松敏夫(元同盟通信華中総局編集部長)

広島に原爆が投下され、次いで長崎にも落ちたその翌日、昭和20(1945)年8月10日の早朝、華中総局(上海)の受信室は、日本政府がスイスとスウェーデン駐在公使宛てにポツダム宣言受諾の訓電を発信しているのを数回にわたって傍受した。情報室長の平野国利君が、隣の部屋に寝ている私を起こして「たった今、受信室から電話があった。いよいよお手上げだな」と、訓電のアウトラインを知らせてくれた。

出社してから、皆に話したところ、案外平靜だった。しかし一夜明けて、街の様子はどうかと出てみて驚いた。上海の目抜き繁華街南京路は、通りの両側を大小無数の青天白日旗に埋め尽くされ、店舗という店

舗のショーウィンドーには大礼服を着た蒋介石總統の写真が花輪の中に飾られていた。たった一晩でこんなにもと、その手回しの良さには舌を巻いた。しかも、まだ終戦の発表があったわけでもなく、郊外には無傷のまま強力な日本軍が控えているというのにこの大胆さはどうだろう。勝ちも勝ち、負けは負け、の現実の厳しさを知らされた思いだった。

終戦の詔勅を沈痛な気持ちで聴いたこの編集室に数日後、制服を着た国府(国民党政府)軍の将校が連合国側の記者団を引きつれて、総局の接收を伝えるにきた。一行の中には、戦前サンフランシスコのAP支局で毎日のように会っていたステイターの記者もいた。これで万事終わりだと、身辺の整理をして、社員と一緒に思い出多い総局を後にした。黄浦江の川面にはようやく夕闇が迫っていた。

日清戦争以来、上海には多くの日本人が移り住むようになったが、太平洋戦争を機に、英国やフランスの租界がなくなったと同様、今また日本租界も消えようとしている。在留邦人は全員、禁足令が出て租界内に封じ込められてしまった。華中総局の宿舍は、総局の社員に加えて報道班員や漢口、南京、蘇州など長江筋から下って来た同盟通信の社員たちでいっぱいになった。そのうち、上海郊外の楊樹浦にあった日本の紡績工場か何かの職員宿舍跡が、帰国を待つ間の收容施設に充てられ、100名近くの社員が、そこで寝起きした。租界内では、家屋敷や財産を没収された邦人たちの売り食いが始まり、古着屋、古本屋、古道具屋、きんつば屋などにわか仕立てのテント張り屋台ができて、結構繁昌した。その頃だったと思う。かの有名な蒋介石總統の「報怨以德(怒みに報ゆるに徳を以てす)」という布告が中国全土に発令された。おかげで在中国の日本軍はもろろんのこと、全邦人たちも一人残らず無事帰国することができたのだった。

(「新聞通信調査会報」第291号 1987年2月1日発行)

# 忘れられない総局の中国人

豊田治助(元同盟通信中支総局)

私の上海在勤は、前期と後期とに分かれている。前期は昭和15(1940)年7月から17年10月までの2年余りで、同盟の中支総局(上海)の勤務であった。後期というのは、海軍への出向を命ぜられて、豪州作戦が始まるまで待機するかたちで、18年4月から終戦まで上海の海軍武官府に出仕していた時期である。

敗戦から1カ月ばかりは、北四川路と海寧路の角の元の総局社屋の一室で、英文部の黒沢英二さんと2人で起居を共にした。しかし国府(国民党政府)の接収が進捗し始めたので、同盟人とその家族、合わせて80人とともに楊樹浦の合宿所へ移ることとなった。ここで翌年の2月上旬の引き揚げまで、敗戦とは縁遠いような、しかも精神的には戦争の重圧から解放された生活が続けられたことは、幸運に恵まれたというべきであろう。

上海の海軍武官府は、当時バンドの英商ジャーディン・マセソンの社屋を接収していた。そんなある日、同盟総局の配信ボーイをしていた中国人のH君が面会を求めてきた。用件を聞いてみると、日増しに募るインフレのため生活が苦しいので、上海電車会社へ勤めたいのだが、何とかしてもらえないだろうか、と、真剣な顔つきで頼み込まれた。私は、もし君が辞めると、発送部が人手不足で困るのではないかと、と念を押ししたところ、このことは既に社の了解を得て許可をもらっている、と言う。

上海電車会社では、松方さんのときに総局長室へよく来訪されていた弁護士<sup>213</sup>の山田璋先生が顧問をされていることを思い出した。採用の余地

があるかどうかを尋ねてみた。幸いにも山田先生のご親切な配慮で、H君は車掌に採用してもらい念願を果たしたのである。平素、私は黄包車(人力車)に乗っていたが、ときたま、市電に乗ると、H君が車内で検札をして回っているのを見かけることがあった。こんなとき私の顔を見ると、彼は笑顔で黙礼してくれるので、ほほ笑ましい思いをしたものである。

ところが、20年の晩秋のことだが、この楊樹浦の合宿所へ突然H君が現れたのである。どうして、われわれが、ここで籠城していることを知ったのか、不思議に思うと同時にガーデン・ブリッジ辺りから、電車でここまで来るには少なくとも50分はかかる距離なのに、これを遠しとせず<sup>214</sup>にやってきてくれた好意を、私は大変うれしく感じた。

特にこちらが戦勝国で、H君の方が戦敗国の人なら、ありがちなケースであったかもしれないが、この場合は全く逆の立場に置かれているので、彼の来訪には深い感銘を受けざるを得なかった。そして彼は開口一番、「先生！何か食べたいものはないか」と言い出した。私はこの質問に、「君が見ても分かるように、同盟人は仲良くこの合宿所で暮らしているの、別段不自由なことはない。ただし仕事からは離れているので、食事は午前と夕刻の2回とることにしているが、決して誰も空腹は感じていないよ」と私は笑いながら答えた。

後は世間話をしてH君は帰って行ったのだが、それから2週間ほどたつと、今度は大きな提げ箱を持ってやってきた。どうしたのだと聞くと、「魚の刺身を伯父の店―陸戦隊の前のマーケットで魚商を営んでいることを後で説明してくれた―から手に入れてきた。新しいものだから安心して食べてほしい。日本人は刺身が好きなことを自分は知っているの、提げてきた」と言う。開けてみると、なるほど10人前よりも多い分量の刺身が入っていて、その日の夕食には久しぶりに皆で舌鼓を打つことが



できた。

このH君の話には、まだ終幕ともいふべき続きがある。H君は、日本人の引き揚げが始まったとの新聞記事を読むと、もう一度この合宿所へ現れたので、私を驚かせた。今回はいきなり、「先生の奥さんと子供は今どこにいるのか」との質問を受けた。H君は私の前期の在滬（滬は上海市のこと）時代には、社の用事で蘭心里の社宅へ幾度か来たことがあるので、私の家族の顔を知っていた。だから、こんな質問をしたのだらうと考えながら、私は次のような返事をした。「私の家は、大阪という町にあったのだが、3月の大空襲で全部焼かれてしまったので、正確なことは分からないが、多分和歌山という町に近い所に住んでいるはずである」と答えた。

すると彼は二つの包みを差し出して、これはビスケットとチョコレートだが、子供さんに持って帰ってほしい、と言いながら、私に手渡すのだった。私は喜怒哀楽を表情に出さない部類の人間なのだが、さすがにこのときはしばらく言葉もなく感動を抑えることができなかった。

その夜、私はH君との関係を振り返ってみたのだが、彼の就職問題は、私にとっては誠に簡単な事件で、極端な表現をすると、数回の電話連絡で済んだ程度のことであった。それにもかかわらず、3度にわたる心のこもった合宿所訪問は、中国人の思考の断面を見せられた思いがしたのである。三十数年を経過した現在でも、私にとっては忘れ得ない思い出に残ることであった。

〔南船北馬〕第3号 1983年1月15日発行

## 中華総社職員に敵のスパイ

菊地四郎（元同盟通信中華総社）

私の終戦は南京・同盟の中華総社<sup>14</sup>であった。昭和20（1945）年8月15日正午の「玉音放送」を悲痛な気持ちで聞いてたまった1時間後に、総社の前には早くも「京滬特別工作委員会」（重慶側の南京・上海地区地下工作隊）の武装警備が敷かれていたのは驚いた。しかもさらにわれわれを驚かせたのは、その指揮官が、何と3年間も最も忠実に華文電信主任としてわれわれとともに働いてきた馬慶雲ではないか。聞けば彼はれっきとした重慶側の陸軍少佐だったという。どうしてこんなことを？との問いかけに「とにかくこれまでお世話になった同盟の皆さんを民衆の暴動から守らなければ」との意から出たものと馬君は答えてくれた。「敵のスパイ」が情報の本元「同盟通信社」の中にいたのだから、最早、日本はすでに情報戦にも敗れていたわけである。

終戦とともにわれわれ南京同盟全員は、南京下関地区に近い城内の「集中営」に收容されたが、收容に先立って、中国憲兵隊から書籍といわず、ノートといわず日記の果てまで、こと日本語で記されたものは全部焼き捨てよ、と命令された。敗戦の身にとって命令は至上であった。われわれはそれから何日もかかって宿舎「平倉巷」の庭先で書籍を焼き続けた。私の座右の書として常に行動を共にした斎藤茂吉の一冊「寒雲」もこうして灰に帰した。いかに文学、芸術、人生などと言ってみたところで、戦争、敗戦という大きな厳しい現実の前には、すべてが無力でしかなかった。この現実はい後の私の「生き方」に基本的な「内なる革命」をもたらしたようだ。いわば私の「中国時代」は一つの自らの「歴史の

区切り」でもあったと考えている。

〔南船北馬〕創刊号 1981年11月発行

## 華南総局の仕事納め

永田武秋(元同盟通信華南総局)

終戦時における華南総局引き揚げに際しての日記にもとづいて記したいと思う。華南総局は、藤川佐吉総局長のもと、21人が一糸乱れず、終戦の8月15日から広東脱出の9月13日まで終戦処理を迅速に進めた。広衛街の社屋に踏みとどまって連日裏庭に掘った大穴で、不要物の焼却を行う一方、引き揚げる際の携行品の整理点検、特に米、味噌(粉末)、塩、醤油、缶詰など食糧を確保。そして「同盟は、いついかなる場所に臨んでも、同盟ニュースを発行する」という同盟精神と使命感から私物は最低にして、無線受信に必要な機材、特に平角3号の乾電池を多く、また速報発行に必要なガリ版、鉄筆、原紙、インク、用紙などを各自のリユックサックに詰め込めるだけ、詰め込んだのである。

従って南方行き社員たちが立ち寄って、本社に帰れるときまで、預かってくれといわれて置いて行った物品類は残さざるを得なかった。広東在留邦人7千人が抑留されている広東郊外東方6<sup>キ</sup>の梅花村竜潭地区は、日本軍の貨物廠跡で、一面の草原に数条の鉄道引き込み線と奥行き15間(約27<sup>ミ</sup>)、間口4間半の倉庫が数棟建てられていた。

もちろん7千人が、この中で起居はできないので、はみ出した人々は、

プラットホームに急造のバラックや、テントを張っての生活。飲料水の水質が悪く、需要を満たし切れず、付近のクリークの水を濾過して、間に合わせるなど環境は、すこぶる悪かったのである。

竜潭地区に、われわれ同盟一行がテントを張り、社旗を掲げたのは、居留民団より1週間を経過してであったが、一番驚いたのは、所内にデマの横行していることであった。例えば「内地に暴動が起こっている」「米1升が1000円になった」「食糧不足で40万人の餓死者が出た」などである。

外部と隔絶され新聞とてなく、なにも知り得る術がなければ、このようなことから人心の不安、動揺が起こりつつあると感じたので、危険を冒してテントの頂点にアンテナをつけた。オペレーターは本社からの対外無線同報を受信して同盟ニュースをガリ版印刷で発行、領事館および居留民団へのサービスを開始した。配信に当たっては、各区町単位で代表者が同盟テントまで毎日午後4時に受け取りにくることにして同盟ニュースの円滑な配信を期した。

この結果、抑留所内の人心不安と、動揺の空気は解消して、逐次落ち着きを取り戻すことができ、領事館や居留民団本部をはじめ、大勢の人々から「同盟さん、毎日ありがとう」と感謝される日々が引き揚げるまで続いたのである。このことは同盟通信華南総局の最後の仕事納めとして心に強く残っている。

〔新聞通信調査会報〕第291号 1987年2月1日発行

## 第3節 戦争末期の南方

### 座談会 太平洋戦争と南方(第2部)

1964(昭和39)年2月11日

(出席者)

福岡誠一 (南方総社長)

秋山操 (サイゴン支社長)

牧内正男 (バンコク支社長)

吉田松治 (昭南支社長兼電務部長)

蠟山芳郎ろうやまよしろう (ビルマ支社長心得)

清河政雄 (ジャカルタ支社編集主任)

板垣武男 (経済局長)

藤井信次郎 (地方部長)

(注) 役職はいずれも同盟通信社での1945(昭和20)年9月時点。

南方総社はシンガポール(当時は昭南と呼ばれた)とサイゴン(現ホーチミン)に置かれ、昭南、サイゴンの両支社を管轄した。

❖ ❖ ❖

司会(編集委員会) この前の座談会では南方方面や、開戦前夜から戦争が始まってからの関係の話をついた。本日は終戦前後というところに焦点を置いて、現地で終戦にどのような対処してきたか、それらの実情を知りたい。同盟の人たちはそれぞれの措置を講じられたと思う。敵軍との折衝に苦勞し、日本軍との折衝もあったと思う。

話の順序として、総司令部がサイゴンに逃げてきたところからお伺いしたい。『通信社史』で見ると、ビルマ(現ミャンマー)敗戦に伴いバンコクに対する空襲が激化してきた。そこで同盟は事務所の庭に軍と共同で大防空壕をつくり、軍無線と同居して受信を行うことにした。この間、久野茂男バンコク支局長は本社帰還を命ぜられて帰国の途に就き、後任には牧内正男が支社長として昭和20(1945)年4月着任した。5月初めにビルマから引き揚げてきた一団がバンコク支社に合流した。牧内さん、着任した当時のころをお願いしたいと思います。

牧内 東京を出発したのが4月でした。福岡さんに駆り出され、私もまだ若かったので、勇躍もういっぺん南方へ行ってみようと思えました。戦況が芳しくないで大変だろうとは思っていた。果たして台湾で上海時代の顔見知りの塚本(誠)憲兵大佐に「お前はばかなやつだ。戦局は駄

目で俺もラングーン(現ヤンゴン)から逃げてきた。軍人が逃げてきたのにジャーナリストは度胸がいいな」と言われた。

台北、高雄と一カ月ぐらいいり回っているうちに、「阿波丸<sup>26</sup>」が沖合を通って行った。これには乗るわけにはいかなかったが、やっとサイゴン行きの飛行機に乗って行った。バンコクに着き、とにかく着任した。当時、街は惨たんたるありさまだったが、社の建物はまだ残っていた。みんなよく頑張っていました。小松君、武内君、日本新聞協会にいる関瑞男君とかいて、それぞれの持ち場を守って頑張っていた。

それから「もういっぺんサイゴンに來い」という福岡さんの命令で、急いで行ったところ、「お前はハノイにしばらくいて仕事をやってくれないか」ということだった。私はバンコク支社長として支社の仕事をやりたいというお返事をした。正確にどういう言葉を使ったのか覚えていないが、そういう意味のことを申し上げて、また空襲下のバンコクに帰った。着任してバンコクの空気になじまないうちに戦局は日に日に悪化し、5月になってビルマから秋山さん、蠟山さん、その他の方々がやって来てくれた。秋山さんはサイゴンに行かれ、蠟山さんと私は一緒にバンコクで頑張った。仕事はほとんどここでやり、ガリ版、写真を出したり、タイ語に訳したニュースを新聞社に渡すとか、日本語のものは司令部とか各方面に渡すとか、業務は曲がりなりにも進行したが、その間にも空襲が頻繁にあり、タコツボに入ったりで、仕事ははかばかしくいきませんでした。

**板垣** どういう種類のをニュースにしていたのですか。

**牧内** ニュースらしいニュースはあまりない。本社から来る電報を翻訳して出すくらいでした。

**福岡** 多少、昭南(シンガポール)からも出していた。

**牧内** 当時ランパン(ラムパーン)というところがバンコクの北にあり、

そこに支局を設ける許可が出て、関君を支局長に任命したが、これは『通信社史』から抜けている。実際にはそういう状況下だから、やれなかったのだが。

**福岡** あそこへ疎開する計画だったのだね。

**牧内** ランパンは通信上必要があったのだろうか。

**福岡** あれは軍の疎開地だった。

**牧内** 技術的なものより戦局の面から必要だったんですね。

**福岡** サイゴンも爆撃は受けたが、バンコクが一番ひどかった。

**牧内** 敵の爆弾もさることながら、バンコクには毒蛇がたくさんいるんだ。頭が二つの蛇がいたりして、うっかりタコツボの中に飛び込むと、サソリなんか刺されて大変だった。バンコクは非常にいい所と思って行ったが、相当な所だった。

**司会** 蠟山さんがバンコクへ引き揚げるときの状況は、『通信社史』に「蠟山芳郎以下5名はなおモールメン(モラマイン)に踏みとどまり、通信の発行を続けた」とあるが、これは同盟自体の方針か、軍の要請があったのか。

**蠟山** そうね。5人は近藤君、東君、北村君、藤田君、沢田君。

**藤井** 敵はだいたいいたんですか。

**蠟山** そうです。ひどかったね。(秋山氏に)5人残ったのは募集したのか。

**秋山** 募集しました。軍の要請もあった。僕は残りたいことがあった。

**福岡** 蠟山君がどうしてもいなければならないということだったね。

**蠟山** その方が強かったかもしれないが、志願者を募った。それに事務所がなくてね。ちょっとした家は爆撃された後で、中心的な港だから、爆撃を受けて目ばしい建物はなかった。バプテストの学校を使った。

**秋山** お寺に入っていたわけですね。

**蠟山** バプテストの経営している小学校の一部で、雨がしのげるくらい

だったが、残っていたのでそこにいた。そんなことで秋山さんとは一緒に帰らなかった。そこでやったことは、近藤さんに頼んで何とか機械の部品を集めて通信を受ける態勢をつくることだった。それがちょっと大変な仕事で、近藤さんは大奮闘だった。部品が全然ない。第一、軍に何もない始末だった。スマランに軍司令部があり、木村兵太郎(司令官)以下がいたが、どうにもならない状態だった。北から逃れてくる敗残兵を集めて部署につけたり、装備を与えてどこに兵力を送るかということで、軍は大変だった。情報参謀がいたが、通信機械が何もないため、天下の大勢は何も分からない。私たちに早く機械をつくってくれ、その代わり物資は軍が何とか見つけてやるからということで、何カ月分かの生活費は確保した。

## 早く引き揚げる軍人

**蠟山** 私はいったん連絡のためサイゴンに行き、バンコクから終戦直前の8月1日か2日にモールメンに帰った。

**藤井** モールメンで終戦を迎えたわけですね。

**蠟山** そうです。そんなところだったし、終戦前後の感じは何もない。いかに食うか、コメを手に入れるかという問題だけだった。われわれは出発すると言ったら木村さんは、占領軍の問題の関係もあって、はっきりするまで情報をくれないかというので僕らは少し残って、その後、全部引き揚げた。

**藤井** 牧内さん、終戦までひとつお願いします。

**牧内** 同盟の本社から例のニュースを受け、いよいよ敗戦が(近いと)分かったので、当時来ていた辻(政信)参謀に早速知らせた。彼の『潜行三千里』(1950年刊行)に「同盟の支局長から終戦のことを聞いたが、そ

の時彼の顔は真っ青だった」とあるが、当時は空襲で電気も何もなく、司令部の彼の部屋に行ったが、真っ暗で人の顔が見えるような状態じゃなかった。

**板垣** 8月何日でした。終戦のニュースを知ったのは。

**福岡** あの放送は、私の記憶では8月10日だと思う。

**牧内** 10日だ。辻参謀は直ちにサイゴンの総軍に確かめに行き、帰ってきて早速、自分が英軍に処罰されることを恐れたのだ。僧院に入って坊主になり『潜行三千里』を始めている。僕らに言わせると、民間人が頑張っているのにビルマの木村さんもだいたい早く引き揚げた。軍人さんは何と早く引き揚げられるのだと思った。そこへいくと民間の人たちは最後まで頑張ったと思う。当時中村(明)将軍が第18方面軍の司令官で、僕らには割合よかった。辻参謀は当時、市街戦に備えて防衛計画を立てていたが、全くなっていなかった。あの当時のバンコクの情勢は、英軍が大きなチャーチル戦車で乗り込んでくるだろうということで、防衛体制はおさおさ怠りなかった。

終戦の15日、天皇の放送は建物の中で、軍人も民間人も一緒に聞いて、みんな涙を流した。浜田という参謀長がいて、立派な人だったが、自決して亡くなった。花谷という参謀副部長がいたが、言うことだけは大きい。大したことはなかった。そんな中で割合落ち着いて終戦を迎えたが、オーストラリアの捕虜が暴れて、われわれを襲ってきた。われわれにも武器はピストルや日本刀があったんだが、池の中に放り込んだものだから、素手では太刀打ちできなかった。蠟山さん、関君、小松君は時計を取られたが、僕は隊長と談判していたため何も取られなかった。

**蠟山** キャンプにいたときの報復と、飲み代が連中は欲しかったわけだ。日本人の宿舎を襲って、みんなを呼び集めて銃を振り回しながら服装検査して、ビンタ食らわせたり、あるいは棒などでたたいたり。その間に

別組が全部品物を集めて持って行ってしまおうということが何回もあったね。

**牧内** 何回もありましたね。もう一つこの機会にコンファームしたいことがある。終戦時、阿南(あなみ)（惟幾）陸相が宣言し、最後の一兵まで戦うということで、これを対外放送はしていないことだが、僕らの方では受けている。まだやるつもりなのかと疑問に思った。そしてある程度の迷いを感じた。

**蠟山** モールメンではその布告は知らなかったけれど、ニュースでやるぞというのはあったね。

**板垣** 対外放送ではそれはやらなかったと思います。

**秋山** 『通信社史』ではやっていないということになっていますね。

**板垣** 普通の長波でやったのを受けたんじゃないかなあ。

**牧内** 僕らのところでは受けているからね。

**板垣** 記事は出した。

**蠟山** 布告じゃなく陸相談として。細切れだが3行ぐらいのニュースで来たね。

**牧内** 『通信社史』にも出ているように、8月上旬には同盟の放送があったが、現地では一般には出さず、軍や関係者には出した。

**板垣** 他の外国のは入ってきていませんでしたか。

**牧内** 入ってきた。

**板垣** それじゃ分かっていたわけでしょう。

**蠟山** 終戦になるのかどうか、降伏するのかどうかはつきりしなかった。しかし大体の情報は分かっていた。

**牧内** 軍人なんかになんかと言ったら何するか分からないし、正式に入ってきたのは10日だからね。それから9月下旬にバンバートン(バンブートン)に蠟山さんと一緒に逃れて1カ月ぐらいたったころ、英軍

に僕と小松君、関君の3人はバンコクに出てこいと言われて行った。牢屋(らうご)にぶち込まれてしまうのではないかと思ったら、そうじゃなくニュースを出せということだった。私たちは悪運が強かったのかどうか分からないが、蠟山さんに留守を頼んでバンコクに行き、バンコクの大使館のそばの家を調達してもらって、日本語と英語のニュースを出したんです。日本人在留民と軍人のために。そして引き揚げるまで英軍の使役をさせられた。

使役といってもニュースを出すこと。バンコクで働いた10人ばかりの者はニュースから離れずに暮らしたのだから、幸せであったと思っている。その間、蠟山さんは非常にご苦労された。今でも感謝している。蠟山さんは島流しのまま。(住んでいた家は)周りが田んぼだから雨が降ると、島みたいになって周りを川が流れているような所だった。そこで初めてサソリにもやられた。こんな大きなムカデが飛ぶのも初めて見た。シューと飛んできて、僕は尻に食いつかれてしまった(笑)。

福岡さんにお伺いしたい。加藤君という人がいましたが、ご存じありませんか。われわれの支社に軍の要員か何かで来ていた。彼が終戦後引つ張られたら大変だと思って、みんなでかばった。結局は無事で済んだんですが。

**蠟山** あれは軍人じゃなかったかね。

**牧内** 特務機関だね。あなた(福岡氏)の推薦だということで、われわれは社員同様に付き合っていた。

**福岡** 僕自身どこから連れてきたのか分からない。そういう人はサイゴンにもいた。

**牧内** 本社から来たわけでもなかったが、その後どうなったか知らないだろう。今どうしているのか分からない。結局バンコクでは終戦の翌年の6月中旬に島流し組と、バンコクの使役組とが合流して「タツミ丸」

という日本の危なっかしい船に乗って九州めがけて出発し、7月3日に鹿児島に帰ってきた。

**司会** 秋山さん、福岡さん、総司令部がサイゴンに逃げて移った前後のことを中心に話を展開してもらいたいのですが。

**秋山** 僕はよく分らない。

**福岡** 総軍はマニラへ行った。そこで僕らも昭南（シンガポール）から移るということで、1度マニラへ行った。そのときは寺内（寿二）総司令官も幕僚もいて、いろいろ打ち合わせをして移る手はずを決め、昭南へ戻ってきた。ところが軍の報道部に中島という中佐がいて、僕に電話をかけてきて「あなたマニラへ行かんでよい。総軍がサイゴンに行くからマニラへ行っても意味がない」ということで、行くのをやめた。あれはいつだったか。日にちは覚えていないが、いずれにしてもマニラには行かないで、総軍が行ったサイゴンへ移った。

## 空気の違った昭南とサイゴン

**司会** それは（昭和19年）11月です。

**福岡** 11月でしたか。総軍が行くというのでサイゴンへ行くことにしたが、南方の通信網はどうしても昭南が中心なんです。それでサイゴンに移すわけにはいかなかった。機械的な設備からいっても、地理的な面からいっても。結局、サイゴンと昭南の両建てのような格好にしてみました。昭南は南方総社昭南支社、サイゴンは南方総社サイゴン支社という呼称で両建てになった。私自身も昭南におり、サイゴンにもいたということになった。実際にはいろんな関係で総社次長の福田（二）君が昭南新聞会の理事長を兼ねており、福田君は昭南を動けなかった。そこでサイゴンに私がいることになってしまい、昭南と往來していた。

8月10日の終戦の決まった日は、しばらく前からサイゴンに行っていて、その日ちょうど福田君が昭南から飛行機で来るようになった。ご承知のように、あの当時は時間を東京に合わせていた。あれは東京からの午後8時の放送だった。本来、われわれは食事か何かで支社にはいないはずなんだが、福田君の飛行機が遅れて僕は社で待っていた。そうしたら8時になって、オペレーターが英文の放送聞きましたといって届けてくれた。何気なしに見たらえらいことが書いてある。つまり降伏の通告をしたという内容なんだ。普通ならそんなに早く知らないはずだったが、そういう偶然から着電と同時に知った。

福田君が間もなく着いたのでそのニュースを知らせ、えらいことになったということになった。そのとき総軍のたいていの人間はドラットの山に行っていた。寺内総司令官も行っていたので、福田君が行って知らせることにし、その晩は福田君と飯を食った。総軍の主な者はみんなドラットへ行ってしまうって、サイゴンは空っぽで知らせる相手がいなかった。福田君を宿舍へ送って、土砂降りの中を帰ろうと思ったが、誰か知らせる人はいないかと考えていたら、インドシナの北部司令官の土橋（勇逸）氏が来ているのを思い出して、知らせようと車を引き返させた。福田君と飯を食ったために12時すぎになってしまったが、行つたころ、副官が「あなた、いいところへ来てくれた。これでしよう」と書きつけを僕に見せた。同盟出身でサイゴン放送局の英文をやっていた人が、やはりその放送を受けて、副官のところへ届けていた。副官はそれを見たが半信半疑で、司令官は2階に上がって寝てしまっているので、起こそうかどうか思案しているところだった。

僕は起こさなきゃいけないと言い、土橋氏に会って話したところ、寝耳に水のようなだった。土橋氏はフランス（駐在の武官をした人で非常にハイカラだったが、当時の情勢は全然分かっていない。僕にどうしてこ

ういうことになったのかと聞くので、「原子爆弾のためでしょうね」と言うのと、「原子爆弾とは何だ」と言って知らない。外国の放送を聞いていると、原子爆弾のことが出ていたので、知っていると思っていたら知らない。「僕らには誰もそういうことを教えてくれない」ということだった。

「同盟の放送を見ていると、広島と長崎の爆弾で被害が相当起きたが、大したことはないと言っているではないか。俺はそんな恐ろしいものとは知らなかった」というわけで、大きな箱を持ってきた。恩賜のたばこだ。「これを同盟の人に分けてやってくれ」ということでもらってきた。土橋氏は総司令部へ行くはずだったが、行かないで、翌朝、自分の隊のいるハノイへ飛行機で帰ってしまった。そのときは土橋氏をけしからんと思ったが、それは無理もないところもあったと思う。翌日、福田君がドラットへ行った。

**司会** ドラットに支局を開設し、鈴木君を支局長に任命したね。

**福岡** 鈴木君はドラットに常駐していた。15日の天皇の終戦の放送のあったときには、寺内総司令官も同盟の支局へ来て放送を聞いていた。ちょうどスカルノがインドネシアの独立の相談でドラットに来ていた。インドネシアを独立させるとい話ができている、その最後の打ち合わせに来ているところへ降伏の命令がきた。サイゴンではそのことで、福田君がちょうど来ていたから、午後の打ち合わせをして各支社局全部に一応の手配をした。手配と言っても、引き揚げに一体どれだけかかるかわからない。下手をすると4年もかかるという説もあった。船の関係もあり、少なくとも1年はかかるだろうということ、現地の事情もあるだろうけれど、総社の基本的方針としては社員全部に向こう1年分の俵給だけでなく、手当も含めた生活費を支給してくれという指令を出した。中にはそれ以上出したところもあったと思う。

**司会** それじゃ吉田昭南支社長にお願いします。終戦前後の模様を。

**吉田** 終戦のことは度々出ているようですから略しますが、相当混乱しましたね。あそこは岡部隊がおったんだが、司令部では終戦の詔書を発表させないということで大騒ぎになった。福田さんが司令部に出掛けて詔書を出させてくれと盛んに交渉した。結局、5日ぐらい温められて発表した。その間いわゆる青年参謀連中は詔書の再煥発かえつぱつをやるんだと飛行機をサイゴンまで飛ばし、寺内閣下に会うといった工作が5日ばかり続いた。

**福岡** そういう点、昭南とサイゴンは非常に空気が違っていた。サイゴンは降伏をスラスラ受け入れた。ところが昭南は全然反対で、吉田君は非常に苦労したようだったね。

### 胸に「三元敵国人使用人」の名札

**吉田** 飛行機を飛ばすということになって、寺内さんから一喝食らって初めて腹が決まった。その後は案外うまくいったと思う。そして降伏と決まると同時に軍はさっさとジョホールへ集結して引き揚げてしまった。当時、昭南支社は日本人が47名、うち5名が女性で、現地人100人ちょっとという大世帯だったから、これをどうするか非常に苦労した。軍について行くか、民間人として行動するかということ、非常に悩んだ。軍について行く方がいいんじゃないかという説もだいたあったが、結局、民間人の方がいいだろうということで、民間人と行を共にすることに決めた。シンガポールの山の中のチロンプという所に日本人のキャンプが指定されたので、ここに全員引き揚げさせた。一方報道関係者は、軍と行を共にするというので、一緒にジョホールまで行ったんです。ご存じの山崎君が先頭に立って軍と行を共にしたが、1日で悲鳴を上げて一般の日本人キャンプに合流した。女性をどうやって無事に引き揚げさせ



るか悩んだ。

間もなく英軍が上陸してきて、日本語部隊の隊長以下がすぐ乗り込んできた。もちろんこちらは白旗を揚げて恭順の意を表していたが、向こうは何をやられるか分からないので警戒していた。スムーズに協議に入り、われわれはキャンプに引き揚げることにしてひと安心していたら、「ちよつと待て。お前は残ることになっている。われわれの仕事を手伝え」と。日本人は70万人を超えるほどいる。もちろんジャワ、スマトラ、こういう方面全部入れてのことです。軍人、民間人合わせて70万人ほどいたらいいんです。これらの人を4年間ここに置くから、これに宣撫<sup>せんぷ</sup>工作をしなければならぬ。従って日本語の新聞を出す。それに必要な人員を集めろということになりました。翌日から英語屋さんと編集をやる人、文選をやる人を集めにかかった。幸い昭南新聞で邦字新聞を出していたので文選工もいた。25名をキャンプから動員してきた。

新聞を出すのに幾日かかったか記憶にないが、「世界時報」という週刊紙を10万刷りました。タブロイドですが、これを配った。引き揚げが済むまでつくるよう因果を含められてやらされた。軟禁状態みたいなものだから、働いている人の相当数が精神的におかしくなった。だいたい3カ月ぐらいうると神経衰弱になり、病院に送り込んだ人間がたくさんいた。重症の人も1人いて、剣道、柔道とも有段者で体のいい人だったが、いっぺん暴れ出すと押さえるのに苦労した。終戦のショックで精神分裂症になって入院している人が90名以上いた。引き揚げてきてすぐ治ったという軽い人もいたようだが、重症の人もだいたいぶんいたようだ。そんなことで、大体スタッフは3カ月ごとに入れ替えた。

その時は新聞だけじゃなく放送もやっていた。日本語でラジオも担当していた。この放送も引き揚げまでやっていた。放送にはキャンプから芸人を引っ張ってきてテストをして放送したり、ニュースの方はもっぱ

ら岩永信吉君が担当した。放送局も経営していたわけだ。今NHKにいる岡本アナウンサー、寺内アナウンサーをサイパンから呼び寄せて、ニュースは日本からのローマ字放送、ロイター放送を全部取って、これを翻訳して検閲を受けて出すという形だ。

われわれは終戦と同時に胸に名札を付けられた。「元敵国人使用人」という名札だった(笑)。それを付けて使役をさせられた。1週間に1回休みがあり、海岸へ行って海水浴をしたりした。海水浴へ行くのはいいのだが、南方のあの暑い海岸で1時間とか時間を切って泳げといわれても苦痛なくらいで、海水浴はありがたくなかった(笑)。それでも何となく解放感があつていいものだった。後からはああいうことは好きじゃないから、それより日本人のキャンプに遊びに連れて行ってくれと言って、1週間に1度、キャンプに連れて行ってもらい、皆さんに会って一日過ごししました。

**司会** 「元敵国人使用人」という名札は英語で書かれていたのですか。

**吉田** そうです。英語です。読めない人もいたが、実際嫌なものだった。幸いなことに、第1回の引き揚げの便で昭南の同盟陣はほとんど帰れた。確か11月だったと思う。

**牧内** バンコクはいちばん最後になった。

**吉田** 昭南では第1回の引き揚げ船に乗せてくれた。そういう仕事をしていたためだと思う。第1回の引き揚げ船で福田さんが帰った。たくさん引き揚げているから、就職運動もしてもらわなければならない。それについて福田、吉田のどちらかを早く帰してくれと交渉し、2人で相談の結果、福田さんを帰してその代わり私は残ることを覚悟していた。ところが英軍は70万人を食わせるのは大変だ。ソロバンはじいたら、米軍から「リバティ」<sup>28</sup>を借りて帰した方が得だ、日本人は早く帰した方がよい、ということになった。確か最後の引き揚げ船は翌年の8月だった

と思うが、大体それで引き揚げが完了したはずだ。

**司会** 最初から最後までそこで仕事をしていたのは何人くらいか。

**吉田** スタッフは次々に切り替えていた。3カ月ごとくらいに。初めから最後までいたのは、私はもちろんだが、岩永信吉君。彼がいたのでこの仕事が出来たようなものです。それから高橋勝雄という昭南新聞の英語屋さんもいた。この3人だけだったと思う。初めから最後まで1年間使われたのは。最初は編集の久我君、昭南新聞会<sup>26</sup>からも来ておられた。後半はいよいよ人がいなくなつて、あちこち探して英軍の飛行機で連れてきてもらいました。

**福岡** 清河君の行ったのは何月ごろですか。

**清河** 10月ですね。

**福岡** 僕も昭南行きを命じられていたんだ。

**吉田** そのことは知っていた。今まで遠慮して言わなかったが、われわれとしては福岡さんと呼んでくれということに頼んだ。軍はそれでは呼んでやろう、しかし呼んでやるが、君はもうマネジャーだから、アシスタントとして呼んでやるということなんだ。とんでもない話なんだ。断つた(笑)。それにこっちより向こうの方が楽だろうという考え方もあった。

**福岡** 4月ごろに船があり次第、昭南経由で帰国させてやるというのだから、いよいよ船が出るから明日出発しろと言ってきた時、アメーバ赤痢で寝込んでいた。昭南行きの船に乗れと言われたので、そのことを司令部に言う、「ウソだろう。行きたくないからそんなことを言っているのだらう」と英軍の軍医が僕の寝ているところへ来て診断してみると「なるほどお前は駄目だ。この薬を飲め」と言ってくれた。最近はいくらでもある錠剤の薬だった。抗生物質じゃない。僕は初めて見たのだが、その薬を3時間置きに飲め、そうしたら28時間で治るといふのだ。

そんなに早く治るのかと思つたが、飲み始めたら治っちゃつて、医学も進歩したもんだと驚いた。乗りたくないわけじゃなかったんだが、そんなわけで昭南へは行かずに済んだ。

**吉田** 幸いなことに、昭南では終戦後一人の事故もなく、全部無事に引き揚げた。新聞作っている間、一番苦労したのは、向こうで出してくれる西洋料理の主食で、非常に弱つた。西洋料理一点張りなのだ。コメの飯を食いたい、みそ汁食いたいかで神経衰弱になる人も随分いた。後ではこつちもずるくなつた。最初のうち12月ごろまでは笑顔を見せるなという指令が出ていたため、向こうの連中は絶対笑わなかったが、一緒に仕事をしているうち、クリスマスを契機に家族的になつた。記事を取りに行くとかいって食糧倉庫などを視察に行き、番をしているのが日本の兵隊だからごまかして、みそ、しょう油、コメなどをふんだんに持ち込んだりして、後ではコメを食えた。

配給の量はわれわれの想像以上だった。バター、紅茶、コンビーフなどの量は非常に多かった。バターの量を大きっぱに計算すると、両手にいっぱいくらいが1食分。そんなになかなか食べられないし、ふんだんに食料はあつた。紅茶なんかも石油缶に入れていくらでも持つてくる。割り当てられる量は多いが、向こうの食料だからおやつみたいなものだった。パンにミルク紅茶をつくってみんなで飲んでしたが、1カ月ぐらいたつたら、全員脚気<sup>か</sup>症状を起こした。

これは大変だというので軍に話したら、向こうの救急車が駆け付けてくれ、診断したら、「これは糖分過剰である」と。脚気症状ではなかった。やはりああいうところでは心の強い人がいなければならぬと岩永君ともよく話したが、われわれはこういう生活をしていても大して気にならないし、太っている。

**司会** 君たちにもお茶の時間をくれたの。

吉田 それは嚴重なんだ。勤務時間が済んで、夜までも仕事をしていると叱られた。仕事をしている方が楽なことが多い。1年も家の中にいるからね。ところがそれはいけないんだ。「あなたがやってくれといった仕事ではないか」と言うと、それは勤務時間中にベストを尽くしてやればいいんだということだ。

牧内 僕らには引き揚げるとき、お土産をくれた。おコメをくれた。

司会 どのくらい。

蠟山 ストッキングに入れてくれたね。

牧内 1人3升ぐらいあったね。鹿児島に着いたら黒木(正人)さんが来ているのでいろいろ話を聞いた。僕は(自分が)当然共同通信社に入っているものとはかき思っていたら、認識不足だった。3つくらいに分けられていた。まず共同、次は時事、その次に地方紙ということで、人も多しから今のうちから覚悟を決めると黒木さんに言われた。

蠟山 共同か時事を選べということは事実だった。

板垣 同盟通信社で所属した事業を選べということだった。編集局は全部共同。経済局も。連絡、総務局は二つに分けて、共同と時事にやった。牧内 われわれはそういうことを全然知らなかった。おかげで半年ぐらい遊んでしまった。

司会 地方の支局になると共同と時事に二つに分けるといふ考え方があった。東京みたいに編集、経済局というようにはつきり別れていなかったから、適当に人数を分けて共同と時事にやった。

蠟山 秋山さんがサイゴンに行ったのは6月ですか。

秋山 4月ごろだ。皆藤(幸蔵)君の後だから。

司会 秋山さん、何か記憶に残っていることはございませんか。

秋山 大体言い尽きましたね。

福岡 秋山君はラングーンから引き揚げたわけです。皆藤君がサイゴン

の支社長でハノイが空いていた。それで牧内君にどうだ、行ってみないかと言ったら、やはり自分はバンコクへ行きたいからと言った。秋山君はまだバンコクまで出てきていなかった。

蠟山 まだビルマにいましたね。

福岡 それで結局、秋山君にサイゴンに行ってもらった。牧内君がサイゴンへ行ってくれば、秋山君にバンコクを頼もうと思っていた。蠟山君がモールメンで頑張っていた。

### サイゴンでも新聞発行

秋山 僕は組織のできているところに行つて何もすることがなかった。

福岡 サイゴンは仕事が二つあった。支社の仕事と「陣中西貢新聞」を出していた。これは昭南の新聞のようなものだったが、サイゴンに限つて同盟が直営した。殿木圭一君らが主にやっていた。秋山君は総社の通信関係と、発行している支社としての仕事を担当した。軍との折衝なんかになると、総社と支社は区別がつかないのでね。軍との折衝は、秋山君はあまりやらなかったと思う。

終戦のときは、サイゴンはまた違った点があった。普通ならフランス軍が来るところだが、フランス軍が来ないで英印軍が来た。それが非常に遅れた。だから「陣中西貢新聞」を英印軍が来る前の8月いっぱい9月の初めに廃刊して、「同盟通信」というタブロイドの半分くらいのものを発行した。それが何と10月5日ごろまで続いた。これはちょっとどこにも例がないだろう。確か10月5日か、10日ごろまで続いた。

板垣 よく続けられたね。

福岡 そうなんです。文句を言つてくるところがない。英印軍が入つてもわれわれに干渉しない。それでそのまま発行していた。ところがあ

日、いきなりわれわれの宿舎が英軍の保安隊に襲撃され、家宅搜索された。後で事情が分かったが、近所のフランス人が密告したんです。あそこで無線の発信をしていると。それで捜査に来た。オペレーターがイヤホンを外してピーピーというモールの音を出した。その音を発信音だと思っただけですね。十数人の部屋を検査された。保安隊の隊長は英軍の大尉かなんかで物欲しそうな顔をしていた。殿木君なんか写真機を取り上げられたりした。秋山君はあのと、部屋にいたかね。

**秋山** 僕はいなかった。

**福岡** あれは10月ごろだったね。まだキャンプにも入っていなかった。さんざん捜されたが、発信機はないということで勘弁してもらった。それを機会にわれわれの存在が英印軍の司令部に認識され、僕は情報部と呼ばれた。その当時のタイムズ(ロンドン)の社長の息子のアスターという人が部長で中佐だった。その人と話した結果、「お前のやっている仕事は続けてよろしい。新聞の名前は『西貢新聞』とせよ」ということだった。僕は「それは結構だが、今まで『陣中西貢新聞』というのを発行していたので、その名前ではまずいんじゃないか」と言った。「それじゃどういう名前がいいか」と言うので、「いっそ『西貢通信』ではどうだ」と言うと、よかろうということになった。それから新聞の名前を「西貢通信」と替えて最後まで刷った。

**板垣** それは面白いね。

**福岡** その「西貢通信」をつくる人間だけ宿舎に残って、後の人は全部キャンプに入ってしまった。

**秋山** 面白い所だった。僕らキャンプに入れられたんではなくて、日本人から要求して入れてもらった。というのはフランス兵がポロポロの服装でやってきたが、負けたはずの日本人が良い生活しているもんだから宿舎を襲ってしょうがない。むしろ接收した英兵が日本人を保護する形

になり、われわれは最後まで干渉を受けなかった。あまりフランス兵が宿舎に暴れ込むから、早くキャンプをつくって入れてくれというわけだね。入れてもらったような形で、出入りも割合自由だった。

**福岡** われわれも毎日のようにキャンプへ行った。

**司会** コーヒーはふんだんに飲めたらう。

**福岡** そうですね。僕は初めキャンプに行くときはお菓子を持って行った。そうしたら高田君に「持ってきてくれるのはありがたいが、せっかく持ってくるなら酒にしてくれないか」と言われ、その後、酒に切り替えてキャンプへ運んだ。

**秋山** 現地人、支那人なんかも日本人には好感を持っていた。時々、外の支那人の店へ飯を食いに行くと、英兵、フランス兵には出さないようなごちそうを出してくれたりして、なかなか好感を持っていてくれましたね。現地人、支那人ともに。

**板垣** ベトナム人は日本人の方がよかったわけですね。

**福岡** 英印軍がサイゴンの外へ出ると、食料の調達ができないものだから、調達は日本人がやった。捕虜が食料を調達して占領軍を食わせていた。

**司会** 他には襲撃されたというようなことはなかったんですか。

**福岡** サイゴンは物情騒然で、終戦後フランス人200人近くが虐殺された。女子供を含めて。フランス人には食料を売らない。屋外で市が立ち、野菜でも何でも売っていたが、安南人も支那人もフランス人には売らない。そのためフランス人は文字どおり野草を食っていた。そこへもってきて日本人は何でも食べていたから憎まれるのは当然でしたが。

## 戦争は「当然やって負けるだろう」

司会 清河さんはいかがでしたか。

清河 私は(昭和)16年の10月末だったと記憶しているが、東条内閣ができたところ徴用でとられ、21年7月に帰ってくるまで戦争に参加していた。ちょうど東条内閣が(昭和)16年10月にできて間もなく、前総理の近衛さんが伊勢と檀原神宮を参拝するので同行せよというデスクからの命令があった。同盟から私と現在九州朝日の支社長、当時の西日本の村山君と2人でついて行った。最後に京都の都ホテルに4、5日泊まったが、ある夜1時ごろ近衛さんが帰って来て、お話しした。

長く記者クラブにいたので顔なじみではあったが、そのとき、近衛さんは淡々たる言葉で、自分が内閣を引き受けてから辞めるまでの経緯、東条内閣ができた経緯を話された。東条内閣が成立すると同時に太平洋戦争が始まるだろうと予測していたが、近衛さんは「やるだろう。そして当然やって負けるだろう」という話し方なんです。「結局負けることによつて日本は生き返るしかない」という話し方だった。こういうことを口に出してしゃべられたのは初めてなんで、われわれもびっくりしました。

近衛さんは五・一五事件で犬養さんがやられた直後、西園寺(公望)公に「お前が組閣の任に当たれ」と言われたが、そのときは断つて西園寺公に進言した。当時の状況から西園寺公の独自の判断で結局、挙国一致内閣<sup>26</sup>ができたが、とにかく五・一五事件以後、政党政治は失われた。その後いろんな形の内閣はできたが、統帥権の問題にみんなぶつかつて日本の政治は今日まで曲げられてきている。憲法を改正する以外にないが、敗戦という経過をたどらずして憲法を改正するのは不可能であるということが分かつたという言い方で、非常にはつきり言った。そういうこと

をいろんな例を挙げて、2、3時間話しました。

帰京して、その話を部内情報でデスクに渡した。無論、発表できる話ではない。話の内容を全部書いてデスクへ預けた。帰ってみると徴用令書が来ていた。当時政治部から数人とられたが、私もそのうちの1人で、ジャワ作戦<sup>223</sup>に配属されて麻布の3連隊に入った。日本を出発したのは非常に遅かったが、フィリピンの土屋部隊に配属され、ジャワ作戦に入つて最後までジャワで仕事をした。

そういう状況で行つたものだから、日本はこれではいけないという考え方もあつた。戦争が長引くと危ないという考えもあつて、できるだけ新聞の戦列に復帰したいと思い、徴用解除になるよう本社へお願いしたが、どうしても軍が放さない。そのうちジャワ作戦が済んで、当時豪州作戦をやる考えのようだったので、海軍と陸軍との話し合いで、ジャワを拠点にして対敵放送の仕事と外電傍受することになった。私にもやれということで、放送局の連中と一緒に対外放送班を作つてその仕事を終戦の3カ月ぐらい前までやつていた。その間、同盟の仕事をしてほしいということになり、半分くらいは同盟の仕事をしました。

福岡 その頃、安藤君はいなかった。

清河 安藤君は海軍で、僕らの仕事には直接参加していなかった。英語に多少関係のある人が寄り集まつて、外電の傍受と対外放送の二つの仕事をやりました。傍受の方は非常に感度が良くてロイター、UP、AP、タスと、大体全部をよほど気象条件の変化がない限り受信できました。その中から軍に必要なものを取り上げる仕事をしており、ミッドウエー作戦の失敗も仕事の関係で知つた。当時同盟の通信ではミッドウエー作戦の失敗は流れてこなかったが、相当やられたんじゃないかと思つたんですよ。深沢君が従軍しており、回ってきたのでミッドウエーの敗戦を聞いてみると、文字通りの状況で非常に強いかん口令が敷かれていて、

一言もしゃべったらいかんという状態だった。

その頃から向こうの戦果の発表とこちらの戦果の発表の食い違いがひどくなり、向こうの発表の方が確実なような考え方をしていた。この仕事に東京新聞の外報部長の鈴木健一郎という人がいて、非常に分析力のある人で、タスなんかの電報を主にして情勢分析していたが、いろんな情報を通じてみると、どうも状況が悪いということだった。そういうことで18年後半ごろから日本の状況は非常に悪いと判断、心配していた。話はそれが19年だったと思うが、福岡さんが東京へお帰りになる際にジャワを回ってお話した。当時日本では風船みたいなものを米国に飛ばしている、この風船につける爆弾が研究されている、マッチ箱一つくらいですごい爆発力を持ったもので、最後の過程で最終的にでき上がらないというふう聞いておりました。

**板垣** この話はどうそではなかった。米国に先を越されたわけだが。

**清河** そういう話を聞いていたものだから、8月になって広島が原子爆弾にやられたのを知り、これだったかと思った。

**福岡** 先にやられたわけだね。

**清河** そういう状況で19年の10月ごろから、いろんな情報を通じて非常に敗戦の機運が濃厚になってきた。飛び石作戦<sup>246</sup>は向こうの言う通りに進んでいる。この調子で行くと後は台湾、沖縄、本土という格好になるだろう、それにはどれくらいかかるだろうとみんなで話していた。最終的に終戦の詔勅<sup>しよく</sup>が出るという通信があったが、これと前後して向こうの外電は日本側との折衝の様子を出しており、だいたい本決まりになった。交渉が終わったというような報道も始めていたから、毎日参謀長のところへ夕方になると情報を持って行って話した。その当時の参謀長は山本茂一郎さんで、英国風の紳士でおとなしい人だったが、どうしても納得しなかった。終戦の詔勅が出るという同盟の連絡があったと言っても

「同盟からの連絡ということだけど、いくらでも電波だから操作できる。敵が同盟という名前を使ってやったのかもしれない。謀略かもしれない。お前も外出禁止、受信したオペレーターなんかも絶対、家に帰さんようにしておいてくれ」という調子でした。

先ほどお話にあったように、南方の状況がその当時混沌<sup>こんとん</sup>としており、ジャワ派遣軍も処置なしという状態で、参謀長と軍司令官が協議したが、総軍からの問い合わせの返事も来ない。来る返事は降伏という線が非常に強く出ていて、2カ月ぐらい前から籠城の話し合いがあり、あくまで戦うという作戦が進行していたが、首脳部は混乱状態に陥っていた。結局総軍からの返事が2、3日遅れて来て、ジャワの方は詔勅を15日から2、3日遅れて公表したという状況でした。

スカルノを中心にした独立運動が進行していたので、日本の敗戦ということから現地人がオランダ人に対する反抗と、負けた日本軍から武器を略奪しようというので、各地で暴動が起き始めた。詔勅を発表する前後は全島にわたって混乱状態に陥りました。同盟の支社局でも暴徒に軟禁されたり、襲撃されたりした所があった。ジャワの支局では半数がキャンプへ入ったが、残った半数が暴徒に襲われ、素っ裸にされたりした。幸いに生命に別条はなく、残った人も宿舎を引き揚げ、キャンプに入り終戦を迎えた。

### 戦争終結協力で感謝状

**司会** 他の方で何か補足することはありませんか。

**吉田** ちょっと言い忘れたが、終戦の時、総軍司令部から同盟の昭南支社が感謝状をもらった。これは長林(密蔵)さんにお預けしたと思うが、終戦に協力した、戦争の終結に協力した、という感謝状だ。同盟の活躍

により無血で明け渡すことができた、ということでもらったと思う。婦女子はどういうことをされるか分からんということで、軍属、一般の女の人は自決の方法を軍が訓練していた。それがこういう受け入れ態勢ができていると新聞が報道したため、流血なしに済んだということで感謝をもらった。それから最後に引き揚げるときは新聞を出した功労があったと、これまた向こうの部隊長から感謝状をもらった。「世界時報」の2号と3号を、偶然に岩永信吉君が持って帰り、数週間前に見せてもらった。それと「昭南新聞」の最後の新聞を持って帰っている。

**板垣** それは貴重なものだ。写真を撮るか何かしておく必要があるね。

**吉田** 複写を頼んでおいた。

**司会** 「世界時報」とは大きな名前をつけたものだね。

**板垣** 南方で発行した軍票は<sup>119</sup>どういう方法で回収したのか。

**福岡** 僕らの所はそのまま使っていた。

**吉田** シンガポールでは全部廃棄された。福岡さんの指令で1万円ずつ

各個人に渡したが、軍票は全部廃棄された。

**板垣** 自然消滅という形ですか。

**吉田** 英軍は「これは不通だ」と言って全部廃棄させた。

**板垣** 一切無にしてしまったということか。交換もせず、流通手段はなくなっただけのことか。

**吉田** 軍票は交換しないわけだ。

**板垣** 具体的にどういうことやったのかなあ。

**吉田** われわれのところは廃棄した。他の所はどうやったか知りませんが。

**板垣** 半分ぐらい流通している所もある。

**清河** ジャワの場合はオランダの植民地だが、敗戦と同時に英軍が入ってきた。インド部隊と豪州部隊も入ってきたが、オランダ軍は自分の国

の植民地だからギルダーにすぐ切り替えた。ところがジャワではスカルノが独立宣言した後、現地人は通貨手段を持っていないので、日本軍の通貨を切り替えて自分たちが使うと主張した。華僑が非常に多く、軍票はすぐ消え去りギルダーが復活してくると思っただけ。ところがインドネシアでは日本の軍票を使うので価値が下がらないため、ギルダーをいくら出しても、その方が価値がないという現象が起こった。物資が非常に少ないのでインフレは非常に進んだが、日本の軍票はインドネシアの独立後、通貨の代わりとしてどんどん通用した。

**吉田** シンガポールの場合は全部無効になった。少なくとも日本人の持っているものは。

**司会** もっとも、収容されていたら金を使う必要もなかっただろう。

**吉田** 軍票がどのくらい発行されたか番号がないから分からず、使用した紙は何十<sup>120</sup>だから、大体これくらいだろうという調査はしていた。現地人には何らかの方策は講じたと思う。

**板垣** 100対1とかいう割合で何とかやったんでしょね。

**吉田** そうかもしれません。日本人のは全部無効になったので火をつけてタバコをつけたり、鼻をかんだりしていた。

**福岡** インドシナでは軍票を発行しないでピアストル<sup>247</sup>を使ったので、われわれは最後まで非常に金持ちだった。余談だが、われわれは英印軍の指揮下に入ってまだ宿舎をもらう前に長屋ふうの所に入っていた。殿木君、秋山君ら3人くらいで入っていたとき、夜は物騒でフランス人が襲撃して歩くので戒厳令が敷かれた。暗くなったら外へ出られない状態のとき、私が2階にいと、バルコニーからプリーズ、プリーズと言うので、戸を開けたら、銃を担いだフランス人とインド人らしいのが3人入ってきて、いきなり僕のデスクの引き出しを引っ張りだした。金貨があっても見向きもしない。

僕は洋服ダンスの中にピアストル紙幣を3束、新聞紙に包んで入れていた。今考えてみると12万ピアストルあったが、それで賄うつもりで残していた。(3人は)それを見つけて二つ提げて下りて行こうとした。1週間ばかり前に、その界限が軍の搜索を受けたことがあった。安南人の不穏分子を掃討するというので、その搜索だろうと思ったので、下へ降りようとするから、呼び止めて受け取りをよこせと言うと、ピアストルを突き付けられてね。強盗だったんだ。強盗に受け取りよこせといって無理なものね(笑)。

清河 あ頃は混乱してましたからね。ジャカルタの支社長が松宮寛次さん。戦争が終わった後、金も預金もないので、本社とはもちろん連絡取れないし、私が銀行へ行つて金を借りなさいと言うと、「駄目だ。借りたら帰ってから返さなければならぬ。社の指示のない限り借りられない」と言う。参謀長と懇意にしていたので最初10万円借りた。それを一応みんなで分けた。当時残っている船舶のトン数で割り出してみると、だいたい日本人を送り帰すのに8年何カ月かかる計算で、最終的にその間の生活する金を確保しなければならぬと思い、また金を貸してくれと頼み都合20万円ぐらい借りた。先ほど話したように軍票がどんどん通用しているので、参謀長も簡単に貸してくれ、みんなでそれを分け合つて持っていた。キャンプへ行つた人はよかつたが、われわれは襲われて全部裸にされてしまいました。

(新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」)

## 座談会 終戦前後の比島

1964(昭和39)年3月6日  
同盟クラブにて

### (出席者)

- 牧内正男 (開戦時マニラ支局長)  
皆藤幸蔵 (戦時下マニラ支社長)  
岩本清 (終戦時マニラ支社長)  
小川優 (マニラ支社外信)  
宇佐美猪之松(マニラ支社通信)  
加藤松 (タバオ支局長)  
福岡誠一 (南方総社長)  
板垣武男 (経済局長)  
長林密蔵 (経済局参事)  
藤井信次郎(地方部長)

藤井 『通信社史』続編の資料を集める意味で同盟通信の南方関係の座談会を2回やった。フィリピン関係だけは悲劇その他もあることなので、独立して別個にやることになった。話のヤマは敗戦を迎えてからになると思う。牧内さんは戦争前のフィリピンで支局長をしており、米軍に捕まった。最初に牧内さんに戦争前夜から開戦の模様についてお話し願いたい。

牧内 私がマニラに行ったのは戦争直前で、風雲ただならない頃だった。勇名をはせていた中屋健一君が支局長をしていて若干の期間、一緒にい



たが、間もなく引き揚げた。本社から藤原文雄君が応援にやって来て「サンデー・タイムズ」という英語の新聞に同盟のニュースを流した。もちろん本職の日本語と英語でニュースを出し、現地からニュースを東京に打った。そのうちいよいよ在留邦人が引き揚げということになった。藤原君らを最後の引き揚げ船で送り、私は現地で採用した日本人若干名とフィリピン人とで残ることになった。

現地では日米戦争反対という空気が強く、マニラの町の中では排日ビラがまかれたり、シヨーウインドーに張られたりしてどうなるかと思っていた。覚悟は決まっていたし、開戦の日を待っていた。最後にはクリスタルサークルという所にいたら、フィリピン軍の兵隊が銃剣付きでドヤドヤやって来て、町の中心にあるピリビッド<sup>184</sup>という刑務所に連れて行かれた。途中、フィリピン人から「ばか」という意味のフィリピン語で罵声を浴びた。

**板垣** それはいつごろのことですか。

**牧内** 開戦当日です。そこで調べられ、われわれのいたホテルはすっかり略奪された。ピリビッドにしばらくいて、それから抑留所へ送られ、そこで日本軍の上陸を聞いた。間もなく来るだろうと日本軍の到着を待っていた。特に印象に残ったのはクリスマスの礼拝が近所の教会で始まり、非常に静かな中で賛美歌のコーラスが流れてきたことで、そのときは戦争なんか忘れませんでした。

そのうち日本軍の航空編隊がやって来て爆撃を始めた。われわれの居場所を教えておかないとやられてしまうと思い、庭に大きな日章旗を掲げて、「日本人だ、日本人だ」と手を振って知らせた。日章旗ほど簡単に作れる旗はなく、全くありがたく思った。フィリピン人は防空壕に逃げ込んでしまった。その頃はまだ日本の爆撃の命中率もよかったので、弾はわれわれのところには落ちてこなかった。フィリピン人の民兵が初め

は鉄砲を持ってわれわれを監視していたが、日本軍がリングエン湾に上陸したと聞いたら武装を解いてしまい、日本軍が上陸してきたら「同盟さんよろしく頼む」という状態だった。

いよいよ日本軍が来たというので、2、3人で連絡のため日本軍の進攻地点に行った。ちょうど先兵部隊がいて向こうも非常に喜んで感激の握手をした。日本軍がマニラに入城する前に戻ったが、途中で自動車を徴発し、日章旗を掲げたら沿道にいるフィリピン人が手を振ってお辞儀をする。日本軍の先兵が入ってきたと思ったのだ。本社から「自動車、建物を手配せよ。自動車は10台くらい」と言ってきた。

そのうち、われわれは日本軍の報道部に所属することになった。尾崎士郎、今日出海<sup>こんひでみ</sup>、石坂洋次郎、ちょっと遅れて火野葦平<sup>あしへい</sup>、三木清らも来て、仲良く日本軍のPR活動に従事し、商売の方も大手を振ってやれるようになった。同盟本社からの同報を取って英文、日本文のニュースを出した。当時、毎日新聞がフィリピンで新聞発行に当たっており、松岡洋子さんのお父さんの松岡正男さんがマニラ新聞の社長になられ、不慣れな私が、松岡正男さん相手に通信料金の交渉をやったりした。柳原平三郎も一緒にやってくれた。(ミンダナオ島の)ダバオ、セブ、(ルソン島中部の)レガスピなどに支局をつくることになり、だいぶ仕事の範囲が広がったが、軍との関係を円滑にやっていると仕事ができないというので苦労した。

**藤井** マッカーサーの敗走<sup>248</sup>当時の秘話みたいなものはありませんか。

**牧内** われわれが捕らえられているうちに、マッカーサーはマニラを無防備都市宣言してバターン半島に逃れた。コレヒドール<sup>コレヒドール</sup>要塞<sup>ようさい</sup>が落ちたのが5月です。コレヒドール作戦は高い所から見ているが、えい光弾が飛び交い、美しいと言うと語弊があるが、シヨーミみたいな戦争でした。

実際に福田君と一緒にバターン半島に行ってみると、惨たんたるもの



フィリピン・コレヒドール島マリント高地の地下要塞から白旗を掲げ投降する米兵＝1942（昭和17）年5月6日

だった。本間（雅晴）将軍の「死の行進」など私は現地で見したが、日本兵自身、食料も少なくて弱っていた。トラックはなくて歩いてるんです。捕虜が歩くのは当たり前。「バターン死の行進」と言われ、本間さんが責任を問われた。マッカーサーはプライドを傷つけられた。その辺に本間さんを厳罰にした原因があるように思います。私は戦争裁判にも疑問を持っている。マッカーサーは本間さんに対し、勲章などすべてはく奪し絞首刑にした。当時最もひどい処罰をした。

**皆藤** 本間さんは銃殺ですよ。

**牧内** そうですか。山下（奉文）大将は絞首刑だが、勲章はとられなかった。

**福岡** あれは間違いであると、現地にいた日本人の投書が朝日に出ていた。

**岩本** 行政処分みたいなものですね。

**板垣** 「バターン死の行進」<sup>249</sup>では日本人はどのくらい死んで、向こうはどのくらい死んだのか。

**牧内** 死んだのは向こうがもちろん多いが、こっちだって相当の死傷があった。向こうに比較するとこっちは少し栄養がいいから、比率としては向こうが多かった。正確な数字は出ていない。戦争中に行進させるのは当然のことだと思う。

**藤井** フィリピンの独立とその後、そのあたりを皆藤さん。

**皆藤** 私は昭和18（1943）年4月、牧内君から引き継いだ。私は支社長3人のうちじゃ一番楽をした。牧内君がすっかりお膳立てしてくれて、社はエスコルタ街の文化会館にあった。小川優君、渡辺孟ちゃんもいた。福田君もいた。みんなでどれくらいいたかね。

**小川** 10人くらいいた。

**皆藤** あなたの部下に戦後、大使になった人がいたね。

**小川** ゲレロという人で駐インドの大使です。

**皆藤** 私が行ってから開設した支局はレガスピだけ。ダバオに加藤君、セブは齊藤桂助君がいた。すっかりお膳立てができていたものだから、私は牧内さんのような苦労はしなかった。ただ私が行った当時は既に物資が不足していてコメがなく、フィリピン人従業員に何とかコメを配給しようと苦労した。軍と交渉してコメをもらったことはあったが、その他のことはまだ余裕があった。

18年3月から19年9月までいて、サイゴンへ転動した。フィリピンには戦争はなかったが、南方の戦況がだんだん悪化してきたことはフィリピン人もよく分かってきて、フィリピン人の日本人に対する態度が悪化してきた。私がある間の一番の行事は（日本の軍政下での）フィリピン独立でした。あの式典はいつでしたか。

**藤井** 18年10月ですね。

**皆藤** 当時、日本は南方で派手にやったが、フィリピン人は非常に冷たい目で見ていた。戦後、大統領になったロハスは病氣と称して(式典に)出たがらなかったが、無理に引っ張り出されて黙って出席したのを見た。それが非常に印象的だった。

**福岡** アギナルドもフィリピン独立のときにはいなかったんでしよう。

**小川** いましたよ。

**福岡** マッカーサーの回想録を見ると、マッカーサー側にいるように思われますが。

**藤井** 小川さんはフィリピンにはいつごろ行ったんですか。

**小川** 戦争が始まった翌年の6月18日に行った。赴任が遅れて牧内さんに「何をぐずぐずしているのか」と叱られた。結婚したり、台湾で待たされたりして遅くなった。着いてすぐ「赤玉」という飲み屋に入った。そこには日本の女給が来ていた。

**福岡** 「赤玉」は確か海岸にあったね。後でスパイの何とかという話があった。

**小川** そこへ行ったんだが、前の晩、日本の軍人がフィリピンの女を切ったというので、とんでもないところへ来たと思った。翌日社へ初めて出たら、すぐカスパへ行ってみたらどうかというので、例の「死の行進」を見たが、とんでもない所へ来たというのが最初の印象でした。その後、平常になってよかったが、大きな洪水があり、そのときからだいぶ状態が変わった。

**皆藤** 19年の何月だったろうか、南方軍総司令部をマニラへ移したのは。

**藤井** 寺内(寿一)さんがマニラへ移ったのは19年3月。南方軍再編成の方針が出たと『通信社史』にある。

**牧内** 視察にだけは来られた。

**藤井** フィリピンは大本営直属になったんですね。

**皆藤** 寺内さんが来て南方軍総司令部が移るといっているので、同盟も南方総社を移すことにしたのでしよう。

**福岡** 岩本さんは何月ごろですか、マニラへ行ったのは。

**岩本** 19年の8月末です。

**福岡** 南方総社の構成を変えて次長を2人にし、岩本さんにマニラに来てもらい、福田一君が昭南(シンガポール)に依然としている、という編成になった。

**皆藤** 私はしばらく岩本さんと一緒にいた。あの頃は、飛行機にはなかなか乗れなかった。そろそろ苦しくなっていたのだ。幸い総軍の飛行隊の連中と仲がよかったので、連れて行ってもらう約束はしたが、飛行場へ行くと兵隊で満員、乗れないことが3度ばかりあった。今度は乗せてやるということで19年9月19日、岩本さんに送ってもらって飛行場へ行ったら、また満員で駄目。引き揚げようとしたら、荷物は駄目だが、体だけ乗せてやるということで、荷物は残してシンガポールへ行った。

翌々日の9月21日、マニラに大爆撃があったとの第一報を聞いた。そのときのこと、福岡さんには君の命の恩人だと言われるが、その通りです。19日にマニラを出発しなかったら飛行機は爆撃でなくなってしまうし、そのうち現地召集が始まった。私は予備役の少尉だったから、恐らくマニラにいたらマニラ防衛隊の小隊長なんかで玉碎したんじゃないかと思う。

現役時代の幹部候補生の同僚の1人が「マニラ新聞」にいた。マニラから引き揚げる間際に戦況が悪くなって、われわれと一緒に飛行場造りの作業をやらされたとき、「お互いに新聞社に勤めたおかげで兵隊にとられなくてよかったね」と言っていた。その男がマニラ防衛隊の小隊長で玉碎してしまった。そういう意味で、今でも福岡さんは命の恩人だと思っています。

**福岡** 肝心なことを言い落としている。皆藤幸蔵君には「サイゴンに行ってくれ」と何度も言ったが、マニラがよかったのか、なかなか動かさうとしない。頑として(笑)。

**板垣** その魅力はなんだったんだろう。

**牧内** 何かあるはずでしょう。

**福岡** それが分からないんだ(笑)。総社の組織を変えて、マニラに南方総社の主力を置くということで岩本さんに出馬を願った。南方総社にいる以上、管下の各地を見てもらわなければならぬので、まずシンガポールへ来てもらい、それからジャワにも行ってもらった。もう少し岩本さんに南方の状態を見てもらう予定だったところ、情勢の急変で僕が無理やりせっついてマニラへ赴任してもらった。後でフィリピンがあるというようになったので、岩本さんには誠に済まないことをしたと思う。

それに引き換え、皆藤君の方は首に縄をつけて引っ張り出したんだから、少々感謝されなくちゃ(笑)。マニラへは僕も行くつもりで飛行機の便を待つばかりになっていたら、昭南にいた中島報道部長が電話をかけてきて「あなたはマニラに行かないでいいことになった」と言うので、「どういふことか」と聞くと、寺内総司令官がマニラを去ってサイゴンへ行ってしまったというわけだ。寺内元帥は急に総司令部をまとめてサイゴンへ飛んでしまった。それで僕は動けなくなり、マニラは岩本さんにすっかり引き受けてもらった。岩本さんにはそれ以来、精神的な負担を感じているわけです(笑)。

**藤井** 岩本さんは山下奉文大将時代に赴任したんですか。

**岩本** 山下將軍より少し早く着任した。同盟機が出るというので急いでジャワから昭南に引き返し、マニラに向け出発した。8月26日だったと思う。すぐ後に総軍の報道部長として本省から秋山邦雄大佐が来ることになっており、新報道部長を飛行場で出迎えた。

ちょうどマニラでは福岡さんが設営した南方総社用の大きな建物の事務所に移った。(建物は)盛んに内部工事中だった。ところがマニラも独立の頃までは物資も豊富で景気もよかったが、独立後、大水があつて急に景気が悪くなり、コーヒー杯が相当高い値段になっていた。前任地の上海やシンガポールも高かったが、マニラもこれに劣らず高かった。

マニラに着いて早速、通信用の紙が足りず、軍政部に紙とガソリンをもらいに行ったが、オリンピックの短距離の選手をやっていた相沢巖夫君が司令官をしていて紙をくれて、当時貴重品のカーキ色の服地ももらってきた。着任早々の仕事は新任の秋山報道部長や軍報道部との関係をうまくやることだった。

**福岡** マニラには宇都宮という参謀がいましたね。

**小川** 宇都宮さんはなかなかいい人でしたよ。

**福岡** 同盟には好意は持っていてくれたが、なかなか難しい人だと聞いていた。

**岩本** ジャワに行つてのんびりした様子を見た後なので、フィリピンに行つて非常に面食らった。だんだん戦況が悪くなってフィリピンも遠からず戦場になるといふことだったが、現地は割合のんびりしており、防空壕もろくに持っていないかった。地質の関係もあつたんでしよう。9月21日に皆藤君を送り出した途端、マニラの大空襲があつた。それをみんな米軍の攻撃と知らず、日本軍の演習ではないかと屋上で見物していた。そのうち近所の飛行場がやられ、目の前のマニラ湾で軍艦が沈められている。

**小川** あれは巡洋艦でしたね。轟沈を初めて見た。

**岩本** 米軍は町を爆撃しないことだったが、そうこうするうちに山下大将が10月ごろ来て、寺内元帥はサイゴンへ行ってしまった。米軍がレイテ島に近寄ってきたので、神風特攻隊が盛んに出撃した。終戦後、

産経へ行った小野田政君や時事通信にいる大森君が盛んに名文を飛ばしたのはその頃だ。特攻隊の飛行機が毎日夕方になると爆弾を抱いて飛んで行くのを見ながら仕事をした。レイテ方面がいよいよ危ないというので戦場報道隊を出すことになり、各社合同で編成したと思う。同盟からは野口勇一記者が班長になり、佐々木通信士と春日カメラマンの3人を出した。

**福岡** それで昭南支社からも応援隊を出さなきゃならないと黒沢俊雄君が率先して志願した。永井皓、松崎繁、玉木幹太郎、野口勇一君らも続いたが、みんな死んだね。

**岩本** 当時は物情騒然としていました。レイテでは日本軍が苦戦して、ほうほうの体でみんなセブに引き揚げてきた。

**福岡** 加藤君はダバオにいつまでいたのですか。

**加藤** 最後までいました。

**福岡** 最後はダバオの飛行場で会ったね。

**岩本** もう管内支局の視察ができないので、加藤君にマニラに来てもらい、いよいよ戦場になったら連絡もうまく取れないので、そのときのことをいろいろ打ち合わせて、飛行場へ送って行って別れた。あの飛行場はひどかったね。

**加藤** 何回も爆撃された後だったから。

**岩本** 空襲の間を縫って帰って行ったね。

## マニラから山岳地帯へ

**加藤** あれが最後でした。すぐその後、マニラは包囲されてしまった。

**岩本** 山下大將はマニラではとても防衛できないと判断して立ち退く方針を決め、一時、マニラ東方の山中へ移った後、主力はバギオ方面の山

岳地帯へ移ることになった。マニラ市の防衛は海軍に任せ、陸軍部隊は東部山中とクラークフィールドを固め、本隊はバギオの山岳地帯に立てこもることになった。どんどん車を徴発して資材を運び、山麓に集積したところを爆撃でやられて、みんなほとんど手ぶらで山へ上がるといふありさまだった。

同盟の先発隊は小川君らが12月下旬にバギオに向かい、バギオの設営ができたところで、僕たちは1月1日にマニラを出発した。マニラ残留部隊は黒沢君らが引き受けてくれ、マニラ東方山地の振武集団には伊東瑛記者と箕浦信太郎カメラマンをつけた。結局、マニラ残留組も全部東方山地に逃れ、この方は弾薬糧食ともに十分持っていたが、米軍の猛爆撃で、3、4カ月で総崩れになった。毎日新聞出身の桐原中尉の下に報道関係者が88人いたが、生きて出てきたのは村山謙英文記者ともう1人という、惨たんたることになった。

私自身は20年1月2日にバギオに落ち着いてみたものの、マニラの方が気掛かりなので、確か4日だったと思うが、取って返した。米軍がもうリングエン湾に攻めてきており、それを見ながら山を下りた。往路が極めて順調だったのに比べ、復路はすっかり様相が変わり、空襲の合間を縫ってようやくマニラに帰ったら、残った連中は幸い元気にやっていた。

またバギオへ帰ろうとした。今度は、昼間は全く動けず、夜間ノロノロと車を進めて北上したが、以前通った道は戦場と化して通れないので、やむなくバレテ峠を越えてカガヤン渓谷に入ろうとした。バレテ峠に差し掛かったところで昼間、河原で休んでいたら突然、グラマン米軍戦闘機の1隊が近くの橋の爆撃を始め、同行の連絡員高光耀君(台湾出身)が戦死した。通信主任の山本守君と庶務の中川光雄君が一緒だった。

**藤井** 『通信社史』には高光耀君は敵機の集中銃爆撃を受けて殉職、岩

本支社長以下2名が負傷したとある。

**岩本** 大きな岩の陰に隠れていたら、爆風で遮へい物が吹っ飛ばされた。「そこにいると危ないから逃げろ」と言ってる僕は川へ飛び込んだ。山本、中川両君も続いて川にもぐったが、高君はそこから動かなかった。空襲が終わって行ってみたら、高君は胸に砲弾を受けて死んでいた。本当に気の毒なことをしました。

**長林** 中川君も山本君も生きて帰っているんでしょ。

**佐々木** 山本君は東方電機22にいます。

**岩本** 爆撃で壊れた車を修理し、苦心惨たんしてカガヤン溪谷のバヨンボンにたどり着いた。この方面には西川健三君(記者)、石井卓郎君(英文記者)、宇佐美君(オペレーター)、溝口怜一君(経理)、田端修文君(帰国準備中)などがいた。

**宇佐美** 僕もバギオには行けなかった組だ。米軍が上陸する前日だったと思うが、バギオの岩本さんから来いという指令があったので、日映28の田口支社長と一緒に車に乗せていただいてマニラを出発、バギオに向かった。そのときにはもうバギオへは行けなくなっていた。サンホセからバギオに入ろうと思ったが、それも駄目でバレテ峠を越えてカガヤン溪谷に入ったのだ。同盟から一番初めにバヨンボンに着いたのは私一人だった。

**岩本** 私どもはやむなくバヨンボンにしばらくいた。軍の方もその頃はバギオに入れなくなつて、バレテ峠からカガヤン方面に集つてきた。バヨンボンではみんなの手で「同盟通信」を発行していた。

**長林** ガリ版ですか。

**岩本** ガリ版です。マニラに残った黒沢君らはマニラが危なくなつて東方山地に入ったが、前にも話したようにマニラ組は結局8人で、村山謙君1人だけ生き残つてあとの7人はその後みんな死んでしまった。

**皆藤** 村山君1人が助かったただけでしたね。

**小川** 飯村弘君も一緒だったでしょう。

**岩本** バギオに行った飯村喬君の兄さんですか。あれは現地召集の軍人として残っていたのでしたね。

**福岡** 山下大將はその時バギオにいましたか。

**宇佐美** バギオの山の中に壕を構えて指揮していた。

### ガソリン不足で思うに任せず

**岩本** 私はしばらくバヨンボンにとどまった。その時の同盟の配置はバギオの一部、バヨンボンに一部、マニラに一部、あとはセブの斉藤桂助君らとダバオの加藤松君らだった。主な通信機械はバギオの山の上にある、しばらく東京、サイゴン、シンガポールと連絡していた。毎日新聞のやっていたマニラ新聞はマニラに残った組とバギオへ行った組と2カ所で発行していた。

**福岡** バギオからの通信はうまく連絡できましたか。

**加藤** ダバオの話ですが、ガソリンのあるうちはよかったが、最後は水車発電だった。それで同盟の東京、サイゴン、バギオの通信やラジオ放送を聞いたが、米軍が押し寄せて来て、山奥へ逃げ込んでからはガソリンがないので思うにまかせなかった。終戦の年の6月か7月だったか、ジャングルの中でいよいよガソリンもなくなった時は感無量でしたね。だんだん電気の明かりが細くなって、ちょうどラジオが横浜空襲とか報道していたが、その時パッと電気が消えて真っ暗になった。

**板垣** 岩本さん、その頃米軍はフィリピンで日本軍のせん滅作戦をやろうと考えたのですか。沖縄へ行くための飛び石の道にしようという判断だったんですか。

**岩本** おそらく飛び石だったと思う。米軍の装備は優秀で、空軍勢力も圧倒的に強いので平地ではとても太刀打ちできない。そこで1日でも長く米軍をフィリピンに縛りつけておいて、日本本土進攻を遅らせるのが第14方面軍の仕事であると山下大將ははっきり言っていた。

そのためバギオの山岳地帯に逃げ込んで、そこで天険てんけんに頼って持久戦をやる。たたかれてもたたかれても、じっと我慢して辛抱している。そのうち何とか戦局が転換するだろうという考えだったようです。マニラ在住の邦人婦女子は少し前にバヨンボン付近のホンハルという村に避難させ、軍はカガヤン渓谷の入り口のバレテ峠を死守していた。山岳地帯の方へは米軍は無理して攻めてこなかった。どんどん道をつくりながらゆっくり進んできて、バレテ峠が決戦場になったわけだ。

ここでは姫路の第10師団を中心に数カ月にわたってよく持ちこたえたが、ここが落ちた途端に敵にぐんと踏み込まれた。山下大將の「敵は腹中にあり」という作戦は、カガヤン渓谷の周囲に兵隊を配置し、バレテ峠の入り口を開けて米軍を引き入れ、四方から一挙に攻め立てるというのだったが、1カ所穴が開いたら米軍がどつと突き抜けてきて、味方の前線司令部の後ろに敵が回ってしまい、せん滅作戦どころじゃなくなっただ。

**藤井** 大本営は「敗けているのではなく、米軍をぐっと引き寄せておいて、一遍にたたくだ」というので、こっちはいい気持ちでした。

**岩本** 山下大將も、日本軍がもう少しやってくれるかと思っただのにと残念がっていました。食うや食わずで何カ月もバレテ峠を死守した後だから無理もないことだ。

話はちよっと前に戻るが、フィリピンがいよいよ戦場になるというので軍報道部が中心となり、各社の記者やオペレーターを集めて戦場報道隊を作ることになった。当時、各社ともフィリピンには記者やカメラマ

ンが大勢いたが、戦場報道隊にはそんなにたくさんいらぬ。必要な人だけに絞って、あとは内地へ帰そうじゃないかと各社の責任者が集まって相談した。

ところが現地軍は放したがないので、朝日の石尾市太郎支局長を代表として帰国させ、大本営やサイゴンの総軍の命令を出させようとしたのだ。それが朝日の社内でも誤解され、石尾君が部下を見捨てて逃げ出したと言われ、気の毒をした。記者の呼び戻しも成功しなかったのです。同盟もできるだけ帰ってもらおう、病弱の松原弘雄君や女の人たち、年輩の田端さんに帰ってもらうことにして北方の飛行場で待機していた。

バヨンボンに向かうとき、私どもはホームライトの発電機は持っていたが、バレテ峠でやられて置いてきた。それをまた取りに帰って持ってきたが、どうしても発電できなかった。結局、バヨンボンからは無線発信ができなくて、宇佐美君に近所の軍通信隊に行つてニュースを取ってもらった。

**宇佐美** あれは1月8日だったと思う。日映の田口支社長一行とバヨンボンに着いたんですが、同盟の無線機が動かないので、軍と交渉して同盟ニュースを受信し、ガリ版の陣中新聞「南十字星」を出していた。軍通信部には私1人だけだったが、間もなく爆撃に遭って使っていた無線機が素っ飛んで駄目になってしまった。しばらくして岩本さんが到着し、何をボヤボヤしているかということで、情報部が山の上にあつたのでそこへ行った。

北の方へ歩いて行つたら、第14方面軍の通信隊がバヨンボンの少し先において、辻中尉以下30名ばかりいた。そこへ行って辻中尉に同盟ニュース受信を頼んだところ、この人は大阪の人で、心よく引き受けてくれた。しかし、参謀が「駄目だ、そんなものに使うガソリンはない。そんな通

信を出す必要はない」ということで、私もけんかした。結局向こうが折れて、私が通信隊で起居して構わないということになったのです。あれはちょうど4月ごろでしたね。

**岩本** そのおかげで、バヨンボンで通信を出す材料が入手できたのです。

**板垣** 最後に東京と通信連絡が切れたのはいつ頃か。

**岩本** 3月にバギオを引き揚げるときです。

**板垣** その後は全然、東京と連絡がつかないわけですか。

**岩本** 軍の無線機でその後もずっと受信していたが、発信機はバギオの壕の中で壊して引き揚げた。その後も受信機や謄写版とうしやばんはずっと担いで歩いてた。バヨンボンにいた宇佐美君は毎日ニュースを読んでいて、在留邦人が避難していたホンハルという村へ行つては、国際情勢の話をしつたりして村では名士だった。

**宇佐美** その名士の話のついでに付録がある。話に行った帰り、裸になって服を頭の上に載せて川の真ん中辺りに来たたら、米軍の飛行機がやってきて、これでおしまいかと思つたが、よほど人道的な飛行士だったとみえて撃たれずに済んだ。

**福岡** 君を日本人じゃなくて現地人と思つたんじゃないの(笑)。

**小川** カガヤンはフィリピンでも一番ひどいマラリアの中心地だ。そこで大体みんな、かかってしまいましたね。

**宇佐美** 私も1回かかり、15分間くらい死んだという話を聞いたが、全然知らない。軍医大尉が「これはもう駄目だ」と言つたそうで、兵隊を走らせて同盟さんに知らせたらどうかとところまで来たそうだ。

**岩本** そんなわけでバヨンボンにしばらくいたが、バギオが非常に気になるので、山越えてバギオへ上ろうということになり、日映の田口君、従軍作家の里村欣三君らと一緒に1週間くらい山越えてバギオへ向かった。

**福岡** 食料は何を持っていましたか。

**岩本** あの時はコメが少しあつたと思う。ようやくバギオが見えるところまで来たたら、大爆撃に遭っているのが見えた。2月11日の紀元節の前日だったか。夕方になってバギオへたどり着いたら、報道部長が私の手をとって涙を流して喜んでくれた。翌早朝の紀元節のお祝いで、みんなが逃げて行くのにわざわざ山を登ってきてくれた人があると、兵隊さんたちを並べて報道部長が話をした。

**牧内** 報道部長は誰でした。

**岩本** 秋山大佐でした。

**藤井** バギオ組が5月上旬、山越えてカガヤン溪谷に下り、再びバヨンボンに終結し、それから間もなく山中彷徨になるわけですね。

**小川** バギオにいるときの話ですが、市内にあった支局は爆撃でやられてしまった。米軍は、教会は爆撃しないと云つていたので、支局の近くの教会の周りにフィリピン人が小屋を建てて集まっていた。そこもやられて死体を数えたら50くらいあつた。

町の中は危ないということで、山の手に家を借りて岩本さんらと移りました。フィリピンの使用人がどんどん逃げて行つたが、一部は残つてついできた。日本軍と一緒にには行きたくないんだが、山を下りれば米軍にやられるんじゃないかというので、日本軍についてきた。馬場という少将がいて、フィリピンの要人たちを山から下ろそうということになり、パスを書いてやって要人と民間のフィリピン人100人くらいが山を下りていった。

その中に終戦後、大統領になったロハスもいたが、ラウレル大統領もバギオに踏みとどまっていた。現在ジャパンタイムズ1社長の福島慎太郎さんも当時は書記官で、村田大使を助けてバギオに踏みとどまっていた。夜になってバギオの山の高い所から見下ろすと、米軍のキャンプが堂々



● フィリピンの都市など



と火をたいており、その前進基地がだんだん近づいてくるのはあまりよい気持ちではなかった。4月29日になって米軍がいよいよ迫ってきたのでみんな慌てて逃げ出し、山越えでバヨンボン組に合流した。

**岩本** バギオ方面軍司令官の山下大将や武藤(章)参謀長がいました。海軍の大河内司令官、村田(省蔵)大使、ラウレル大統領もいました。ある日、空襲の合間に村田大使を訪ねたところ、ラウレル大統領を連れて日本に引き揚げることが決まったばかりだった。村田大使は「こんなうれいことはない。ラウレル大統領に日本亡命を勧めたがどうしても応じない。ロハスなんかは山を下りてしまったが、ラウレルさんはここで死ぬと頑張ってきた。3日3晩もかけてあなたはフィリピンだけのラウレルでなく、大東亜のラウレルとなるため、ここは一つ忍んで再起を図ろうではないかとようやく説得した」ということだった。

そこへちょうど行き合わせたわけで、村田さんも上機嫌で、「欲しいものは何でも持つていけ」といわれ、新型パッカーDの高級車におコメや砂糖、酒を積んで帰った。一生で一番高価な贈り物ももらったが、車はガンリンがなくて動かせないので、軍へ寄贈し、積んだ品物を仲間に分けて大変喜ばれた。

**藤井** それからしばらくしてみんなでバギオを去ったわけだね。

**岩本** 5月の何日だったか、いよいよ米軍が間近に迫ってきたということで、大急ぎで転進することになり、大きな発信機などを壊し、運べるものだけ手押し車に積んだ。簡単な受信機と発電機やガンリンを積んだ。山越えして前に来た道を逆戻り、車を引きながら随分苦労した。再びバヨンボン組と合流し、ブシラクという村にしばらくいたが、そこも危なくなつて北進し、バガバックから山に入り、キアングン<sup>253</sup>を経て山の奥へ逃げていった。

**小川** キアングンからキング方面へ転進する途中で随分仲間が死んで

いった。

**福岡** バヨンボンにいたのは6月ごろですか。どれくらいいたのですか。

**岩本** バヨンボンには短い間しかいなかったと思います。

**宇佐美** 1カ月ちょっとじゃないか。私の記憶では岩本さんたちがバヨンボンを出発したのは6月2日か3日だと思う。私は通信隊と行動をともした。通信部隊のお偉方は5月末に軍司令部と一緒に山中へ引き揚げたが、辻中尉の通信隊だけは残っていた。

6月6日の大雨の晩でした。じゃんじゃん降り。9時ごろでしたが、いよいよ移動の命令が出て、通信隊長の辻中尉以下3名ばかりが残って通信機を破壊するということだった。私は20名ばかりの兵隊と一緒に出発した。当時は私も若かったが、指揮してくれと言われて困った。通信隊のトラックで引き揚げたが、米軍の砲弾が私たちの先を越えて前の方でさく裂した。米軍はもうバヨンボンを占領していたらしい。めちゃくちゃなんだ。邦人でも逃げ遅れた人たちが随分いた。

### 必ず2人一組で行動

**福岡** 仲間がだいぶ死んだというのはどの辺なのか。

**岩本** キアングン辺りまでは、私どもの仲間はまだ何とか無事だった。それからは持ち物を全部背負って険しい山道の夜間行軍が続いたが、その頃からぼつぼつ落後者が出始めた。われわれは持ち物をほとんど捨て、受信機と謄写版と紙のほかは、若干の食い物を持つだけで山中へ山中へと逃げて行きました。

**藤井** 最後まで軍司令部と行動を共にしたわけだね。

**岩本** そうです。

**小川** マラリアにかかる人が多く、雨に当たってだいぶ弱り、食べ物も

なく栄養失調でバタバタ倒れていった。

**岩本** 落後して道端に倒れると必ず死んでしまう。うちは行動する場合、必ず2人ずつ組ませた。1人が弱ってももう1人が食べ物や水を探して何とか介抱できたし、不幸にも1人が死んだ場合、いつごろ、どこで死んだか分かった。よその人たちはバラバラになってしまい、いつどこで死んだか分からない場合が多いようだ。1人だと危ない理由は、1人で落後していると通る兵隊がみんな持ち物を剥がして裸にしてしまうようなこともあった。とにかく倒れているとすぐ駄目になってしまう。

**長林** 持ち物を剥がすのは日本人じゃないんでしょう。

**岩本** 日本人ですよ。みんな着のみ着のままでしたから何でもほしいんです。

**板垣** 生きている者から持ち物をとるとはひどいね。

**藤井** その頃、軍から多少食べ物をもたらえたんですか。

**岩本** 報道部と一緒に行動していたので、若干の配給はあり、民間の連中より恵まれていました。しかしそれとて終わりごろはだんだんなくなり、自分の食べ物は自分で探さねばならなかった。

**牧内** あなた方は犬を食べたことはありませんか。

**小川** 僕はバギオでございそうになった。

**岩本** 空襲が激しいので、昼間は全然動けないんです。報道部のおかげで住民の小屋などの確保はできたが、食べ物は草でも木でも自分で探さなければいけなかった。狭い山間地へ十何万人もの日本人が逃げ込んだのだから、イモ畑なんかいつべんに掘り荒らされてしまった。蛇やネズミは食べたが、それもそんなにいないので、たまに見つけても大勢で分けると、ほんの1切れしか当たらない。そういえば犬はほとんど見かけなかった。

**長林** 犬がいけないというのは、みんな食ってしまったわけですか。

**小川** 住民が連れて逃げてしまったのだ。僕らもイモ畑の監視をさせられた。ピストルを持って監視し、他の部隊がきてイモを掘ろうとすると、これは報道部のイモ畑だ、掘ってはいけないといって追い払った。

**岩本** この山中生活の間、われわれにはガソリンがないので、同盟ニュースは軍の通信隊に受けてもらい、これで謄写版刷りの陣中新聞「南十字星」を最後まで出した。部数は四、五十部くらいのもだったが、各部隊で引つ張りだこになり、士気鼓舞には役立ったと思う。昼間は動けず、空襲の合間に食べ物を探しに歩くのが仕事でした。

**藤井** そういう生活が2カ月ほど続いたわけだね。

**岩本** そうです。われわれもだんだん山奥へ入って、食い物がなくなり、腹は減るし、米軍の攻撃はある。雨に打たれてマラリアの発熱が続き、激しい下痢をしてだんだん体が弱り、ひどい格好になってしまい、これではとても駄目だと思えました。一番若い飯村喬君が死に、鉄筆の林田幹徳君も後を追いました。

**小川** 松崎君は終戦の日の朝、ピストルで自殺しました。

**岩本** NHKに向向していた大森君も死んだね。死んでもみんなそのまま放ったらかしが多かった。死んだ人を埋める穴を掘るのがまた大変だったんですね。われわれは同盟の人だけは穴を掘って埋めてきたが、腹が減って穴を掘る力がなく、おまけに小さなシャベルしか持っていなかった。1人分の穴を掘ることは大変だ。死んだ人は持ち物をとられ、裸になっていたが、同盟の人は裸で埋めた人は1人もいなかった。毛布にくるんで埋め、木を切って形ばかりでも墓標を立ててきました。

**加藤** 日本の兵隊が水を飲もうとしてそのまま死んでいるのを随分見た。

**板垣** 自殺は相当な気力がないとできないのでは。

**加藤** 水を飲もうとして水に顔を突っ込んだまま、顔を上げる気力がなくなってしまうのだ。

**岩本** 黒沢俊雄君と松崎繁君はピストル自殺だったが、松崎君はマラリアと大腸カタルで本当に動けなくなってしまう、これ以上戦友に迷惑を掛けるのは忍びないと遺言を残して終戦の朝、自殺したのです。

**牧内** 埋めた遺体はそのままですか。

**岩本** そのままです。

**牧内** 何とかできないでしょうかね。

**岩本** 僕らと一緒にいて亡くなった人の場合は大体見当がつくが、20年近くたった今日どうなっていることか。マニラの東方山中で死んだ7人はよく分からない。黒沢君は自殺したということしか分からないし、他の人はどこかの洞窟に入っていたことは分かったが、後は分からない。帰国組は内地向け連絡便のある飛行場へ行ったりしている間にゲリラにやられたようだ。4人のうち3人まで死んで、年長の田端さんだけが生きて帰ってきました。

**藤井** セブやダバオ支局はどうだったのか。

**加藤** ダバオには日本人が1万人くらいいたが、町に残った者は死ぬ者が多かった。山へ逃げ込んだ連中は助かった者もいるが、僕らはどうせ死ぬなら敵中生活しようと、日本人が残っていた家に入って夜は寝て、昼はシラミをとったり、夕方になるとイモを掘りに行ったりしてそれを食べて生きていた。

ある日、松尾次男君と私と工藤平三郎君と3人で出掛けたら、向こうから米兵がやってきた。道路の裏側に隠れたら松尾君がセキをしそうになった。見つかったらたちまち撃ち殺されてしまうので、私が怒って殴ろうとしたら幸いセキが止まって助かった。

あるとき、コメが手に入ったので、これはありがたいと食べたのはいが、みんな猛烈な下痢を起こした。今までもろくな食べ物食べていないから、1人で1升以上食べちゃったんですね。それでも食べたような

気がしない。そんなことで多くの人たちが死んだ。僕は炭素不足だと思いい、木を燃やして炭を作って助かった。

**板垣** 結局、同盟マンはフィリピンでどれくらい死んだんでしょう。

**岩本** セブの方はレイテ従軍班が引き揚げてきたわけで、佐々木輝生オペレーター、春日武彌カメラマン、そこへパラオから引き揚げてきた人が3人くらいいた。窪川秀雄、加藤保、丸山輝太郎君、それにセブの斉藤桂助、真山行雄、市原義誠君がいた。野口君は軍用機でマニラに向かう途中、行方不明になった。その後セブも危なくなってきたので、斉藤支局長は「俺はここに最後までとどまるから、みんなは早く逃げてくれ」と言ってセブからボルネオへ行く魚雷艇2隻に乗せた。

ところがこの2隻が途中、米国の魚雷艇にやられた。真山君だけは海へ投げ出されて助かったが、他の人たちはみんな死んでしまった。自分は死ぬつもりでセブに残った斉藤君が無事帰国して、人間の運命は分からないものだと話していたら、その斉藤君が横浜で電車にはねられて死んでしまった。生きて帰った者、死んだ者を数えてみたが、従軍した人を含め46人くらいじゃないかと思うが、そのうち18人くらいしか生きていない。

**藤井** 終戦はいつごろ知りましたか。

**岩本** 軍司令部の通信班に人を出してニュースを取っていたが、電気がないので手回しの発電機で無線機を動かしていた。これは腹の減る仕事で、若い兵隊でも5分やるのがやっとだった。そこで同盟放送を受けたのが第一報だった。15日の朝だったと思うが。

**小川** 15日の1日前だったと思うが、米軍の飛行機が来てピラをまいた。そのピラを持って報道部へ駆け込んでしまわれた。怒鳴られてね(笑)。

**藤井** 日本の放送では前日に何もなかったわけだね。

板垣 同盟の英語の放送は10日だ。

福岡 日本語でも15日に天皇の放送があるとやっている。

佐々木 あれは1日前にきた。

岩本 司令部の方では、公電が来るまで発表してはいけないということだったので「南十字星」にも出さず、しばらく押さえた。しかし昨日までどんどん来ていた米軍機が急に来なくなり、そのうちにビラをまき出し、みんなホツとした次第です。

藤井 そこにいたのは軍と新聞通信関係の人だけか、民間人はいなかったのか。

岩本 山中のあちこちにいたが、民間人は山中放浪で死んだ人が多いよ  
うだ。

宇佐美 軍と民間人はキアングンの右と左に分かれてしまった。僕らが  
撤退するときに民間人と合流する格好になった。

小川 民間人がまだこんなにかと思つた。

### 終戦1カ月後に下山命令

福岡 米軍の収容所に入ったのはいつごろか。

岩本 終戦後1カ月ぐらい山の中にいた。

小川 山下大將が降伏のためバギオへ行つて、本部に連絡するからそれ  
まで待つということだったが、バギオに着いた途端マニラに連れ去られ、  
連絡する方法がなかった。残された本部には大佐級の連中がいたが、そ  
の間にもだいぶ多くの人が死んだ。

岩本 9月20日ごろでしょう、山を下りて米軍の手に渡つたのは。

宇佐美 僕は21日です。

岩本 山奥からふらふらで下りてきた。宇佐美君なんか赤痢で血便を出

してひどかつたね。

宇佐美 体が随分弱つていましたからね。下山命令が出たとき、赤痢に  
なり、それでもリュックサック担いで歩いてるうちに治つた。結局、  
気力が勝つたんですね。「自分は死なないんだ」と思つていないと駄目  
だったんです。

岩本 本当に紙一重だ。

藤井 岩本さんは一番年長者だったんでしょう。

岩本 そうです。僕がいなければ、死んだ人たちの消息が分からなく  
なつてしまうから、どうしても生きなければという気持ちがあつたこと  
は事実です。遺品を持って帰ってきてそれぞれ遺族にお届けした。当時  
41歳だったが、山中にいた中で一番年寄りでした。

福岡 その気力で生きたわけで、もういけないと思つたら駄目ですね。  
ポルトモレスビーを攻略した部隊があつたが、大本営命令で引き返すと  
き、ものすごかつたらしく、北側の海岸へ出たときは敵に後ろから追撃  
されて退却した。その時の連隊長にシンガポールで会つて聞いたが、や  
はり若い者が落後して倒れるので、連隊長が木の枝で倒れている者を  
ひっぱりたい。そうしないとそれつきりになってしまう。ひっぱりたい  
立ち上がらせて連れてきた者は助かつたということだった。そういう点  
から言つても、気力がああいうときには非常に大事なんだね。

板垣 同盟時代に僕は印刷所をやつていたが、右翼のゴロツキで大杉栄  
の骨をかっぱらつて逃げたやつが来た。紙をくれと言う。私は何連か紙  
は持つていたが、何に使うのかと聞くと、陸軍を脅かすと言うのだ。そ  
れは和知(鷹二)中將のことなんです。フィリピンで悪いことをしてい  
るからガリ版で刷つて回すということだった。紙が板垣から出たとい  
うことになる。俺はえらい目に遭うと思つたが、ばれたときはばれたとき  
と覚悟を決め、2、3連やつた。後で何升か酒をもらったけれど和知と

いう人はどうだったんですか。

**皆藤** 彼は参謀長でした。どこでもそうだろうが、参謀長というのは実権を握っているし実力者だったが、僕たちはちっとも悪いことしたとは思いませんね。なかなか親分肌の人でした。

**小川** フィリピン人は、和知中將のことを非常によく言っていました。フィリピン人にもいいというのが悪かったんじゃないですか(笑)。

**板垣** そいつは知らなかった。

**藤井** 司令官の本間中將はインテリ階級には人気があったね。山下大將はどうだった。

**岩本** 終戦後、山下大將から使者が来て「諸君は長い間ご苦労だった。もう戦争は済んだのだから君たちの任務は済んだ。早く民間人になって日本へ帰ってくれ。いつまでも軍にしていると帰りが遅れるから」という伝言があった。

**福岡** 僕は戦争が済んで見直した軍人が2人いる。海軍の永野修身大將と陸軍の山下奉文大將、どっちもなかなか立派だったらしい。永野は真珠湾攻撃の責任は全部自分でひっかぶったんだからね。

**岩本** それから終戦後、山を下りてくる時の話だが、どこの小屋に入っても必ず兵隊の死骸が二つや三つはありましたね。それも服を着たまま、首は白骨になっているものが多かった。

**板垣** 内地へ引き揚げるときはみんな一緒だったのか。

**岩本** 収容所が違っていたりしてバラバラだった。米軍に収容されるときはひどかった。ドイツ製の高級カメラや時計などをタバコと取り換えられたりした人がいた。僕は向こうの将校に「お前たち、こんなひどいことをしているのか」と言ったら、「お前たちはバターンで何をした。それに比べればこんなことは何でもない」という始末だった。僕は英語で応対したせいもあって、カメラ1台でタバコ数箱とほかにいろいろくれ

た。ひどいのはカメラ3台でタバコ1箱というのもあった。次へ行くと、さっき助かったと思った貴重品をそっくりとられてしまうという状態だった。

**福岡** サイゴンでも英軍の隊長に殿木君がカメラをとられた。

**岩本** 次の所へ行くと、また持ち物の一斉検査がある。しかし僕は戦友の遺品と遺髪はちゃんと持ってきた。検査の際、監督の将校に事情を話すと了解してくれ、安全に預かってくれたね。2カ所くらいそういう所があったと思う。

**小川** 私は終戦後、軍の通訳をやらされて、いったんキアンガンまで来たが、C I C<sup>24</sup>の連中が山下司令部を見たいというので、また戻った。その途中、C I Cのメンバーが「これから日本へ行くことになるが、何か持っていくものはないか。時計でもあれば持って行ってやる」という。どうせとられるならと思って、大したものも持っていなかったが渡した。

それが帰ってみたら、ちゃんと同盟に届いていた。その人が井上勇さんに日比谷公園で会って、同盟はどこかと聞くので、私も同盟の者だと言うと、「これを小川君から預かってきた」と渡された。井上さんはそれを遺品だと思つたらしい。岡山の私の家に電報を打って遺品があるから取りに來いと連絡したから、親父が飛んで來た。私が生きているという知らせが入っていて安心したそうだが、預けたものはちゃんと全部持ってきてくれた。

**岩本** 米軍に運ばれるとき、トラックに乗せられた。われわれが徒歩で歩いてきた道を通つたが、以前の細い山道がすっかり良い道路になっていて驚いた。

**小川** 僕は途中で汽車に乗せられたが、フィリピン人に石を投げられて危なかったね。

**藤井** フィリピン人が石を投げるんだ。

小川 警備の兵隊に石が当たったら、カービン銃で威嚇射撃いかくをしていた。

宇佐美 途中の電柱に登っていたやつがピストルを撃った。もちろん当たらなかつたが、無蓋車両の警備兵が電柱の上の犯人を撃ち殺してしまつた。汽車がのろいので、村の向こうで騒ぐと威嚇射撃をやつてね。

岩本 マニラ南方の仮収容所へ入れられたが、鉄条網を張り巡らした広い収容所が幾つもあった。

小川 12くらいあつたようだ。

加藤 ミンダナオ島の連中も最後にはみんな集まつて収容所へ一緒に入つた。

岩本 同盟の人たちは最後まで責任を果たしたと思う。外部と通信連絡のある間は戦況報道と現地通信発行の両方をやっていたが、通信連絡が切れてからは通信発行に集中し、最後まで「南十字星」を出し続けたからね。同盟は立派だったと秋山報道部長に褒められた。

長林 秋山さんは今どうしていますか。

岩本 日本に帰ってから悠々自適、俳句の雑誌など主宰しておられる。今でも時々、山中でサツマ芋の葉を食べて生き残つた報道人が集まつては会を開くが、秋山さんはいつも出席され、みんなで当時を追憶している。

板垣 同盟人は最後まで立派だったということですが、上海事変の時は各社ともだらしがなかつたという評判だった。兵隊は悠々としているのに、新聞記者はちよつと弾がくるとビクビクして頭を下げると言われた。僕らは兵隊に行けばそれくらいやれるだろうと思つていたが、新聞記者で度胸のない者が兵隊に行くときつこう普通の兵隊並みにやつている。兵隊より新聞記者がしっかりしているという印象を受けた。一番だらしのないのは権力の座に就いていた者、終戦直後の軍人ばかりじゃないけれど、支配階級に就いていたやつらのだらしのないには驚くべきものが

あつた。

岩本 収容所ではテント張りの中のキャンバスベッドで、食事は毎回行列して配給を受けたが、雨が降ったりすると困つた。それに食事が少ないとか多いとかで幕舎の中でよく問題が起こつたね。終戦前に米軍に降伏した連中は、顔色もよく太つていて大変威張つていた。炊事係をしてだぶピンハネをしていたようだ。その連中の洗濯なんかしてやると食べ物くれるので、宇佐美君など使役を買つて出て、もつた食べ物をよく僕らの方へ回してくれた。1人じゃ食えないから回りの連中にも分けたが、宇佐美君には随分助けてもらった。小川君が通訳の使役をやつて、チョコレートなんかもらつてきてくれたりしましたね。

小川 僕らにはよくおコメのおじやのようなものをくれたんですよ。岩本さんにもあげましたね。

藤井 どうもいろいろとありがとうございました。この辺で終わります。

(新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」)

## ミンダナオ山中をさまよう

三七敬(元同盟通信マニラ支社)

同盟勢6人、比ミンダナオ島の山中を流浪中、終戦を知りました。惨憺さんたんたる敗戦下、極限を体験しながらも全員無事。しかも昭和20(1945)年11月という早い帰国で、他の地域に比べ幸運だったと思います。

同盟のほか読売、それに映画配給社員など報道関係者は、敗残の将兵

に交じり山野を彷徨中、日本降伏―終戦を知りました。恐る恐るジャングルをはい出して投降。トラックで支局の所在地だったダバオ市に送られ、収容所入りしたのは、終戦の日に一カ月も遅れた9月15日と記憶しています。

終戦の2カ月ほど前、われわれは虎の子と頼む無線機器を処分しておりました。後退を重ね、山中深く逼塞した司令部から、備蓄食糧の枯渇を理由に、自活を言い渡され、座して餓死を待つわけにいかず、行動の自由を束縛する重たい機器の放棄に踏み切ったわけです。

ダバオ支局(加藤松支局長)は19年10月、米軍のレイテ島上陸に先立つ空爆で焼失。このため支局全員、辛うじて確保した受信機を持ち、ダバオ周辺地域を守る第100師団報道班に移り、東京発信のローマ字放送を聞いて、陣中新聞の発行を続けていました。マニラ支社勤務中だったオペの私は、支局焼失の直後、岩本清支社長 の命令で支局の再建、強化のため小型発電機と送受信機一式を携行、陸軍機に便乗して一同に合流しました。連絡のためマニラに来ていた加藤支局長も私と一緒に帰任しました。

しかし食糧など給与一切を軍に依存する自立困難な支局は自然解消、キャップも中尉の報道班長に代わりました。われわれの内訳は記者3、オペ2、鉄筆係1の計6人。記者は岡山に健在の松尾次男、東京の加藤松のほか、セブ島から辛くも脱出、合流した「軍曹」の愛称で知られる(斉藤桂助、いま一人のオペ(青森県出身)と鉄筆係(沖縄県出身))。

マニラ、バギオ、次いで交信相手をサイゴン支社に換えた頃、ダバオ周辺に対する空襲が熾烈化し、司令部の撤退が始まり、ダバオから南へ約10<sup>キ</sup>のミントル、次いでさらに5<sup>キ</sup>のカリナンという小集落へ。ついには米軍上陸―友軍の敗退相次ぐ中、人跡未踏、深い山奥のジャングルへ分け入りました。

このような状況下でも新聞の発行は続けましたが、苦闘して運んだ送信機が動いたのはたった一度。最後の交信相手となったサイゴンに向け「米軍ダバオ上陸、わが軍は果敢に交戦中…」という数行の記事を打電するにとどまりました。そして土壇場。無線機処分に評議が一決した後、撫然たる私に、斉藤さんが「三宅君、無線機は食えないからなあ…」とユーモアまじりの慰労の言葉を。今も私の脳裏に深く刻み込まれています。

(新聞通信調査会報)第285号 1986年8月1日発行

## 兄・黒沢俊雄の思い出

中山ちゑ(元同盟通信記者の家族)

同盟通信の記者だった兄は、55年前の昭和20(1945)年6月13日、マニラで自決いたしました。聖戦という名の下に踊らされ、国のためにと、非業の死を遂げた幾十万人の国民の一人でございます。当時、同盟通信マニラ支社編集部長でした。戦局が逼迫した時点で、現地召集の形で軍隊と行動を共にしようです。日本軍の敗戦が色濃くなり、マニラを撤退した時、同僚の方とピストル相撃ちによって自決。同僚の方がだけだけで、幸運にも米軍の捕虜となり、日本に帰還できてお話しくださったので、兄の最期の様子が判明いたしました。最期の時まで兄は相手の方に「君は若い。必ず帰って、くれぐれも家族を大切にするように」と申ししていたそうです。



父が熊本医大に赴任しましたので、昭和初期に私ども一家は東京から熊本に転居いたしました。東京高校の学生だった兄だけ下宿生活になり、家族と離れました。兄と私は6歳違いで、東京と熊本に離れていますし、私は小学生でしたので、兄の成人後の仕事ぶりや人となりは、詳しくは分かりません。むしろ、兄のお友達や、同盟の方々の書かれた本から知りました。落合小から東京高校の尋常科、高等科まで一緒に親友のNHKの解説委員だった松宮克也様、生物学者の八杉龍一様の著書、また同盟時代の先輩の方々、田崎与喜衛様、大森建道様などの著書の中で生き生きとした兄の姿を知りました。文中で、黒沢は非常に切れ者で、人間的魅力があったと書いてくださっていますのを、私は誇りに思っています。

たまに熊本に帰省した兄は、江津湖<sup>えづこ</sup>に魚釣りに連れて行ってくれたり、絵が上手でしたので、私の通学かばんに油絵でエジプト模様<sup>エジプト模様</sup>の絵を描いたりしてくれました。エボナイトの古いレコード盤を使って、鉦石ラジオを組み立てて、私どもを喜ばせてくれました。当時珍しかったアイスクリームを、空き缶を使って作ったこともあります。数少ない休日<sup>休日</sup>を、兄らしい思いやりで精いっぱい<sup>精いっぱい</sup>に弟妹たちをかわいがってくれたのです。兄の柔和な顔が忘れられません。

兄は学生時代に吹き荒れた、赤の旋風<sup>赤の旋風</sup>に巻き込まれ、治安維持法にひっかかりました。最後まで意志を通したそうです。父の友人、岩波茂雄氏の推薦で、同盟通信に入社、社会部の記者として働きました。昭和11年の二・二六事件の時、西園寺公望公に密着して兄のとった特ダネが記事になり、熊本の新聞紙面にも載りました。父が大変喜んだのを覚えています。

兄には愛人がおりましたが、子どもはおりません。小学校6年の時、最愛の母を亡くし、可哀相な幼い弟妹たちの姿を見、家族を悲しませて

はいけないと思つたようです。最後まで家庭を持つとうしなかつた兄の心中を、この年齢になって私は初めて察することができました。甥や姪の中に、医者、化学者、絵を描くもの、詩を作る者がいます。多才だった兄の血を受け継いだものと、身内の一人として喜んでいきます。生きていれば、90歳近く、正義感の強い人でしたので、日本の現状には、歯ざしりをしていてほしいでしょう。志半ばで亡くなり、無念だとは思いますが、没後何十年たちましても、兄を覚えていてくださる方がおられると思いますと、ありがたいことです。兄の人生は良かったのでしょうか。

今は静かに故郷山形市内の菩提寺<sup>ぼだいじ</sup>、法祥寺の墓地に父母と共に眠っています。

「栗食めば君を思ほゆ出て征し日 たくましき顔にこぼれし白き齒」  
同盟の田崎与喜衛様からいただいた歌です。

(新聞通信調査会報「第457号 2000年12月1日発行」)

## 第4節 原爆投下

### ポツダム宣言受諾を海外向けに放送

長谷川才次（元同盟通信海外局長）

（編集者注）原文は旧漢字・旧仮名遣い。

#### 原子爆弾攻撃の第一報

8月7日の午前1時半ごろだったろう。第一ホテルの637号室に泊まっていた記者は、枕元の電話に目を覚ました。受話器を取り上げて聞くと、（同盟通信）川越分室のT君だ。「トルーマン大統領が原子爆弾で広島を攻撃した旨発表した。英国のアトリー首相も同じような発表を下院でやるそうですよ」との話。形而下学を軽蔑している記者はこのときちっとも騒がなかった。せっかくの電話だから、口先では「ありがとう」とお礼を言って切ったものの、腹の中ではくだらぬことで夜中に起こしたもんだと、不平たらたら。再びベッドにもぐり込んでしまった。しか

し夢心地に考えてみると、どうも前日、即ち8月6日の夜、編集室から出るとき、通信部の席で「広島支局からの報告はふに落ちない。1機や2機で広島の大半がやられたというのは解しかねる」と、係の人たちが話し合っていた。話の結論は広島支局から電話連絡の途中で、報告の内容がはき違えられたのだろうということだったらしいが、トルーマン大統領の発表はこの不思議に対する回答に違いない。

#### 原子爆弾とわが統帥部

勇を鼓して記者は服を着て社へ急いだ。重大なニュースは政府と、統帥部<sup>すい</sup>とに伝達するのが社の慣例となっているので、早速、東郷茂徳<sup>しげのり</sup>外相や迫水久常<sup>さくみずひさつね</sup>書記官長を電話口呼び出して、原子爆弾の第一報を伝えた。しかし両先輩とも、果たして原子爆弾の恐ろしさを知っておられたかどうかは、少なくとも電話口での応答から判断すれば甚だ疑問であった。もちろん統帥部では事の極めて重大なゆえんを早速見てとったらしいが、お昼ごろまでの情報では原子爆弾恐れるに足らずといった考え方が、統帥部の意向として外部に伝えられた。

次の原子爆弾攻撃には少なくとも4カ月はかかるだろうとか、米国だって原子爆弾を10個以上は用意していないだろう、とかいう観測が極秘情報の極印を押されて伝わってくる。しかし午後4時半ごろ、大本営の発表で、特に原子爆弾という表現を避けて、新型爆弾という文字が使われていたところから見れば、少なくとも統帥部は原子爆弾の恐ろしい威力に気付いていたに違いない。

## ソビエト政府の宣戦布告

しかし不意打ちは原子爆弾だけに止まらなかった。翌8日、毎週2、3回早起する癖のある記者は、午前3時半ごろより社へ出掛けて、夜中に入ってきた電報に目を通していたところ、4時半ごろ世田谷分室よりの電話だ。ソビエト連邦が宣戦布告したとの第一報だ。早速タス通信社のモールスキヤスト(電信同報)を受信するよう頼み、宿直の連中にもんな手伝ってもらって要所要所に電話する。官邸の電話係が躊躇するのを押し切って、迫水さんにお伝えしたところ、ひどく意外だったらしい。「本当かね」と念を押す。後で分かったのだが、ソビエト政府に斡旋を依頼していたのだから、スターリン元帥が宣戦を布告するとはちよつと意外だったのだろう。

事態はもはや一刻も猶予できない。最高戦争指導会議が開かれる。閣議が何時間も続く。午後5時ごろ、陸相阿南惟幾大将が、閣議を外して陸軍省へ帰ったという報告が入る。極秘裏にしかも多少でも事情を聞かされている人々のすべてにとっては、息詰まる緊張のうちに閣議は午後10時半散会。夜半宮中で御前会議、それが9日の午前2時すぎまで続いて、さらに閣議。いよいよ重要訓令が外務省当局の苦心惨たんたる推敲の後、午前7時ごろ、ベルンの加瀬俊一公使、ストックホルムの岡本

季正公使に発出されるに至った。

## 聖断を下る

記者は一介の新聞人として当時極秘情報として伝え聞いたところを、しかも何らメモにも頼らず思い出したままを書き連ねるのだから、色々誤伝もあるうし、考え違いも少なくないと思うが、ほとんど24時間にわたる重要協議の結果、最後に御聖断を仰いで廟議がポツダム宣言を受諾するに決定したということだけは、間違いのない事実だ。そこで法律の知識も政府部内の煩瑣な手続きも知らない記者は、即時終戦の大詔が渙発されると予想していたのだが、午後4時ごろに出た下村宏情報局総裁の声明は、国体護持の宣言だ。

もちろん日本国民の一人として戦争の帰趨いかんにかかわらず、国体の護持に身を賭する覚悟は持っているが、声明の与える印象は廟議の決定とはおよそそぐわぬ。久富達夫次長が起草したと伝聞しているが、恐らく各方面の意見を取り入れた結果、声明の趣旨が晦渋に墮したのであろう。同盟通信社の海外局長として、対外報道の重大な任務を担っていた記者は、この声明を見て外国に伝えるべきか否かで迷った。そこへ矢継ぎ早に出てきたのが、陸相の全軍に対する布告だ。最後まで抗戦するとの趣旨だが、それでは廟議の決定として承知しているところと相いれない。

記者は慎重考慮した後、独自の判断と責任とにおいて、双方とも対外報道には黙殺するに決定した。前者は文意が錯雑し、ことに国体護持の観念を英語に訳しても、米英両国民にはピンと来ないだろうし、後者は日本軍に対する陸相の布告で、外国に伝える必要はないという理由だ。しかし国家代表通信社としての同盟の立場から、この重大決定を世界に

伝えずにおくことはできないし、廟議の趣旨を貫徹するには、一刻も早く米英の世論に真実を伝える必要があると考えたので、辱知じよくちの松本俊一外務次官と連絡したところ、次官は情報局総裁の声明と陸相の布告とに關する記者の措置を支持した後、両公使に対する訓令の内容を同盟の電信同報で全世界に伝えることに同意してくれた。

## 同盟報道の影響

既に12時間前に訓令が出ているのだから、訓令の内容を同盟が米英両国に伝えるのは当たり前だとは、新聞人としての考え方だが、醇乎じゆんこたる能吏として知られる次官がこの英断に出られたことに對しては、今更ながらに衷心から敬意を表せざるを得ない。最も国内では高度の国家機密なのだから、この電報の扱いには慎重の上にも慎重を期し、まず古野伊之助社長に申し上げてお許しを得、誰もいない別室で安保長やすほ春英文部長に自身でタイプしてもらって、9日午後8時からの米州向け放送に繰り入れた。もちろん当時の気持ちとしてはこと面倒となれば、海外局長として全責任を一身に負う覚悟であったが、反響はてきめん。午後9時にはA Pが同盟の報道として、こちらから打った全文をそのまま全世界にばらまくし、ロイター電信同報によれば、ピカデリー・サーカス一帯ではお昼の1時ごろというのに、ロンドン市民が路上でダンスをして終戦を喜んでいっているという。

次にワシントンからのUP電報は、トルーマン大統領が同盟の電信同報を手にするや、朝食が済んだばかりなのに、そのまま書齋に入ってしまう。スチムソン陸軍長官、バーンズ國務長官らが相次いでホワイトハウスに詰め掛ける。目下重要協議が続けられていると報道してくる。9日夜半から10日払暁にかけての情報だ。

10日、11日と本当に骨身を削られるような日が続いた。廟議の決定については社内でも漏らすことは絶対にできない。統帥部や情報局からは訓令の内容を打電した責任を問われる。南京の中華總社ちゅうわからも、英文の電信同報を傍受して詰問の電報が舞い込む。11日の夜、情報局に呼び出されて、第1部長からいろいろ事情を聞いた。部長さんは幸い一高時代の学友で、極めて親切に扱ってくれ、心配しないようにと言ってくれたのだが。午後7時半ごろ社へ帰ってきて椅子に腰かけた時には冷や汗が脇の下から流れ、同僚がせつかく残しておいてくれた社の弁当も喉を通らなかつたくらいだ。

ロンドン以来、何遍も爆撃を食らって生死の大事については腹ができていづつもありだし、廟議決定を正しく世界に伝えて和平に貢献するのが、臣子しんしの分としても日本国民の一人としても、否、同盟の社員としての当然の任務だとは考えていたのだが、どうも身辺が危険となると、慌てるのが凡夫の悲しさだ。

## アメリカからの回答

当局はもちろんだつたらうが、記者も恥ずかしながら自身の心配も手伝った。本当に一刻千秋の思いで、ワシントンからの回答を待った。トルーマン大統領は同盟の電報を基礎にモスクワ、ロンドン、重慶と四角交渉を始めたらしいが、国際電話で交渉を進めたとしても、色々意見が出るのだから、そう簡単には片付かない。しかし各方面の電報を総合して、今夜あたり返事が来るだろうと見当をつけ、11日夜は徹夜で頑張ることにして、デスクの上に横になりながら考え事をしていたら、午前11時すぎ、川越分室よりの電話だ。A Pのワシントン特派員ジョン・ハイタワーの観測によれば、4カ国政府は日本政府の申し入れを拒否するら

しいとの報道だ。

いよいよ駄目かと考えていると、追いかけて川越からの急報だ。UPのフラッシュ。連合国は受諾を決定。ただし日本政府は最高司令官を通じて国務を遂行するという条件付きだという。間もなくバーンズ国務長官がスイス代理公使に手交した公文の正文が入ってくる。UPは受諾と言っているが、本当に受諾と解釈できるかどうかが問題だ。電話で連絡したら外務省から岡崎調査局長が見える。軍令部からは有馬大佐が出てくる。書記官長の所へは、同僚の安達企画部長が正文を持って自動車を飛ばす。そこで「subject to」という字句の解釈が問題になったわけだ。

降伏による終戦の構想が、重臣その他の指導層の間に具体化し始めたのが、いつごろからかは知らない。多分、5日ごろだったろうか。ある陸軍武官がスウェーデン赤十字社の総裁ベルナドッテ伯に、非公式に斡旋を要望したとか、重慶からと称する密使が来ているとかいううわさは耳にしたが、本気で終戦工作に乗り出したのは沖繩戦の前後、鈴木貫太郎首相と東郷外相との決意以後であろう。相手はもちろんソビエト政府で、外相はモスクワの佐藤大使に「飛躍的構想」で交渉を開始するよう訓令したと聞いている。

いずれにせよ記者が郷里に残した慈母重体の報に6月25日、帰省し、昼夜の看病も効なく葬儀を済まして東京に帰ったのが7月11日。それから連日、ワシントン、ロンドンからの電報で和平の動きを検討するのが日課となった。ワシントン政界筋の情報では7月上旬、日本政府がソビエト政府に、降伏による終戦を申し入れ、スターリン議長がポツダム会談に報告したことが明らかだ。申し入れの当時、日本政府は4カ条の留保を付けているというのが、多分ニューズウィーク誌の報道ではなかったかと思う。

陛下の御一身ならびに御地位には触れぬこと、武力占領を差し控える

こと、日本軍が自発的に武装を棄てること等々であったと記憶する。デーリーメール紙のワシントン特電として伝えられたところによれば、陛下については畏れ多い言葉だが、日本国民の間における安定勢力として、日本政府の要望を入れるのが賢明だし、保障占領も形ばかり( token occupation)でいいじゃないかという議論が米国政府筋で有力だということであった。とにかく、上御一人の御安泰を祈念することは、日本国民一致の衷情(ちゆうじゆう)なのだから、ポツダム宣言を受諾するに当たっても、日本政府は特に陛下の大権を毀損(きそん)しないとの了解条項を付けたわけだし、バーンズ国務長官の回答についても「subject to」の読み方が問題になったのは当然だろう。

## サブジェクト・ツ

手許に正文を持ち合わせていないが、問題の一節は The authority of the Emperor and the Japanese Government to rule the State is subject to the Supreme Commander of the Allied Powers who will take such steps as he deems proper to execute surrender terms. という字句ではなかったかと思う。この節で明瞭なことは

一、連合国が、陛下ならびに日本政府の国家統治の主権を原則として確認したこと。従ってドイツの場合と違って、中央政権の存続を承認したこと。

一、しかし右統治の権限は連合国最高司令官の権限に從属すること。

一、最高司令官は降伏条項の実施に妥当な措置を講ずる。

ということだ。問題は、第一に最高司令官の権限が国家統治の全分野に及ぶのか、それとも降伏条項の実施に限定されるかだ。これは降伏条項が無条件と言うのだから、実体的には論議の価値がない訳だが、 Who

以下の文言が制限的か例示的かという点は、解釈論として争点となるのは当然だろう。

次が subject to という字句の含意いかんだ。記者は極めて平明に「従属する」と直訳したが、外務省の公定訳は「制限の下にあり」ということに落ち着いた。これも訓詁の争いで実質的には大した相違がなさそうだが、日本人の気持ちとしては、subject to のニュアンスいかんで、日本政府の了解事項が受け入れられたか否かが決まるように思われるから、恐らく爾後の閣議や最高戦争指導会議でもいろいろ論争の焦点となったに違いない。

さらにバーンズ國務長官の回答で重大問題化したのは、統治の究極における形態は国民の自由意思で決定するという一節だ。美濃部達吉博士の『憲法撮要』が発禁になっている情勢下には、以上の一節は容易にうのみにできない訳で、これまた論議の焦点となったと聞いている。

今から考えてみると、これら一切の論議がいかにも敗戦と無条件降伏を受諾したという現実を遊離した観念の遊戯に他ならないのだが、堂々たる閣僚諸公が真剣に、高等文官試験での応酬にも等しい論議を重ねていたらしい。

8月12日は日曜だったと記憶するが、同盟の受信した電報で開催された閣議の空気はすこぶる悪く、もう一度ワシントンに照会しようとか、内閣を投げ出そうとかいう意見まで真面目に飛び出したくらいだ。

「陛下の権威が連合国の最高司令官に従属す」では、臣子の分として到底同意できないというのが、反対論の有力な論拠であったらしい。ところが日本政府がぐずぐずしているのが、米軍の統帥部では強硬論が飛び出す。ニューヨーク・タイムズ紙のワシントン特派員は、東京時間の13日午前1時までには日本政府から回答が来なければ、日本本土に総攻撃を加えることに米軍の方針が決まったと報道するし、12日夜の形勢では

和平はまさに危機一髪にかかっていたと言っても差し支えあるまい。

加瀬公使を通じてバーンズ國務長官の回訓が着くのが遅れた事情を、一応打電しておいてはどうかと進言しても、当局はなかなか同意してくれない。これも迫水書記官長の英断で12日夜、ようやくつなぎに、同じ趣旨の電報を米州向け放送に入れたところ、ロイターは早速、スイス通信省を調べて、もっと早く着いているはずだと報道する。時間とつばぜり合いをしているような感じだ。

しかしこの度もまた、上御一人の御英断で区々たる群議は雲散し、二世のために太平を開く」との御言葉を頂いたのは、誠にありがたい限りである。

功罪は棺を覆いて後定まるのだし、民族興亡の関頭に立つての施策が当を得ていたか否かは、もちろん後世史家の批判に待たねばならない。しかし老首相をはじめ閣僚重臣諸公は、丹心を留取して聖慮に答え奉った点では、自身の浮沈を度外視して、自ら案ずるところがあるに違いない。通信社員は自分の主義主張によって、ニュースに色を付けず、客観的な事実を正確に迅速に報道することを使命としているが、終戦の前後1週間、いささか報道報国の任務を果たし得たことは、顧みて自ら慰めるに足ると思う。

（時事通信の月刊誌「太平」から。どの号に掲載されたかは不明）

# 原爆投下48時間の恐怖／そのとき私は広島に

中村敏（元同盟通信広島支社編集部長）

## 原爆第一報と大本営発表

私が昭和20（1945）年8月6日午前11時20分ごろ、NHKの原村放送所の電話で、岡山経由で本社に吹きこんだ原爆第一報は次のようなものであった。

「6日午前8時16分ごろ、敵機大型機1機ないし2機、広島市上空に飛来し、1発ないし2発の特殊爆弾を投下した。これがため広島市は全滅、死者およそ17万人……」

この第一報を受け取った同盟通信社の本社では、内容をなかなか理解できなかったようである。第一報の整理に関係した整理部員は後日、次のように語っていた。「広島からの第一報が舞いこんで、同盟の編集局は大騒ぎになった。冗談じゃない。1機や2機の敵機が1発、2発の爆弾を投下したからといって、広島市がなくなって、17万人の人々が爆死したなんて、どうしても信じられない。これはおかしい。1機は100機、2機は200機、1発は100発、2発は200発だ。数字の桁が2桁違っている。それにしても17万人の人間が一挙にやられて死ぬようなことはない。これは1万7千人の間違いだ」

このような論議が大勢を制して、結局広島に問い合わせの電話をかけることになった。広島からの返事は、カンカンに怒っているということであった。この第一報は、内信部長から大本営参謀部に届けられたと記

憶している。

私が死者17万人と判断したのは、当時の広島市の人口は、家屋疎開その他で30万人そこそこであった。この半分以上がやられたと判断したのである。

大本営報道部は7日午後3時10分、次のように発表している。

一、昨8月6日、広島市は敵B29の少数機の攻撃により、相当の損害を生じたり。

二、敵は右攻撃に、新型爆弾を使用せるものごときも、詳細目下調査中なり。

全く人をばかにした発表である。

## 紅蓮の炎のキノコ雲

私の広島の下宿は、相生橋あいはしの中央からT字型に突き出した中の島にあった。何でもかつての芸者の置き屋を支社の歌橋淑郎記者が探してくれたということであった。原爆投下後、ここには瓦のかけら一つ残っていなかった。下宿屋の夫婦と小学校5年生の息子さんの消息は、今日に至るも全然つかめていない。

広島に原爆が投下された8月6日は、特に暑さの厳しい日であった。この日のことをひとことと言い表すならば、広島市は全くの生き地獄、鬼神も顔をそむける残虐極まりない、誠に呪うべき地獄絵であった。

私はこの日、広島市郊外の楽々園（現在・広島市佐伯区）の大藤弘樹記者の家で朝を迎えた。広島市内を流れる太田川に架けられた相生橋のたもとの下宿先から、週に1度ぐらい洗濯物を頼みにきて、1泊させてもらって帰ることになっていた。奥さんの心尽くしの食事中に、強烈な、誠に強烈な、マグネシウムの光のような閃光せんこうを感じた。続いてドドンとい

う大音響を聞いた。窓ガラスが粉々になって四散した。3つになる息子さんが火のついたように、激しくいつまでも泣いた。私の時計は午前8時16分を指していた。

慌てふためいて座布団を頭にのせて戸外に出てみると、はるか遠くの広島市上空に、竜巻のような真つ黒な煙がもくもくと立ち上がり、三、四千呎の中空で、悪魔のような紅蓮くれんの炎が燃え広がっていった。強烈な閃光、これに続くドドンという大音響、何が広島市に投下されたのか、全然想像がつかない。これまでに経験したことのない爆弾か、あるいは爆発である。

私は広島市上空のキノコ雲と、紅蓮の炎の実体をつかむため、自転車に飛び乗って広島に向かって懸命にペダルを踏んだ。葉々園を出ると沿道の家々の屋根瓦が、天に向かってぼっかりと口を開けている。魚のうろこを逆なでにしたような格好である。いかなる原因によるものか全く分からない。

五日市を過ぎるころ、烈風を伴った土砂降りになった。土砂とほこりを含んだ真つ黒な大粒の雨である。烈風はやがて竜巻に変わり、自転車もろとも吹き飛ばされそうになった。トタン屋根が紙くずのように吹き飛び、板切れが舞う。これだけの水がどこから落ちてくるのか。雨というようなものではない、空からドス黒い水が流れ落ちてくるのである。恐怖の30分間であった。

己斐こいの町では、市電の中で、すでに事切れてしまった数多くの哀れな人々を見た。全裸のまま焼けただれて、たくさんの人々が無言のまま町をさまよい歩いてきた。これは普通の火傷ではない。皮膚がくちやくちやにふやけ、ずるずるにぶら下がっているのである。広島市内の火勢はいよいよ強く、炎と煙になめられていた。市内を流れる七つの川に架けられた木橋の全てが焼け落ちてしまっていた。吐き気を催すような

屍臭しじゅうが熱風とともに吹き荒れていた。

## 生きていた電話

NHKの原村の放送所を、空襲を受けたときに緊急の避難場所に決めていた。放送所は広島市の北方約5<sup>キ</sup>の田んぼの中にあつた。そのすぐ裏を太田川が流れていた。己斐から山裾に沿って原村の放送所に急いだ。広島市内の火勢はますます強く、午前11時ごろには市内のほとんどを焼き尽くし、可部かべ街道には、全身に火傷を負った数万、数千の人々がひしめき合っていた。

放送所はこんもりと繁った木立の中にあつた。放送所に飛び込むと、どこかと電話で話をしている声があった、岡山放送所を呼んでいたのである。「広島はこの惨状を一刻も早く同盟本社に送りたいんです。5分でもいいからその電話を貸してくれませんか。同盟からNHKに第一報が流れば、あなたのところで全国放送しますよ。お願いします」

私は哀願するように頼んだ、血のべつとりとついた浴衣を着ていた放送所のその技師は「早いとこやってくださいね」と言って電話を手渡ししてくれた。技師はその後、原爆症で物故されたと聞いた。私は電話器をしっかりとつかんで目をつむった。そしてNHK岡山放送所から同盟通信岡山支局を通じ、第一報を東京本社に吹き込んだのである。

6日朝の原爆攻撃で、第2総軍司令部、中国軍管区司令部、船舶司令部、中国総監府、電電公社などの有線、無線の通信ルートは一瞬にして焼失し、広島市内から県外に通ずる通信ルートはNHKの原村放送所の連絡線一本のみが生きていたのである。広島第2総軍司令部、中国総監府などから大本営、中央政府に対する一切の連絡はこの電話線を通じて同盟経由で行われた。



終戦のご詔勅もこの電話線を通じて同盟本社から声で流され、これを通信主任の瀬谷崎孝君と安原善次君が速記で受け、翻訳し、警察官護衛のもとに放送所でガリ版を切り、印刷し、警察官の手で広島市の所要所に貼り出した。瓦礫の街と化した広島市内にはラジオも新聞社も印刷所もなく、ガリ版印刷以外にご詔勅を国民に伝える方法が他になかった。終戦のご詔勅をガリ版印刷して街に貼り出したのは広島だけだった。原村の放送所で作業をする私たちが警察官が護衛してくれたのは、終戦に反対する憲兵の不穏な動きがあったからだ。

窓を閉め切り、電灯の光を覆う防空カーテンを下ろした蒸し風呂のような部屋で、全員が敗戦の虚しさにむせび泣きながら電話を受け、泣きながらガリ版を切った。私たちを守ってくれたのは広島県の特高課長太宰邦博氏であった。

## 第二報

社の同僚のことが気になり、居ても立っても居られない。原村の放送所の裏を丸腰の兵隊が太田川の上流を目指して三々五々、無表情で避難していく。逃げ出していくのである。午後1時をすぎ、同僚がぼつぼつ集まってきた。安原善治速記者が後頭部に裂傷を負って現れた。げたを片方だけ履いて寝間着姿であった。次いで大藤、片島薫、前原忠重の3記者が無傷で姿を見せ、午後3時ごろ通信主任の瀬谷崎君が自転車を引きずって現れた。

瀬谷崎君は出社の途中、強い閃光を感じた後、爆風で路面にいやというほど叩きつけられた。安原君は気がついたら屋根の下敷きになっていた。片島君は広島市の北方6<sup>キ</sup>の地点から、敵の大型機1機が1万<sup>リ</sup>ぐらの高度で広島に侵入するのを見た。大型機からパツと落下傘が飛び出

して、四、五千<sup>リ</sup>の上空で強い閃光がきらめき、何秒か後に大音響を聞いた。次いでむくむくと異様なキノコ雲が立ち上ったと語った。

前原君は出張先の呉市からの列車で広島駅に滑り込む直前、強い閃光を浴び、次いで野球のバットで全身をたたきのめされたような衝撃を受けて列車の中に転倒した。この一撃でたくさんの人々が即死した。列車からはい出してみると、駅の屋根はどこかに吹き飛ばされ、駅前の広場には2千人近くの人々が大火傷を負ってたたきのめされていた。間もなく真つ黒なほこりが視界を遮った。あまりの恐ろしさに駅の裏の双葉山に逃げた。広島市内に残っている建物は、中国新聞ビルと紙屋町の百貨店と東警察署の建物ぐらいで、あとは全部焼けてしまつて、瓦礫の荒野になつたのである。

私はこの同僚の話をまとめて、瀬谷崎通信主任に第二報を本社に吹き込んでもらった。ピカドンの一応の詳報である。ピカッと閃光が光つてドドンと大音響を聞いたので、6日の爆弾のことを誰が言うともなくピカドンと呼ぶようになった。一般に原爆と呼ばれるようになったのは10日ぐらいたつてからのことである。

## 熱風吹きまくる広島市内へ

私たちは爆撃の詳報を書くために、原村の河岸から小舟で太田川を下り、広島市の中心街に入ることにした。運よく耳の遠い60<sup>リ</sup>の船頭がいて、協力してくれることになった。太田川の兩岸の国道には上流へ上流へと逃げ惑う人々が満ちあふれていた。牛田の町も九軒町も焼け続けていた。山陽本線の鉄橋の上で貨車が真つ赤になって燃えている。水中の小魚の背中が白くふやけて見える。かの恐ろしき爆弾の閃光は、冷たい水を通して魚の背中を焼いたのだろう。浅野泉邸(現在の縮景園)の裏

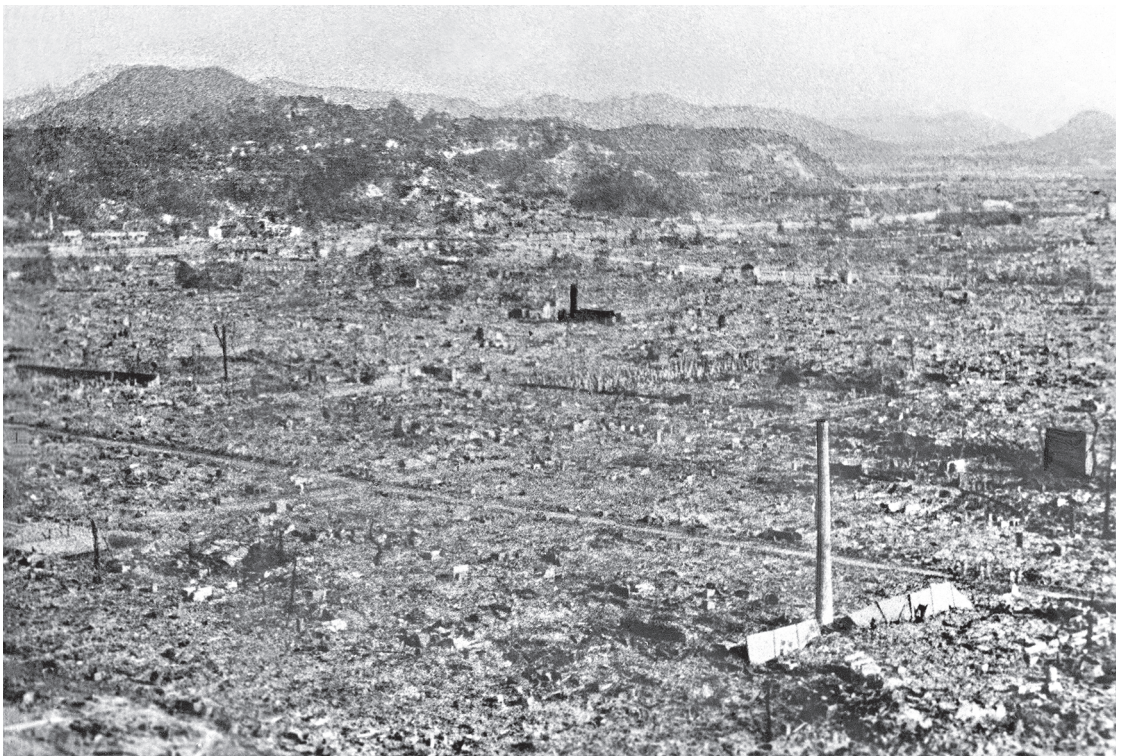
の河岸には、猛火に追い詰められた重傷者たちが恐ろしい形相で立ちすくんでいた。助けを求める声も出ないのである。太田川は屍の満ちた川になっていた。

猿猴橋えんこうばしのもとに舟をつけて、片島君と2人で熱風の吹き荒れる町に上がった。前原記者は、怖がって帰ると言い出した船頭のなだめ役として舟に残した。熱気と屍臭で目まいがする。見渡す限り全くの瓦礫の街である。完全な瓦は一枚もなく、粉々に打ち砕かれている。ただの空襲を受けた街の様相と全然違っていている。辛うじて残っている建物は、中国新聞ビル、広島放送局、勸業銀行、赤十字病院、紙屋町百貨店、東警察署の六つの建物だけであった。

放送局の前の路上で、黒焦げになった母と子の痛ましい屍を見た。いとし子を猛火から守るため懸命に抱きしめて逃げ惑ううちに、ついに力尽きて母子ともに焼け焦げたのであろう。防火用の水槽に頭を突っ込んで沢山の人々が死んでいた。上流川ながれかわの通りには焼死体がごろごろと転がっていた。恐ろしい死の町であった。

同盟支社のある中国新聞ビルは燃え続けていた。窓ガラス一枚残っていない。輪転機も、活字も、編集局も、新聞用紙も、新聞輸送のトラックも、全部が焼けてしまっていた。もちろん、2階のわれわれの支社も焼けただれていた。この廃虚からどうしたら再び新聞を発行することができるであろうか、発行するとしたらどんな新聞になるのであろうか、片島君とそんなことを話した。

それから1カ月後、山本美一社長の陣頭指揮でこの中国新聞ビルで記事が書かれ、活字が拾われ、鉛版が作られ、輪転機がうなり、新聞が印刷されることなど、全く想像もつかなかった。



焦土と化し煙突1本だけが残った広島市街。同盟通信支社があった中国新聞本社から南東を望む=1945(昭和20)年8月

## 支社長の遺体を焼く

7日午前5時、太田川の土手で目が覚めた。全員が草むらにごろ寝したのである。猛烈な空腹である。太田川に飛び込んで汗を流し、水を腹いっぱい飲んだ。体の節々が痛む。

瀬谷崎通信主任と小林徳宝支社長の家に自転車走らせた。三篠本町みさほほんまちにある家は、爆風で屋根が半分飛ばされ、ぼっくりと大きな口を開けている。誰もいない。苦勞して近くの農家に逃れている支社長一家を探して当てる。家族に見守られて部屋の隅っこにうずくまっている小林支社長を見て驚いた。顔の形が崩れている。頭髮は焼き尽くされてつるつるである。全身が大きく腫れ上がって、今にも破けそうであった。5日の夜、6日は勤勞奉仕に出ると言って元気に別れた支社長は、見るも無慘な変わり果てた姿になっていたのである。

支社長は胸をかきむしりながら、「無電機はどうした。第一報を打ってくれたか。わしはもう駄目だ。何もかも頼んだぜ」と言った。何と責任感の強い人であろう。死を待つこの重傷で、途切れ途切れに口走ったことは、通信記者の使命とその責任についてであった。

小林支社長は6日午前8時から県庁近くの家屋疎開の勤勞奉仕に出たのである。ここで中学生や女学生を交えた約1万人の人々とともに頭上で破裂したピカドンにやられたのである。支社長は胸が苦しい、注射を打ってくれる医者を探してほしいと訴えた。私と瀬谷崎君は、郊外の町から村へ、1本の注射を打ってもらう医者を訪ねて回ったが、神は味方してくれなかった。医者もその家族も6日の空襲でやられていたからである。

7日正午すぎ、赤松林の山陰で小林支社長の遺体を焼いた。私たちは畑にシャベルで深い穴を掘った。枯れ草や薪まきをたくさん集めた。その上

に静かに小林支社長の遺体を横たえ、私がマッチを擦った。生き残った全員が合掌した。枯れ草はメラメラと燃え、赤松の枯れ枝は勢いよく炎の渦を巻き揚げた。誰もが涙を流さなかった。私たちは、もう流す涙も枯れ果てていたのである。そこかしこで犠牲者の遺体を焼く白い煙が、何十、何百条となく、山陰の畑から立ち上っていた。銀色にまぶしく光るB29の編隊が、ごうごうと爆音をとどろかせて、日本海の方に消えていった。みんなで遺骨を拾い終えるころ、歌橋記者と上手嘉枝さんが元気な顔を見せた。みんなで生きていたのかと叫んだ。抱き合って泣いた。

(新聞通信調査会報「第132号 1973年12月1日発行」)

## 支社長以下5名が犠牲に

瀬谷崎孝(元同盟通信広島支局通信主任)

広島の被爆当日の様子については、支社編集部長だった中村敏さんが「新聞通信調査会報」第132号に記されているが、当時の支社の様子について少し付け加えておきたい。

まず、陣容は支社長・小林徳宝、編集部長・中村敏、編集部員・片島薫(陸軍、通信局)、前原忠重(呉海軍、県)、大藤弘樹(曙部隊、鉄道局)、東岸敏丸(県)、歌橋淑郎(フリー)、太田巧(応召中)、通信主任・瀬谷崎孝(速記、鉄道管理部、東署、専売局)、穂谷四郎、安原善治、加藤正一、笹津ハル工、二井矢定(以上が速記)、音出正夫(速記、市、病欠中)、安田成三、佐

武三枝子、松本美代子、上手嘉枝(以上が電訊)、大西トシエ、橋本嬢(以上商況)、その他商況員1、2(不明)であった(カッコ内は担当部署など。氏名は社員名簿による)。

被爆の前日、昭和20(1945)年8月5日の夜の当直は東岸君と私の2人になっていたが、私は歯痛が激しく、前原君と勤務を代わってもらった。そして当日朝、東岸君は1・5分四方に60度の角の柱が4本ある中国新聞社と、中国ビルの継ぎ目にある便所に行く途中被爆。柱のおかげで直撃を免れ、前原君は担当の呉海軍に向かう途中、向洋駅近くの車中で被爆、頭部など数カ所にガラス破片による傷を負ったが、軽傷であつた。

私は雑魚場町の教育委員会への連絡用務を終えて帰宅中、文理大(現広島大)横の路上で被爆。路上に自転車もろともたたきつけられ、自転車は即死した馬の上に倒れていたが、奇跡的に私は助かった。その後、比治山橋(ひじやまばし)駅(あたこ)―愛宕(あたらこ)―京橋(なげか)―流川(ながれがわ)と回り、私の代務の宿直者の様子を知らたく、まだくすぶっている支社の焼け跡に入ったのは午後4時前後であつた。犠牲者がいないのを確かめた後、西練兵―大本営跡―相生橋(爆心地)―横川経由、新庄町の支社長宅を経て原村の集結地(放送所)に入った。

安原君は比治山下の自宅で梁の下敷きになり、腰部打撲で足を引きずりながら、東部の峠を越えて夕刻原村に到着。笹津さんは自宅で被爆、胸部裂傷を負ったあと路上で東岸君と会った。加藤君も自宅で被爆(数カ月後に退社し中国新聞に入社)、出勤途中だった穂谷君や市内にいた安田君、佐武さん、橋本さんは犠牲になられた。

疎開取り壊し作業の奉仕に早朝から出ていた支社長の小林さんは、爆心地の小学校で直撃を受け、頻死の姿で約3分離れた新庄町の自宅近くまでたどり着いたところを近くの人に見つけられ、家に運ばれたが、私

が支社長宅に立ち寄り、お目にかかった時は、顔はまっ黒に焦げ、声を聞かなければ判別できない姿であつた。翌日は近くの河原で、われわれの手で茶毘に付すことができたのが、せめてもの弔いであつた。

郊外の五日市に居住していた大藤記者宅に被爆前日止宿していた中村敏さんは、同家に疎開してあつた無線機を抱えて、2人で原村放送所に一番乗り。支社の活動は、かすかにつながっていた放送局の電話を借りて打ち込んだ「広島に特殊爆弾投下」で始まった。続いて原村の近くにいた片島君、牛田の方にいた歌橋君、中電の応援2人も加わり、同報無線の受信、訳文、ガリ切り印刷(約30部)、配信が続けられた。

間もなく原村に近い祇園町の大下キヌさんに根拠を移し、家をつた遠方在住の中村、瀬谷崎、前原、安原、二井矢、小久保、上手、友田嬢は同所に止宿した。その他の者も同所に出勤、市中央まで3〜4キロの道を毎日往復し、軍、官公庁、銀行などに配信した。電気もなく、電話もなく、新聞もなく、ラジオもない当時の広島市の唯一の情報源であつた。

(新聞通信調査会報「第282号 1986年5月1日発行」)

## 支社長の柩は箆笥の引き出し

斎藤龍雄(元同盟配給会)

私が広島市街に足を踏み入れたのは、昭和20(1945)年8月6日のことである。周知の通りこの日の朝8時、広島に原爆が投下され、街は

壊滅していた。

当時、私は東京の同盟通信本社に籍を置いていたが、新聞記者とは名ばかりで「同盟通信建設隊第4部隊」に所属し、毎日、爆撃で焼け落ちた神田印刷所の後片付けばかりしていた。

そんな私が広島に出張することになったのは、張り出し用の新聞(同盟ニュース)の代金取り立てのためであった。今の新聞社はどこも、独自のニュース写真新聞を作って、販売店や公共の場の掲示板に張り出しているが、その頃は、同盟通信だけが「同盟配給会」という組織を通じて、この種のサービスを行っていた。張り出し先は、軍や軍需工場が多く、時節柄、代金の支払いが滞りがちだった。

私は19年末に同盟通信本社に入ったのだが、その前の約1年間、同盟配給会に勤め、岡山県の第37販売所所長もしていた。そんな経歴が買われての広島行きで、いわば集金旅行だった。

前夜、大阪に1泊し、6日の午前8時着の列車で広島入りする計画だったが、大阪で宿をとれなかったことが、私の運命を左右することになった。阪奈県境の生駒に、ようやく泊まるところを見つけた私は予定の列車には乗れず、何本か後の列車で広島に向かった。この列車は当然のことながら広島駅には着かず、二つ手前の海田市駅で乗客は全員降ろされてしまう。事情がはっきりしないまま、私は通りかかった海軍のトラックに、同盟通信の社員証を見せて便乗させてもらい、とにかく広島入りしたのである。

広島街の街が集金どころの騒ぎではないということは一目で分かった。支社にたどり着くと、支社はなかった。爆心地近くの中国新聞社に入居していた支社は、大家ともどもなくなっていたのである。

中心街を離れた田んぼの中のテントに避難していた支社を探し当てて訪ねると、そこには中村敏編集部長と本社の鷹嘴寿連絡局長、高橋与三

治庶務主任がおられた。鷹嘴局長と高橋主任は、出張先の九州から急きょ駆けつけたとのことだった。

小林徳宝支社長は亡くなっていて、勤労奉仕に出ているところを、不運にも原爆に直撃されたのだった。とにかく小林支社長の遺体を奈毘に付すことになったが、市内の柩は払底して全く入手できない状況だった。このため、私は郊外の農家へ出掛け、頼みこんで筆筒の引き出しをひとつ買ひ受け、それが支社長の柩となったのである。

4日後の8月10日、私は四国に渡り、不思議に命を取り留めたことを感謝するため、金刀比羅宮に参り、帰途、高松支社に寄った。そこで当時の飼手菅四支社長から、「日本は、バンザイ(降伏)だよ」というお話をうかがった。全く信じられない気持ちだったが、15日、奈良支局で玉音放送を聞き、それが紛れもない事実であることを知った。

奈良市内では、東大寺の周辺に土産物屋がまだのんびりと店を開いていた。私は、出張で集金した金のありったけを注ぎこみ、団扇や歯ブラシを山のように買いこんで東京に戻った。しかし、私の物資が本社の同僚に喜ばれたのは、ほんの2、3日の間だった。新橋の駅前にたちまちできた闇市が、団扇や歯ブラシをせっせと売り始めたからである。

(「新聞通信調査会報」第295号 1987年6月1日発行)

# 支局の屋根割れ、窓吹き飛ぶ

横山兼光(元同盟通信長崎支局)

電聯(日本電報通信社と新聞聯合社)合併のとき、長崎支局は出島千馬町の電通支局を使い、初代支局長は麻生林策電通支局長であった。その後、福岡から2代目支局長として田端秀文氏が着任され、間もなく同じ町の筋向かいに支局は移転した。当時、出島は「上海丸」「長崎丸」「神戸丸」の3隻が上海―長崎―神戸を結ぶ航路に就航してにぎわい、長崎の表玄関とさえ言われた。これらの船は、すべて終戦前に触雷や座礁のため沈没してしまった。

3代目支局長として福岡から中住繁夫氏が着任された。確か十七、八年ごろだった。中住支局長は小倉記者の葬儀に参列、夫人は隣組の防空演習に参加しているときに、無人の支局2階(支局長の住まい)から出火。発見が遅れたため支局長宅からは何一つ持ち出すことができなかった。

支局が焼けてからは、地元の素封家山野辺寅雄氏のご厚意で、馬町にある同氏別荘の洋館1、2階(現在市長公舎)を借り、ここで原爆を受けた。爆心地から約2・8<sup>キ</sup>。古くはあったが、がっしりした立派な煉瓦造りの建物。諏訪神社の山陰に隠れてはいたが、頑丈な屋根が爆風によって真つ二つに割れ、赤銅枠の窓という窓はすべて枠ごと室内に吹き飛ばされ、ガラスの破片で足の踏み場もないありさま。いつもは美しい山容を見せる英彦山、風頭山も爆煙と爆風で吹き上げられた砂ほこりで夕暮れのようにかすんでいた。

専用線の架線は爆心地を通っていなかったの、断線を免れ、「新型爆弾投下さる」の第一報を福岡に送り込むことができた。支局は間もな

く桜町の商工会議所2階に移ったが、ここが同盟としての最後の長崎支局となった。

(「新聞通信調査会報」第282号 1986年5月1日発行)

## 負傷の支局長が投下の第一報

松野秀雄(元同盟通信長崎支局)

同盟通信社長古野伊之助は、広島へ投下された爆弾が原爆と知ったとき、戦いは終わったと直感、日本を滅亡から救うため戦争終結の工作に動き出した。そこへ長崎にも新型爆弾の第一報が入った。古野社長は長崎の状況を政府に突き付けて一刻も早く終戦に持つて行くため福岡支社長田村源治に「被害状況は漏らさず速報せよ」と命じた。

原爆のため長崎の通信線が全滅状態になった中で、奇跡的に同盟の専用線が生きていた。長崎支局長中住繁夫はガラスの破片で顔中血だらけになりながら電話を離さなかった。

「福岡、東京、分かるか、長崎に大型爆弾、広島と同じものと思う。町全体が黒い煙に覆われている」と歴史的な第一報を送った。

天皇の放送で戦争は終わった。しかし憲兵隊は、戦いはこれからだと息巻き、市役所に押し掛け「陛下の放送はニセだ。町内会に示達して市民に徹底させろ」と迫った。岡田(寿吉)市長は「いつから軍政が敷かれたのか、知事の命令がない以上駄目だ」と突っぱねた。

憲兵隊は同盟支局にも押し掛けたが、「玉音放送の全文が優先で入っ

ている」と聞かされ、シユンとなって泣き出す者もいた。それでも憲兵隊は在郷軍人会をあおって、市中に騎馬隊を繰り出し「徹底抗戦」「本土決戦」を叫び、ピラをまいた。鼓笛隊が後に続いて氣勢を上げたが、それは虚勢にすぎなかった。長崎市内はひっそりと静まり返り、彼らを歓呼して迎える者はだれ一人いなかった。

戦争は終わったのだ。原爆のため大打撃を受けた長崎市民だったが、ほっとしていた。だが長崎市民は原爆被爆の後遺症という重い十字架を背負って以後何十年も苦しい歩みを続けなければならない運命にあることに誰も気付かなかつた。それは終わりなき悲劇の始まりであった。以上は今夏、原爆40周年を迎えて、私が出版を予定している『あの日のナガサキ』<sup>26</sup>の一節である。

〔共同通信社友会会報〕第26号 1985年3月31日発行



炊き出しのおにぎりを持つ被災した少年と母親=1945(昭和20)年8月10日午前、長崎市井樋ノ口町(西部軍報道班員の山端庸介氏撮影)

## 9月には叢書『原子爆弾』発行

大高義孝(元同盟通信札幌支社)

ピカドン2発でわが国の運命が大きく変わった日から1カ月余り後に発行された同盟叢書<sup>そうしょ</sup>第一号『原子爆弾』を、記憶の方も多と思う。

粗末な更紙<sup>ざらがみ</sup>のB6判、32<sup>ジベ</sup>1。今では赤茶色に変わり果てたこの小冊子は、私の唯一貴重な1冊である。当時札幌支社に在籍、あの運命の日はニュースの第一線を留守(8月1日から同20日まで軍籍)していた私にとって、その空白を埋める重要な証言者であるからだ。8月の声を聞くと必ず読み返していたものが、昭和40(1965)年に転勤による引越など、所在不明に。それが62年11月、古い資料の中から突然見つかり、二十余年ぶりの再見となった。

叢書の奥付には、昭和20年9月15日印刷、同年9月20日発行。70銭。20万部。「著者・武井武夫、発行者・牛腸五郎」と記されてある。終戦直後にもかかわらず、記事の内容は詳細を極めることにまず驚かされる。米国側は原爆投下の経緯などは既に軍事機密ではなく、自由に報道できたのである。その報道資料をいち早く入手した同盟通信の情報収集力と著者の健筆に敬意を表したい。

〔南船北馬〕第8号 1988年10月発行

## 第5節 ポツダム宣言受諾

### 敗軍の将、ポツダム宣言受諾に涙

高田秀二（元同盟通信サイゴン支社編集主任）

「政府はポツダム宣言を受諾した」の電文が他のニュース電文に交じって突然、まったく突然に飛び込んできたのは、昭和20（1945）年8月10日の夕刻だったと思う。本当にがくぜんとした。当時、私は同盟通信社サイゴン（現ホーチミン）支社の編集主任だった。1年ほど前から南方総社もシンガポールからサイゴンに移ってきていた。総社長は福岡誠一さん、支社長は秋山操さん。「西貢新聞」という邦字紙も出して、その方の編集主幹は殿木圭一さんだった。

それからが大変だった。電文を南方軍総司令官の寺内寿一元帥のもとに持って行ったら、中風で足腰定まらない元帥が副官に支えられて出てきて、電文を読んでポロポロと涙を流した。憲兵が何人も支社にやって来て「この電文を他に漏らしたらただでは済まないぞ」と怒鳴るし、写真部にも来て一部のネガを押収していった。当時の仏領印度支那（仏印

IIベトナム）は敵前上陸こそなかったが、空襲は毎日あった。日本軍に撃墜され落下傘降下した豪州兵などの写真をわれわれは撮影して持っていた。日本軍に殺されたかどうかは不明だが、その写真の豪州兵などが現存していなければ大問題だったのだろう。

15日、陛下の玉音放送があるというので、在留邦人有志が報道部に集まり拝聴した。玉音の速記を私は命じられたが、言葉もはっきり聞こえないし、涙が出てきて途中で速記を止めてしまった。

それから抑留所に収容されるまでの2カ月半ばかりは、われわれ支社一同、悶々の日々であった。それでも支社の現金を全員に均等配分したので、若い者は大金を持って、ちよくちよく夜遊びに出るので心配で仕方がなかった。

拙著「サイゴン抑留所」（泰流社刊）にその間の事情は尽くしたつもりだが、当時の仏印はその年の2月の「仏印処理」で、日本軍が統治権をフランスから取り上げ、現地の住民（ベトナム人）に移譲したばかりのところへの終戦で、サイゴンの街もベトナム人のフランス人襲撃や放火などあって物騒な日々だった。フランス人が敗戦国の日本軍に護衛してもらうような事態だったのだ。



英軍がサイゴンにやって来て、多少平穩になったが、在留邦人たちは早く抑留所に入りたいと望んでいた。それほど落ち着かない毎日だった。抑留生活は畑仕事などの作業のない日は、野球をやったり碁を打ったりで過ごした。

終戦の翌年の6月11日、引き揚げ船でサイゴン港を出発、9日間の貨物船暮らしの後、19日に広島湾の似島の検疫所の棧橋に接岸した。みんなが夢にも見た「祖国上陸第一歩」はDDTの粉を体に浴びせられるという情けないものだった。翌日夕方、東京行き引き揚げ列車に乗ったが、びっくりしたのは客車の窓ガラスが全くなく、板張り、椅子のビロードははぎ取られパンヤが出ている。貨車同然だった。

翌日夕方、新橋駅に着いた。とりあえず同盟の本社のあった日比谷の市政会館<sup>126</sup>へリュックを担いで歩いた。第一ホテルの前でバツタリ、飼手<sup>かいて</sup>誉<sup>な</sup>四<sup>か</sup>先輩に会った。大学ラグビー部の先輩でもある。「おお、今引き揚げてきたのか」と、飼手さんは逆戻りして私を連れて市政会館に引き返した。

その晩は2階の(共同通信)専務理事室のソファで寝た。第一ホテルの前で会ったのが、共同通信ではなく時事通信の誰かであつたら、私は時事に入っていたかもしれない。それからの人生は、飼手先輩に出会ったことで始まったと言えよう。

(「新聞通信調査会報」第333号 1990年8月1日発行)

## 長谷川局長の夜中の電話

村井茂(元同盟通信内経部)

忘れもしない昭和20(1945)年8月7日。たまたま夜勤の日だった。夜勤といっても決まった仕事はなく、ただ編集局内で仮眠、待機するだけであつたが、夜中にボソボソ声があるので薄目を開けて見ると、海外局長だった長谷川才次さんが電話をかけている。相手は外務大臣か次官のどちらかであつた。聞き耳を立てると、広島に落とされたのは新型爆弾と言っているが原子爆弾であること、アメリカはこれを数発(よく聞き取れず)持っており、さらに投下する用意があること、情勢次第では本土上陸も考えているようであることなどを説明し、一刻も早くポツダム宣言を受諾すべきである、といった極めて重大な内容である。長谷川さんは周囲をはばかり、机の下に潜るようには話している。後年、長谷川さんから伺ったところでは、特高に常にマークされていたから自宅に帰れず、ホテルに泊まっていたという。

(「新聞通信調査会報」第276号 1985年11月1日発行)

# 日比谷公園で写真を焼却

源関正寿(元同盟通信写真部)

昭和20(1945)年8月7日の東京は、見事に晴れ渡って、真夏の太陽がきらきらと暑く輝いていた。B29の姿は今日は見えないが、米軍の偵察機から撒かれたものであろうか、どこからともなく飛んで来た数多くのビラが、この日、日比谷の森を舞っていた。そのビラの見出しに大きく「日本国民に告ぐ」とあり、「大型、特殊爆弾が、広島地方に落下した、これと同じ爆弾が次は東京地方を襲う」と警告していた。確かその文末に「非戦闘員は速やかに退避せよ」とあったと思う。

日比谷公園の同盟通信社は、数々の過去の爆撃や焼夷弾攻撃からも逃れ、終戦の日も健在だった。しかし、写真部員たちには「自分たちは今後、



日比谷公園内に掘った穴で写真を焼却する同盟通信の竹内(旧姓野本)玉子(右奥)と渡辺清=1945(昭和20)年8月

どうなるのだろう」「今まで取材を重ねてきた乾板、フィルムはどうなるのだろう」という、言うに言われぬ心配と恐怖がつきまとった。

生死をかけて取材した特派員の尊い貴重な資料。日本降伏の翌日から処理が始まった。市政会館の東側、写真部の前の日比谷公園に、大きな穴を部員一同で掘り、乾板を埋めて、粉みじんに割り、フィルムを焼き、写真を3日から1週間かけて破壊し、焼却した。今思えば、実に惜しいことをしてしまったものだが、当時の状況からして、やむにやまれぬ処置だったのである。

(「新聞通信調査会報」第285号 1986年8月1日発行)

## 「筆剣一如」の日の丸肩に入隊

鷲尾武治(元同盟通信職員)

昭和20(1945)年4月に同盟通信の「準社員」。間もなく赤紙がきて東部88部隊(相模原市)に入隊した。古野伊之助社長揮毫の「筆剣一如」の日の丸を肩にかけて営門をくぐった。軍隊といえども食料不足は目に余るものがあつた。来る日も来る日も大根汁かスイトンである。一日ごとに痩せ細っていくのが分かる。毎晩、南京虫に襲われて寝不足。栄養失調で倒れる者、下痢患者の続出で「これが日本の軍隊か」と寂しくなった。8月19日に新潟港から朝鮮の清津に転属することになった。「二度と祖国の土を踏むことはないだろう。それなら、腹いっぱい銀シャリ(白米)を食べておこう」と思い、一計を案じた。内務班長に「下痢患者が多



焼け跡で玉音放送を聞き、涙を流す戦災者たち＝1945（昭和20）年8月15日

いので薬が必要だと思えます。叔父が日本橋で薬種問屋を経営しています。栄養剤、下痢止めの薬を大量に購入したらいかがでしょうか」と申し入れた。8月10日、公用外出が認められ、小田急電車で東京へ。大急ぎで本社へ行った。社会部のデスクは田中徳さんか大鋸<sup>おがとき</sup>時生さんだったと思う。誰だったか忘れたが「おい、2等兵、何しに来た。広島に特殊爆弾が落ちた。戦争は1週間以内に終わるぞ。それまで死ぬんじゃないぞ」と教えてくれた。

日本橋の叔父というのは方便で、元幕内力士の陸奥ノ里後援会会長の河原稔さんの家で風呂に入り、ごちそうになった。リンゴ箱に薬を詰めてもらい、部隊に戻った。

8月15日朝、「正午に玉音放送がある。全員、宮庭に集合」の部隊長命令が出た。玉音放送中、私は栄養失調と日射病のため、目の前が真っ黄色になり、ぶっ倒れてしまった。誰一人助けてくれない。放送が終わり、戦友が軍歌よろしく「しっかりせよと抱き起こし」てくれたのを今でも覚えている。わずか4日の差であった。

（新聞通信調査会報」第276号 1985年11月1日発行）

## 書類焼却を手伝う

阿久津カウ（元同盟通信人事部）

天皇陛下の玉音放送（8月15日）の翌日だったか、朝、社長秘書兼庶務部長の浅野豊さんから呼ばれ、「これから書類を焼くのでお手伝いしてください」と言われました。社屋の東口階段のすぐ脇に大きな防空壕があり、そこで防火用水のバケツに水をくみ、書類を一つ一つほぐして防空壕に入れ、浅野さんが火をつけられました。当時の私には何も分かりませんが、よほど重要な書類らしく、燃える書類を竹槍<sup>たけやり</sup>の先でかき回しながら、浅野さんが「敵さん、いつやってきても……」とポツリつぶやいた姿が印象的でした。午後になって浅野さんが「僕は故郷の茨城に戻り、

山を開墾するつもりだ。行きたい人は連れて行く。阿久津さんも一緒に  
行こう」と言ってくれました。

4時近くまで書類燃やしのお手伝いをさせていただきましたが、あの  
日の悲しかったこと、非常に暑かったこと、浅野さんの優しかったこと、  
今思い出しても涙が出ます。

〔十五年のあゆみ〕1989年3月31日発行

## 深夜に終戦詔書を受信

小沢俊則(元同盟通信仙台支社)

昭和20(1945)年8月14日、当直の亀井進一先輩(後の共同通信盛岡支  
局長)は、まだ外が明るいうちに早々と暗幕を引いてしまった。同盟通  
信仙台支社は当時、河北新報社の正面左側の一角にあった。傾斜の急な  
屋根の木造洋風の建物の2階で、1階には河北の受付と同盟の電送写真  
室が入っていた。事務室は長方形で、中央に長い机が置かれた三方ガラ  
ス窓の古びた一室だった。通常5人ぐらいで、専用線で流れる本社から  
の原稿を速記して河北に配信していた。

暗幕が、赤と黒の二重のどっしりした、古ぼけた事務室に似つかわし  
くない立派なものだったこと、また亀井先輩がさっさとワイシャツ、ズ  
ボンを脱いで肌着一枚になってしまったことなど、妙なことを覚えてい  
る。もっとも盛夏で密室同然の事務室は蒸し暑かったはずだ。

支社に終戦の詔書が入電し始めたのは何時ごろだったろうか。頭上に

遠くB29の爆音が聞こえたから10時前後であったろう。この日、14日午  
後10時半ごろから、翌15日未明にかけて秋田市は都市として、わが国最  
後の空襲を受けたのであった。私は先輩が百目ろうそくの灯が揺らぐデ  
スクで書き取った原稿を河北編集局へ何回か、支社と河北との間に渡さ  
れた跨線橋こせんきょうのような通路を渡って運んだ。当夜の河北デスクは毎日新聞  
から出向していた楠美隆之進くすみ たかゆきさん(後の東奥日報社長)で、黙々と原稿を整  
理されていた。楠美さんはこの終戦の紙面を作られた数日後、河北を  
去って青森へ行かれた。

〔新聞通信調査会報〕第282号 1986年5月1日発行

## ポツダム宣言受諾電を受信

藤川清次(元同盟通信ブノンペン支局)

昭和20(1945)年3月、西辻太一先輩から「俺とおまえとでサイゴ  
ン(現ホーチミン)からブノンペンへ行くことになった」と言われた。仲間  
は、無線の糊沢君くさわ じゅんと安国さん(大建工業)と、連絡の林君との5人。日本  
人経営の中村会社のバスでブノンペンへ。サイゴンは雨期だった。

沖繩失陥しゅうなん しんげん後、戦局は悪化し、8月9日午後2時30分ごろ、サイゴン支  
社から送られてくる仏文の電文を受けていた糊沢君が、突然大きな悲鳴  
をあげ、「西辻さん来てください。どうもおかしい」。支局長は糊沢君か  
ら受け取ったらしい英文と仏文原稿を右手にしっかりと握っていた。出  
てくるなり、「内容はポツダム宣言受諾というものだが、2、3の疑問点

もある。編集会議だ」。支局長は「この仏文放送の時間の間隙、30分ほどに打たれて来た英文は、同盟のものかどうかがだ」。榎沢君は興奮気味に「これは断じてわが同盟のもんです。仏文の休み時間の使用も自然だし……」

支局長の判断は「国内は大変なことになっているようだ。この電文は余りにも重大だ。軍とも連絡を取ってくる。それまでは他言無用だ」

12日昼下がり、わが同盟と別懇の間柄であった少佐が訪れ、支局長に面会を求めたが、留守だったので私が会おうと、「同盟はいつから敵性放送を流すようになったのか。君はどっちだ。一刀両断にしてくれる」。いや驚いたこと、必死の説得で、お引き取りを願うことができたが、そのうち運命の15日がやって来た。

定刻数分前、守備隊長、憲兵隊長、外交官、在留邦人の代表たちが、無線室に入り、扉は閉じられた。

〔新聞通信調査会報〕第273号 1985年8月1日発行

## 「玉音放送」を反訳する

洪孔焯(元同盟通信台南支局)

日本の敗色が次第に濃くなってきた。やがて昭和20(1945)年8月6日、広島に原爆が落ち、8日にはソ連が日本に宣戦布告し北滿に進攻、さらに9日、長崎にも原爆が落とされ、日本はポツダム宣言を受諾、敗戦が決まった。

12日、ハプニングがあった。朝からかんかん照りで、こんな日は支局の無線の受信状態は極端に悪いが、少し陰り始めた夕方4時ごろ、突然閩南語で「日本已經……(日本は既に……)」という声 flowed。重慶の台湾向け放送らしい。閩南語は福建省南部の言葉。われわれには容易に聞き取れる。「そこ、もう一度」と私はオペ(無線技術員)に頼んだが、電波は二度と帰ってこなかった。しかしそれで十分だった。4文字の閩南語がすべてを語ってくれた。私はやがて起こるであろう「何か」を緊張した気持ちで待った。

14日、本社から明日正午、重大放送がある旨バタ(社内連絡)があった。玉音放送と言わず、重大ニュースとばかりしているが、玉音放送に決まっている。

案の定、15日朝9時から同報無線で玉音放送の内容が(事前に)送られてきた。一般国民には放送局を通じて正午にラジオ放送される。ところがこの玉音放送(の内容を事前に伝える無線電信)は、オペ泣かせの雑音、混信のオンパレード。電波の突然減衰まで加わって、あっち抜けこっち抜けて、玉音とは分かるが何を言っているかさっぱり分からない。この大事な時にこんな状態では処置なしである。今日もかんかん照りで受信状態がよくなる見込みはない。

受信を終えて私は受信紙を引き出したが、どこから手を付けていいかわからず、ぼうぜんとした。すぐにリピートが送られてきた。大事な原稿だからリピートしてきたのだろう。何とか状態がよくなってうまく取ればよいがとタイプライターをのぞき込んだが、1回目とほぼ同じで変化はない。やがてリピートが終わった。私は空洞だらけの原稿を目の前にして途方に暮れてしまった。すぐ台北支社、高雄支局から電話があり、受信状態を聞いてきた。どちらも台南と同様、全くのお手上げであった。

そんな時、人手不足から外回りを兼ねていた大瀧鹿次支局長が帰ってきた。支局長は原稿をちらっと見て、とてもモノにならないと思っただけだ。「洪君、正午から玉音放送があるから放送局へ行って（速記を取ってくれないか。放送局長に電話しておくから）」と言われた。そうだ、放送局を利用する手が残っていた。名案である。まだ間に合う。あそこの50<sup>リ</sup>アンテナだったら威力を発揮してよい結果が期待できそうだ。私は「はい」と答えて、ざら紙をつかんで立ち上がった。

当時台南支局長は3月の爆撃で直撃を受けて全焼、市内の高野寺の離れを借りて細々と仕事を続けていた。支局と放送局の距離は300<sup>リ</sup>程度ですぐ近くだった。

放送局に着いたのは午前11時52分、既に支局長から連絡があったので、すぐ受信室に招き入れられた。子供ほどの大きさの、どっかい真空管が幾つも並んでいた。

先客があった。台南憲兵隊長（大尉）、駐屯部隊の参謀（少佐）、それに海軍台南航空隊の情報将校の3人。皆無言で奥歯をかみしめ、神妙な顔をしている。私は小さな机を見つけ、座った。

正午の時報が終わると玉音放送が始まり、陸軍の2人は左手で刀を握り、右手で帽子をつかんでうつむき加減の直立不動。海軍将校は脱帽したまま直立不動の姿勢で聞き入っていた。

あの特異な抑揚のある玉音が流れるほかには、速記をとる私の鉛筆がざら紙の上を走り、その音が時々サツサツと聞こえるだけで寂<sup>せき</sup>として声なく、玉音は途切れ途切れに延々と続いた。

期待した50<sup>リ</sup>アンテナは威力を発揮せず、同報無線と同じで雑音、混信が入り、初めの部分はさっぱり駄目。放送局の技師が調整しているがどうにもならない。そのうち突然、ある一瞬を契機にうそみたいに調子がよくなり、幸い最後まで好調が続いた。

玉音放送は終わった。憲兵隊長は目を潤ませ口を固く結んで出て行った。参謀は初め声を抑えていたが、放送の終わりころには声をあげて泣き出し、最後は大声で泣き崩れてしまった。情報将校は特に感情を示さず帰って行った。

速記原稿を抱えて支局長に帰ると、支局長が心配顔で「うまく取れたかね」と尋ねた。私は「何とかなると思いますが」と返事はしたが、原稿3本を机の上に並べ深いため息をついた。

これからが私の仕事である。しかしこのずたずた原稿をまとめ完全なものに復元する能力があるか。全力を尽くすのみだ。しかも時間的制限もある。どうしても明日の朝刊締め切りに間に合わせなければならぬ。私は三つの原稿を統一することから始めた。次に統一によって生じた空洞埋めにかかった。玉音には厳重な規約があり、簡単な字を特別な読み方で読ませた。処理上いい加減は許されず、特に注意を払った。最終的にはオペの受信経過の追跡にまで手をつけた。こう来たモールス信号をこう受けたのは、ここでこういう間違いを犯していたからであり、ここがこう間違っているのはここでこういう混信があったからだ、と次々に、オペが雑音や混信に妨害されたため生じた間違いを究明し修正していった。

悪戦すること2時間半、午後3時ごろやっと私の版本ができ上がり、早速支局長に提示した。注意深く読んでいた支局長が「これでいいだろう。こういう難しいときにこれ以上難しいことを言っても始まらない」と言い、台湾関係は私の版本で通することに決め、直ちに台北支社、高雄支局に連絡した。翌日新聞に載った終戦の詔勅は私の版本だった。

しかし私の責任はこれで終わってはいない。オリジナルと突き合わせ、間違っていれば責任を取らねばならない。しばらくは寝食も安らかではなかった。やがて本社からオリジナルが送られてきた。早速突き合わせ

て確認した。幸い間違いはなく、私は初めてほっと肩の荷を下ろした気持ちで、バンザイと私だけに分かる快哉かいかいを叫んだ。

ことは55年も以前のことだが、私は今でも当時の状況が網膜に焼きついている。どうしてあれだけのことができたか。若い真摯しんしんな情熱が、旺盛な敬業精神を駆り立て、国家のためにすべてをささげ切ったからこそだろう。私はそれを今でも誇りに思っており、悔いはない。

これが日本、ひいては同盟通信社に対する私の最後にして、最大のご奉公となったのである。終戦によって、私は間もなく同盟通信社を辞めなければならぬことになった。でも私は、私にこうした自己をフルに発揮できる機会を与えてくれた同盟通信社に対し、今でも心からの謝意を表するものである。

## 付記

平野正一（元同盟通信台南支局）

第2次大戦中、日本人社員が次々と応召、不在となった同盟台南支局を守り、活躍してくれたのが台湾人社員です。これらの人々のことは、もっと早い機会に皆さんに報告しなければいけなかったのですが、今回終戦55年を機に、とりあえず洪孔焯さんに当時の思い出をまとめてもらいました。私としては同胞であった台湾人、日本人になりきっていた支局の諸君のありさまを少しでも知っていたいただけると大変ありがたいと思います。

当時、私は台南支局から応召、最後は台湾軍司令部副官部に配属、「重大発表」の日はラジオ放送の速記を命ぜられました。雑音でほとんどモノにならず、記録する紙の上に涙が落ちて鉛筆も走らず、何を書いたか覚えておりません。

洪さんは真面目で、積極的な勉強家。入社後、瞬く間に同報無線のモース符号や日本語速記をマスターし、支局の大きな「戦力」でした。

現在台南市に在住。透析闘病中で、文通を続けている私はお見舞いに訪台を計画していますが、まだ実現していません。

（新聞通信調査会報」第453号 2000年8月1日発行）

## 不発に終わった暗号解読

小糸忠吾（元同盟通信海外部）

「何でこんなもってえねえことをするんだろう」——新京<sup>35</sup>（現長巻）から来て間もない紅顔の少年通信兵たちは、山積みになされた段ボールから、はがき大の真っ白なカードを取り出し、たき火の中に放り込みながら、そうつぶやいた。

ときは昭和20（1945）年8月12日。  
ところは旅順関東軍司令官官舎構内。

このカード焼却が翌日終わった頃には、官舎内の密室で四六時中ピーピー鳴っていた幾つものラジオ受信機、表の斜面にそびえ立っていた数本の丸太製受信塔は、跡形もなく消え失せていた。いずれも入り江の藻くずと化す運命にあった。

庭先でカードの焼却が始まると、それまできつく口に掛けられていたタガが緩み、事実<sup>じじつ</sup>があちこちでささやかれるようになった。いよいよ8月15日正午前に全員が広間に招集された。玉音を聴いている間に将兵、軍属、女子職員の間からおえつの声が漏れた。

当時私は、（満州）第4航空軍第800部隊（新京）の旅順分遣隊・第40

0部隊にいた。この部隊は情報隊と通信隊から成り、情報隊はさらに英語班、中国語班に分かれ、両班とも軍事放送の傍受組と暗号解読組を持っていた。中国語班には軍属がいたが、英語班は兵隊だけで、放送傍受はアメリカ生まれの二世兵士の任務であった。私は暗号解読をやった。

20年になり、戦雲急を告げると、大本営は本土決戦に備え、遠方部隊から目ぼしい人材を東京に呼び戻すことにした。参謀本部アメリカ班の大竹貞雄少尉(同盟同人)から「T大尉が君の帰ってくるのを待っている」との注進を受けたのは、その頃であった。私は前年9月、沖繩・宮古島からの帰途大本営に立ち寄り、外務省囑託でスペイン語の大家早川氏が、八方手を尽くして私の行方を探していたことを知った。私は早川氏の好意に感謝し、大本営第4班長林大佐、副官亀谷少佐の懇篤な言葉に感激し、東京を後にした。担当官からは「一応新京へ行ってくれ。いずれ呼び戻すから」と言い含められていた。

あれやこれやで私は、20年3月には東京に戻れるものと思っていた。ようやく5月末になり新京に呼び出されたと思ったら、部隊長から「貴様は中央の誰と連絡を取っている。中央が何を言おうと、絶対に貴様を東京に帰さん」と引導を渡された。さすがは関東軍、大本営総務部の命令も形なしである。

20年7月27日に日本は、連合国から降伏を迫る文書を突きつけられた。アメリカ政府のサンフランシスコ放送は、対日戦争の総まとめの中で次のように報じた。

・7月26日、トルーマン大統領、チャーチル首相、蒋介石はポツダム最後通告を発表、日本に無条件で降伏するか、破滅させられるかを選ぼう呼び掛けた。

この放送は声の放送で、文字放送ではなかったが、他国の新聞にも利用されることを前提とし、通信社電に似た形式をとった。平文の棒読み

ではなく、聴取者が筆記できるような読み方、速さで放送された。つまり句読点、カッコ、引用符、行替えなども言葉で表現された。ソ連や中国では戦後も、中央から地方新聞へニュースを流す時、この方式が使われた。

ポツダム宣言を同盟通信社が傍受したのは、27日午前4時30分。ほかに外国ラジオを傍受していたのは陸海軍省、通信省、NHK、外務省などであるが、戦後RP(ラヂオプレス)に発展した外務省のラジオ室は、一番規模が大きかったようだ。

ポツダム宣言は、アメリカがソ連の参戦前に単独で日本を降伏させ、ソ連の南進を阻止しようとした切り札であった。ルーズベルトはポツダム会談の際、スターリンからソ連が8月後半に対日参戦すると聞いていたので、イギリス、中国をそそのかし、急ぎ宣言を発表したのだ。

ポツダム宣言の衝撃はひどかった。新京も本土決戦の次に来る満州決戦に備え、態勢を固めることにした。その一環として第800部隊は、アメリカの5字暗号を解く3人構成チームを作ることを決めた。語学の担当は私、暗号組成の数理は東京帝大数学科出身のS少尉、機械関係は大蔵省貯金局の某氏。この計画がまとまると、大連からくだんのカードがわれわれの宿舎に運び込まれた。しかしチームの3人が顔合わせする前に、貴重なカードは灰にされてしまった。

アメリカが面子にかけたポツダム宣言は、日本により「黙殺(読売報知では笑殺)された。いきりたったトルーマンは、ついに決断した。前記サンフランシスコ放送の総まとめには、次の1項目がある。

・8月5日(日本時間6日)、最初の原子爆弾、史上最大の破壊力を持つ武器が、広島における日本の兵器庫および要塞の上空で爆発し、同市の大半を廃虚とした。

この原爆投下は、ソ連の参戦を早めた。以前に新京のソ連班は「ソ連



対策は万全」と胸を張っていたが、実際には関東軍は寝込みを襲われてしまった。ソ連の参戦、それに次ぐ第2の原爆投下につき、前記の放送は報じた。

・8月7日(日本時間8日)にソ連は、日本に対し宣戦を布告、同時に赤軍は満州、朝鮮、南樺太に進攻した。

・8月9日、第2の原爆が長崎に命中し、同日トルーマン大統領は、日本が降伏しない限り、第3の原爆、その他の武器にさらされるだろうと警告した。

これには次のような早とちり戦勝報というおまげがついた。

・サンフランシスコ、8月12日、日本が連合軍の降伏条件を受け入れたとのUPの早とちり電は今晚、ニューヨーク、その他の都市で和庆祝賀の行事を触発した。同電は午後9時34分(ニューヨーク時間)に発信されたが、2分後に新聞、放送は同電の発表を差し控えるよう要請された。

と言つても、以上のようなラジオ放送を旅順の英語班が毎日傍受していたのではない。アメリカ軍使用の新周波数を探し出そうとする古参のK伍長(アメリカ出身の航空機整備士)などが、ポツダム宣言発表後、食事で顔を合わせた時、耳打ちしてくれた情報が以上である。もっとも、ここに挙げた電文そのものは、私が同盟通信社傍受電のファイルから拾い出した。

暗号について少し述べると、基地間の交信では、アルファベットのAはエーブル、Bはベーカー、Cはチャーリー、Dはドッグ、Eはイーグル、Fはフォックス、Gはジョージと音読みにして使われた。この方式でいくと、戦闘機F15は「フォックス・ワンファイブ」になる。各基地はそれぞれ暗号名を持っていたから、「某基地からB29が何機某基地へ飛び立った」は簡単に暗号化され、解読された。しかしこんなものを解

読したところで、満州の第4航空軍には何の役にも立たない。料理すべきは5字(作戦)暗号や5数字(気象)暗号であった。

暗号は人間が組んだもの。解読できぬはずはない。中央は、かすかではあるが望みを持つようになった。英語の性癖に照らし数学の魔力を機械で増幅させれば、何らかの答えが出てくるであろうと私も考えた。惜しむらくは、8月下旬、私は捕らわれの身となる前に大連飛行場付近の草むらで、暗号に関し克明に記したノートを、日本には1冊しかなかったかもしれない『風と共に去りぬ』(マーガレット・ミッチェル)の普及本(1<sup>ド</sup>)とともに細かくちぎり、天に向かつて放り上げた(原注Ⅱこの本は戦前シアトルを出港した最後の船、平安丸で持ち帰ったものである)。その際思い出したのは、8月15日夜、2階の一間に集まった数人のうちの1人が、「いつかわれわれの骸骨が掘り出され、ここに優秀な日本民族が住んでいたのだ、と語り草にされるだろう」と冗談まじりに言ったことであった。

本稿で引用したサンフランシスコ放送局はアメリカ政府情報局の主宰で、主な放送内容はAP、UP、INS提供のニュースであった。

(「新聞通信調査会報」第345号 1991年8月1日発行)

# 戦時下同盟の対外放送

加藤万寿男ますお（元同盟通信戦時調査室理事）

## 日本を知る手がかり

同盟通信社は戦後外国から悪しざまに言われたが、その原因の大半は対外放送（無線電信による対外発信）によると思う。同盟の対外ニュースキャストは、敵国側にとっては日本のことを知る有力な手がかりだった。放送協会の声の国際放送もあったが、ニュースの供給源は同盟だ。同盟は日本を代表し、また代弁する通信社として世界的に有名になった。終戦直後米国の有力週刊誌「サタデー・イブニング・ポスト」の掲載した記事の中で、同盟は「数百万語の毒語を流した通信社だ」と激しい非難を浴びた。

無線電信による同盟対外放送は同盟発足後間もなく開始、英語のほかフランス語、スペイン語、中国語でも放送していたが、海外から一番注目されたのは英語による放送で、初めは通信局の一部である海外部がその掌に当たり、開戦前から陸奥陽之助君が部長だった。彼は立派な英文書きであるばかりでなく企画性があり、対外放送の仕事には打ってつけの人だった。対外放送が海外から特に注目されたのは、戦争が勃発してからで、開戦後の約半年余、日本は太平洋で赫々たる戦果をあげ、大本営は胸を張って、かつ正直に戦果を発表、敵国側では先々の事態の進展に不安を抱きつつ、同盟放送を熱心に傍受したことであろう。

私は開戦の翌年の昭和17（1942）年8月、交換船で帰国、通信局長として対外放送が所管となったが、すでにその頃はミッドウェー海戦

で日本は大敗北を喫し、太平洋の戦局は米国が制海権を握りつつあった。日本の華々しい戦果は跡を絶った。翌年の18年に通信局から分離して海外局が設けられ、松本重治氏が局長、私は次長、陸奥君は海外部長といった陣容。海外部には何十人かの二世諸君がおり、フランス語、スペイン語、中国語、ローマ字の放送もあって、海外局は130名ほどの大世帯だった。

## 大本営発表の作為

私は前ワシントン特派員という肩書入りで、氏名を明らかにした署名記事を少なくとも10回は書いたと記憶している。開戦1年を迎えて日米交渉最後のことを回想、ハル國務長官の覚書に言及、「米国があのような一方的かつ高圧的な提案を示してきたとは、日本側が到底受け入れられないことを百も承知の上で、また日本側の回答を期待しないで示したものと見るほかになく、交渉を先にギブアップし、あえて挑戦に出たのは米国である」といったコラムをはじめ、中国問題なども取り上げた。来栖き三郎駐米大使の対米問題についての演説も放送した。日々のニュース、大本営発表のほか、企画ものと称するニュースも時々放送に入れた。

私の印象に残っている企画ニュースの一つは、陸軍の了解を取って、台湾の某収容所に比島コレヒドールで捕虜となったウェンライト將軍を訪れた会見記で、確か二世の有能記者田崎花馬君がインタビューに当たった。ウェンライト將軍は会見記の中で「戦争が終わって愛する祖国へ帰り、親愛な家族と楽しい時を過ごすことを待ち望んでいる。日本で発行される英字新聞も毎日見ている」などと語り、この放送を傍受したどなたでも、ウェンライト夫人に將軍の消息を伝えてもらいたいと夫人の住所なども放送中に入れた。どんな反応があったか定かでない。

われわれが心掛けたことは、できるだけ真つ直ぐなニュース (straight news) を送ることにあったが、戦局が不利になるにつれて大本営の発表ものなど作爲が多くなったように思う。しかし同盟放送では大本営発表は漏れなく報道した。

われわれの同盟がAP、UPなどのプレスワイヤレス、ロイターの電信放送、その他米政府情報局の放送 (USIS) など傍受し得るあらゆるものを受信していたと同様、外国の大通信社でも同盟放送を傍受していたに違いなく、ことに米国防時情報局 (USOWI) は各地で同盟放送を受信していた。そして作戦関係の各機関にも配布していたことであろうし、これらの機関は対日作戦と関連して、いろいろ利用する面があったことであろう。大本営の発表は彼らの、持っている戦況の情報と照合したとき、例えば大本営が戦況の実情を国民に伝えるにいかん苦慮しているか、その他いろんな判断の資料を敵側に提供する逆効果を招いたことであろう。

私は19年夏、長谷川才次氏と交代、戦時調査室に移り「敵性情報」<sup>183</sup>の整理、分析に当たることになったが、松本氏は18年の後半ころから病気がちとなり、陸奥君もその後病気になった。20年に入って海外局は局長となった長谷川氏が終戦まで主宰、井上勇氏が次長だった。

## お知恵拝借

海外放送に関係した2年余を振り返ると、この間、政府からの特別指示は受けなかったと思う。一般的な指導方針といったものがあって、これは新聞に対するものと変わりなかったようだ。むろん検閲などはなかった。私は大本営には足を踏み入れた記憶はないが、情報局の課長連とは定期的だったか、時に応じてだったか、よく接触を保った。ほかに

対外放送のことで「お知恵拝借」といった趣旨から、実業家の浅野良三氏、元外務大臣の有田八郎氏、外交官の井口貞夫氏、東大政治学教授の矢部貞治氏（そのほかにもあったと思うが名前を思い出せない）の諸氏と、毎月1回ほど帝国ホテルで粗末な昼飯を食べて、意見を聴く会合を持った。古野伊之助社長も出席、内外の情報も報告して自由に話し合った。しかし、食べ物も不自由となり、他に理由もあってか、いつの間にか立ち消えとなった。軍との連絡は政治部の仕事だったように思う。

20年に入って、本土各都市への空襲は熾烈となり、緊迫感はますます加わった。例えば3月10日の東京大空襲（当時発表されなかったが死者10万、罹災者300万を出した）の大本営発表は「130機の敵B29機が10日午前0時半から午前2時半まで、東京を無差別空襲、宮城の各所は焼夷弾の投下により火災を起こしたが鎮火、その他の火災も午前8時には鎮火、わが方は敵15機を撃墜、重大損害を与えたもの50機」というのだった。3月12日の名古屋大空襲、14日の大阪大空襲についての大本営発表も東京大空襲と同様簡単なもので、戦果の発表もほぼ似た数字である。そして15日には情報局スポークスマン井口貞夫氏は記者会見で「東京、名古屋、大阪など敵機の無差別爆撃は日本国民の士気を高揚、最後の勝利まで戦争を完遂する決意を固めるに役立ったのみ」と語ったと報道している。

## 問題となった「黙殺」の翻訳

その後戦局はますます深刻度を加えるのみだったが、対外放送には目新しいことはなく、大本営は6月から7月にかけての1カ月余の間に敵の沖繩基地爆撃で敵機1021機を撃墜または重大損害を与えたこと、沖繩海域では敵艦15隻を撃沈また重大損害を与えたことなどを発表、同



記者会見する鈴木貫太郎首相。ポツダム宣言は重大視していないと語った=1945(昭和20)年7月28日、首相官邸

盟放送もそのまま報道している。この間重慶と延安の緊迫関係、国民政府軍と共産軍の交戦などの上海情報度々放送されている。

7月26日には英、米、中国の三国共同のポツダム宣言が発せられ、日本に無条件降伏を呼びかけてきた。

同盟放送は27日、「権威ある筋からがんち聞知したところによると、日本はチャーチル、トルーマン、蒋介石の共同宣言は黙殺する」と第一報を流した。次いで29日、「鈴木貫太郎首相は記者会見でポツダム宣言はカイロ宣言の焼き直しにすぎない。日本政府はこれを黙殺する。日本は最後の勝利を収めるまで戦争を継続する既定方針に全然変更なし」と語ったと放送した。

終戦後よほどたつてのことだが、この「黙殺」の訳語をめぐる、一部評論家から「ignore」という訳語は拒否ととられ、特に米政府は態度を硬化したといった批判が行われて問題となった。

同盟放送の第一報は「It was authoritatively learned that Japan will ignore the joint proclamation of Churchill, Truman and Chiang Kai-shek calling upon the Japanese to announce unconditional surrender. Japan will prosecute the war of Great East Asia to bitter end in accordance with her fixed policy, it was authoritatively stated.」とあり、そして追い討ちをかけるように、鈴木首相の記者会見の談話が放送された。「黙殺」はこれを裏付ける「戦争完遂の決意」が繰り返し報道されていて、黙殺の訳語には誤解される余地はないはずだが、私にとって大きな疑問は、同盟放送第一報の「権威ある筋」とはいかなる筋かということだ。これが禍根だと言えよう。鈴木首相が記者会見であるような談話を行ったのは陸軍抗戦派の圧力に屈して、心ならずもしゃべらされたものだ。

## 原爆への抗議を放送

日本国内ではポツダム宣言受諾をめぐる政府と軍部抗戦派の論争が続き、聖断が下されるまでに2週間余の貴重な日時を空費した。この間、広島、次いで長崎に原子爆弾が投下され、ソ連が対日戦に参戦した。この二つの大きなショックがついに決断に結びついたものだ。

8月6日の広島爆撃について、同盟放送は初め、「毒ガスよりも悪質の新型爆弾が投下された」という大本営発表を放送したが、その後は残酷な原子爆弾投下と報道。また8月10日、政府が中立国スイス政府を通じて米国へ提出した抗議は繰り返し放送した。「米軍の投下した爆弾により広島市民は多数の死傷者を出し、市の大部分が破壊された。これは毒ガスよりも残酷かつ非人道的であり、この種の残酷な兵器を無差別に使用することは人道と文明に対する新しい犯罪であり、日本政府は国民の名において、またヒューマニティーと文明の名において米政府に抗議する。同時にこの種非人道的武器の使用を即刻中止するよう要請する」といった趣旨の厳粛な抗議だった。

ところでポツダム宣言受諾を同盟放送が迅速に報道した経緯については『通信社史』に詳しく叙述されているのでここでは触れないが、あの刻一刻が重視された時期、同盟放送は日本政府と連合国側との橋渡しに重大な役割を果たしたものだ。

終戦末期の同盟放送の記録には「フラッシュ 8月9日新京発・ソ連軍は昨夜半ソ満東部国境で日本軍に攻撃を開始した」。8月14日は「フラッシュ ポツダム宣言受諾の天皇陛下のメッセージが間もなく送られる」といった至急報などが放送され、あのころの緊張した場面が目につく。

同盟放送は9月14日まで続けられたが、むろん放送の内容は戦争中の

ものとはがらっと変わって、占領軍の上陸、マッカーサー元帥の到着、米戦艦ミズリー号上の降伏文書調印式などの重要ニュースをはじめ、終戦後の日本の平和的な推移を毎日、簡潔に報道したものだ。

（新聞通信調査会報」第394号 1995年9月1日発行）

## 終戦第1号は10万部が即日売り切れ、世界週報

T・Y

昭和20（1945）年8月15日を挟んで、その前後の数カ月は「世界週報」ととって、最も苦難の時期であった。編集陣は、東京と長野に分かれていたし、出来上がった「週報」はわずか16部、黒一色のB5判4枚を、ただ刷って折りっ放しにしたものであった。週報が16部になったのは、用紙事情の窮迫が原因であった。新聞は既に、19年3月に夕刊がなくなり、同11月には朝刊もペラ2部<sup>2</sup>に落ちていた。

8月15日の前後といっても、今になって当時を回顧すると、一番苦しかったのは、その年の初めころから敗戦までであって、玉音放送の後は何かしら前途に曙光<sup>しょうこう</sup>が見えてきたように思えて、明日に対する希望はあった。

この年3月10日夜、東京に300余機のB29が来襲した。『日本大空襲』（原田良次著、中公新書）によると、大量投下されたナパーム弾と焼夷弾<sup>しょうえいだん</sup>によって、帝都の約4割が灰じんに帰した。この後、東京は断続的に空襲され、5月25日夜はP51とB29計500機が襲ってきた。このとき帝

国ホテルや東京新聞社が焼失した。日比谷の市政会館の南筋向かいに、18年に新築された同盟通信社本社別館は、翌26日に焼け落ちた。

3月の東京大空襲で、中央新聞の跡地(帝国ホテル近く)にあった同盟印刷所が被害を受けたので、印刷設備が3カ所に分散されたが、4月1日には、東京の諸新聞が空爆によって全滅するのを防ぐため、政府は「戦局に対処する新聞非常態勢に関する暫定措置要綱」を発令し、輪転機の疎開を図るほどの情勢となったので、同盟通信社は「世界週報」と「時事解説版」を長野に疎開させた。

「週報」の編集陣は、東京残留組と信州疎開組の二手に分かれた。日比野良夫(当時、「週報」部員)の記憶によると、長野臨時在勤の発令は20年5月1日付であった。「週報」担当者のうち、編集長の村田為五郎、部員の福田兼治、小泉てつ子、西村哲也は東京に残り、高田伝、伊藤正三、日比野良夫、谷崎終平の4家族が長野に移った。

同盟通信長野支局(支局長・荒井宗次郎)は信濃毎日新聞の2階にあり、疎開組はそこに同居して編集の仕事をした。東京組が原稿の収集、整理、長野組がレイアウト、校正、印刷確認を担当した。原稿は東京から運んだ。原稿が手に入ると、軍から特別切符(乗車券)をもらって、福田が長野まで持って行った。

谷崎メモによると、疎開組4人の宿舎は、長野電鉄で30分、信濃吉田駅で降り、そこからバスで約4<sup>キ</sup>、国胎寺の本堂であった。須弥壇の前が畳敷きで、真ん中が谷崎、右に高田、左に日比野、奥が伊藤であった。持ち込んだ疎開荷物が間仕切り代わりのバリケードであった。谷崎は本尊の前にいたので、村人が通りがかりに仏さまを拜んでゆくので、谷崎自身が拜まれているようで、本当に困ったという。

『百年の歩み―信濃毎日新聞社』は、当時、輪転機とともに疎開した新聞人の暮らしを、「食糧は底をつき、住宅はない。まさに断末魔の様

相の中であったため、この人々は気の毒な生活に堪えねばならなかった。ある人は農家を借りて住み、ある者はにわとり小屋を改装した家に住んだ」と記している。谷崎は「配給米(大豆が混入)をカユにして食べ、わずかに青い落ちリンゴ(1貫目 $\parallel$ 3・75<sup>キ</sup> $\parallel$ 3円)で子供たちは飢えを凌いだ」と思い出を語っている。

長野組4人は毎朝、バスに乗って信濃吉田に出て、長野電鉄で権堂という市内の駅へ行き、そこから善光寺門前通りを右折して、信毎2階の支局へ通勤した。仕事は小組みの校正と割り付けであった。文選と大組みと印刷は、信毎が引き受けてくれ、「週報」は、自動的に折れて機械から出てきた。出来上がった「週報」は、東京本社経由か、または長野駅から、直接バッグ便で発送した。今も残っているものを見ると、20年5月12日号から同7月14日号までの10冊が「長野市南縣町六五七、信濃毎日新聞社印刷部」の印刷である。紙は東京組が苦勞して汐留駅から貨車に積み込んだ新聞巻取紙であった。

毎週1回土曜日発行で、売価は32銭(税とも)。16<sup>ヰ</sup>のうち11<sup>ヰ</sup>までが特集、解説、翻訳で、12<sup>ヰ</sup>から16<sup>ヰ</sup>までが海外事情(ニュース)であった。16<sup>ヰ</sup>建ては、5月12日号から同9月22日号までの15冊である。

福田の回想によると、本社別館が焼けた後、東京組は市政会館の地下から1階の内信部の脇に移り、「週報」の編集が時事通信社の仕事となったとき3階上がった。戦時中は一回も休刊しなかったが、8月15日前後は、さすがに空白である。ポツダム対日宣言が7月26日に発表、日本は8月10日にこれを受諾した。これで戦争も終わるのではないかというので、長野の印刷をストップした。

終戦第1号の8月25日号は「ポツダム会談と対日宣言」を特集し、三国会談、会談公報、対日宣言、対日宣言解説を掲載した。公報と宣言は全文であった。この号は牛込区の大日本印刷で刷った。疎開せず、焼け

もせずつに残っていた平版2台をフルに動員した。しかし10万部刷るので3日もかかった。20日に売り出し、即日売り切れた。雑誌としては終戦後の第1号であったようだ。活字に飢えていた時だったとはいえ、また日本の将来を、国民すべてが心配していた時期であったとはいえ、10万部とは、すごい部数であったと福田は述懐している。

この号から売価は50銭(税とも)となった。印刷所が長野から東京に切り替えられた期間、7月14日号(通算1309号)から8月25日号(同1310号)まで5週間休んだ。この後週刊だったが、10月13日号からは印刷事情の関係から、2号ずつの合併号、32<sup>頁</sup>建てとしたから、しばらくは隔週発行となり、売価も1円になった。しかし20年中は、毎号10万部の売れ行きであった。

(「新聞通信調査会報」第222号 1981年5月1日発行)

## 軍報道部から情報取りに同盟へ

浦岡偉太郎(元同盟通信東亜部)

あの晩、夜勤で一人デスクにいと、守衛が編集室のドアを閉め、今夜は夜勤者全員に泊まってもらうことになった、と言うのだ。何のことが分からなかったが、僕は配給された夜食を食べ、馬の腹掛けみたいなベッドで眠ってしまった。

ひと眠りして夜半に目を覚ますと、局長のデスクに各部のお偉方が集まって来ていた。何事かと思つて近づいてみると、馬來半島という大き

な地図を広げて、「ここだ、ここだ」と言っている。コタバルの位置を見付けたのだ。マレー半島上陸の報でみんな呼び出されたのである。その時点では、まだ真珠湾攻撃の報は入っていなかった。

夜が明けると、ラジオは大本営発表を報じた。「帝国陸海軍は今8日未明、西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」というもので、続いて「天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス 朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス(後略)」という宣戦の詔勅が放送されたのである。

昭和16(1941)年12月8日、日本軍の真珠湾空襲とマレー半島上陸で始まった大東亜戦争は、連戦連勝で大本営発表がある度に国中が沸き立った。勝った勝ったで国民が浮かれているうちに年が明け、17年になると4月に米軍機16機が、東京、名古屋、神戸などを初空襲した。僕は同盟のあった市政会館屋上の、時計台の上に出て空を眺めると、1機が西の方へ飛んでいくのが見えただけだった。日本軍は何の防衛も攻撃もできなかったのである。

それ以後、わが国防は大丈夫かなと思つていると、5月初めには珊瑚海海戦、6月に入ってミッドウェー海戦と、大本営発表とは裏腹に敗色が濃くなっていった。僕はその年の秋、南京特派員になって中国へ行ったが、翌18年4月18日、山本五十六連合艦隊司令長官が戦死。5月末にはアッツ島の日本軍が全滅するという事態だったから、このまま負けてしまえば、もう内地へは帰れないかもしれないと思つて、覚悟を決めていた。それから一年半、凶らずも本社へ呼び帰されて東亜部勤務。半年後、2度目の召集を受けて東部軍報道部に配属されたのである。

それからは毎日、公用腕章を巻いて、同盟へ情報を取りに行くのが任務だった。東部軍の参謀部には、塚原俊郎さんと中屋健一さんの同盟先輩がいて、2人とも中尉だったが、僕は上等兵だ。普通なら将校と兵卒

が対等につき合えるわけはなかったが、同じ同盟の仲間だから気が楽だった。僕は情報を取ると、一ツ橋の共立高等女学校にあった報道部へ帰って部長に報告した。僕の仕事はそれだけで、たまには部長の講演原稿を作ったが、毎日午後から同盟へ出掛け、外信部で敵情情報をきいて、各部で油を売り、写真部の暗室で昼寝をして夕方帰るのだから、まあまあ気楽な日々だった。

だいぶ前から敗戦は近いと思っていたが、8月6日に広島に原子爆弾、8日にはソ連対日宣戦、続いて9日、長崎に原爆が落とされ、これで勝負あったと思った。そのころは同盟でも仕事を手につかなかったようだし、東部軍内部でも混乱を極めていたのがよく分かった。

いよいよ8月15日正午、天皇のポツダム宣言受諾の放送があった。「朕深ク世界ノ大勢ト帝國の現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク……」。今でも覚えている。報道部長以下直立してこれを聴いた。忠勇なる下士官の中には泣いている者もあった。

午後から帯剣を外して丸腰で同盟へ出掛けていったが、意外なことにデスクはどこも明るかった。みんな前から覚悟ができていたことだから、ホッとしたのだろう。

夕方、帰りがけに、日比谷から堀端を歩いて帝劇の前まで来ると、向こうから五、六百人のデモ隊がにぎやかにやって来た。口々に何やら怒鳴っている。よく聞いてみると、「われわれは負けたのではありません……」と、涙ながらにわめいているのだ。そのとき隊列の上を、飛行機が1機低空からビラをまいた。僕は1枚拾った。今でも持っている。

「為政者 重臣等ノ売國的陰謀ニ依リ、皇国未曾有ノ大痛恨事出来セリ、彼等ハ口ニ国体護持民族ノ名誉ヲ称フルモ、皇軍ナクシテ何ノ国体ゾ、敵ニ降服シテ何ノ名誉ゾヤ、原子爆彈何物ゾ、ソ聯参戦何物ゾ、我

等ハ君側ノ奸ヲ排シ、断乎戦争継続ニ邁進スル決意ト用意ヲ有ス、海軍航空部隊ト共ニ陸軍航空部隊モ亦健在ナリ 陸軍航空部隊」というのがそのビラだ。あの日の堀端から宮城前一带にかけて、恐ろしく殺気立っていたのを思い出す。

それから復員するまで1カ月余り、毎日同盟へ通ってぶらぶらしていた。9月末、同盟へ復帰はしたが、気が抜けたような日が続いた。進駐軍の将校が編集室へ入って来て、大きな面をして歩き回るのが不愉快だった。

11月に入り、同盟が共同になるとすぐ、日本野球奉公会(日本野球連盟)から電話があつて、8チームが復活して、11月から東京と大阪で公式試合を始めるといふ。続いて相撲協会から、11月16日から国技館で晴天10日間の秋場所を開くという知らせがあつた。

戦前の相撲協会は軍部と関係が深かったから、相撲はどここの社も社会部の担当で、陸軍省詰の記者が取材に当たっていたのに、できたばかりの運動部に担当が代わったのである。ところが、あいにく運動部には相撲の分かる者がいなかった。部長の飼手菅四さんが「お前やれ」というので、僕にお鉢が回ってきたわけだが、たまたま僕は小学生だった大正の初期から、相撲が好きで国技館に通っていたから、二つ返事で引き受けた。

とは言うものの、相撲の取材は勝敗ばかりではない。好勝負には手捌きを書かなければならないのだ。多少相撲は知っていても、なかなか手捌きは書けるものではない。そこで戦前からの相撲記者だった、社会部の松尾義男さんから手ほどきを受けることにして国技館へついて行ってもらうことになったのである。

いよいよ秋場所が始まってみると、戦争中に風船爆弾の工場だった国技館は、爆撃を受けて屋根は大きな穴だらけ、壁面は焼けただれて、見



る影もなかった。久しぶりの本場所とあって、客の出足はよかったが、正面<sup>さし</sup>は進駐<sup>しんしゅ</sup>軍兵士に占められて、戦前とは趣がまるで違っていた。

土俵<sup>どひょう</sup>の方はと言えば、復員したばかりの坊主頭や、ざん切り頭の力士が多く、みんな痩せ細って、湯たんぼみたいなあばらを出したものが目立ち、力の入らない相撲ばかりで、大した盛り上がりがなかった。花道で出を待つ力士は、たいいてい軍毛布で作ったジャンパーを引っかけたみすばらしい格好をしていたし、中には進駐軍の捨てた、のみさしのタバコを拾って、ポケットに入れる力士もいて、これが天下のお関取のなれの果てかと、情けない思いをしたものである。横綱の土俵入りだけは、さすがに舞踊美を失っていなかったが、太刀持ちの持つ太刀の中身は、マッカーサー司令部に召し上げられて、竹光に変わっていた。

〔新聞通信調査会報〕第345号 1991年8月1日発行

## 第6節 苦難の引き揚げ

### ついに巴港とまへの灯を見たく樺太からの引き揚げ

荒尾弘（元同盟通信豊原支局長）

豊原（現サハリン州ユジノサハリンスク）支局は昭和16（1941）年4月1日の開局、内地では花の季節というのに、まだ吹雪ふぶきいていた。本社から同行した電訊1名、オペレーター2名、現地採用の速記兼電訊1名、自分と5名でスタートした。ところがその年の6月に独ソが開戦、12月に大東亜戦争突入と全く多忙の連続だったが、全員よく頑張ってくれた。地元の樺太日日新聞（その後、新聞統合で樺太新聞と改題）は開局の日から生の、しかも豊富なニュースの配信で紙面を大拡充、部数も急激に増え、社長ら幹部から感謝されたのも良い思い出であった。

緒戦の頃の大戦果もそう長くは続かなかった。大本営発表もだんだん怪しくなってきた。支局の無線機の屋外非常訓練も数回実施した。国民奉公会も結成された。軍の要求で樺太報道義勇隊（樺太新聞単独）、同連合隊（同盟、東京3紙、北海道各支社局全員）も組織され、軍報道班の若い中尉

にハツパをかけられながら非常訓練を繰り返した。連合隊長だった自分は時々、長崎という中尉と渡り合ったものだった。だが班長の原少佐から軍の配給酒を何回と届けてもらったことは、不自由だった当時だけにありがたかった。連合隊長の余得というところだったろう。

#### 引き揚げ開始

8月15日の終戦のラジオを聞いてからの全島民は、一億総決起、米英撃滅の意気はどこへやら、一億総ふ抜け、軍官関係首脳部の家族は早々と引き揚げた。16日、樺太長官から一般の引き揚げを布告、証明書の交付を受けるため全市は大混乱、自分は報道義勇連合隊長として各社の家族全員の証明書を取る責任がある。樺太庁警務課と折衝、特別の計らいでその日のうちに一括入手、18日出発と決まった。国境方面ではソ連機の爆撃が始まったとの情報がある。各戸30<sup>+</sup>の荷物3個では貴重な物しか入らない。内地は戦災と極度の物資不足、何としても送りたい。だが奥地からの避難民がなだれ込んでくれば、物より人である。到底不可能であろう。



函館港に入港した樺太(サハリン)からの引き揚げ第一船「雲仙丸」=1946(昭和21)年12月6日

18日朝、支局員家族など21人を引き連れ駅に出掛けた。想像通り言語に絶する大混乱、駅長に頼んでようやく無蓋貨車の隙間に押し込んでもらった。野良着姿のお百姓さん、着のみ着のままの人ばかりだ。途中の駅という駅は人と荷物の山、軽便鉄道級の樺太鉄道の輸送力では到底さばき切れるものでない。家族たちにもあきらめるよう話したが、結局その通りになり、送り出した荷物は1個も着かなかったのである。

ようやく大泊(コルサコフ)にたどり着いたが、連絡待合室やホームはもちろん、駅前から付近の空地まで人、人、人の渦巻き。船にはどんな乗り込んでいる様子だが、人の波は少しも動かない。8月というのにどんより曇り、今にも降りそうで肌寒い。みんな身軽な夏支度だ。気持ちは焦るが身動きもできない。その時突然、後ろから軍服の大男が「支局長さん」と声を掛けてきた。びっくりして振り向くと、大谷飛行隊の開隊式に行った時、意気投合して痛飲した豪傑(ごうけつ)大尉だった。事情を聞くと、即座に「飛行隊の家族の中に紛れ込ませてやろう」と人込みをかき分けて、もう終わりにかけていた列の中に割り込ませてくれた。全く地獄に仏とはこのことかと心から大尉に感謝した。

「白竜丸」の甲板に一同を何とか落ちつかせた。「この船で一緒に引き揚げたら」という家族に「支局員も残っている。無線機の処置もある。無責任なこともできまい。間もなく帰れるだろう」と無事な航海を祈りつつ、降り出した霧雨の中を豊原に引き返した。

### 終戦1週間後に爆撃

終戦後、連日のように飛来したソ連機が2日ばかり姿を見せずほっとしていたが、1週間後の22日昼近く、突然爆撃機3機が豊原市上空を襲った。折から避難列車の到着でごった返している最中の駅構内に数個

の爆弾を投下、続いて機銃の掃射。たちまち阿鼻叫喚の巷と化し、全市は終戦になって初めて爆弾の洗礼を受け、今さらのように戦争の恐怖におののくという皮肉な立場に置かれた。死者も出た。多数の負傷者も出た。爆弾の破片が、七、八百ほど離れた樺新(樺太新聞)の2階編集局の窓ガラスをきれいに射抜いていたのを見た時はさすがにぞっとした。退避するまでその窓を背に、編集局員と話していたのを思い出したからである。

引き返したと思った敵機の爆音がまた聞こえた。慌てて新聞社の前の簡易壕に飛び込んだ。大通りを隔てた四、五十ほど筋向かいの店舗から黒煙と同時に、ものすごい勢いで火炎が噴き上がった。炎は一昼夜半で大通り西側を街外れまで焼き尽くした。住民はほとんどが神社山に逃げた。全く燃えるにまかせたありさまだった。天を焦がす猛火と各戸の屋上に立てられたソ連軍歓迎の赤旗、それに降参の白旗の対照は凄絶さいぜつというか、悲惨というか、何とも言い表せぬ気持ちで眺めたものだった。

23日、特高課長室で話し合っていた時、電話のベル。知取(マカロフ)警察署から「ソ連戦車旅団が南下するので、日本軍との摩擦の心配がある。進駐地をどこにするか」との電話だった。結局市の郊外豊北ということにした。樺太庁、豊原市、会議所など早速歓迎の打ち合わせを始めたらしい。

24日早朝、ベッドの中でものすごい戦車のごう音を聞いた。支局員と家を飛び出し、見物に出掛けた。日本側の指示を無視、いきなり豊原市に乗り込んで来たのだと直感した。重戦車6台に、自動小銃を肩にした汗と泥にまみれた大男ぞろいのソ連兵が無数に乗っていた。大通りはたちまち人垣で埋まった。その日の樺新は写真入りで大々的に報道した。アリモフ少将の率いる戦車旅団に続いて、警務司令部、国家警察(エム・ピー・デー、MPD)の出先もぼつぼつ乗り込んで来た。

ある日各社の代表が集まって豊原爆撃についてソ連側に抗議する相談をした。アリモフ少将に面会しようということになったが、どこでも取り次ぎを断られた。ちょうど駅に相当数の部隊が来たので部隊長にでもと出掛けた。大尉が2人いた。婦人の大尉の方が、日本語が分かった。われわれの抗議に「爆撃機はハバロフスクからと思う。命令が前線に届くまで日数がかかる。もうしばらく警戒せねばならぬだろう」という全くばかげた話である。その際、マダム・カピタンは「われわれは平和進駐ではない。3日間の戦闘の結果、武力占領したのだ」という。

事実、国境方面では日本軍の一部と警備隊が相当強硬に抵抗、ソ連軍の戦車何台かに損害を与え、敷香(ポロナISK)の兵舎も焼き払ったという。それに小型の船まで動員して逃げる引き揚げ者の足止めの意味もあって爆撃したのかもしれない。だが幸いその後、1回偵察機が飛来したきりで、事なきを得たのは何より幸いだった。

## 治安の悪化

その後、食糧営団、各所の食糧倉庫、製菓、製紙各会社も接收、9月に入って樺太庁、市役所その他の各機関も正式に接收され、大津長官は貯金局の2階に軟禁されたと聞いた。これより先、アリモフ旅団長一行の歓迎パーティーは豊原中の芸者、娼妓しょうぎ総揚げで盛大に行おうとしたが、その席上、アリモフ閣下から、この種女性の即時解放を命ぜられて、せっかくの催しも惨めな結果に終わった。数日ならずして、全島の芸娼妓は全部解放された。

銃砲や刀剣類は直ちに提出しろとか、住民登録をしろとか、ラジオ受信機は全部提出しろとか、ルーブルへの切り替え(1円=1ルーブル)、日本円の使用禁止とか、昔の町会を通じて次々と布告が出た。各所に歩哨が立

ち、表面は至極平和のうちに行政措置が取られた。しかし各地で婦女暴行、押し入り強盗、辻強盗が頻発した。男装の婦人の姿も街で見受けられた。夜は全市が戦時中より嚴重な遮光と戸締まりで人一人通らぬありさま。

近所でも次々押し入れられ、自分の家にも2度押し入れられた。1度は壊れかけた時計1個で追い返した。2度目は薄暮、毎日支局長持参の酒で支局員を交えて酒盛り中、3人組のソ連兵がのっそり土足で上り込んだ。時計をくれ、万年筆をくれ、はては金を出せという。豪傑の毎日支局長が「ばか野郎」と真っ赤な顔で怒鳴りつけた。自動小銃は持っていたが、肩にかけたきり別に脅かしもしない。そのとき自分はテーブルの下に隠れた白鞆しろぶちの大刀をひき抜きざまテーブルに思い切りつき立てた。ソ連兵3人は慌てて飛び出した。この日本刀は備前もので、終戦後偶然知り合った土建会社の社長から頂いたものだが、家宝級の名刀だったかもしれない。

10月半ばに町会長がソ連の航空少尉夫妻を同伴して部屋を貸してくれと言ってきた。押し入り防止の役に立つと思って快諾。ところがリョーニヤと名乗る少尉は親友のミーシャ夫婦も一緒に部屋でいいから頼むという。一間ならと承諾、それから2組のソ連人との共同生活が始まった。部屋代の代わりでもなかったろうが、時々パン、バター、ウオッカなどをくれた。町内でもソ連兵とのごたごた解決に役立ってくれたことはありがたかった。

豊原支局はソ連参戦と同時に、受信機を樺太庁新館の一番奥まった一室に移した。隣が特高だった。支局員は開局以来のオペレーターは2人も徴兵でとられ、応召者も2人出した。電訊の女子2人は家族とともに引き揚げたので、当時は電信課から配属のオペ2人、現地採用の電訊3人、記者1人だった。そのうちソ連側の出先が来て配属オペさんは2

人とも引き揚げられた。札幌との電話も不通となった。樺太庁にもエム・ペー・デーが出入するようになり、歩哨が立つようになった。

## 「小笠原丸」撃沈

特高課長から支局の無線機を樺太庁の諜報機関と見られては困るから、急いで搬出してくれと哀願された。さて大っぴらにできぬとなるとどうして運び出すか思案の結果、特高課員の協力を得て深夜から早朝にかけて、特高の非常用毛布とむしろで受信機を包み、窓から裏庭に出し、無事樺太の2階に戻した時は支局員とともにほっとした。翌25日昼近く、突然電話局の係長から札幌との通話ができるかもしれぬ、同盟は一番先になどとの通知。早速ソ連軍進駐までの粗筋を原稿にまとめかけていたところへ、札幌をつなぐとの知らせ、いきなり花田通信主任の声が飛び込んで来た。

同盟の次に毎日支局が札幌と通話した。大田原支局長の耳に飛び込んだのは「お父さん」という小学6年生の長男の声、後は泣き声だけ。ようやく札幌支社員の説明で、19日に大泊をたった通信省の「小笠原丸」が北海道・増毛ましげの沖で機雷に触れて爆沈、大田原支局長の奥さん、6歳の長女、それに生まれて間もない赤ん坊が一瞬にして多数の引き揚げ者とともに海中に消え、長男は船の破片につかまって漂流中助けられたことが分かった。大田原支局長は無事引き揚げたと信じていただけにショックも大きかったのだろう。それ以来酒浸り、支局に見舞ったときも日頃の剛腹さはなく、一升瓶を抱えてぼそぼそと涙声で話すだけだった。

同盟の支局員にも被害のあることが分かりびっくりした。電訊の須田君の新婚間もない奥さんも同船に乗っていたのだった。須田君は豊原商

工会議所事務局長の推薦で現地採用した親兄弟のない札幌出身の青年だったが、非常に常識もあり、真面目で将来を期待していた。7月に通信課員の妹さんと結婚させたばかり。兄一家と引き揚げての遭難であった。その後、須田君は親代わりの前記事務局長宅を、「樺太に居残る」と言い残して出たきりという。どこかで無事に生きていてくれるよう祈っている。

毎日の支局長一家は証明書の引き揚げ先が違っていたため、どうしても訂正してもらってこれというので1日遅れ、報道関係者の家族だというので、「小笠原丸」に乗船させてもらったための遭難だった。その上、大田原支局長は翌年5月ごろ、各支社局長などと前後してソ連側に引張られ、刑務所で盲腸を病み、手術の結果が悪く死亡したと風の便りで聞いた。運命とはいえ全くお気の毒なことだった。1人になった長男坊も今は立派な社会人として生きていることだろう。多幸を祈るや切。

## 「新生命」と改題

警務司令部の大尉が下士官2人を同道、樺新の人の案内で支局に現れたのは、確か8月27、28日ごろだった。2台の受信機を見ながら発信装置はないか、発信地はどこか、同盟とは何かなどを質問。「機械を持ち出したり、破壊したりしてはならない」「大丈夫そのようなことはしないが、あなた方がこの機械を預かってくれるのか」そのうちに話します、あなたが責任をとってください、また来ます」となかなかうまい日本語で応答して帰った。その後、一度前に来た下士官の1人が来て、スイッチを入れ発信音が聞こえると「ハラショー」と言って帰ったきり、何の音沙汰もないままに過ぎた。

数日してソ連の新聞関係者が樺新に乗り込んで来て「新生命」の題号

の下に、樺新の機構そのまま日本人向け新聞を発行した。主幹ミシャロフ少佐のほか女性を含めた5、6人のソ連人が中心で、樺新の人たちは一部を除きほとんどがそのまま働かされた。

ミシャロフ少佐は小柄だが、下から見上げるような鋭い目つきの第一印象の悪い男だった。日本語は非常に達者で、支局の無線機について、警務司令部の大尉が来たことを話すと「分かりました。そのまましておきなさい」と言うだけだった。その後新聞社の空気も以前の明るさはなくなり、彼らの前では小さくなった。樺新の遠藤社長、星野編集局長も国民奉公会の首脳部の人たちとともに引張られた。警官も前日まで協力させながら、翌日一斉に学校その他に集団隔離収容された。暮れも正月も虚脱状態のうちに過ぎた。

密出国もだんだん難しくなった。それでも3千円、5千円で小さなポンポンで運んでくれるという話も聞いた。インチキも相当あったらしい。ちようど近所に住む豊原魚菜市場の佐藤という主任さんが、ソ連側から西海岸の本斗(ネベリスク)の漁業トラスト出張所の責任者として行くことを命ぜられた。現地の準備を終え豊原に帰った佐藤主任の話では、本斗には付近海上を監視する30メートル程度の船があり、ソ連兵1人、機関士1人、それに3、4人の日本人が乗って、1日1回深夜から早朝海上を巡視することが分かった。酒でつり、しばらく働いて信用させれば同船に乗り込める。自動小銃を持つソ連兵1人を海に放り込めば、後は機関士1人、脅かせば何とかなるというので、魚菜市場のにわか使用人として豊原からの3人とともに本斗に行くことになった。プロプスク(通行証)も入手、ウイスキー5本、ウオッカ3本も手配できた。出発前夜に送別会があり深夜に帰宅した。同居のリョーニヤの夫人が水を持って来てくれた。この人たちとももうお別れだ。妻子の無事な顔を思い浮かべつつ、ベッドにもぐった。

## 家宅搜索、連行

2月8日明け方、前夜の吹雪はやんでいった。コツコツとノックの音、同居の日本人鉄道員が戸を開けた。いきなりどやどやと5人のソ連兵が踏み込んだ。上級中尉と少尉の通訳、自動小銃を抱えた3人のサルダート(兵士)だった。ベッドに起き上り、「何の用事か」「ちよっと来てください」「どこへ、何のために」。返事がない。丹前姿の自分をストーブの前の椅子に座らせ、上級中尉は黙々とタンズや押し入れ、戸棚の中まで探し出した。果てはベッドの中から枕まで破って見る始末。まだ昨夜の酒がさめない。大橋鉄道員に話しかけると「ストロイ」と止められる。

1時間ばかりして「寒いからたくさん服を着てください」と言う。大げさな家宅搜索で出たものは速記帳2冊、中身だけのラジオ、引き揚げ用の米、みそ、タバコ、甘味類を詰めたリュックだけ。そのままジープで旧豊原署のエム・ペー・デー本部へ。そして五つ並んだ留置場の真ん中の5寸角の格子戸をくぐらされた。その頃には酔いもさめてきた。ネクタイもバンドもとられ、オーバーこそ着ていたが、締めきつけない体には2月の樺太の寒さはひとしお強く感じられた。密航計画がばれるはずがない。何のためかさっぱり見当もつかない。

それから3週間。廊下を隔てた高窓も雪でふさがり、昼夜の別もない暗さ、薄暗い電灯の光に、ソ連兵が歩く姿が格子戸の間からチラチラ見えるだけという陰惨な留置場暮らしが続いた。その間、取り調べは前後10回ばかり。それも必ず夜10時を過ぎてからストーブの赤々と燃える3階の中佐の部屋に呼び出された。

取り調べの内容は報道義勇隊のこと、NHKで放送された手記のこと、樺太庁首脳部の言動や軍のことなどだったように記憶する。最後に指紋をとられ、署名させられたが、取り調べ中に叱られながらいつも居眠り

ばかりで、何のこともやらさっぱり分からぬまま、反ソ的言動とスパイ嫌疑で刑務所送り。それも10年というのだから、あきれてものも言えぬ。ところがソ連側の書類の不備だったせいか、刑務所には4、5時間いただけで、元のエム・ペー・デー本部に戻され旧日本軍の収容所送りとなった。

3月3日の雪晴れの日、ユジノサハリンスク(原注)豊原、この頃は旧日本土地がソ連名に変わっていたからコルサコフ(大迫)に着き、そこから8<sup>キ</sup>余り離れた雄吠泊(おほえとまり)の旧日本海軍基地跡の横穴壕にあった樺太部隊の収容所に入れられた。そして千名近い将兵に交じって黙々と12時間労働に服した。

ちょうど霧雨の薄ら寒い5月半ば、夜間作業に出動した際、折悪しく飛行場の油槽タンクの鉄板を運ぶ作業にぶつかった。厚さ3、4<sup>ミ</sup>もある大きな重い、油でぬらぬらした鉄板をトラックに、そして貨車に運ぶ。一晚中何百回となく繰り返したが、中尉の現場監督が予定していたであろう分が運べず、夜明け近くになっても作業をやめさせぬ。自分は再三交渉したが駄目。ついに15人全員座り込んだ。中尉も頭に来たか、ピストルを2、3発、倉庫の壁に向かって威嚇(いかむ)発射した。駆け付けた歩哨が、われわれに味方して自動小銃を擬(な)しつ、中尉に時間が来たのになぜ帰さぬと談じ込む。結局もう少し運べばということで作業に取りかかった直後、自分は貨車から線路上に落ちて、左眼と右膝に負傷。作業は中止になった。中尉は足を踏み鳴らして怒号していたが、歩哨が探してきてくれたトラックでようやく収容所に戻った。こうして1ヵ月半、野戦病院で療養中に、本隊は北樺太に移動、食料難と酷寒地の道路作業で相当の死者と病人を出したと聞く。この部隊は2年遅れ、やせ細って帰ってきたという。

## ホルムスクに移動

退院後、病人部隊に所属し軽作業を続けた。後には北千島からの部隊が入って来た。樺太庁の寺谷労政課長と2人で、将校当番をしながら元気のいい若い将校を、訓戒したのもむしろ楽しい思い出である。11月に入ってホルムスク(真岡)に移動するという。いよいよ引き揚げかと、兵隊たちは急に元気になった。ところがホルムスクに着いて山の上の旧真岡高女の校舎に入った翌日から、各教室に大きな2段ベッドを作る作業をさせられた。何日も続いた。帰れそうな気配もない。そのうち街に出て、引き揚げが始まるらしいと聞いて、一般引き揚げ者の収容施設だと判断した。

12月初め、一般の引き揚げ者が続々入って来た。自分らは屋外の雪の中のテントに移された。一般との接触は許されない。ある日引き揚げ者の中に新聞人が1人いるといううわさを聞いた。会いたいと思って隠れて探した。やっと探し当てた。北海道新聞真岡支局長だった。紙屋の主人と名乗って隠れている、絶対口外しないでくれと真剣に頼んでいた。無事函館上陸後、道新紙上に手記を発表した。同時に自分の手記「ああ巴港(函館)の灯が見える」も全国紙に載った。

いよいよ一般引き揚げ者の乗船が始まった。その翌日、突然われわれの私物検査が行われた。おかしいなと思っていたら、第1船の「白竜丸」は満載したが、第2船の「雲仙丸」は半分くらい余裕がある。作業成績のいいわれわれの隊全員を引き揚げさせるということになったのである。思いもかけぬ朗報に全員歓声を上げた。自分は乗船と同時に船倉深くもぐり込んだ。というのは各社の記者が共同で帰国嘆願書を出し、それが発覚して、乗船間にソ連官憲に拉致されたということを知っていたからである。実際、今までに感じたこともない恐怖心に襲われたものだった。

た。

船が港を出たころ、ようやく甲板に出た。次第に離れ行く樺太の山々を涙にぬれながら眺めた時の感慨は今も忘れられない。途中ものすごいしけとなり、第1船「白竜丸」はスクリューを折損し小樽に避難、「雲仙丸」は「釜山引き揚げでも第1船だったのに」という事務長の希望通り、第1船として夜の函館に入港した。その時見た巴港(函館港)の街の灯の美しさは、全く印象的だった。

翌朝、「雲仙丸」の周りには記者、カメラマンを乗せた各社のはしけが何隻も押し掛け、船の周りをぐるぐると回っていた。水上署の船がこれを制止するようにメガホンで怒鳴っていた。甲板と下のはしけの歓声で何も分からないくらい。そのうち報道陣の船から自分を呼んでいるというので、右舷に左舷に駆け回るが、その都度、後を追って見えない。ようやく先回りして発見した。函館支局の川村君の姿が見えた。早速用意の原稿を防水のため軍毛布で作った手袋しゅとうに包み投げた。海中に落ちた。4、5隻のはしけや、水上署の船もいた。そのうちの1隻が拾って逃げた。あつという間の出来事だった。持ち逃げは新北海。このため自分の原稿は半日遅れたとのことだった。上陸後CIC24に呼ばれ、一般より1日遅れて解放された。当時札幌支社長だった佐藤喜一郎さんに迎えられる、畳の上で杯を口にしたときはただ感無量、その酒のうまさは終生忘のさまざまなことを思い起こし、容易に寝付けなかったことが、まるで昨日のこのように思い出される。

(新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」)



# シベリア抑留の日本兵を見届け

坂田二郎（元同盟通信モスクワ支局長）

春まだ浅い1946（昭和21）年4月25日午後、佐藤尚武<sup>（尚武）</sup>大使以下五十余名の僕らモスクワ在留日本人は、8カ月余にわたる抑留生活をようやく解除され、ウラジオストク行き国際列車「ロシア号」に特別連結された車両に乗車、ヤロスラブリ駅をたった。列車が欧亜両大陸の分水嶺であるウラル山脈を越え、東シベリアのノボシビルスク駅に滑り込んだ時、誰か大声で叫んだ。

「おいっ、あれは日本の兵隊じゃないか」。見れば駅構内のあちこちで真つ黒になって労役に服しているのは、紛れもない日本兵。こうして僕らは奇しくも、関東軍の兵士たちがシベリアの果てまで連行され、抑留されている事実を、日本人として初めて、わが目で見届けたのだ。彼らは僕らが故国へ帰還する途中と聞き、ある者は僕らにしがみついてオイオイと泣き出し、ある者は、「一日も早く帰れるようにしてください」と声を絞って哀願するのであった。断腸の思いであったが、手の施しようもなかった。

列車が東行するにつれて、沿線の各駅でも日本兵捕虜の惨めな姿が見られた。その一つにタイシエツト駅もあったのだが、それがバム鉄道（第2シベリア鉄道）の起点であり、ブラーツクまでの新規鉄道工事に4万人もの日本兵捕虜が投入され、「枕木一本に死者一人」と言われるほどの犠牲者を出した事実は知る由もなかった。

それからちょうど6年後、再入ソした時に、外務省のフランツェフ情報局長に対して、残留日本人戦犯に関する13項目の質問書を提出したが、

「既に完全かつ的確な資料が数回発表されている」と取り付くしまもなかった。

だが今日グラスノスチ（情報公開）によってソ連は、既にタイシエツト地区で死亡した1444人のリストを日本側抑留者団体に渡し、さらに来るゴルバチョフ大統領訪日までには約6万人の死亡者リストも示すという。45年も前のシベリア捕虜の姿がまざまざと<sup>（まざまざ）</sup>瞬に<sup>（瞬）</sup>浮かび感慨を禁じ得ない。

（「共同通信社友会会報」第32号 1991年3月25日発行）

# シベリア・チタ監獄の浴場

塚本義隆<sup>（義隆）</sup>（元満州国通信社理事長）

1945（昭和20）年12月27日、われわれの護送列車はシベリアのチタへ到着した。午前10時ごろであろうか、青空に太陽が照っている。全員下車の命令が出て、貨車の入り口にはしごがかけられた。一同は土手を埋めている雪の中を滑り降りて空地へ整列した。10日間の薄暗い貨車の中の生活から、にわかに太陽の輝きわたる白雪の中へ投げ出されたので目がぐらぐらする。

30分も歩いて駅前にある4階建て劇場風の煉瓦造りの建物に収容された。一行は500人ぐらいで、われわれは20人の小部屋があてがわれた。スチームがよく効いて暖かい。夕方になって初めてバケツでお湯をくれた。ブリキの空き缶1個と木のサジー本、角砂糖1個が配給されたので、

これで熱いお湯を一杯飲み、ようやく人心地がついたが、夜になると腹が減ってきた。皆が騒ぎ出したが、結局何も食べ物はない。

翌朝はまだ暗いうちに起床を命ぜられた。待ちかねた食事がきたのである。配給されたのは粟の薄いかゆで、ブリキの空き缶に一杯半ばかり。それでも新京<sup>35</sup>を出発して以来、10日目に初めて食べる飯の味である。

29日夕方、60人が一組になって、チタの町を行進、相当遠いところにある浴場へ連れて行かれ、2週間ぶりの入浴。入浴といっても、浴槽があるわけがなく、手桶<sup>おけ</sup>を借りて湯をくみ、身体を洗うだけ。

60人がひしめき合う狭い浴室は、片隅にカンテラー1個がわずかに鈍い光りを投げているが、中はよく見えない。セメントの床が水垢<sup>あか</sup>のためぬるぬるして足がすべる。脱衣場へ戻ると、熱気消毒を済ませた衣類を返してもらおうのだが、シャツがない、上衣を盗まれた、チョッキがない、靴下がなくなった、と叫ぶ声が悲惨に身を刺すのだ。聞けば、ここはチタ監獄の浴場だそう。

1946年の元日も、われわれは、このシベリアの酷寒地チタの仮寝の宿舎、電灯もない小部屋で迎えた。皆が新年のあいさつを交換したとき、不意に誰かが「ささやかながら正月の餅をお分けします」と言う。いぶかりながら眺めると、それは本当の小餅1個。阿部君という人が袋から取り出し、細かく割って一人一人にかけらを分配してくれた。どこかに隠して持ってきたものらしい。

1月3日にチタを再出発、また西方へ輸送されて1月20日、カザフ共和国(カザフ・ソビエト社会主義共和国)のアルマ・アタ(現アルマトイ)に到着。3年間のソ連抑留生活が始まった。ちょうど21年昔の話だ。

〔新聞通信調査会報〕第49号 1967年1月1日発行

## 終戦で孤立、死闘重ね騒乱の平壤脱出

荒井勝三郎(元同盟通信平壤支局長)

昭和20(1945)年8月15日正午、ラジオを通して天皇陛下の沈痛に満ちた御声で終戦の詔勅<sup>しよくちよく</sup>が放送された。張りつめていた身も心も、一時にぐったりした気持ちで、言い知れぬ感情で泣いたのである。同盟通信社平壤支局はこの重大ニュースの速報に、テンヤワンヤのまるで火事場のような騒ぎ。ところが応召や徴用などで日本社員は支局長の私と無電受信係の坂野秀夫君(当時18歳)の2人だけで、他は全員朝鮮人社員であったため、詔勅を聞かぬや手のひらを返したように反抗的となり、全員職場を放棄してどこかへ引き揚げてしまった。私はこの重大時の使命遂行に支障があつては申し訳ないので、直ちに平壤毎日新聞社の森社長と相談して、同社の日本社員の応援を求めて、東京本社よりの受信や電文の翻訳、関係機関への速報など徹夜の奮闘をした。

一夜明けた16日の早朝になるや、武装した数名の北朝鮮保安隊員を先頭に、朝鮮人社員の一部がドカドカと闖入<sup>ちんにゅう</sup>し、銃を擬して「同盟通信のあらゆる機関は、北朝鮮人民政府で接収するから、現状のまま出てゆけ」と強制的に退去を迫ってきた。同じ建物にあった平壤毎日新聞も同様に接収され、出入り口を中心に、社屋の外は武装した多数の保安隊員によって厳重に監視され、一步も近付くことができない。涙をのんでそのまま立ち退くほか手の施しようがない。また通信、交通機関は全部ストップとなり、京城(現ソウル)支社はもちろん、新義州<sup>シンニョウ</sup>、清津<sup>チヨンジン</sup>両支局への連絡も全然つかず、孤立状態に陥ってしまった。

一方、平壤の街は、朝鮮独立を叫ぶ朝鮮人が歓声を上げて練り歩き、

うっかり日本人が街路を歩いている姿を見ると、老幼男女を問わず、投石あるいは殴る蹴るの暴行を受けるので、外出もできず、屋内に身を隠しているほかすべがない。このような不安な日が幾日か続いたが、困ったことは多少用意した食糧が欠乏し、かつ着のみ着のまままで住家を追い出されたことだ。

郷土を遠く離れ、しかも異国の空の下、住むに家なく、食べるに食なく、まるで野良犬のように追われ追われて、生き抜くために死と闘いながら、地下に潜って不安な日々を送らねばならぬ。それに加えて恐れていた北朝鮮の冬が駆け足でやって来た。酷寒のため幼い子供や老いた人、あるいは病弱な日本人男女がばたばたと死んでゆくその悲惨さは、体験した者のみがあることで、到底筆舌では表現のできない生き地獄である。

日がたつにつれてソ連進駐軍の略奪行為も激しく、ピストルや銃剣などで日本人を襲撃して迫害を加えた。平安南道の古川知事を筆頭に道庁の日本人官吏、警察官、武装を解除された軍人や軍属をはじめ、戦時中指導的地位にあった者は、官憲といわず民間人といわず、発見次第どしどしと拉致され、戦犯として手錠をかけたまま打つ、殴る、蹴る、果ては水攻めや火攻めの拷問にかけられるありさま。そのまま獄死した人、あるいは遠くシベリアに連れて行かれて、親子兄妹がばらばらにされる始末。

このような中であって、私たちは石をかじり、草を食<sup>は</sup>んでも何とかして生き抜かんと、地下に潜んで頑張ったが、精も根も全く尽きて、私たち親子4人と、ただ1人の日本人社員坂野君の5人は、そろって死の寸前にまで追い詰められ、もう駄目だと観念することが幾度もあった。その度にこんな所で果てたらそれこそ犬死にだ。何とかしてこの危機を脱し、かつ朝鮮にいる日本人を救出するにはどうしたらよいか、身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあることを信じ、いろいろと考えた末、よしここで一

つ、のるかそるかやろうと決意した。

それはソ連のタス通信社野戦報道班に連絡を取って、日本人救出と危機打開について努力してくれるように折衝することだった。妻にこのことを打ち明けて賛同を得たが、報道班の本拠に行く途中で見つければ、殺されるかもしれぬ危険は当然覚悟せねばならないし、不幸にして捕らわれるようなことがあったら、そのときは万事終わりなので、万一のことを考え、妻も同道することにした。ルンペン姿に変装した2人は、3、4日の間隔を置いて平壤の街を潜行し、平壤公会堂前の旧朝日新聞社平壤支局に本拠を置く同報道班にたどり着き、班長に直接面会し、同盟通信社平壤支局長の身分証明書を見せ、いろいろと日本人の窮状を話した。

「案ずるより産むが易し」の言葉通り、非常に好意をもって私の願いを聞き入れてくれた。その場で関係各方面と連絡を取って、私の一家を保護してくれることになり、生命の安全を保障するため、ソ連進駐軍司令官署名のパスポートを私に持たせてくれた。良かった。これで助かった。このままで生命さえ持ち続けていれば、夢にさえ見た懐かしい日本に帰れるとの自信を得たが、それでもまだまだ安心はできない。騒乱の平壤を脱出するとしても乗り物を利用することは絶望的で、地図の分からない朝鮮の山や野道、川を渡って、徒歩で南下するよりほかに方法がない。

幾千<sup>キ</sup>もある遠い道を歩くのはこれまた非常な冒険で、実に危険なことばかりで途中でどんな迫害があるかもしれぬ。途中における食糧はどうか、栄養失調で衰弱している身で幾千<sup>キ</sup>もの山野を無事に歩けるかどうか全く自信がない。しかしこのままでは、自滅するほかないので、どうせ死ぬのなら一步でも日本の本土に近いところで死にたいと勇気を湧き立たせた。同じ気持ちの他の日本人とも細かく打ち合わせ、私の持っているソ連進駐軍司令官のパスポートを唯一の生命の綱に、同

道を希望する老幼男女合わせて110名余りが一団となって、夜闇に乘じて私が団長格になって、寝静まる深夜に声をひそめて平壤脱出を敢行したのである。

終戦の日から数えて270日余りを経た、小雨の降る寒々とした夜のことである。途中、幾度か北朝鮮保安隊やソ連進駐軍などの監視網に引掛かったが、その都度、私の持っているパスポートを見せて、弁慶の関所破りと同じような危ない場面を繰り返しつつ、少ない食糧を互いに分け合って飢えをしのぎながら頑張った。神の加護もあつてか、一人の脱落者もなく、ついに南北朝鮮国境の北緯38度線の突破に成功。南朝鮮警備隊の保護を受け、仁川にある北朝鮮脱出日本人収容所で疲れた心身を休めることができた。

思えば平壤を脱出してここにたどり着くまでには、幾回となく軟禁されたり、野宿したり、風や雨にさらされ、履物は切れてはだしで腫れあがつた足を引きずりながら、手を取り互いに助け合つて歩く姿は悲惨そのものであった。このように苦勞に苦勞を重ねて、待望の38度線の国境を突破した時は、うれしさのあまり全員が思わず万歳を叫び、抱き合つて泣いたのである。

仁川港から引き揚げ船「高栄丸」に乗って佐世保港に上陸し、夢に見た懐かしの本土に第一歩をしるした。互いに無事であったことを喜び合つて、厳粛な解団式を行つてから、それぞれ肉身の待つ郷里に向かったのであるが、平壤での終戦の日からソ連進駐軍、朝鮮保安隊などによる迫害を受け、飢えと酷寒と闘いながら過ごすこと270日余り。また平壤脱出からこれまた途中いろいろと死闘を重ね、本土帰還まで210日余り。通算480日余りの長い年月を生き抜いたことは実に奇跡と言ふほかはない。

佐世保港に上陸したのは11月初め。霜の降る薄寒い季節だが、私たち

家族はボロボロになったシャツ1枚を着ていたので、引き揚げ者収容所で軍服を1着ずつ配給された。これを身に付けて久方ぶりに人間らしい気持ちをやや取り戻し、ホッと一息入れて、混乱する引き揚げ列車に乗り込んで東京に向かった。途中、福岡支社に立ち寄り、当時の田村支社長と面接したが、田村さんから同盟通信社の解散、新たに共同、時事両通信社が創立されたこと、古野伊之助社長が巣鴨プリズンに収容されていること、その他、終戦以来の日本国内の急変ぶりを聞いて驚きながら東京へと向かう。

列車が品川駅に着くと、ホームは出迎えの人たちでごった返し非常な混雑であった。人混みを縫つて、赤地に白く染め抜いた同盟通信社旗を高く振りかざしながら長林密蔵さんが、満面に笑みをたたえながら「ご苦労さん、実によかった。どうなつたか非常に心配していたが無事に帰れて何よりだ」と出迎えてくれた。あのうれしい劇的感激に満ちた気持ちには、私の命のあるうちは脳裏から寸時も消えない。

(新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」)

## 最後に帰国、社に席なし

坂田寛蔵(元同盟通信南支総局編集部長)

長い間帰国もせず、中国戦線を駆けずり回つた。主に中間基地(漢口時代)において、最前線からの無電を整理、中継して本社に打電すること、ガリ版ニュースの発行に当たったから、銃弾飛び交う最前線には数回く

らしいか行っていない。しかし戦線が広がるにつれ、各部隊に配置する記者、カメラマン、無電技師、荷物運搬の連絡員の編成など中間基地としての任務の煩雑さにてんでこ舞いしたことを覚えている。

最も長期間勤務したのは上海総局だった。松本重治さん、松方三郎さんの二代の総局長の下、田村源治さんが編集部長で、私と高見義男君（人間として美に優れた人物だった）は編集部次長として多くのスタッフと共に働いた。その頃、殿木圭一、岩永信吉、坂田二郎、久我豊雄、川崎正雄、前田雄二、半谷高雄、大星石松、その他たくさんの俊秀な若手記者がいた。松本総局長が中国要人と接触したり、重要ニュースをつかんできたことはある程度知っていたが、松本さんの『上海時代』を読んで、今更ながらその活躍ぶりには驚嘆した。

私は盧溝橋事件（1937年昭和12年）前後と、漢口占領（38年）後の2回、漢口支局長を務めた。2回目の支局長のときは井手新六君という若年記者がいた。その後大きく成長したことを心から喜んでゐる。東久邇宮殿下が中央軍総司令官として大別山脈を越えて漢口を占領し、入城後の記者会見の際、私は最右翼に座らされ、殿下と1ばばかりの机を隔てて殿下がイモを食べられた話などを聞き、質問したりしていたが、そのうち恩賜の酒が配られ、それがとてもうまくてグラス2杯を飲んだところ、あまり酒に強くない私はいつの間にかすうすうと寝息をたてて眠ってしまった。

当時皇族といえは神様扱いであった。神様の前で居眠りしたというので、後で他社の記者連中から「坂田君は度胸があるなあ」と冷やかされた。今でも恐縮、汗顔、記者として不謹慎であったと思っている。

横田実氏を総局長とする広東の南支総局編集部長を2年間務めた後、横田、半谷高雄両氏と私の3人が「上海陸軍特別報道部」へ出向。朝日、読売、毎日、大陸新報など各社の出向社員と共に敵方後方攪乱かくらんの宣伝文

を作成し、ラジオで中国民衆に呼びかける原稿を書いていた。終戦の8月15日の2、3日前から中国民衆は日本の敗戦を知り、街中に宣伝して不穏な空気がみなぎっていた。

特別報道班員が書いた原稿は1冊の冊子にまとめて印刷、各方面に配布していた。一番心配したのはこの冊子で、早急に取り戻して在庫品とともに焼き捨てなければならぬ。1冊でも中国軍の手に渡れば、われわれは戦犯として処刑されるとの懸念から必死になって焼き捨てに努力した。それからすぐに報道部から1人当たり米2俵（1俵は約60キ）をもたらって私は虹口地区に住む遠い親戚の家に転がり込み、天井裏の部屋に約2カ月間潜伏した。当時、湯恩伯軍が上海に入城して治安維持に当たり、軍律は厳しかったが、いきり立った群衆が日本人を殴り殺したというニュースが毎日のように伝わってきた。

同盟通信社はそれまで中支の各地に散らばっていた社員と家族72人を上海北站（上海北駅、現在は廃止）近くの民家を借りて収容していたが、危険地帯であることと、72人には狭すぎるので楊樹浦ようじゅほの一角の地所を借りて引越すことになった。蒋介石將軍の「怒みに報いるに徳を以てす」という布告がどれだけ日本人の命を救ったかと考えると蒋介石將軍には今も感銘を覚える。

布告で平静化したと見て、私は潜伏先から同盟の収容施設に出掛けた。横田実氏が統括しており、私は「みんなの世話役になれ」と命令された。総務部長的な役割を仰せつかった訳である。すぐに引越しの準備にかかり、軍のトラックを借りてきて、72名と荷物の運搬にかかった。

そのトラックが門の上部の煉瓦れんがを荷物に引っ掛けて落とし、その一つがあいにく下を通りかかった中国人少年の頭に当たり流血した。流れた血を同伴の母親が少年の顔中に塗りたくって悲鳴をあげ、大騒ぎとなった。たちまち付近の群衆が大勢集ってきますます騒ぎが拡大し、群衆

に取り囲まれてしまった。「日本人を殺せ」の声を浴びながら私が母親と少年を家の中に連れ込もうとしているところに、幸いに中国人巡捕長（警官）が通り合わせたので、事情を話して調停を頼んだ。母子と巡捕長と私は家に入り、治療費として50万円を払い、巡捕長のポケットにも50万円をねじ込んでようやく一件落着した。

楊樹浦に移ってからは部屋の割り当てや食事の世話、その他諸々のもめ事で終日多忙を極めた。これから先72人をどうして食わせていくかについて心配していたら横田大人が、同盟が保有していた白紙（ザラ紙）を売って、大きな麻袋3個にいっぱい紙幣を詰め込んだのには驚いた。戦争直後の極端なインフレ時代とはいえ、こんなにたくさん紙幣は見たことがなかった。この金で当分は食いつないだが、段々懐が寂しくなり、ついにはカリントウを作って街に売りに行くようになった。武士の商法でうまくゆくはずはなかったが、どうにか餓えをしのごうができた。

その間、横田大人が日本人居留民団と毎日連絡を取りながら、便船ごとと同盟社員と家族を帰国させた。何回目だったか、社員10名が乗った船が呉淞沖で沈没した、というニュースが入った時ほど肝を冷やしたことはなかった。幸い巡航中の米国船に救われたとの報でホッと胸をなでおろした。社員と家族の帰国がほぼ終わり、私はわずかに残った社員と居留民を合わせて60名の集団の大隊長に推され、嚴重な身体検査の上、最後の「興安丸」に乗船した。私の副官は齊田弘君だったと思う。

鹿児島に上陸して、米軍からDDTを頭から全身に振りかけられ、無蓋列車に乗り込んで部隊は解散。私は一晚郷里に帰ってから上京した。大平安孝さんから、「全部席がふさがってしまってあなたの座る場所がないよ」と言われた時には失望落胆、目の前が真っ暗になった。みんなの世話で散々苦勞して最後に帰社してみたら、先に帰った人たちがそれ

ぞれ適当な部署に座を占めていたのだから、やり切れない気持ちだった。ある人から「おまえは日本一のお人よしだ」と言われたが、同僚社員の帰国促進に専念し、自分の座席を毛頭考えなかったお人よしぶり、あほうぶりをしじみと反省させられた。結局、「時事通信社の熊本支局を開設しろ」と言われ、郷里の福岡に近い熊本に赴任。記者感覚を失って慣れない仕事で失敗の連続であった。それからの私の人生は狂いっ放しだった。

〔南船北馬〕第3号 1983年1月15日発行

## 漢口、引き揚げ日録

横山英志（元同盟通信）

昭和20（1945）年8月15日

洞庭湖畔の岳陽駅を出発したのは13日の夕方だったが、汽車は空襲を警戒して日中は走らず夜行のノロノロ運転なので、武昌（現在の武漢の一地区）駅に着いたのは15日の午前9時。負傷してから9カ月余をずっと付き添ってきてくれた台湾出身の連絡員、原田君に助けられ、不自由な足を引きずりながら傷病兵の最後尾について武昌兵站病院に入り、初めて白衣に着替える。病室は四畳半ほどの個室。ゆっくり寝られるぞと思っていると、けたたましい空襲警報。超低空の敵機がピラをまいていった。

衛生兵の話だと、日本の無条件降伏を報じたものだという。咄嗟には

信じられずにいると、「玉音放送があるから全員中庭に集合せよ」という知らせに、同室の原田連絡員が顔色を変えて飛び出して行く。ついに来るものが来たという感じ。一人病室に残る。気が抜けたような感じで、涙がとめどなく流れる。興奮している原田君にとりあえず同盟通信漢口支局に連絡に行ってもらおう。少しでも詳しい情報が知りたかったから。

16日

漢口同盟に走った原田君から何も音沙汰なし。

17日

漢口支局の八木毅君、南金助君がガリ版刷りの同盟ニュースを持って見舞ってくれる。原田君は私が武昌兵站病院にいることを告げると、そのまま消息を絶ったという。彼の場合、私たちよりも敗戦のショックは大きかったのではないかと思う。同盟ニュースで、ようやく降伏までのいきさつを知ることができた。八木君の話だと、武漢地区は比較的平静で、日本人に危害が及ぶような動きはないという。

22日

朝食後、漢口第一陸軍病院に後送の命令が出る。白衣のまま揚子江を舟艇で渡り対岸の病院に入る。街は極めて平静。

25日

病院の食事、日ごとに悪くなる。この分では体力の回復どころか栄養失調になりかねない。一日も早く退院するにしかずと今日から歩行訓練を始める。

27日

飽きもせず同じ所を歩き回っている私を不思議そうに見ていた傷病兵も1人、2人と私の歩行訓練に加わり、ついに十二、三人も列をなすようになった。

30日

朝食後、看護婦を通じて、退院の許可を申し出る。折り返し「軍医殿に伺ったところ退院の許可はできない」という答え。それでは自主退院するしかないとの決意。夜になるのを待って同盟漢口支局に電話する。前田廉支局長すなわに病院の許可はないが、退院したいので迎えを頼むとお願ひする。

31日

正午近く、前田支局長、八木君が着替えを持って迎えに来る。同室の患者たちの羨望せんぼうの聲に送られ、玄関、正門を避けて横手の潜り戸から出る。洋車ヤンチョ（人力車）でまず軍報道部に報告に立ち寄り、江漢路鄱陽街の同盟漢口支局に落ち着く。同室に先客あり、電通北京支局長の十時柁秀氏。彼は漢口に出張中病気になった由。ほかに八木君、田崎君、博川次竜運転手のほか食事係の中国人婦人とその幼児と中国人少年という構成。支局の通信設備はすべて中国側に接収され、同盟の機能は停止。この建物の2、3階は中国通訊社漢口支局となり、活発な通信活動をしているということである。

9月30日

体調悪く、日記を付ける元気もなく1カ月を過ごした。総領事館の宿舎にいる前田支局長と清川儀一君が来てくれる。総領事館では今日から館内の改修工事を始めたという。冬を越すかもしれない抑留生活のためで、工事が終わり次第、私たちも移ることになるだろうという。中国通訊社の人たちが、私たちの部屋の窓ガラスを全部持っていったので、私たちは板やボール紙を打ちつけて寒さをしのぐありさま。

10月2日

博川君と総領事館の宿舎に前田支局長を訪ねる。十時氏の伝言を伝えるのと、間もなく移る予定の宿舎を見たかったため。高橋、清川、藤田の3君に出会う。宿舎は爆撃で壊れた領事館官舎の2、3階を利用する

もの。アンペラで屋根を補修し、間仕切りをして、領事館、産業経済会、大陸新報、同盟通信などの職員家族を収容するというのだが、雨風も満足にしのげそうにない。

爆撃で破壊された日本租界の日本人学校の校舎に住んでいる黒川勝君を訪ねる。日本人は戦況が悪化するとほとんどの人は家族を内地に引き揚げさせていたが、彼は家族4人とここで終戦を迎えた。喜美夫人、長男正也、長女満恵の4人の生活のため、校庭にアンペラ小屋を建て、在留日本人相手の八百屋を開き、今日で4日目だという。1人の中国青年が店を手伝っていた。「霍さんがなあ、市政府に勤めているのを辞めて、店の手伝いをしてくれよるんじゃ、わしは何もしてやった訳でないのに、世話になったと言うてなあ」と言つて、黒川君は霍さんを紹介した。私と同年輩ぐらいの人である。

この霍家という青年は天津市北郊霍庄子村の人で、天津から北京、漢口と京漢線を南下する日本軍に徴用され、漢口で解放されたのを黒川君が漢口市政府に就職させ、ずっと家族ぐるみ付き合っていた。霍さんは、これを徳として引き揚げまで黒川君一家の世話を献身的にしたという。現在は天津市北郊に居住、71歳で健在である由。

午後4時すぎ、鄆陽街の宿舎に帰る途中、疲れたので洋車に乗る。100円の約束だったのが降りる時になって150円くれというので黙って払う。立場の転倒というやつであろう。

### 3日

朝早く目がさめる。日課の一つになった体操をやって街に出る。10月の大気は冷たいが、清々しい気分です。街角で湯気を立てている屋台で湯麵を食べる。法幣<sup>17</sup>で30円。江漢路に足をのばす。マントウ屋が店を開き、隣に湯麵屋の屋台もある。ここの湯麵は50円。夕食は十時氏のおごりで牛肉のすき焼。一年半ぶりのご馳走で、みんな満腹する

まで食べる。こんなにおいしいものは日本に帰っても食べられないだろうと十時氏と語り合う。

### 4日

朝、江漢路まで散歩する。兵站本部のあった建物は既に中国軍の兵舎になり、たかさんの中国兵が炊事をしたり、大声で話し合っている。街並みには、つい先日まであった日本語の看板はすべて中国語に塗り替えられ、中には中美商會とか中英洋行とかいうように米英資本の進出を思わせるものも目につく。武装解除された日本兵の一団が白い腕章をつけた丸腰の将校に引率されて江漢路から中山路の方へ行く。ちょっと見は青年団という感じだが、兵隊の顔は一樣に暗い。

午後は部屋にずっとこもって、長編の『鯨とともに』を一気に読む。これは自分の体力がある程度回復したということかもしれない。午後8時すぎ、初めて夜の街に出てみる。街灯は消え、月もない真っ暗闇である。洋車引きが暗闇からのっそり立ち上り「要<sup>ヤオ</sup>、不要<sup>フヤオ</sup>」と呼びかけた。博川君の話によると、漢口の物価は2、3日前からほとんど倍に跳ね上ったという。在留邦人の生活はますます窮迫するばかり。引き揚げ船の早く来ることを祈るほかはない。

### 5日

中国軍の第6戦区司令部から日本字の新聞「正義日報」が発行され、在留邦人に配布される。一面に蒋介石総統の「国民に告ぐ」というラジオ放送の全文が日本語で載っている。日本が敗けたというより、日本人が中国人に敗けたのだという感じ。蒋介石は実に人間的な温かさを持った指導者だと思う。裏面のニュースでは東久邇内閣は短命に終わるだろうという記事が目を引く。日本では新しい政治の胎動が起こっているらしい。

### 9日



江漢路の華中日報社の掲示板を見に行く。東久邇内閣の総辞職、幣原喜重郎氏に大命があったと東京電は伝えている。日本を吹く風はまだまだ激しいだろう。一日も早く帰りたい。午後再び街に出ると、偶然高橋君と出会い、一緒にそばを食べる。街で見かける日本人はこのところぐっと少なくなつたが、やがて日本人は街を歩くことさえできなくなるかもしれない。

## 10日

今日は双十節(中華民国の建国記念日)。街では朝早くから戸毎に国旗や提灯を掲げ、新しい聯が貼られ、慶祝の気分がいっぱいだ。勝利の双十節だけに慶祝行事も盛り沢山あるとのことだが、日本人の外出は危険なので禁止の触れが出る。夜、提灯行列があるというので、そつと外出。危険を避けて暗い所を選んで歩く。平素は暗い裏通りも、今夜は明々としている。今日の正義日報は幣原内閣の成立と日本共産党の台頭を報道している。

## 14日

鄱陽街の部屋を引き払い、十時氏と領事館の同盟宿舍に移る。博川君は韓国人というので自由の身。「横山さん、元気になってお国に帰ってください」と涙を浮かべて出て行く。中国人の母子、身寄りのない少年とも別れる。

新しい宿舍は洋室に畳を敷いたもので、床と窓の高さが同じくらい。しかも窓は外に向かって観音開きになっており、何となく嫌な感じがしていたが、果たせるかな、不幸な事件が起きた。ある夜、同室の八木毅君がトイレに行こうとしてこの窓から転落した。まともに落ちたら即死だったろうが、窓の下に張り出していた樹の枝に受け止められ、バウンドしてコンクリートの地上に落ちた。左眼失明だけで助かったのは奇跡というほかはない。

## まとめ

領事館の宿舍にいたのはほんの数日間だった。武漢にいた日本人はすべて、旧日本租界と漢口競馬場の建物に日僑集中区として收容されることになり、領事館をはじめ、産業経済会、大陸新報社、同盟通信などの職員と家族は旧日本租界から2<sup>キ</sup>余り離れた漢口競馬場に收容された。同盟通信関係では前田支局長をはじめ十時柁秀、八木毅、清川儀一、前田正臣、高橋某の諸氏と私など9人で、競馬場の中央観覧席の最上階の部屋を割り当てられた。コンクリート床に畳を敷き、蚊帳を布団がわりにして寝るといふ有様で、寒さしのぎにニンニクをよく食べた。

日僑集中区に自治制を敷くことになり、競馬場は集中区第14保となり、保長に前田支局長、課長に十時氏がなった。私は歩行も大分よくなったので、清川、藤田の両君と競馬場のスタンドの横手に大福餅屋を開店、大陸号と名付けた。毎早朝中国人街に行つて、1個15円で仕入れたのを20円で売るのが、1日の仕入れ限度は100個、日に20人ぐらいの客が買った。雨の日は50個も売れ残り、清川、藤田の両君が14保内を原価を割って行商したり、時には無料で配ったこともある。それでも仲間の副食代になったり、汾酒(中国の蒸留酒)を買えた。前田支局長は保長として人知れぬ苦勞をされていたと思う。

21年1月半ばごろからようやく引き揚げの見通しがつき、引き揚げ先別に県人会を組織することになった。私は北海道人会の顧問に祭り上げられ、2月11日、漢口から引き揚げ船に乗った。

(「南船北馬」第3号 1983年1月15日発行)

# 集中営からコレラ船へ、ハノイからの引き揚げ

前田雄二（元同盟通信ハノイ支社編集部長）

昭和20（1945）年3月9日に、日本は仏印（フランス領インドシナ）の主権をフランスから奪った。いわゆる「仏印処理」<sup>24</sup>で、日本軍は仏印全土で兵を動かし、フランス軍を武装解除したのだった。私は当時、支局長としてハノイにいたが、それまで平穩無事だったインドシナはこの日、境に急角度に窮乏と敗戦の方向に向かうことになった。

仏印処理は、太平洋戦争自体が危険な段階に差しかかったため、南方の基地を固めるために行われたもので、これを機に比島（フィリピン諸島）にあった南方総軍がサイゴンに移駐し、サイゴンにあった仏印派遣軍司令部がハノイに移動してくることになった。これに応じて同盟もサイゴンを南方総社として福岡誠一氏が着任し、ハノイを支社に昇格させ、6月にはサイゴン支社長だった皆藤幸蔵氏<sup>25</sup>がハノイ支社長に兼任し、私は支社編集部長になった。この頃から終戦までの支社の職員は次の通りだった。

【記者】小山房二、藤田令允【写真】小川三郎【無電】角田文雄、奥山清一【庶務】滝山源三郎【鉄筆】岡本輝磨、立岡熊雄、益田信行、坂巻【連絡員】田中、北崎

皆藤氏の来任の頃からハノイへの米軍機の爆撃はその頻度を増し、日本軍は米軍上陸に備えてラオスに後退して抗戦するための準備を始めた。当時、私のそばには妻と生後一年半の長女がいた。南方に妻子を伴っていたのは、同盟では私一人だった。その頃、南方からの最後の引き揚げ船「阿波丸」<sup>26</sup>がサイゴンに寄港するというので、福岡総社長から私の妻

子に乗せる手はずをつけたからよこすようにとの連絡があった。「阿波丸」には乗船希望者が多く、席を取るには並大抵ではなかったのだが、妻は幼児を抱えて一人帰国するのは心細く、再三の連絡にもかかわらず、ハノイにとどまることを決めた。人間の運不運は分からぬもので、安全と思われた病院船「阿波丸」は撃沈され、サイゴンから乗り込んだ僚友久野茂男君ほか3名の同盟人は南海にその生を終えたのである。

しかし戦況が悪化し、軍はもちろん、邦人全員がラオスへ撤退する計画が進むにつれて、私はいざというときは、妻子をフランス人の修道院に預ける決心をし、妻ともそのことについてひそかに手はずを考えた。しかし、戦争のテンポは速く、広島、長崎への原爆投下、ソ連の参戦となつて、8月15日の終戦の日がやってきた。何十年ぶりというトンキン地方の飢饉のため、ハノイは農村から続々流れ込んでくる避難民であふれ、地獄図絵の様相を呈していた。フランスは権威を失い、日本は敗れ、安南民衆は飢えた。その間隙を縫って、ホー・チ・ミンの率いるベトミン<sup>26</sup>（越盟）はみるみるその勢力を拡大して、その後の政権確立の基礎を築いたのである。

こういう状態の中、まずアメリカの使節団がハノイに入ったが、日本軍を武装解除する役目を負った中国軍の到着が緩慢だったため、治安維持はそのまま日本軍の手で続けられた。敗戦の日本軍が、その後2カ月近くも北部仏印の治安に当たるといふのは奇妙な状態だったが、この余裕を利用して、大使館、日本人会は日本軍と協議して、ハイフォン北方約30<sup>キ</sup>のカンエン（クアンイエン）に邦人の集中営（収容所）を設け、自主的に帰国待ちの生活に入ることを決めた。

このカンエンには、昔の安南の城跡があり、城壁をめぐらせた中に、フランス軍が兵舎に使っていた廃屋があった。この兵舎を中心に、日本軍の手で数棟のニツパ（椰子）小屋がつくられた。そしてハノイ、ハイ

フォンを中心とする北部仏印一帯の邦人は、それまでの生活を引き払って、続々とカンエンに集まった。同盟支社もカンエンへ移動することになり、まず10月上旬、藤田、岡本など若手の一行が、先遣隊として無電機を抱いてカンエンへ向かった。

その頃、盧漢將軍の率いる雲南軍の先鋒がようやくハノイ地区に到着しつつあったので、一行が陸路を行くと、途中、中国軍に荷物を点検される恐れがあった。そこで舟を雇って、ソンコイ(紅河)を下った。ハノイ、ハイフォン間は陸路なら2、3時間で行くところ、3日もかかる難行だったが、無事に無電機をカンエンに運び込むことに成功した。その受信機がその後のカンエン生活で通信発行に大きな役割を果たしたのだ。

雲南軍の本隊がハノイに入ったのは、この先遣隊が出発した直後だった。そして明大出で日本語のできる中央通訊社の記者が将校とともに乗り込んできて同盟支社を接収したのは、10月12日のことであった。それ以後、皆藤氏は三井支店長宅、私の一家は横浜正金銀行の支店長宅と、このように分散していたが、19日にはわれわれ残留組もハノイを後にカンエンへ向かった。しかし、われわれ15名の支社員のうち、終戦直前、現地召集で軍隊に入った酒巻は別として、既に支社を辞めて商売を始めていた北崎とともに角田、滝山の2人は、同盟支社の統制下から離れてハノイに残り、個人行動を取ることになった。3君はハノイを去るに忍びなく、安南人と同居して生活を立てようとしたのだ。

しかし、それは容易なことではなく、角田、滝山の両君は翌年の引き揚げには、われわれに合流して日本への船に乗った。これに対して北崎と、その後カンエンから離脱していった連絡員の田中の両君は、ついに日本へ帰らなかった。その後の風の便りでは、田中はバオダイ帝の安南政府軍に加わり、ベトナム政府の作戦中、敵弾を受けて死んだというこ

とだ。北崎については杳として消息がない。

カンエンでの集中営の生活は決して楽なものではなかった。しかし、自主的に設営し、組織した団体生活だったため、他の南方各地で行われた監禁生活に比べれば、はるかに自由だったと言えるだろう。本部の許可証があれば営外に外出し、町で日用品を買ったり、市場で食料を手すりたりすることも可能だった。皆藤氏がカンエンに入る前に、軍司令部から相当額のピアストルを借り入れてきていたので、われわれは営の共同炊事のほかに副食物を入手することができた。

カンエンでの通信発行は11月上旬から始められたが、既に同盟は解散して共同になっていたもので、キーワードの文字をどう書いていいかわからず、はじめは「協同」と書いて出したりした。カンエン生活は約半年続いた。その間、南シナ海を荒らしていた海賊の一隊が集中営に送り込まれてきて、一緒に生活することになったり、恋愛問題や乱闘事件があったり、野球大会や演芸会が催されるなど、多彩な人間模様が織りなされた。この中で、われわれ同盟班は、通信発行という極めて重要な仕事を続けていたため、つまらぬいさかいに巻きこまれることもなく、営内では敬意をもって遇されていた。

昭和21年2月ごろ、突然、盧漢司令官の名前で、皆藤、前田の両名にハノイに出頭せよとの命令書が届けられた。戦犯容疑者の追及が始まっていたため、多少の不安の気持ちを持ちながら、日本軍のトラックに乗ってハノイへ行ってみると、用件は、同盟を接収した中央社の支局長が同盟ハノイ支局の業務内容を知りたいという簡単なものだった。われわれは日本料亭の「河内」に泊まり込んで、3日ほど中央社の相手を務めただけで、再びカンエンに戻った。

待ち望んだ引き揚げは4月だった。迎える船はリバティー船で、われわれは4月に入るとカンエンを後にハイフォンに向かい、中国軍の人員

点検や荷物調べを受けた。乗船は15日、荷物は持てるだけのものは持ち帰って構わないとのことだった。師団長や参謀など乗船間際に戦犯容疑で引き止められた人たちがあつたが、われわれは無事に乗船、狭い船内にギツシリと詰め込まれた。

船は、故国への飛ぶような思いを乗せて、南シナ海を北上した。しかし、3日目には船内にコレラ患者が発生してたちまち死亡するという事件が発生した。幸いコレラは広がらなかったが、船はコレラ船の指定を受けた。23日には浦賀沖に着いたものの、そのまま沖に停泊することになり、その後1カ月、われわれは故国の緑を目の前にしながら船内監禁の苦しい日々を送つたのである。その間、注射は前後3回打たれたが、そのため熱を出して寝込む者が続出するありさまだった。また検便は頻繁に行われた。そうしている間に南方から持ち帰つた食糧はたちまち欠乏し、われわれは新しい下着類や靴下を船員に提供して、夏みかんやトマトなどと交換して栄養を補つた。戦後のハノイやカンエンの生活は不自由ではあつたが、肉体的な苦痛はなかつた。しかし、この1カ月にわたるすし詰め船内での窮乏生活は身にこたえるものであつた。

それも5月25日にはようやく終わりを告げた。われわれは浦賀の土を踏みしめたのであるが、人員調べや検疫、荷物検査などにさらに5日間の収容所生活を余儀なくされた。これらの手続きのすべてを終えて、われら一同が自由を与えられたのは5月31日だったのである。われわれ同盟ハノイ支社の一同は、終戦から約10カ月間、互いに分かち合つた長い労苦をねぎらい、別れを惜しみながらそれぞれの家路に就いた。わが同盟ハノイ支社は、同盟本社の解散後7カ月目に、浦賀駅頭でその歴史を閉じたのである。

濃い初夏の緑の中を久里浜から東京駅へ、そして東京駅から荻窪へと、私と子供を負つた妻は、大きな荷物を抱えながらポロポロの省線17の中に

あつた。車窓から見る東京は全くの廃虚と化しており、中央線の車窓からは白亜の国会議事堂が遮るものとしてなく、すぐ間近に眺められた。私は、ただ茫然ぼうぜんと、窓外に走り去る変わり果てた光景を見やるばかりだった。

(新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」)

## サイゴン終戦記く生涯忘れ得ない現地人の好意

福岡誠一(元同盟通信南方総社長)

### 日本降伏の一報

誰も戦局の前途についてイリュージョン(幻想)は持っていなかつた。問題はどのような形で、いつ終末が来るかであつた。広島せりつの被爆、次いで長崎の同じ運命。敵側の放送を傍受していたわれわれには原爆の戦慄せんりつがよく分かつたし、事態の容易でないことはなおさらよく分かつた。しかし、敗戦の報は、それでも意外なときに、意外な形で、意外にあつさりとして入ってきた。

8月10日に昭南(シンガポール)から総社次長の福田一君が事務打ち合わせのためにサイゴン(現ホーチミン)へ来ることになつてきた。当時、総社はサイゴンと昭南の両地にあり、サイゴンには私、昭南には福田君が駐在していた。南方総軍はサイゴンに総司令部を置き、南方全戦局の指揮に当たっていたが、無線の交信、輸送の利便さなどからいうと、昭

南の重要さは、はるかにサイゴンをしのいでいた。従って、マレー方面軍司令部は、ある意味では総軍以上の実際的重要性を持っていた。同盟の南方総社が昭南を完全に引き揚げるわけにかなかった理由もそこにあった。

福田次長は昭南新聞<sup>226</sup>会理事長を兼ねていて、同盟がマレーおよびスマトラ地区で担当していた日本語ないし英語、マレー語、中国語の新聞紙の発行責任者でもあった。そのため福田君は久しくサイゴンを訪れておらず、事務打ち合わせかたがた、暮友の寺内寿一総司令官をダラットの山荘に見舞う予定になっていた。ダラットは仏領インドシナの夏季政庁所在地で、南方総軍が万一の場合に立てこもる築城予定地でもあった。

福田次長は、当日午後7時ごろ、サイゴン飛行場に到着する予定だが、飛行機が遅れそうだという通報があり、私は動物園近くにあった仏軍下士官クラブ跡の総社の事務室で仕事を見ながら情報を待っていた。時間がどんどんたつて8時近くになった。当時、日本側は南方全域にわたって日本時間を使用していたので、2時間の時差のあるサイゴンの午後8時は、実際には午後6時で、ちょうど日没前後、それほど暗くはなかった。

8時を少し過ぎると、無線室から電務主任の津川勝美君が「はい、英文放送」と言つて、東京から送信されてきた8時の同盟英文放送の一枚目を届けてくれた。いつもなら午後8時は夕食時で、事務所にはいないのだが、この日に限って福田次長の到着を待っていたため、この英文放送を受信と同時に手にすることができた。

何気なく目を通して、一瞬、電流のようなものが体中を走るのを感じた。日本の降伏を通告するスウェーデン政府宛て通告を報じた対外ニュースの第一報なのである。私は次から次へと受信される一枚一枚の電文を待ちかねるようにむさぼり読んだ。ついに来るものが来た。戦争

は終わった。日本は全面的に降伏した。間髪を入れず、ロイターは、ピカデリー・サーカスで、折から昼食に外出中のロンドン市民が狂喜する光景を報じてきた。そこは、かつて私が朝夕に通ったところだけに感慨無量であった。

## 嫌われたフランス人

8月15日の天皇の放送は、私は聞かなかったが、ダラットでは、土子猛君が主任となっていた同盟の通信部に、寺内総司令官が出掛けてきて、福田次長や土子主任とともに直立して聴いた。寺内総司令官は既に軽い脳溢血のういっけつに襲われていたが、放送を聴きながら涙を流していたという。

総軍の首脳部は続々とサイゴンに帰ってきた。昭南では、マレー方面軍司令部の幹部がなかなか敗戦を認めず、同盟総社でもかなり手を焼いたらしいが、サイゴンでは総司令官以下若い参謀にいたるまで素直に中央の決定を受け入れる空気で、終戦処理は順調に進んだ。

しかし、日のたつにつれ、市内の物情は騒然となってきた。当時、安南人といわれたベトナム人のデモが、初めは自然発生的にぼつぼつであったが、次第に組織化して、市内のあちこちで見られるようになった。ことに総督官邸の前の広い大通りには、毎日のように赤い旗や白い旗の行列が見られた。赤い旗の行列は越盟(ベトミン)、すなわち、後の北ベトナム派の示威行進であり、白い旗の行列はバオダイ派、すなわち越南側のデモであった。この両派の盛衰は、今や敗戦でニュースを持たないわれわれにとつて、一向定かでなかった。日々の上げ潮、下げ潮であり、そして、われわれはいつとはなしに有形無形の虜囚の生活に追いやられていった。

とは言っても、日本人の生活は、まだ意外なほど自由であった。元来、

戦時とは思えないほど物資の豊富なサイゴン地区では、食料などで窮屈を感じることは全くなかった。サイゴン名物の野外市には相変わらず、あらゆる食料品がふんだんに並べられ、日本人は自由に、気持ちよくこの市で仕入れることができた。

それに引き換え、フランス人はこの市で徹底的にボイコットを受けた。誰もフランス人には食料品を売らない。ベトナム人だけでなく、中国人までが厳しくフランス人の客を拒否した。もちろん、ベトナム人側からの圧力によるものであった。ベトナム人のフランス人に対する憎しみは想像に絶するものであった。これはもちろん、過去の植民地統治からきたものに違いないが、あながち、そうとだけは言い切れないようで、ベトナム人は、もともと白人嫌いのように思われた。

われわれは、フランス人とほとんど交渉がなかったのでよく分からないが、聞くところによると、食料品のボイコットを受けたサイゴン在住のフランス人たちは、特に野菜類の欠乏に悩み、庭の野菜を摘んで、わずかに壊血病の予防に当てていたという。

フランス人の苦悩は野菜の欠乏だけではなかった。ベトミンのフランス人に対する散発的迫害が始まった。数十人、数百人のフランス人が闇から闇に葬られていった。ある大学教授の13歳になる息子は自転車で外出したまま帰らなかった。翌朝、死体となってドブの中で発見された。婦人の被害も多かった。終戦から9月の半ばごろ、英印軍が終戦管理のためにサイゴン入りするまでの何週間かは、誠に救いのないフランス人の受難の日々であった。

英印軍、主としてイギリス人の将校とインド人の兵士をもって構成された軍隊が、フランス軍の代わりにサイゴン地区管理のために乗り込んでから、事態は必ずしも好転しなかった。第一、連合軍側の食料調達は、英印軍の手ではどうにもならない。軍用トラックが、一步サイ

ゴン郊外に出ると、たちまちベトミンの射撃を受けた。郊外の農村で食料を調達することなど思いもよらないことで、ベトミンにとって、フランス軍も英印軍も区別はなかった。どちらも憎むべき外人侵入者であった。

そのくせ、日本人は別であった。終戦の年の2月9日に、日本軍はいわゆる「仏印処理」を行って、事実上、フランス領インドシナを占領したのだが、形の上ではあくまで敵性分子の一掃ということで反抗するフランス軍以外にはできるだけ手を触れなかった。通貨もピアストル貨の購買力を維持するために、わざわざ内地から裏付け物資を送ったりして、他の南方占領地城とは全く別扱いであった。それだけ現地のベトナム人や華商たちに憎まれてはいなかった。

こういう事情から、戦いに敗れて降伏した日本軍隊の食料調達が始まった。白旗を掲げた日本の軍用トラックが、丸腰の日本兵を乗せてサイゴン郊外の農村に食料の買い出しに行くが、ベトミンはこれを攻撃しなかった。そこで、何のことはない。捕虜収容所に収容されて、当てがいぶちを食わされているはずの敗軍の兵士が、勝ち誇った管理軍隊を養ってやるという、奇妙な事態がしばらく続いたのである。

### 宿舎に強盗団

サイゴンの治安は、英印軍が乗り込んできても一向に改善されない。改善どころか、ベトミンの暗躍は日増しに激しくなり、夜は市内のあちこちで銃声が聞かれるようになった。このため、日没と同時に戒厳令が敷かれ、夜間の外出は一切できなくなった。夜間だけでなく、昼間でもどうかすると激しい銃声を聞くことがあった。

これより先、同盟はサイゴンで「陣中西貢新聞」という2ページの日本語

日刊紙を発行していた。降伏後は、さすがにはばかって、8月29日限り、これを廃刊した。しかし、活字も印刷機もある上に、日本人の間にニュース飢饉きんげんを起こしては申し訳ないとあって、「陣中西貢新聞」のスタッフを縮小し、タブロイド半切りの活版「同盟通信」を創刊し、英印軍の入城後も、引き続き発行していた。スタッフは私のほか、殿木圭一、藤本有典、山根英夫、それにオペの津川勝美、矢部順太郎、榎沢喜安の諸君、それに外部から出向の印刷技術者2人であった。

初めは、総督官邸にほど近い2階建ての同盟宿舍に立てこもって仕事を続けていたが、10月上旬のある日、突然英印軍野戦保安隊の将校数人に襲われて徹底的に家宅搜索された。隊長のイギリス人大尉は、各部屋をシラミつぶしに搜索しながら、目ぼしい私物を半ば強制的に取り上げて行った。

立ち会いに同行した報道部員のゴドウィンというイギリスのユートピア社会主義者の末裔まついが、さすがにこういう行為を目撃して苦々しく、恥ちずかしく思ったのであろう。隊長が私の部屋に入ってくると「ここはもう検査済みです」と言って強硬に搜索を拒否した。私は思いがけなく、人生劇の一コマを見せつけられた感じであった。殿木君はこの日、虎の子のカメラを彼らに持ち去られてしまった。

後で分かったことだが、この搜索は、疑心暗鬼のフランス人が「日本人が無線放送している」と密告したため行われたもので、もちろん、搜索の結果、そういう疑いは晴れ、むしろこれがきっかけとなって、同盟の無線受信と通信発行が英印軍司令部にも知られ、10月16日以降、天下晴れて「西貢通信」の発行継続が許可された。司令部の担当責任者はアスコット中佐で、ロンドン・タイムズ社長の息子であった。

こうしてわれわれは帰国までの長期戦体制を考えた。もと連絡員の宿舍に使っていた下町の三軒長屋に引っ越し、分宿していたある日の昼さ

がり、遠くに銃声が聞こえた。と思うと、町内一斉に家宅搜索が行われた。ベトミン潜伏の疑いである。私たちの宿舍には、フランス人少尉の率いる数人の兵士がやってきた。少尉は、2階の私の部屋を搜索して、洋服ダンスの引き出しに紙包みが見つかった。

「これは何です」

「紙幣だ」

実にかつな答えであった。仏印は食料が豊富だから、日本人の引き揚げも、南方では一番しんがりになるだろう、おそらく4年はおかるだろう、といううわさが専ら現地で流れ、われわれも100人近い社員的生活を4年間支えなければならぬというので、各人に1年2カ月分の給与を前払いしたほかに、相当額の資金を用意していた。また、「西貢通信」発行の資金もある。それらを三つの新聞包みにして洋服ダンスの引き出しに放り込んでいたのである。

それを正直に言ってしまったのだ。この答えは、一つにはフランス人将校が相手であって、他の兵士はそこにいなかったからでもあろう。そういう安心感が大変な油断でもあった。

数日後の夕刻、私はよろい戸を下ろして一人でタイプライターをたたいていた。2階のペランダの戸を軽くノックして「ポリス、ポリス」という声が聞こえる。また例の家宅搜索か、と気軽によろい戸を開けると、いきなり銃を持ったフランス人らしい白人と、インド人らしい男、ベトナム人らしい男と計3人がつかつかと部屋に入ってきた。しかし、私はまだ家宅搜索ぐらいにのん気に構えていた。

白人は片っ端から机の引き出しを開け、とうとう洋服ダンスの引き出しを開けて「これだ、これだ」と言わんばかりに、やにわに新聞包み二つをつかんで階段を下りかけた。私は、慌てて「ウェイト、レシート、プリーズ」と声をかけた。いくら搜索隊でも、押取物には受領証を渡す

のが常識と心得ているからである。ところが、白人は、いきなり銃口を私に突きつけた。ギャングだったのだ。強盗に「領収証を置いてゆけ」といったことになる。

苦笑しながらギャングに追い立てられ、階下に降りると、殿木、藤本、矢部の面々が文字どおりホールドアップで1列に並んでいる。3軒とも別動隊に踏み込まれ、皆手を上げてしまったのだから、この強盗一味はかなり計画的なものであった。

しかし、ギャングの頭目も、かなり慌てていたらしく、新聞包みの一つだけは取り残していった。これがわれわれにとって、せめてもの幸いであった。何分、ひと包みが約4万ピアストル(当時の日本貨では4万円以上)という相当の額である。

## 親切だったインド兵

この事件にこりて、金は全部、英印軍の報道部に預けることとし、毎月、予算を立てて必要なだけ報道部から引き出してきた。どうせ、最後には召し上げられると思っていたからである。経理はきちんとし、報道部の記録も明細がはっきりしていた。

ところが、英印軍は翌年3月ごろには引き揚げることとなり、われわれの管理もフランス軍の報道班に引き継がれた。報道班長は元大学教授で、非常に肌触りのいい紳士だ。われわれに「もっと金はいらぬが、遠慮なく言ってくれ」と親切に言葉をかけてくれるなど、なかなか物分りのいい男だと感心したのだが、それも初めばかりで、だんだんに、われわれを疑いの目で見えるようになった。英印軍と違って、第一、われわれの経理報告に無関心なのである。いい加減な経理をやっているらしい。こう分かると、私もばかばかしくなって、向こうから言われるまま

に、余計に金を請求し、前よりもたくさん食料品や嗜好品を買い入れ、それを自転車で、同僚の収容されているAキャンプ、Bキャンプ、Cキャンプに届けることとした。

われわれの「西貢通信」は、6月まで発行を継続したが、資金の残高はなお相当あつたはずである。それがどう処理されたかはわからない。英印軍の報道部は、「西貢通信」発行のため、下士官宿舎群の一隅をわれわれに提供してくれたが、この宿舎群の当番兵は、みんなインド人で、初めからわれわれに異常な好意を寄せてくれた。インド人は牛肉を食べないので、コンビーフの大缶を、彼らはいつもわれわれのところを持ってきてくれた。牛肉だけではない。バスケットや時には季節外れのスイカまで持ち込んでくる。

主任格の兵に「われわれにまでスイカをくれるのだから、君の部屋には、よほどたくさんスイカがあるようだね」と言った。彼は破顔一笑して「どういたしまして、1日に2個だけですよ。あまり少ないので、めったな人にやると後がうるさい。隊長とあなただけですよ」と答えた。この部隊は兵站部隊であつたから、食料を扱っていたらしい。インド兵たちは、われわれをインド映画の映写会にも招いてくれた。また、私が町に出るときにはジープも用意してくれた。

終戦後のサイゴンで、ベトナム人や中国人やインド兵たちが、われわれに寄せてくれた温かい心遣いは、われわれにとって生涯忘れることのできないものであつた。あの正直そうな現地人たち、どこかおどおどしながらも、われわれを陰に陽に温かい目で送り迎えしてくれた彼らは、今はどうしていることだろう。

(「新聞通信調査会報」第47号 1966年11月1日発行)



## 最後の西貢通信は総選挙結果

山根英夫(元同盟通信サイゴン支社)

昭和21(1946)年4月10日に行われた戦後第一回総選挙の開票結果を告げるニュースは、国外にいた私たちも異常なほどの興奮で受け止めていた。このニュースを伝える4月15日付の「西貢通信」は、同盟人の手になる公刊物としては、おそらく最後のものだったのではなからうか。西貢通信は戦後、東南アジア連合軍の命によって、「陣中西貢新聞」に携った者と、同盟サイゴン支社員の一部の者によって、20年10月ごろから日刊で発行された。連合軍の指示は「サイゴン周辺地区の最後の一兵が撤収するまで」という条件であった。

この紙面を見ると、当選者の名前だけで何の変哲もないが、これをつくったときの苦労は並大抵のものではなかった。第一は、当選者の名前を、いかにして正確を期するかであった。初めて女性に被選挙権が与えられたこともあって、この総選挙には無名の新人が立候補したからである。それは、紙面にもあるように、当選者の8割が新人であることから分かる。

無電の字解の解説と、雑音で十分聞きとれない短波放送による確認は、神経を寄せ合って、ああでもない、こうでもないの連続であった。今紙面を見ると、誤字誤植がいくらかはあるものの、よくこれだけ確認できたものだと、今さらのように驚いている。

とりわけ驚いたのは、初の女性当選者39人という数字と、それが女性の立候補者の5割に達したという事実であった。ニュース中に出てくる

「世間を啞然<sup>あぜん</sup>たらしめた」という表現は、現地のわれわれにとつては、それ以上の驚きであった。この紙面に登場している人々の多くが、今では過去の人となっている中で、今も現役として活躍している原健三郎衆院議長が新人として当選していることが興味を引く。

当時、この仕事に携った人々を記しておきたい。福岡誠一さん、殿木圭一さんをリーダーとして藤本有典さん、オペは津川勝美、矢部順太郎、<sup>くろみざわ</sup>柳沢喜安さん。印刷技術者は鈴木富士雄さん、南雲幸平さんに私を加えた9人であった。矢部さんは、トンツツを漢字交じり文に直訳するという特技の持ち主であったが、このときばかりはそうはいかなかった。福岡さんを除く8人全員が、顔と手を真っ黒にして文選から植字、組版、印刷までを懸命にこなしたのも懐かしい思い出である。しかし、苦勞しながらも、みんな朗らかな空気の中で仕事できたことは救いであった。料理がうまい藤本さんにわれわれは感謝し、ジョークが巧みな殿木さん、矢部さんや鈴木さんたちがよく笑わせてくれた。ただ福岡さんだけは、いつも学者然としていて、私などはパジャマのまま鼻歌で仕事をしていてよく叱られた。

5月10日ごろ、最後の兵隊たちと一緒に私たちは連合軍から帰国命令を受け、リバティール船に乗り込み、20日ごろ、広島県の大竹港に上陸したと思う。福岡さんだけは、東南アジア連合軍司令部と打ち合わせのためシンガポールへ行かれ帰国は遅れた。一番若かった私でさえ、43年前の記憶は少々怪しい。その当時の生々しい記録のコピーを手にすると、懐かしさとともに、苦しくまた楽しくもあった思い出が深い感慨とともに蘇<sup>よみがえ</sup>ってくる。

(「新聞通信調査会報」第318号 1989年5月1日発行)

# 暗号表、肌身離さず解読作業

東谷潤吉（元同盟通信海外局企画部）

同盟通信社へ入社したのは、昭和19（1944）年6月だった。編集局地方部でガリ版を切っていたが、すぐ海外局企画部に移り、南方要員として暗号解読班となった。

シンガポール（当時は昭南特別市）に出発したのは、その年の12月10日、所沢飛行場からだった。シンガポールでは、酒井庶務主任の案内で、カセイビルの総社へ。それから毎日、鈴木主任と2人、数字だけの暗号電報を乱数表で解読する仕事を続ける。無電だから数字の誤りも多く、1通の解読にも時間がかかった。

南方軍総司令部のサイゴン（現ホーチミン）転進に伴い総社も移動することになり、私は一足先に軍用列車で陸路出発した。マレー半島を北上し、タイ、カンボジアのプノンペンまで2300<sup>キ</sup>の旅行である。プノンペンからは飛行機。1カ月以上かかってサイゴンに着く。シンガポールで見送ってくれた木原経理主任が出迎えてくれる。

暗号表は肌身離さず、毎日、かばんに入れて出社、一人隔離された所で解読作業をやった。当時は、サイゴン支社長が秋山操さん。殿木圭一、藤本有典、高田秀二、山根英夫などは私には雲の上の存在だった。

敗戦とともに、南方報道員を解除され、民間人として「印度支那西貢市ノロドム街二号同盟通信社内、右者、帝国臣民ナルコトヲ証明ス、二十年八月十七日在西貢総領事河野達一」という国籍証明書を渡された。英軍が上陸し、福岡誠一総社長とともに暗号書を持って、司令部へ出頭した。日本にいたという英軍将校は、巧みな日本語で「お互いに不幸

だった」とコーヒーを出してくれた。

11月5日、市内「B2」の日本人抑留所に在留民間人やその家族とともに入れられた。所長は英人ロジャース少佐だったが、警備には日本軍が当たった。故国をしのんだ祭も何度か催された。所内の広場に舞台がつくられ、山根さんたちは翻訳劇を上演したが、私たちの班は、私の脚本・演出で「丹下左膳余話、討入以前」をやった。

1946年4月、日本に帰り伊勢新聞に入社したとき、高田秀二さんが「丹下左膳も今の時世では、いつもいつも浪人していられぬとみえるね。お互い500円生活では抑留所が懐かしく思われる……」という便りをくれた。

（新聞通信調査会報」第273号 1985年8月1日発行）

## ニュース翻訳の報酬はたばこ2箱

牧内正男（元同盟通信バンコク支社長）

昭和20（1945）年初め、敗色すでに濃いころ、本社大陸部長の椅子を去って空襲下のバンコクへ支社長として赴任した。台北に航空機で着いたまではよかったが、それからがいけない。乗るものもなく、やっと南の屏東（シンドウ）で小型の軍用機に割り込み、途中敵機の襲撃（おび）に脅えつつサイゴン（現ホーチミン）到着。そこから木材燃料の機関車に引かれた列車で、4月末バンコクにたどり着いた。

だが、それもつかの間、8月にはバンコク支社とタイ北部のランパー

ン支局の「戦後処理」に当たることになった。空襲の度に、ムカデが巢食うようなたこつばに飛び込むナレー街の事務所から追い出された。その代わりバンコクから、かなり離れたバンブアトン（水路沿いの小島）に9月に移されて、裸の生活をするようになった。

突然、駐留英国軍にバンコクへ呼び戻され、取り調べられた末、「支社長は記者（英文記者を含む）と無線技士など数名を連れてバンコクに帰り、ニュースの受信、翻訳に従事せよ」と命令された。つまり英軍情報将校の監督下で一種の強制労働に服することになった。その報酬といえば、驚くなかれ、1日1人当たりたばこ2箱。そして当時閉鎖中だった日本大使館の食客として預けられた。

このわび住まいから英兵同乗の上、日系兵運転のジープで臨時事務所に往復した。こんな籠の鳥暮らしでも、依然一般邦人とともにバンブアトンに仰留されている支社員や、ビルマ（現ミャンマー）引き揚げ組に比べれば、まだ通信社めいた仕事を続けられただけ、幸せだったのかもしれない。

バンブアトンの別棟に移されていた台湾出身の同盟連絡員たちのことも案じられた。彼らは日本国籍を失ったが、われわれとは別に解放されて、無事生地に帰れたのは何よりだった。21年6月、われわれは一般人とともにバンコク港で送還船「辰日丸」に乗り込み祖国へ向かった。一路平安とはいかず、20日余の航海の間に、しばしば暴風雨に遭い、その都度、おかゆのような食事も喉を通らぬ始末。「辰日丸」の行く先は久里浜のはずだったが、四国沖で急転回して、7月3日鹿児島に到着した。

（「新聞通信調査会報」第273号 1985年8月1日発行）

## ゴム林での降伏式

本間文吉（元昭南新聞会マレー総局編集部長）

サラノース収容所へ入ったのは、終戦の昭和20（1945）年8月末のことであった。持てるだけの荷物と一諸にトラックに積まれて、タイピ（マレー半島北部、昭南新聞会マレー総局があった）を出発したのは昼ごろのこと。途中つり橋を渡り、山道を抜けて、廃園になっていたゴム園に着いた。日はカンカン照っていた。木造の粗末な倉庫のガランとしたコンクリートの床の一隅がわれわれ報道班に割り当てられた。むしろの上に持参の毛布を敷いたり、トランクなどを並べたりして通路との境にした。1時間くらいの後には荷物も整理され、同じ条件の人たちが思い思いの格好で寝転がったり、天井の高い倉庫に笑い声さえ上がった。隣は商社の組であった。

シビリアンといっても決して特別の待遇を受けるわけではない。これから幾日かをここで生き抜いて行かねばならないのだ。休む暇もなく食糧運びの使役が割り当てられ、元気のいい若者が志願して飛び出して行った。石黒兵団もこの近くに集結している。軍政監部の人たちも別棟に入っている。使役から帰った人たちによって刻々と情報が伝えられ、外部の様子も分かってきた。われわれも今夜から夜警に出なければならぬ。いつ共産軍の襲撃があるかもしれないという状況であった。

9月末のある日、持ち物を全部毛布の上に広げて屋外へ整列するように命令された。この日は降伏式であった。幾たびか点呼が取られた。提出したりストと実在人員に違いがあるとのことだ。脱走者が出たとの情報があった。ある医師は日ごろから現地人に尊敬されており、マレーに

とどまるように懇望されて、山中へ逃亡したといううわさもあった。しかし誰も公然と話題にはしない。ここでは人員調べが重要なことであった。

ようやく4列に並んで歩き出した。30分ほどして道路から外れた小高いゴム林の中で止まった。そこで2<sup>分</sup>間隔に1列横隊に並んだ。丘から丘へ続くゴム林の中は、敗れた日本人でいっぱいになっていた。「ちり紙、タオルなどポケットにあるものを全部前に出せ」と命令され、従軍服の胸のポケット、ズボンもいく度か調べて、すっかりハンカチの上に並べた。どんなに注意しても間違えということがある。万一間違えてピストルの弾でも残っていようものなら万事おしまい、そのまま連れ去られるのだ。しかも本人一人で事は済まない。所属する班全員が取り調べを受けることであった。もっとも先にピストルや大型ナイフなど刃物類や、写真機など兵器およびこれに準ずるものは一切提出したはずだが、それでも不安は消えない。並んだどの顔も緊張で青ざめていた。

やがて耳慣れないラッパが林の彼方で鳴った。丘の上にイギリス国旗がするすると上がった。人も林も一瞬息が止まったように静まり返った。戦勝国の国旗をつけた大型のオープンカーが止まった。せき払い一つ聞こえない。司令官に対して敬礼が行われ、ベレー帽をつけた一団の兵士が動き出した。

いよいよ身体検査が始まった。はるかか樹間に次々と両手を上げた様子が見える。自動小銃を突き付けられ、前後から身体を仰ぐように触つての検査である。無事に済みますように、とただ祈るだけであった。これが降伏式なのだ。

## 収容所内で殺人事件

蒸し暑い10月末の真夜中のこと、鉄板が乱打された。みんな飛び起きた。共産軍の夜襲に違いない。夜警詰所につるされた非常用の鉄板がガンガンと闇の中に鳴り響いた。物盗りが目的なのだから抵抗は禁物である。何事が起きようともまず身仕度を、というわけでゲートルをつけて外へ出た。暗闇の広場に集った人たちがヒソヒソと話を交わしている。

どうやら予想がはずれ夜襲ではないようだ。人殺しがあったのだ。現場はわれわれの棟から二、三百<sup>分</sup>離れた苦力長屋ケリカウラに起居していた家族組の部屋であった。夫がよろめきの妻を殺害したのだ。犯人は内地で裁きを受けることになっていた。葬儀の日、丸顔の美しい2人の娘さんが赤く泣きはらした目を伏せていた。その痛々しい姿が、やし油の異臭が染み込んだ板の間の薄暗い中で、一層悲しい印象を残した。

ある日、夕食の汁に羊の肉らしい一切れが入っていた。誰かが何かと交換して手に入れたものらしいが、入手の経路は明らかでない。とにかく久しぶりに肉の香りをかいだ。この日の午後、Y君が太いマカロニのような羊の腸を丹念に箸で裏返して、きれいに水洗いしていた。その臍物もごちそうになった。

楽しみは「飯上げ」の知らせであった。各自がコップとフォークを持って集まってくる。いつも「おらあ寝るだア」と言って寝てばかりいるのでネルダー提督の異名をもらったE君も、めい、の一声でがばつと跳ね起きてくる。とにかく乏しいが食べることに、寝ること以外に何にも楽しみがないという毎日であった。囲碁、将棋、マージャンは最初のうちはよくやっていたが、日がたつにつれて熱が覚めていったようだ。

## 食べ物のお国自慢で望郷の念

夕食の後など決まって車座になって、食べ物のお国自慢に花を咲かせた。北の国の人はサケ、ニシン、数の子、筋子、または三平汁、タラのかす汁など、汗を拭き拭き、うまそうに郷里の味を褒めたたえたものだ。高知の人はカツオのたたきの作り方を披露した。大阪育ちは、バッテラずに昆布のお茶漬けの話、北陸筋はブリの味をひとくさり説くなど、とにかく食べ物の話は楽しく、にぎやかに時が過ぎて、望郷の念に駆り立てられた。

野草採りにはよく出掛けた。朝顔の葉のような時計草はたくさん採れたが、春菊は貴重なものであった。南方の春菊は、香りは薄いが柔らかく、なかなか乙なものだ。それらもだんだん遠くへ足を延ばさないと採れなくなった。そんなときは4、5人で行動するが、時々、山の中で銃声を聞いた。警備兵の威嚇であろうが、気味の悪いものだ。道で出会った現地人が野草を採す仲間に「つい先年、白人が今と同じようなことをやっていたが、歴史は繰り返されるものだ」と言っていた。

報道班はよく働く。日ごろ持つものはペンぐらいで、口は達者だが身体は動かないと評されていた連中が、重労働の道路工事、まき取りはもちろんのこと、重い米袋でもひょいと担ぐ者もいたのだから、記者さんは働きものだということになった。

内地の状況はいいことは一つとして聞かれない。肥料不足で肥だめから人糞がとられたり、牛や豚が盗まれたとか、深刻な世相を表すニュースばかりだった。これらは外国から日本人向けに送られる放送で知らされた。サラノース収容所では、これらのニュースが同僚の手で整理されて、ガリ版刷りの小型新聞が発行され、30人に1枚くらいの割合で配布されていた。外地からの引き揚げが開始されて、われわれの帰還も近い

というニュースが流れ、みんなの表情が急に明るくなった。

## シンガポールへ移動

12月になっていよいよシンガポールへ移動する日がきた。荷物を整理して命令を待った。持ち物と言っても、何回かの検査の後で、リュック一つに納められて軽くなっていった。移動中のことだった。クアラルンプールに停車の際、ある者は暑いので列車の窓から腕を出していた。その腕から、ホームにいた外人兵士が時計をむしりとった。すぐに輸送指揮官の将校に掛け合い、若い将校は兵士の後を追いかけて、呼び止めて何やら話してすぐ引き返してきた。そして「あの兵士は何も取らないと言っている」と告げただけで、時計は失われた。

ブンガメラ(赤い花)がいつ咲いていつ散ったか、捕らわれの身では自然の移り変わりは見えない。ジュロンはジャングルを切り開いて設営した丘で、乾ききった土ほこりの村であった。私たち北部マレー組のキャンプは、シンガポール組とは道路を隔てた丘の上であり、雑木林に囲まれていた。山陰に大きな井戸を掘って黄色い水をためて、マンデー(水浴場を作っていた。自然動物園の中でわずかの餌を与えられ、生きていくという格好で、柵のないおりから一歩も他の世界へ出ることができない、全く自由を奪われた半年であった。

いよいよ乗船の朝がきた。港まで歩かせるといううわさも伝わり、これなら歩けるという身仕度を整えて夜半に広場へ集合した。点呼が済んで暗い山道を歩き出した。舗装された道路に出た。暗闇の中で、現地なまりで「バカヤロ」「オイコラ」と呼ぶ声が飛んでいた。これはかつて日本兵が訓練した兵補たちの声である。私たちは暗闇の道端にうずくまって指図を待つだけだった。私は従軍服の胸のポケットを押さえられ、財

布を取られそうになった。とつさに「だれか頼むよ」と大声で怒鳴った。財布の中には内地帰還の際に最も重要なパスポートが入っているのだ。これがなければ乗船できない。思わず「パスポート、パスポート」と言っ  
て彼の腕をつかんで渡すまいと争った。ようやく日本側の連絡係が駆け  
付けて難を免れた。

繩ばしごから「朝嵐丸」に乗り移った。悪夢の終戦の年も終わって21  
年2月7日、みんなの明るい顔が甲板にぎっしり詰まっていた。もう大  
丈夫だ。検査も、脅かしてもないのだ。この船は日本のものだ。船員も日  
本人だ。内地へ帰ったようなものだ。誰もかれも長い間忘れていた晴れ  
晴れした表情を取り戻していた。7千トのくたびれた貨物船もこのとき  
は楽園であった。むんむんする船底のカイコ棚を逃れて、甲板に積まれ  
た石炭の山に腰を下ろした。ビルの続くシンガポールの港は、スコール  
に洗われた後のように、夕陽に映えて水彩絵の具のようにさらりと明る  
く彩られていた。「悪夢よさらば」――ただばんやりと別れを惜しんだ。パ  
シー海峡のうねりは高く、風も加わり、この辺りから甲板の人の姿も減  
り寒さが身にこたえてきた。

3年ぶりに日本の山が見えてきた。豊後水道に入り、臼杵港(大分県)  
外に仮泊した。漁をする小舟から、初めて本物の日本語で混乱の様子を  
聞き、「国破れたり」の実感に接した。2月11日、大竹港(広島県)は潮風  
が冷たく、真冬の寒気は夏シャツの重ね着を通して肌を刺した。DDT  
の洗礼を受けて、廃虚の日本へ上陸、畳にあぐらをかき、大浴場に飛び  
込んで長い間のあかを洗い流した。

(新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」)

## 敗戦、抑留、ニュース戦、マカッサルからの引き揚げ

葛野信太郎(元同盟通信マカッサル支社)

昭和20(1945)年8月14日午後6時30分は、紺碧の海辺に位置し、  
マカッサルでも絶好の景勝地にある同盟宿舍にいた私にとって、生涯忘  
れることのできない一コマであった。夕食後ベッドにごろ寝していると、  
無電担当の根岸竹次君がドアを蹴破るように入ってきた。「本社か  
ら重要な連絡がありました」と、電文を差し出した。「明15日正午、天皇  
陛下の戦争に関する放送があるから、在留邦人等しく聴取するよう手配  
すること」。こういった内容を読んだ私は、戦争完遂でなく「関する」と  
あるので、これで戦争は終わったと直感、ホッと胸をなで下ろした。直  
ちに根岸君、佐藤長蔵君(会計)、坂本春雄君(ガリ版)を集め、「戦争は敗  
けた。無条件かどうかだが、無事に帰還できるよう協力してがんばろう」  
と誓い合った。

翌朝、海軍23根拠地艦隊の大角司令官を訪れた。放送の顛末を話すと  
司令官は「戦争完遂ではなく、関するか」と重ねて尋ね、沈痛な表情を  
した。直ちに参謀連中や民政部の幹部を集めて協議。私は当然、在留邦  
人約2千名に間かせる措置を取ると思いのほか、「敗戦により人心に衝  
撃を与えてはいかん。代表に絞ろう」と決まった。びっくりし、思わず  
「敗戦を隠すとはどういうことか」と叫んだ。彼らは無言。にらむよう  
な顔をしている。

午前11時30分、NHK放送局前に、邦人代表とお役人が集まったが、  
人数を制限したため、約100名が沈んだ顔つきで受信機をじっと見つ  
めていた。やがて、天皇の声が流れてきた。雑音のため内容はほとんど

聞き取れなかったが、敗戦の詔勅しよくちくと読み取れた。まぶたに涙しながら詔勅を聞いたという劇的な情景はなかったが、誰も日本は大変なことになるかと沈痛な顔をしていた。

詔勅の内容、敗戦に関するニュースが刻々に入電してくる。「同盟最後の奉公になるぞ」と大わらわになっているとき、再びわれわれを仰天させる事件が起きた。

## 軍司令部がニュース配布を禁止

16日午後、軍司令部から「大本営から敗戦の正式報告が入るまでは、同盟ニュースの配布を厳禁する」の通知だ。茫然とした私はついに爆発し、「だから敗けるのだ。大ばか野郎」と怒鳴った途端、ジョンゴス(使用人)が「トアン(旦那)、酒か」と聞いた。酒の注文と勘違いしたらしい。それから2時間ばかりたつと、下士官が武装のものしくやって来た。ニュースの監視だ。司令部、民政部を探ったところ、スラバヤの第2南方派遣(南遣)艦隊かんたいから「同盟が米軍の謀略に乗っているから注意せよ」との入電があったため、前記の措置になったと分かる。「スラバヤに移ったオヌシ(猪伏さんの愛称)一行は何しているのだ」。ジャワ方面の空をにらんで、同志に逆恨みをした。

後日聞いた話では、在留邦人の一部が、同盟は売国奴だと憤激、支社焼き打ちを計画したという。冷や汗をかいた。

17日午後、大角司令官から相談したいことがあると、電話してきた。つきり同盟謀略の件で無理な注文かと、駆けつけた。だが、司令官はそのことには何も触れず、支社の現地オベがデマをバラまいては困るから軟禁してほしいとのことであった。私は考えた。敗戦により彼らの態度も一変するだろう。今必要なことは、彼らの気持ちをできるだけこち

らの心につなぎ留めることだ。軟禁しては逆効果だ。よし、放っておけ。聞き流すことにした。大本営から海軍司令部に敗戦の通知が来たのは、たぶん18日と記憶している。

9月3日、古野伊之助社長の「南方同志に告ぐ」の電報が入った。これは文字通り、言々胸を突く劇的なものだった。同盟もいよいよ最後かと思っていたところ、翌朝ぴたりとニュースは途絶えた。

それにしても、現地の住民はよく協力してくれた。最後の一瞬までニュースがよどみなく流れたのも、彼らの努力があったからこそと、今でも感謝している。現地オベの軟禁問題は、その後司令部から何も言わず、結局うやむやになった。ニュースが絶えて間もなく、マカッサル北部70<sup>キ</sup>の山中にある陸軍第2軍(司令官・豊島房太郎中将)2万名が、「単独抗戦を辞せず」と言っているとのうわさが広まり、邦人に衝撃を与えた。

疲れ果てた顔に、一種異様の臭気をばらまいて使役に従事していたオランダの捕虜、日本の兵隊に引率されてトボトボ歩いている彼らを見る度に、戦争は敗けられないとよく思ったものだ。その捕虜たちが一斉に解放され、海軍が経営していたホテルに、葉巻をくわえた傲然たるオランダ人の姿が見えだした。豪州軍の上陸。ニューギニアから来たそうだが、身の丈1<sup>尺</sup>80<sup>寸</sup>前後の偉丈夫ぞろいだ。一般邦人2千名余り、民政部役人500名、海軍700名の監視に、オランダ軍だけでは心細いため、豪州軍の応援となったものである。敗戦感がひしひしと迫ってくる。

某日、支社に白人がやって来た。豪州の新聞記者で、軍とともにニューギニアからやって来たそうだが、「同盟にまず敬意を表しに訪れた」となかなか愛想がよい。「明日あたり、オランダ人が接収に来る。彼らはいくつから、重要なものは隠してしまえ」と警告してくれた。ご親切ありがとうと感謝したが、後がいけない。ラジオ受信機をくれたとい

う。この下心あつてと分かり、苦笑しながら与える。

翌日の昼ごろ、この記者が言った通り、オランダ人が通訳を伴い、接収にやって来て、2、3日中に退去してもらうことになる、と言って去った。ちょうどその頃、現地陸軍部隊に召集されていた写真の郷田君が、マラリアのため解除となり支社に帰ってきた。続いて読売の安藤君も同じく解除されて、私を訪ねてきた。読売支局の連中はスラバヤに行つてしまい、孤独だから同盟組に入れてくれという。喜んで承知する。これでわが同盟部隊は6名になる。

## 抑留生活始まる

いよいよ抑留生活が迫ってきた。2千名余りを数える邦人の抑留地が決まるまで、マカッサル市内数カ所に分散仮収容されることとなった。9月下旬ごろと思うが、同盟組6名は、支社の真ん前にあるマカッサル衛生研究所に移った。この収容人員は五、六百名と記憶している。われわれはトランクに内地土産をしま入れてあったが、どうせ持つて帰れぬと諦め、現地の使用人に善政を施した。持ち物と言えはリュックに身の回り品だけ。ただ、抑留生活に備えて缶詰類は詰めるだけ詰めた。1カ月ばかり頑張ったところで抑留地が決まった。マカッサルから北に40<sup>キ</sup>のマリンペン、50<sup>キ</sup>のベンテンである。前者は一般邦人のほとんどと、民政部のお役人、陸軍部隊、後者は海軍部隊、軍属、それに女性部隊だという。

11月上旬ごろだ。40<sup>キ</sup>の道を歩き続けた。汗とほこりとのすごい暑さにどろどろになって、目的地マリンペンに着いた。見渡す限りの不毛の地、陸軍部隊によってつくられた兵営式バラックが、点々と並んでいる。水を飲もうとしたら、真つ白い濁つたのが出てきた。兵隊さんに聞

くと、かつてオランダ人がスマトラ島から七、八百名のインドネシア人を移住させて、農耕開発に使役した。ところが、チフス患者が続発して全滅。以来、現住民に死のマリンペンと恐れられている土地だという。われわれ一行6名は第1棟舎に入れられた。畳にしたら4畳半ぐらいで、ぎゅうぎゅうの窮屈さ。陸軍部隊から米食をもらい、持参の缶詰で夕食をとった。だが「何年間ここにいるのだろうか」「それまで生きていられるか」など、とかく陰うつな話になつてしまふ。

午前6時起床。全員集合。民政部首脳部から抑留生活の心構えといった訓示があつた。米は十分あるから安心、副食物は現地自給の建前から農耕に従事せよといった内容だ。シンカンの第2軍が抗戦に備えて、3年間の米食を確保してあつたため、抑留生活中は米の不安がなかった。この点、われわれは他地域に比べて幸せだったといつてよい。午前7時朝食、8時から11時まで農耕、正午昼食、午後1時から4時まで農耕、午後6時夜食といった毎日だ。タピオカ、カボチャの栽培である。10名程度で班を組織、三井、三菱関係の農業技師が指導することになった。まずは不毛の地を掘り返すこと。私はもとよりスキ、クワを初めて持つ人が多いため、テナヤワンヤの始末だ。指導に来る技師も見ぬふりをしてい

る。ここで私は考えた。ここから北へ約10<sup>キ</sup>のベンテンには、海軍司令部があり、当然通信隊がいる。同盟に代わる通信社の誕生も予想されるので、海軍通信隊の受信機を使用してニュースを受信したらどうか。そうなれば、抑留生活で再びニュース事業に集中することができ、われわれの高ぶつた神経も鎮まるだろう。抑留者の全員に内地ニュースを知らせることが出来る。直ちに準備に取り掛かろう。私は午後の農耕を免除してもらい、10<sup>キ</sup>の道を数日往復、通信隊に運動した。幸い通信隊長の山本大尉は酒で懇意の間柄なので、話はスムーズに進んだ。われわれのべ



ンテン移動が決まった数日後、マリンプンの邦人はペンテンに移れの指令が発せられた。われわれもともに行動することとなり、12月下旬トラックに分乗、ペンテンに到着した。

## 共同ニュースを受信

この環境はマリンプンに比べてはるかに良い。棟舎が大きくて頑丈、部屋の奥行きも広くて、われわれの一こまは八畳ぐらいある。土地も毛の地というほどではないので、マリンプンよりずっと楽だ。それに女性部隊がいる。大川隊（大川花子さん経営の料理店の従業員ら）と高砂隊（横浜市内出身の慰安場従業員ら）だ。女人筋というのが、かえって抑留者を喜ばした。彼女たちは立派な軍属だが、男子出入厳禁と警戒は厳重そのものだ。棟舎の周りには鉄線を張りめぐらしていた。抑留生活としてまさに一等地と喜んだのは、医務室と病棟のほか図書館の設備まであること、こんなことは他地域にみられぬことだろう。

いよいよ受信だ。「共同ニュースというのが入りました」―通信隊から戻って来た根岸君が興奮気味に叫んだ。これで初めて共同通信の誕生を知った。根岸君の4、5回に及ぶ通信隊への往復、ガリ版書き、謄写版刷りと、総員8名がてんでこ舞い。狭い一こまに同盟通信抑留支局が出来上がった。開局直後は黒山の人だかりで閉口した。かくて邦人約2千名、海軍六、七百名、陸軍四、五百名に対する同盟ニュースの発行がスタートした。ほとんど同時にセレベス新聞（毎日新聞が発行、約50名）が、ラジオ受信によるガリ版新聞をはじめた。掲示板を作って人を集めるなど、なかなか味なことをやる。「クソ、負けてなるものか」。抑留生活におけるニュース戦が展開された。このニュース戦は内地帰還まで5カ月間ばかり続けられた。

いくら環境が良くても、抑留生活が長くなれば気が滅入ってくる。ニュース戦に集中しているわれわれも同じだ。いつも口に出るのは「帰還はいつか」。「2、3年は駄目だ」。陸軍が確保していた米食を豪州軍が取り上げるとのうわさが流れてくる。受信する内地ニュースはいつも暗く、報道班員は戦犯になるというニュースが入り、ヒヤリとする。

## 弱肉強食の帰還船

内地はいま春たけなわと思っていたころ、たぶん4月下旬か5月早々と記憶している。各棟で「ワアー」の大歓声。また現地住民の奇襲かと思ったら、内地帰還が決まったという。予想もしていない。デマではないか。誰かが飛んで行った。間違いないと知らせてくれる。「バンザイ、バンザイ」。忘れることのできぬ本当の感激、喜びだ。さあ、帰れるぞ、荷物整理だ。と言っても、リュックに身の回り品少々だ。ここに悲喜劇が持ち上がった。インドネシア女性といい仲になった連中は、必ず同伴で帰還せよとのオランダ軍指令だ。粹な裁きと言いたいところだが、彼らのほとんどはありがた迷惑だったらしい。

5月8日の夕刻と思うが、パレパレ港（ペンテンから約10キロ）に集合した。英印と蘭印系の軍人が荷物検査。品物を没収されやしないかと、みんなビクビク顔だが、英印系は何でも持つて行けと大いに同情、これに反して蘭印系はいかめしい顔つきをしている。ここでもお国柄が分かって面白い。同盟組の5名はパスした。ところが私は運悪く蘭印系とぶつかり、スイス製の腕時計をとられた。いよいよバティー船に乗った。定員七、八百名なのに、2千名近くが乗っているの、船内はぎゅうぎゅうだ。席を取るのに大変な騒ぎ。わが同盟組は大男にすまされて、隅っこに小さくなる。まさに弱肉強食といってよい。大海原に点々と見えるセレベ

スの島が、丸3日間続く。セレバスも大きいなあと感心する。4日目にセレバスの島々も遠くへ去った。誰かが「さらばセレバスよ」とはやした。南十字星が実にきれいだ。家族はどうしているかと感傷的になる。台湾沖に差し掛かったとき、終戦連絡事務所から連絡があり、数日後に名古屋へ着くと知らされる。セレバス新聞の吉良編集長にはったり出会う。「小人数でよくやりましたねえ」と言う。抑留生活中のニュース戦のこころしい。

例の同伴組は16家族だが、内地へ近づくに従って、インドネシア女性の黒いのが、いやに目立ってくるような気がする。昭和21(1946)年5月21日の夕刻、名古屋港に着いた。いよいよ内地上陸の第一歩だ。引き揚げ者事務所に収容される。入浴、夜食は赤飯で鯛という手厚い歓迎に感謝する。5月下旬だというのに肌寒い。寒いと震えているインドネシア人女性がかわいそうになる。同事務所で2日間過ごした後、東海道線で東京に向かった。沿道盛んな歓迎風景だが、東京へ近づくに従って冷たくなる。京浜間の焼け野原にびっくり、これは予想以上にひどいと思った。25日か26日の午前7時ごろ新橋駅に到着した。リュックに戦闘帽のいでたち、改札口で闇商人にリュックをたたかれて驚いた。

共同通信に入っていくと、守衛にとがめられ大憤慨したが、この姿では無理はない。懐かしい社会部のデスクに腰を据えていたら、正午ごろ松方三郎編集局長が出動してきた。一通りのあいさつをした後、大事に持ってきた抑留中の同盟ニュースを差し出した。松方さんは一べつしただけで、取って見ようともしない。もう、同盟はなくなつたのだ。こっちの感覚がどうかしていたのだろう。

(新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」)

## PRビラを執筆、ボルネオ全土に散布

千田真清(元同盟通信ハンジエルマシ支局)

昭和19(1944)年の半ばごろ、マカッサル支社からハンジエルマシ支局(旧南ボルネオ)に転勤となつた。当時29歳。支局の仕事は毎日、南方建設の成功を裏づけるニュースを南方総局に送る一方、本社からの無電を記事の形にして、朝日系のボルネオ新聞社に送信することだった。20年に入ると、ゲリラがボルネオに送り込まれ、治安が急速に悪化してきた。そこで臨戦体制の一環として、艦隊報道班が結成され、ボルネオ新聞、映画配給社、日映<sup>28</sup>の人々とともに私も一員として加わつた。

日本はオランダの支配を覆すことに成功したが、日本の真意を現地住民に詳しく分かりやすく説明しなかつた。報道班の初仕事として今こそそれを語ろうということになった。誰が書くのかという段になって、言い出しっぺの私が指名され、約1週間考えに考え、情熱をたぎらせて書き上げた。草案は全員一致でパスし、マレー語へ翻訳した。このPR伝単(ビラ)はジャワで印刷され、ボルネオ全土に空中散布された。

この1回のPRの効果は誰にも分からない。だが、それから自発的武装解除を経て指定された場所に集結するまで、一人も危害を加えられた日本人がいなかつたこと、むしろ連日、住民の歓待攻めに遭つたという事実で、私は満足している。

敗戦で支局員は集結地に向かった。田中真清支局長以下が先行し、私一人、後始末に残つた。私は、世話になつた住民に対するお礼のつもりで集結期限の前日、強引に綿布1200疋入り1梱(原住民1人当たり年間

綿布消費量は4、5<sup>ルヤ</sup>だった)を放出させ、支局の什器類・無線機械と、3年は商売をやれるほどの写真材料など全財産とともに分け与えた。後で写真材料をもらった華僑から「あなたの財産はいつまでも預かっています」という伝言が届いた。

(「新聞通信調査会報」第285号 1986年8月1日発行)

## 金の延べ棒腹に巻き収容所へ

片岡誠一(元同盟通信パレンバン支局長)

空の神兵―落下傘部隊の華々しい活躍が報道されたスマトラ島パレンバンに、同盟通信社の支局が設置されたのは昭和17(1942)年8月。開設当初からの支局長山田繁治氏が20年5月まで在任、私が引き継いで3カ月目に終戦を迎えた。パレンバンには南スマトラの政庁があり、製油所の重要施設があるため、第9飛行師団が駐屯。パレンバン防衛司令部がおかれて、南方では最も強固な防空体制が敷かれていた。この強力な駐屯部隊のおかげで終戦後もパレンバン地区では大きな混乱もなく、邦人の撤収作業も順調に行われた。

同盟通信が支社局間の無電連絡網を持っていたことを終戦前後ほどありがたく感じたことはなかった。終戦当時、パレンバン支局員は安田徳助、小沢嘉弘、内野福治の3君と台湾出身の連絡員2人と私。その後、ラハト駐在の高島修三記者と出張滞在中の日映カメラマン龍神君の両名が、われわれと行動を共にして一緒に帰ることになった。このうち小沢

君は現地召集を受けて入隊中であつたが、終戦と同時に召集を解除されて支局に帰ってきた。

撤収作業のはじめは支局保有資材の処理。必要な通信資材を除いて用紙等は駐屯部隊やパレンバンの小学校に寄贈した。引き揚げまでの生活は一応収容所で保証されるとしても、いつ帰国できるか見通しもたない状態では、非常事態に備えて若干の準備金が必要だ。そこで交換価値の高い金<sup>きん</sup>を入手することを考えた。パレンバンでは、現地産の砂金でつくった金の延べ棒を自由販売していた。終戦後、日本人の金購入は禁止された。

入手できた延べ棒を私が腹に巻き、各自はリュックサックに身の回りを詰めこんで収容所に入ったのは9月初めだった。この時点で、台湾出身の2君は現地の華僑を頼ってわれわれと別れた。収容所では、昭南新聞会の支部長星野一男(中日から出回)と小野田(回)両氏が合流し、同盟関係者は7人になった。パレンバン収容所には南スマトラ各地から集まった邦人400名余りが入所してスマトラを離れるまでの5カ月間、共同生活を送った。この間小野田氏は熱帯性マラリアに侵され、数日間高熱に苦しんだ後死去した。

いつ帰れるというあてもなく、焦燥のうちに年が明けた1月中旬、シンガポールへの移動が発表された。収容所内は移動の準備であわただしい活気にあふれた。延べ棒の始末に迷った。邦人の貴金属持ち出しは一層厳重に禁止された。一方、シンガポールに移れば同盟の仲間とも合流できるから金はそれほど必要なくなると判断した。延べ棒3本を食糧とタバコに交換した。とてもわれわれだけでは持ち切れないほどの量だった。

シンガポールの引き揚げ基地ジュロン収容所では、マレー組はずでに帰国した後だったが、スマトラをはじめ各地からの同盟の仲間が寄り集

まって再会を喜び合った。ジュロン生活約3カ月。スマトラ組は4月末にシンガポール港からLST<sup>211</sup>に乗船、紀州田辺に上陸したのは5月10日だった。

〔新聞通信調査会報〕第273号 1985年8月1日発行

## セレベス山中で阿南大将と会見

田中盛文(元同盟通信マカッサル支社電務部長)

敗戦の色が濃くなってきた昭和20(1945)年4月のことであった。ひそかに中部セレベス(現スラウエシ)の山中に配置されていた陸軍第2方面軍司令官の阿南<sup>あなみ</sup>惟幾<sup>これちか</sup>陸軍大将が、突如、同盟通信との単独会見に応じた。会見には猪伏<sup>いぶし</sup>清支社長と田中盛文電務部長が当たった。場所は司令部とは名ばかりのニツパ椰子<sup>やし</sup>の兵舎<sup>へいしゃ</sup>であった。將軍は小柄で目は森繁<sup>もりしげ</sup>久弥<sup>ひさや</sup>にそっくり。

さすがの支社長もやや緊張の面持ちで「閣下はこの戦争をどうお考えですか」と切り出した。阿南さんは、癖なのであろうか長い耳の中の毛をひねりながら、次のようにはっきり敗戦を認めた。

「残念ながら今度の戦は私たちの負けですよ。優秀な搭乗員もたくさん連れてきたし、滑走路も完成したが、肝心の飛行機がさっぱり来ない。私は退屈のぎにこの山の中で毎日、馬と弓以外にすることがありません。私はこの戦は、東西両文明の戦いだと思っています。とても5年や10年で勝負がつくものじゃない、100年かかるかもしれないし、50

0年先になってみなければ結論が出ないかもしれません」

私は、阿南さんは軍人というよりも坊さんか哲学者のように感じた。さらに言葉を續けて「あなた方報道マンに是非お願いしたいことは、この戦争には負けるにしても、日本の立場はあくまでも正しいということ、機会あるごとに米英は言うに及ばず、世界の国々に訴えてほしいということ、それともう一つ、目と鼻の先のソ連の出兵に気をつけなければ」。この数日後、阿南さんが終戦内閣の陸相になったことを本社の同報無線が伝えた。

終戦はジャカルタで迎えた。受信機にしがみつこうにして、終戦詔書の放送を一言も漏らさじとウオッチした。役目を果たした無線装置、タイプライターその他一切の器材は、それまで一緒に働いてくれた現地人のオペレーター諸君に贈った。インドネシアのアンタラ通信社のスタートに、大きく貢献したことは言うまでもなからう。

〔マカッサル支社局の記録〕1991年5月発行

## 人情に国境なし

佐藤長蔵(元同盟通信マカッサル支社)

昭和20(1945)年5月ころだった。(マカッサルから)遠く離れたマリノにあった資材・食料貯蔵庫が破られた。ベンジャミンという管理人からの急報で駆けつけた。管理人は大変に恐縮しており、庫内を調べているうちに物陰で首をかき切って自殺を図った。医者の手当てで命は取り

止め、ホツとしたが、彼の強い責任感に感動した。マリノは高所の涼しいところであった。時期には南方特有の火焰樹かえんじゆという文字通り焰ほのおのように真紅の花が咲き誇っていた。

収容所に入ってから、直前まで宿舍で働いていたバブ（女の使用者）とジョンゴス（男の使用者）の姉弟が、夜に紛れてひそかに食料を運んでくれた。監視が厳しくなって途絶したが、その情には泣かされた。人情に国境はないものである。

〔マカッサル支社局の記録〕1991年5月発行

## 同盟の灯、燃やし続ける

岸田繁（元同盟通信バンジエルマシン支局）

バンジエルマシンの阿部行雄君がバッテリー充電中に負傷し、交代要員として急きよマカッサル支社からバンジエルマシン支局に赴任したのは昭和19（1944）年10月ごろだった。当時、支局の無線設備は70ワット短波送信機、ポータブル式送受信機各1台、短波受信機数台、自家発電機、英文タイプなどで、現地人オペはルビス、アブドラなど4人のほか、養成中の4人がいた。

業務内容は1日2回のマカッサルとの管内ニュース交換、東京の大東亜同報、シンガポールの南方同報（ともにローマ字）を1日約十二、三時間受信。空中状態は最良期に当たっていたが、電力会社の発電機故障が多いのが悩みの種だった。社屋前には管内一と言われたアンテナ鉄塔2本

が立っていたが、空襲が激しくなり、目標となるため撤去した。敵上陸に備えてマルタプーラ近くのカンポン（集落）に受信機などの資材を疎開、交信基地としたが、結局使わなかった。

終戦の1週間ほど前、退屈しのぎに連合国放送を聞いていたところ「日本がポツダム宣言受諾」のビッグニュースが飛び込んできた。極秘に関係方面に急報し、同盟の面目を施した。8月15日の玉音放送は軍の無線設備が貧弱で、同盟無線1本が頼みの綱であったが、支局を通じ陸海軍、民政部関係に速報した。海軍警備隊からは「同盟本社はスパイに占拠されてデマを流しているのではないか」と抗議してきたり、「この内容では負けたとはっきり分かるから文章を変えろ」と無茶な申し入れもあったが、ともかく最後まで同盟の機能を果たし得たことを誇りに思っている。

終戦後数週間が過ぎ、豪州軍が進駐してきて「日本人は1週間以内にバンジエルマシンを退去し、ダナサラックのゴム園に集結せよ」との指令が出た。そこはバンジエルマシンから数十キロ離れた野村殖産のゴム園で、苦力クワリの宿舍であった。アンペラー1枚で、1日おにぎり2個という捕らわれの生活が始まった。豪州兵には目ぼしいものを略奪され、夜はサソリやダニ、南京虫に悩まされた。いったんバンジエルマシンへ引き返し、日本人会館裏のテニスコートに集結したが、金網の外から現地人の「バカヤロー」の罵声を浴びながら敗戦の現実を思い知った。バンジエルマシンから3隻の上陸用舟艇に詰め込まれ、3日がかりでバリックパパンに向かったが、飢えと渇きで文字通り炎熱の「地獄航路」であった。バリックパパンでは最初、市街地を離れた第1キャンプに入ったが、21年5月の帰国まで数力所のキャンプを転々とした。1日5、6枚の乾パンと1、2杯のおかゆを支給されながら軍の作業にかり出され、1年近い望郷生活を送った。この間、同盟の解散を知ったが、松村君が軍の

ラジオニュースを聞いて、皆で協力して簡単な通信を発行、同盟の灯を燃やし続けた。21年6月上旬、待望の帰国船リバティー船が到着した。乗船前に戦犯首実験のゲートがあり、ここで引つ掛かる者もいたが、目を伏せて小走りで駆け抜け乗船した時は命拾いした思いであった。台湾沖では南十字星も水平線に消え、6月17日、無事名古屋港に入港した。同船者は千田、芦部、松村、岸田の4人。

〔マカッサル支社局の記録〕 1991年5月発行

## 苦難のジャングル逃避行

内田啓明（元同盟通信バリックパパン支局）

昭和19（1944）年3月15日、ダグラス機でマカッサルからバリックパパンに着いた。海面すれすれの超低空飛行だった。皮肉にもその晩から石油精製工場を狙うB24の空襲が始まった。「君の土産は空襲か」。諸氏から痛烈に皮肉られた。しかし、しばらくは空襲が少なく、市街地は狙われなかったので不安はなかった。南国情緒は十分に味わった。だが、それ以外は何もない。あるのは石油ばかり。食べるものも見られるものもない。わびしい町である。夜は支局のオープンカーが判を押したように、某所に着いてしまう。

のんきに南国情緒に浸っていたのは、半年くらいであった。空襲は次第に頻度を増し、日中にも来るようになった。それでもゼロ戦が1000機もいたので、空中戦を高見ならぬ、下見の見物をしていった。だが、20

年に入ると、ゼロ戦がレイテ作戦に転じて、ゼロになってしまった。それから敵の思い通りにたたかれた。支局の周辺にも爆弾が落ち出した。ある日、ふと危険を感じて防空壕を飛び出して1キ離れた宿舎に逃げた。戻ってみると、防空壕に直撃弾、多くの死傷者が出ていた。これを「虫の知らせ」というのか。そんな危機一髪が幾度もあった。

敗走中、ジャングルの一軒家に1人でいた時、3機のP38に繰り返して襲撃された。直径2尺近い大樹のお陰で助かった。あれがなかったら……。戦後その地を訪ねたが、全て伐採されて跡形もない。その恩木も切り倒されていた。

現地住民の集落に隠れていた時、司令部に連絡に出掛けると、不思議なことにその直後に空襲される。それも1回や2回ではない。度重なるので、ボルネオ新聞の連中に「内田さんがいなくなると、空襲される。頼むからどこにも行かないで」と泣きつかれた。1人の記者は、どこへ行くにも私の後を着いてくるようになった。運だけでは解明できない何かがあった。後日、高名な易者に尋ねたら、「運ばかりではない。先祖が守ってくれたのだろう」と言っていた。

ジャングルの敗走は心細かったが、戦争経験豊かな両先輩のおかげで救われた。村川武躬支局長は、父と兄が高級軍人、自身も陸軍士官学校病氣中退という軍人一家であった。陸軍報道班員としてビルマ（現ミャンマー）戦線を駆け回ってきた強者である。青木オペはソ連と戦ったノモンハンで、死体の山から意識を取り戻して生還した、という歴戦の鬼軍曹である。所在のないままに、両氏から深いジャングルの底で、戦闘、戦略、戦史などから死生観その他さまざま話を聞いて過ごした。兵役も戦争体験もない若輩には心強い先達であった。気丈夫の支局長も神経痛に苦しんでいた。激痛が起きると、私が肉の薄い尻に痛み止めの注射を打つ。ほぼ日課のようであつた。

## 将兵が手榴弾で自決

赤道に近いので、毎日午後6時に日が暮れる。そのころ決まったように「カナカナ」とヒグラシが鳴く。巢へ戻る尾長猿が「ポーポー」と鳴く。何とも言いようのない寂しさに包まれる。そんな感傷を突き破るように突然「ドカン」と遠くから破裂音が響いてくる。弾丸で傷ついたり、ジャングルの中でマラリアなどの病気で動けなくなったりした将兵が手榴弾で自決する爆発音である。毎夕、二つも三つも聞こえてくる。全くやり切れない。頭を抱え込んでうずくまる。日暮れはやるせなかつた。

ジャングルでは3千人以上もが、誰にも見守られないで死んでいる。所在が分からないので、遺骨の収集は不可能であろう。そのほとんどは、四十数年の間に積もった厚い枯れ葉の布団の下で眠っている。戦後2回、悲しいジャングル戦場を訪れたが、ただ遠くから手を合わせて冥福を祈るばかりであった。

マハカム川べりの収容所に10月ごろに入り、帰国する翌年5月まで過ごした。監視は全くなく、行動は自由であった。作業は野菜作りくらいしかない。退屈しのぎと栄養補給を兼ねて、村川さんと毎日のようにエビ釣りをしていた。のんきな日々であった。

こうした環境にいると、人の本当の姿がはつきり出てくるものである。堀内さんがアマーバ赤痢にかかった。収容所には薬がなく、多くの人が病気で亡くなった。困り果ててある陸軍軍医に相談したところ、こっさり貴重な特效薬を提供してくれた。そのおかげで早く治ったが、この薬は軍医が自身の万々に備えていたものであった。「堀内さんのためなら」。

その人徳を慕う軍医はそう言っていた。人望が自らを救ったのであろう。食糧不足に困ったが、たばこにも困った。多くの人はなけなしの物々交換で何とか手に入れていたが、杉山民政部長官はその惨めさを恥じて

禁煙を決断した。なかなかできないことである。人物の大小がこういふときにこそよく現れることを痛感した。顧みてわれは……。黙々と自給農園で耕す人がいれば、共同作業の畑に出ず、たばこもマージャンに明け暮れる一団もあった。たばこをねだる人、知らぬ顔の人、不平不満をブツブツ言い続ける人、さまざまに本心をさらけ出していた。若輩には得難い人生教育の場であった。

〔マカッサル支社局の記録〕 1991年5月発行

## マハカム川河口で被弾、漂流

堀内軍平(元同盟通信サマリンド分室長)

パリックパン支局の後進基地開設のため昭和20(1945)年4月15日、100ト足らずの機帆船で現地人オペのイブラヒムとその妻子を連れ、パリックパンを出港した。夕方にはサマリンドに着く予定であったが、マハカム川河口の沖合で、快調な響きをたてていたエンジンがストップした。この付近は浅瀬になっており、たまたま干潮と重なって船底がつかえたためだという。イブラヒムの部屋をのぞくと、女房が胸をはだけて誕生を迎えたばかりの坊やに乳房をふくませていた。二言、三言交わしたとき、船室の外で異様なざわめきが起こった。

敵機来襲！ はるか上空に見えていた黒点がこちらを目指して高度を下げてくる。紛れもない空の要塞、B29だ。一瞬、進入方向と反対側の船橋の陰に身を伏せたが、そこには十数人が折り重なっていた。耳をつ

んごく機銃音とともに船体は激しく小刻みに揺れた。「助かった！」と思う間もなく2回目の攻撃だ。再び折り重なる人をかき分け、下に潜ろうとするが、押し返されてしまう。人の身を盾にしても自分だけは助かりたいという心理、醜いことだが、これが人間の本能かもしれない。甲板では乗客が血しぶきをあげて幾人も倒れ、断末魔の悲鳴を上げていた。

猛烈な恐怖心かられるまま、機関室に飛び込みエンジンの下に身を潜める。ガラガラ、キンキンという金属音が続き、目を開いた時は前面に炎が上がり黒煙が立ち込めていた。もはやここまでと船を離れる決心をし、甲板に駆け上がった。カメラが気になりイブラヒムの部屋をのぞくと、さっきまで坊やに乳を飲ませていた妻は顔を撃ち抜かれ、仰向けに倒れていた。船尾から海に飛び込み振り返ると、船体は橙色の炎に包まれ、4回目の攻撃を終えたB29は悠然と遠ざかっていった。

樹林に覆われた岸辺までは3キロぐらいに見えた。水泳には自信があった。2時間もあれば泳ぎ着けるだろう。日はまだ高いが、夕方までに泳ぎ着かねばと思いきだした。右肩のあたりがチクチク痛むのでよく見れば、シャツが破れ周囲の海水が血に染まっている。緊張していたので気がつかなかったが、肩を撃たれたらしい。このまま出血が続けば途中でダウンするのではないか。一抹の不安がすすめる。とりあえずハンカチを出して左手と口を使って縛ってみたが、もとより傷口をふさげるわけではなく気休めに過ぎない。

後方から「堀内さん！」という声がした。海軍特務機関の佐藤君だ。お互いに無事を喜び励まし合って泳ぎ続けた。日はとつぷりと暮れ月が出たが、目指す陸地ははるか彼方で、3時間余り泳いだにしては一向に近付いてこない。後で分かったことだが、岸へ向かって泳いでいるつもりでも、マハカム川の流れて沖へ沖へと流されていたのだ。もう岸へ泳ぎ着こうという気力もなく放心状態で波間に揺られていた。初めは群

がっていた漂流者も潮の流れで離れ離れになり、月明かりの海上に点々と散らばっていた。

日が暮れて4、5時間たったころ、救助艇がきてロープを垂らしてくれた。肩の痛みをこらえながら、必死にロープにしがみつき甲板に引き上げられたときには寒さと疲労でガタガタと震えが止まらなかった。

翌朝目を覚ましたのはサンガサンガ海軍病院のベッドの上だった。肩の痛みで右腕が上がらぬ。盲貫銃創もうかんじゅうそうとのことで、摘出手術の結果、2ヶ月ぐらいで菱形につぶれた機銃弾が出てきた。無一物になって海軍の作業衣を支給してもらい、伸び放題のひげ面で退院したのは4月29日の天長節であった。

〔「マカッサル支社局の記録」 1991年5月発行〕

## 敗戦後、地獄に突き落とされる

阿部行雄（元同盟通信シンガラジャ支局）

終戦の報は民政部との話し合いで10日ほど伏せていた。そしてある日の早朝、海軍の「特警（特別警察隊）<sup>229</sup>」数名がシンガラジャ支局の宿舎に来て、「なぜ終戦ニュースを流したんだ」と、血相変えてガアガア怒鳴り立てた。この時ばかりは「殺されるのでは」と全員の顔面が引きつった。その日のうちに現地人の全従業員を集めて、片言のマレー語で終戦の説明をした。今思うと冷や汗もの、どれだけ理解してくれたものやら…。

スラバヤに上陸した途端、あちらの兵隊たちに現金、万年筆、時計な



ど金目のものを全部取り上げられてしまった。收容所の食事はお粗末なもの。朝昼2回分で飯盒半分ほどの飯と梅干し二つ、小さな鱈の干物が2尾、夜は一汁一菜だった。作業の多くは船からの荷揚げだったが、飛行場の地ならしはきつかった。英軍兵舎の糞尿をトラックに積んで海に捨てに行くこともやらされた。2、3日は臭くて飯が通らない。辛い作業だった。墓地を掘り起こして死体を埋め替える作業もいやな臭いが鼻について1週間も胸がむかむかした。

キャンプに来るまでは、龍宮城での浦島太郎のような生活だったが、一転して地獄に突き落とされたようだった。それでも身体が丈夫だったので耐えられた。病気もせずに約10カ月間の重労働を体験したのは、今となっては思い出である。肉体的にも精神的にも随分鍛えられたような気がする。

〔マカッサル支社局の記録〕 1991年5月発行

## 空襲のアンボンから極楽島のメダンへ

秋山如水(元同盟通信メダン支局長)

終戦の時、私はスマトラ島のメダンにいた。同盟の支社は東部のブキティンギにあり、時事通信へ行った近藤公一氏が支社長だった。メダンの在勤は1年余に及んだが、日夜空襲にさらされたアンボン島からの転勤だったので、灯火管制も、銃声も聞かない物資豊かなスマトラ生活は全くの極楽世界であった。

だが私のスマトラ行きは望んでかなえられたものではなかった。それどころか、当時、南方総社長(シンガポール)だった福岡誠一さんにマニラへ行かせると散々食ってかかり、ダダをこねたのだが、援護射撃を頼んでいた殿木圭一先輩が、いざという時に得意のおとぼけぶりを発揮してたぬき寝入りをしたもものだから、福岡さんに説得されてしまったのである。

今になって振り返ってみると、両先輩の思いやりには頭が下がるだけだが、前線から帰ったという気負いとアンボン支局に畑敬君以下4名の支局員を残してきたことが気持ちに引っ掛かっていたのである。マニラに行けばアンボン島へ引き返すチャンスもあるだろうというのが私の計算だった。もしこの時、望み通りマニラ行きとなったら、私の運命はどうなっていたか分からない。

アンボン島はひどいところだった。ニューギニアの西のモルッカ諸島、俗に香料諸島と呼ばれる中の猫の額ほどの小島だったが、まだ景気よかった昭和18(1943)年ごろは、ここが豪州侵攻の拠点と定められ、根拠地隊だった海軍は、第4南遣艦隊の司令部となり、陸軍はいつの間にか師団三つを抱えた「堅」集団の本拠地となっていた。私が同盟のアンボン支局長として赴任したのは18年の夏で、横浜から川西の4発海上機に乗り込み、サイパン、パラオ経由でこのじめじめした島へ到着した。当時はまだ海軍の第19根拠地隊があるだけで、司令官柴田弥一郎中将はその後、スラバヤ第2南遣艦隊の参謀長に転じ、終戦後は日本とインドネシアの友好関係に貢献している。その頃の支局は、東京からモールズで送られてくる同盟ニュースを日本人とアンボンの技師が受けて、若い支局員がガリを切り、少年ジョンゴス(ボーイ)が自転車関係先に届けるといった明け暮れだったが、1日に2度ぐらいいはポートモレスビーからの爆撃定期便があつて、前線のな気分が横溢していた。

## 小島に2軒の料亭

北野憲造中将の堅集団がジャングル内にバラックの司令部を設置する頃には、海軍の方も第4南遣艦隊となつて山県正郷中将まさむねが生きのいい幕僚を従えて乗り込んできたし、それまでは海軍だけの小さな料亭や慰安所だったのが、いつの間にか大阪仕立ての陸軍専用料亭が出来上がり、海軍には向島の待合が芸妓げいぎぐるみで進出するという騒ぎで、渺びようたる小島に二つの料亭が夜ごとにさんざめき、空襲がその合いの手を務めるといふばかげた毎日が続いたのである。高級将校がウウウヨといて、何かと私は呼び出されたが、そのうち陸、海の司令部に入りにできる同盟支局長という肩書が、とんだ利用価値を生み出して、海軍がひそかに陸軍の料亭を使用する時、またその逆の場合に、私が仮の主人公となつて、双方の料亭を使用する便利屋とされたのである。

私にとつてはいい面の皮で、ちょっと羽目を外したり、ホステスに謀反わはんぎ気を出したりすれば、たちどころにシツペ返しが来るのは分かってきたし、いわば私は高級将校の隠れみのみたいなのだから、料亭設営の依頼には全く音を上げた。と言つて、陸海の参謀はニュースソースみたいなものだから、粗略にも扱えなかつたし、やむなく私はこれのご用命が下ると、まず飯をたらふく詰め込んで、酒に酔わず、うまくもなしという状態でお相手を務めることとした。

そんなある日、突然、大平安孝編集局長とマニラの黒沢俊雄君が塚本機で訪れた。ニューギニアのフィンシユハーフェン支局を設置する目的で調査に来たのだという。もうその頃はニューギニアの戦況も悪化していたから、結局沙汰やみとなつたが、渡豪作戦のズレもこの頃から次第にはつきりした様子である。

## 出頭の赤紙に目の前真っ暗に

18年1月2日の午後だった。本社から暗号電報が入り、1月7日に横須賀の海兵団へ出頭の赤紙が来たと伝えてきた。さらに追いかけて現地海軍に事情を話し、内地帰りの近便を探せという。途端に私は目の前が真っ暗になった。私は慌てふためいて4南遣の司令部に駆け付けた。

仲の良かった高崎情報参謀に電報を見せ、千早作戦参謀とも相談して、長官室の山県中将の前に進み出た。「赤紙かあ、処置なしだなあ。千早、7日までに横須賀へ着く飛行便はあるのか」「明日、セレバス経由で司偵しじ(司令部偵察機)が1機出るとは出ます」「誰が来るのか」「連絡便で機密書類だけです」「じゃあ、それに乗るか」と聞かれたので、「いや、閣下。現に私はこの前線で同盟通信の支局を預かり、報道業務をやっているのですから、今さら内地へ帰つて3等水兵になつたところで、お国のためになるとは思いません。まして昨今のように空襲が激化しているさなかに、支局員を放り出して帰ることも気掛かりですし、万一のことがあつても任地で仆たおれた方が本望です。召集令状に対する冒流ぼうりゅうだとは思いますが、何とか長官のお力で現地入隊か、あるいは召集解除にはいただけませんでしょうか」「軍人でないお前を機密書類の飛行機に乗せるわけにもいきまい。それじゃ貴公、俺の従兵になるか。俺の傍にいて、下手に軍機なぞつかまれても困るが、アハハハハ。オイ情報参謀、公電を打つて何とか手を打つてやれ」

千早、高崎両参謀のとりなしもあつたが、豪快な山県中将の一言で「秋山3等水兵は免れることとなつた。後で聞いた話だが、同盟本社でも大変心配してくれて、当時の大平編集局長が海軍省と横須賀海兵団に再三赴いてくれたそうである。

19年を迎えて戦局は日増しに厳しくなり、アンボン島の敵機空襲も頻

度を加えた。ボルネオ、アンボンの海軍地域はセレベスのマカッサルにおかれた支社の統轄下にあり、今は亡き猪伏清氏が支社長であった。終戦後不幸な死をとげた上村君や千田君、川和君などが元気に飛び回っていた。空襲激化の3月ごろ、転勤命令が出て昭南島と呼んでいたシンガポールの南方総社へ赴くこととなった。後任の某氏は政治部出身の豪傑風大言壮語の旦那だったが、マカッサルの猪伏公邸で落ち合ったらアンボン島行きは無意味だから嫌だと言い出した。空襲の体験を正直に話したことが、豪傑の内心を揺さぶったものらしい。最後には「俺を殺す気か」という見幕となって、猪伏大トアン(巨那)を激昂させた。「そんな意気地のないことを言うなら、俺がもう一度引き返す」と啖呵を切る仕儀となり、猪伏さんになだめられる一幕もあった。

後味の悪さを残してシンガポールに出たわけだが、ここも2年前とは大分変わっていた。17年の2月ここを占領した当時、私は海軍報道班員としてセレタ軍港の接収部隊にいた。例の山下・パーシバル会談をこの目で見た一人だし、支那街にバリケードを張り巡らして「軍人軍属立入り禁止」とした辻参謀命令を尻目に華僑の有力者と友達になったりした。

その頃のシンガポールは敵産物資が豊富にあり、陳さんとかいう台湾出身の連絡員がいて、ほしいものは何でも集まった。ジョンニ赤が7円、ホワイトラベルが5円で何ケースでも買えた。作家の石川達三さんと黒沢君の3人で山手の豪奢な家に勝手に住みつき、スコッチの木箱を前に毎晩野郎ばかりの大宴会を張ったものである。だが2年後の昭南島は日本の軍人、軍属ばかりがやたらと目につくだけで、街中が貧相で薄汚くなっていた。

メダンの前任者は現高知新聞社長の福田義郎氏で、陸軍省詰の記者時代によしみの深かった武藤中将がここへ進駐した近衛師団長だったので、

縦横の腕を振るっていた。その後釜に前線ボケの私が赴任したわけだが、極楽とんぼのメダン生活にはなかなか解け込めなかった。前任者の影響力が内外に浸透していたせいもある。福田さんは誠に運の強い人で、例の不法撃沈された「阿波丸」に乗り込む予定だったのが、何かの都合で乗り遅れ、飛行機で無事帰還した。

1年間のスマトラ生活は、ただのんびりとした明け暮れで、思い出らしいものはない。支局員は、取材担当は社会部出身でアメリカの大学を卒業した安田君、ガリの要員は堀内君、野口君、それに名前を失念したが、支局の設営時代から住み着いている連絡員の某君が、威勢のいい長靴姿と仙台南まりの切り口上だったのを覚えている。

## チャンドラ・ボースの歓迎会

戦争末期というのに敵機敵影の現地ニュースは皆無だし、ゲリラのうわさも全くない別天地で、メダン在勤中のビッグニュースと言えば、日本を訪れる途中で立ち寄ったチャンドラ・ボースの大歓迎集会が開れたぐらいのものであった。近衛司令部の若手将校に飲み仲間が増えたり、参謀長や軍医長ともウマが合ったりしたから、仕事に不便はなかったが、憲兵隊からは相当にらまれた。というのは支局に3人の混血タイピストがいて、3人とも美人ぞろいだったのと、オペレーターのインド人にスパイ容疑があったせいである。

終戦のごたごたが済むと、邦人はゴム園のなかの収容キャンプに送られたが、私と2人の支局員は軍のリエゾンオフィスでそのまま同盟の受信を続け、無電機材はそのまま英軍とともに進駐すると伝えられたロイターの連中に引き継ぐ予定だった。だが、連合軍の進駐は一向に行われず、街では日本の軍票が緩慢なインフレの傾向をみせながらも通用して

いた。21年の2月、スマトラの邦人がシンガポールのジュロン収容所に移されたとき、支局長と合流して私も同行し、ジュロンでの収容3カ月を経て、21年の5月、和歌山の田辺港に帰着した。わが家の消息も知らず、帰還列車が雨の品川駅構内に着くと、忘れもしない長林密蔵さんがこうも傘を差して「ヨウ、ヨウ」とお得意の口調で迎えてくれた。その瞬間の一こまがいまだに脳裏にこびり付いている。

（新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」）

## アルプス山麓で終戦、米国経由で帰国

小田善一（元同盟通信バルカン特派員）

「ふるさととは遠きにおいて思ふもの」とか言うが、海外特派員の仕事をしながら、戦況利あらず、ズルズルと敗戦地獄へ落ち込んでいく母国の悲運をかみしめていたあの頃は、何とも辛い毎日であった。思えばちょうど20年の昔になるが、ヨーロッパで捕らえられてアメリカへ。ぶつかった事件も人も昨日のことのように鮮やかだ。

今は亡き懐かしい先輩、大屋久寿雄くすお兄の後を受けて、バルカン特派を命ぜられたが、外信部のデスクに1回も座らず、いきなり社会部から出て行ったのも異例なら、ビザも持たずにイランへ上陸できたのも、あまり例のないことらしい。昭和16（1941）年の9月、中近東から引き揚げる邦人を出迎えに、神戸を出港した郵船の「日枝丸」には、外交官の家族数名と毎日、読売、小生の記者3人だけが乗っていた。行く先も、

出港日時も、一切家族にも秘密という厳戒ぶり、唯一の寄港地ボンベイ（現ムンバイ）でも上陸できず、波止場に現れてくれた蠟山芳郎ろうやまよしろう特派員にも船の上から手を振っただけ。それほど既に戦雲は深く立ち込めていたのである。

当時イランも北はソ連軍、南は英軍の占領下で、バンドルシャプール（現バンドルホメイニ港）の沖合に着いた「日枝丸」へ乗り込んで来た英海軍の士官は、無論、われわれ3人の記者の上陸の願いを聞き入れようとしなかった。ただ何事も全力は尽くしておくもので、僕は諸先輩の注意を聞き、英国大使館の情報官から、イラン派遣英軍総司令官ウェーベル大將宛ての紹介状と、イラク、トルコのビザを用意していた。ただ肝心の上陸地イランのビザがないのだから、こんな用意も役には立つまいと思っていたのだが、何とこれが利いて、僕一人だけがとにかく上陸を許されたのである。

### 日本のラジオで開戦知る

バグダッドの公使館、アンカラの大使館でも「どこから来た」と不思議がられた。しばらくして、イスタンブールで日本のラジオを聞いていると「ニュースを中断して天気予報を申し上げます。南の風、晴れ」と言う。ここに太平洋戦争の悲劇が始まったのである。思い出は尽きないが、もつと先を急ごう。

これからイスタンブールとブダペストを中心に、バルカン各国を巡り歩き、戦況や中近東、地中海、アフリカなどの情報を集める地味な特派員稼業も既に3年、トルコ、ブルガリア、ハンガリー、ルーマニア、ユーゴスラビアなどの日本に似た風景にも、素朴な人情にも、各国の地酒や料理にも、すっかり慣れて、住み心地はすこぶる良かった。厳しい統制

にあえぐベルリン支局などには、物資の豊富なブダペストから、時には差し入れもできて、うらやましがられたこともある。

しかし形勢は次第に逆転、赤軍はルーマニア、ブルガリアを押しさえ、ついにブダペストの東方40<sup>キロ</sup>に迫った、その砲声を聞きながら、病気の日本人留学生を介抱しつつ、汽車でベルリンへ向かったのが、昭和19（1944）年の明治節（11月3日）の日であった。

そのベルリンでも、連日連夜の爆撃を食らい、本社からは「スイスへ行け」という指令が来て、ひとまずウィーンへ落ちのびたのが翌20年の2月。機関車にぶら下がり、帽子に火の粉の焼け穴を作ったの強行軍だったが、静かな都ウィーンも、じゅうたん爆撃の連続で、ほとんど焼け野原となり、ナチスの権威を張ったインペリアルホテルの防空室では、バルカン各国の親独政権の大立者たちが、全く生色を失った顔で、ヒソヒソと語り合っていた。中には知り合いの顔もあったが、もっぱら英米とソ連をかみ合わせる権謀に、唯一の希望をかけているようであった。

### チロルアルプスに逃げる

在スイスの同僚諸君の努力にもかかわらず、ビザは一向に下りなかった、さらに西へ、チロルアルプスのスキーの世界的名所のキッツビューエルへ逃げのびた。3月というのに、まだ腰までもある大雪で、飛行機を持たぬドイツの空軍部隊が右往左往している中を、宿舎を探して歩くのは、泣きたいほどの思いだった。やっと石小屋ホテルという山小屋を見つけ、気丈な女主人アンナ、空軍将校の夫人ヒルデ、かわいい娘のモニカなどの親切に甘えて住み着いた。

既にドイツの崩壊は時間の問題になっていた。ビザ待ちの手配がやっとで、もう連絡も確かではなく、この山小屋で聞けるだけのラジオ放送

を聞き、故国の運命を探るのが日課となってしまった。食糧がない、ガソリンがない、女子供にまで竹槍やちを持たせて、最後の抵抗の猛訓練をしている、といったニュースも聞いた。

他に日本人もいず、強がりを聞かせてくれる武官連中も、希望的観測を話したがる外交官もいない。新聞も来ないこの山中で、独りラジオニュースだけに頼っていると、かえって的確な判断がつく。故国を取り巻く情勢は、日に日に悪くなるばかりで、「ムダな抵抗はよせ」「せめて救いのある收拾を」と、ひたすら神に祈るだけの追い詰められた気持ちも、わびしく耐え難いものであった。

4月末から5月、アルプスの雪解けは、一夜にして山々を白から緑に変える。今まで腰を埋めるばかりの大雪が、魔術のように、さあーっと融けて、紅、紫、黄の花々が一斉にほほえむ。見渡す限りの緑のチロルに、カランカランと、首の空き缶を鳴らしながら、放牧の牛が山へ上ってくる。空を飛ぶ銀色のアメリカのB29も、戦いは終わったというように、悠々たる編隊ぶりである。

それほど連合軍の進撃は速く、ドイツのラジオはついにヒトラーの自殺、ベルリンの降伏を伝えた。総統後任のデーニッツ提督は「米英には降参するが、ソ連には敵対する」と呼号していたが、この狙いも空しく、5月7日、無条件降伏の幕が下りた。山小屋の女主人が、目を潤ませながら、ヒトラーの写真の顔に黒い布をかけたその夜、山の上から見ると、長い灯火管制から、やっと解放された町の灯は、一つ一つ、生きているもののように美しかった。

その麓の町へも米軍がやって来て、山小屋の少年は、毎日明るい顔つきで、町へ遊びに出掛けるようになった。覚悟はしていたが、一向に米軍は捜しに来ない。山小屋の連中は「日本はまだ交戦中だし、戦争が終わるまで私たちがかくまうから」と、親切に言ってくれるが、そうもい

かない。そこで日本人ここにあり、とそんな景気のいい文面ではないが、米軍司令官に手紙を書いて少年に託した。自首して出たわけである。

5月20日、32回目の誕生日が来た。幼いモニカが花の王冠を作って、母から教えられたお祝いの言葉らしいことを言った。「今日まで捕まらなくて良かった」と、同宿の人たちが口々に言いながら、折り目正しく挨拶を述べ、夜は祝いのパーティーをやってくれた。この山で初めて見る婦人たちの礼装に、とうとう戦争が済んだ、という実感が湧いてきた。乏しい食糧から米も炊き、ぶどう酒もあける盛宴であったが、ウィーン空襲で、両親を失った15歳の少年オスカールが、そととドアを開けて、早口におめでとうを言い、ぼとりと何かテーブルの端に置き、逃げるように去った。肉の缶詰が一つ、今後いつ手に入るかも分からぬ貴重品である。いきなり涙が込み上げてきた。言葉は通じなくても、東西、人情に何の変わりもないのである。

## SS大将と監獄で同室に

米軍の中尉が兵隊2人を連れて来たのは、3日後であった。ライター、万年筆、何でも欲しがるがめついで中尉だった。その夜は、下の町の監獄に入れられたが、同室にドイツ軍人がいて、まめまめしく掃除したりしている。あまりボロのシャツを着ているので、ワイシャツを呈上<sup>ていじょう</sup>すると、涙ぐんで喜んだ。後で聞くと、パリ進駐のSSの大將で、後にロンドンで処刑されたという。何しろ日本人と見れば、すぐハラキリという訳か、第一に安全カミソリを取り上げられたのには驚いたが、ここでもライター、万年筆、パスポートまでいろいろ預けさせられて、一つも返ってこなかった。

80\*東のバートガシュタインには、日本の外交官や記者団が軟禁され

ているとラジオで聞いていたが、4日後にドイツ人、オーストリア人30人ばかりと、トラックに詰め込まれ、連れて行かれたのは逆にはるか西のシュツットガルトの収容所だった。

昔、ドイツが西部戦線の捕虜を入れておいた所で、鉄条網が三重に張り巡らされ、強力な照明灯を持つ高い見張り台があり、僕は外人バラックの個室に入れられ、その部屋の半分は一晚中、探照灯(サーチライト)に照らされるという仕掛けである。

僕の捕虜番号は2986号だったから、恐らく4千人を下らない人間がいたわけで、一斉点呼は広場へ全員を狩り出しているの壮观であった。外人バラックには、国別にして25カ国、86人いたが、言葉も生活も違うのがワイワイガヤガヤ、係の伍長もてこずって、ここでは強制労働もやらせなかった。

しかし意地の悪い米兵もいて、僕の顔を見る度に「パールハーバーを忘れるな」と浴びせかける伍長や、年中、僕の挙動ばかり注意しに来る軍曹もいた。僕には洗濯場が一番気楽な場所になったが、洗う物がなくてハンカチをボロボロにしたこともある。外人バラックの点呼は、毎朝整列、アメリカ国旗掲揚の後、姓を呼び上げると、名前を答えてクルリと後ろ向きになる奇妙なもので、姓はマーメッド、名もマーメッドというグルジア(現ジョージア)の元憲兵の場合など、毎朝の笑いのもとであった。僕の不動の姿勢が悪いというので、例の伍長から1日パン抜きに処せられたこともあったが、バラック長のハンガリーの大尉がそと差し入れに来てくれた。

パンは2斤ぐらいを、日によって八つか六つに分けるのだが、6等分の時は大歓声、それも角の方を取ろうとひしめき合い、スープの分け方にも監視委員ができるほどあさましい騒ぎであった。しかしこういう土壇場の裸の生活では、いやな奴もいるが、人間性の善良をさらけ出す人

の方がずっと多い。「お前は目をつけられているから」と、司令部前の掃除当番をいつも代わってくれたロシア人、黙って僕のパイプにタバコを詰めてくれたエストニアの老人、気を引き立てようといういろいろ遊びを工夫してくれたハンガリー人、5年の特派員生活で、一番印象の深かったのは、結局この50日であった。

調査の順番を待っていては1年もかかるので、また手紙を書いて、司令部に提出、やっとバートガシュタインの仲間の所へ送られることになった。晴れの出所というわけだが、ジープに片手を手錠でつながれて、800<sup>\*</sup>飛ばされたのには参った。大きく壊れた道や半分落ちた橋を渡るときは、もう駄目かと目を閉じる始末。それが800<sup>\*</sup>連続だからかなわない。たどり着いて仲間にもらったタバコのうまかったこと。同じ収容所でもこうも違うのかと思うほど、長い吸いさしが、ばかに白く目にしみた。

間もなく飛行機でフランスへ。ルアーブルから軍用船で大西洋を渡ってアメリカへ。もう8月になっていて、船は戦いに勝ち、故国へ帰れる、勇み立って陽気な米兵でいっぱいだった。ある日、甲板に出て潮風に吹かれてみると、たちまち米兵が一斉に足を踏みならし、ピューピュー口笛を吹く。何が始まったか、見当もつかない大騒ぎだったが、これがあの広島原爆の悪魔のニュースであった。もつともあの米兵たちは、新型の大爆弾で日本もすぐに降参するだろう、というくらいの理解しかなかったらしい。

アメリカへ着いての汽車の旅で、窓から見る風景は、ほとんどもう戦争を感じさせない落ち着きを取り戻していた。特にどの駅の付近にも見られる、うず高いスクラップの山、まだ十分使えそうな自動車も放り出してある。かゆに箸を立てて3分持つのが3分がゆ、5分立ってれば5分がゆ、という日本の情ない話を思い出した。これだけでも、アメ

リカの物量は日本やドイツとは桁違いだと、しみじみ考えさせられた。ワシントン付近の温泉ホテルに閉じ込められたが、日本はどうする、どうなる、というのが、ただ一つの話題であった。ところがある晩、数百台と思われる自動車が、一斉にクラクシオンを鳴らして、ぐるぐるホテルを回り続ける。耐え難い狂騒曲、誰も何とも言わなかったが、みんなよく分かっていた。日本はついに降伏したのである。涙も出ない思いであった。

さらにしばらくここで過ごし、シアトルまで大陸を横断し、船で日本へ送り返された。久里浜へ着いたのが12月6日、迎えに来てくれた同僚が、トラックの上で、同盟が共同となり、他に時事通信ができたと教えてくれたが、僕はどこかアメリカ兵のいない田舎へこもりたかった。5年間、外地から思い続けた日本は、まだ敗戦の混乱が続く、トラックの上から見る横浜や東京は、なめたように全く一物も残さぬ焼け野原が広がって、ヨーロッパの戦災都市より一層ものすごかった。道端で売るミカンの一山に「10」と書いてあるのを10銭と思ったら、これが10円。想像もなかったインフレが始まっていたのである。

日比谷まで来ると、ゲートルを着けた小学生がチョコチョコ走り寄って来た。5年前に別れた長男が小学1年生になっていたのである。敗戦日本の子どもにしては、丸々と太っていて頼もしかった。それから田舎へこもっていられたのはわずか1カ月ばかりで、当時、共同の社会部長をしていた横地倫平(ヨコリン)氏の手紙で、たちまちコロリと気が変わって上京。与えられた仕事は、何と毎日アメリカさんのおしゃべりを追いかける市ヶ谷の戦争裁判であった。

(新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」)

# 列車でベルリン脱出、最後の電報はヒトラー自殺

江尻進(元同盟通信ベルリン支局長)

1944(昭和19)年の秋には、ドイツの敗戦は時間の問題となっていた。9月3日にベルギーの首都ブリュッセルが英軍に占領されてから、ドイツ国境へ向けての大攻勢が始まった。そして10月24日には、ついにドイツ領内に侵入され、国境線の歴史の町アーヘンが連合軍に占領された。東からはジューコフ軍がポーランドを突破し、ドイツ国境線に迫っている。今やドイツの全領土は、空陸から強固な鉄網をかぶせられ、猛火の洗礼によって殲滅せんめつされる、といった不安におののいていた。

古野伊之助社長から訓電を受け取ったのは、その頃である。「戦局重大化しつつある情勢に鑑み、ドイツ敗戦の場合のヨーロッパ全支局の処置につき貴下の決意を問う」という趣旨のものであった。これに対して私は数日後に次のような電報を打った。

一、特派員はなるべく多く中立国に分散し、ドイツ敗戦後も米英情報  
を入手して打電を続ける。

一、ドイツ残留組はいずれにしても、生死の保証ができないので、本人の希望に従い、ベルリン残留組、ドイツ政府の待避地への随伴組、および中立国(スイス)への脱出組に分ける。

こうしてできた全ヨーロッパ特派員の配置計画は次のようなものになった。

- ・ベルリン残留組 友枝宗達
- ・ドイツ政府へ随行 江尻進、樽井近義、邦正美
- ・チューリヒ 堀口瑞典すえん、池上幹徳

・リスボン 佐藤重雄、本田良介

・ストックホルム 斎藤正躬、佐々木凛一

・南独で避難、中立国脱出待機 菊地守、小田善一

その頃、ベルリンは各地を追われた特派員のためになっていった。イタリアからの佐々木特派員、パリからの菊地特派員、ブダペストからの小田特派員らが集まり、待機中であつた。支局は日米開戦と同時にDNB本社前のAP支局をそのまま接收し、これが爆撃で使えなくなつてからは、その中庭の1階に新事務所を作つた。家具会社の展示室の跡だから広々とした部屋だ。

その頃、入手困難の机や椅子もたちまち10人分ぐらいそろつた。正面の幅7呎ぐらいの壁面は天井までいっぱいに作り付けの本棚で埋め、数十に分類した切り抜きのファイルを並べた。本社からいつ、どんな注文が来ても1時間ぐらいのうちにはこなそうといった資料である。

パリから来た菊地特派員は、毎日「タイムズ」を切り抜いて、ユーゴのチトーの運動を追い始めた。これは戦後の処理にも重要な影響を及ぼす問題だからというので徹底的に調べ上げたのはいいが、DNBの対日放送の中に入れて、毎日数百語ずつ分割して送つたところ、それが延々1カ月以上続き、1冊の本の分量になつたのには驚いた。その頃はヨーロッパの戦局は敗戦情報ばかりだから、むしろヨーロッパの将来を判断する資料を送ろうといった働きぶりである。

## 握りずしで送別会

佐々木特派員をストックホルムに送り出したのは、クリスマスの近づいた頃であつた。支局でやつた送別会には池上特派員の丹精込めた握りずしが出た。ノルウェー帰りの兵隊から、たること買入れたニシンを



塩抜きして作ったものだが、こはだずしの感じであった。ドイツ人助手の男女4名も参加し、飲むほどに踊るほどに夜勤アルバイトのルンゲ嬢は酔いつぶれて、どうしても帰宅できない。支局の机の上に担ぎ上げて寝かしたが、間もなく大空襲。やっと地下室に担ぎ込みホツとした。

池上特派員のスイス入国が許可されてベルリンを出発したのは翌年の1945年1月11日であった。中立国のスイスはドイツ領と間違つて爆撃されないように至る所<sup>ところ</sup>煌々と電氣をつけていた。「電灯輝く平和なチューリヒ」からの葉書をもらつても、実感がピンとこない感じであった。

その頃はわれわれの宿にしていたベルリンの一流ホテルでも、暖房も風呂もなくなり、外套<sup>がいとう</sup>を着てベッドにもぐり込むというありさまで、ベルリンの新聞も2<sup>ツ</sup>になっていた。1月末には、日本総領事館を中心に日本人の避難準備の動きが活発になってきた。新聞人はベルリン西郊40<sup>キ</sup>のケチン村に共同の避難所を1軒借り入れ、手回り品など運び込んだ。赤軍がベルリンの東から攻撃をかけてくるだろうから、西側の方が安全だろうとの計算であった。しかし、いざベルリン攻略戦が始まったら、赤軍は大きく後ろを回つて西側に出てしまったので、真つ先に攻撃を受け、利用する暇もなかった。

小田、菊地両氏は、ペタン政府の亡命先の南独ケーニヒシュタインに避難することとなり、2月2日にベルリンを出発した。ここにはフランス系の人たちが多数集っているから、多少取材できようし、またここを足場にスイスに潜入することもできようという計算であった。ところが両氏を送り出した翌2月3日は米空軍千機による昼間大空襲となった。この日に限り支局の地下室で待避したが、10<sup>分</sup>と離れぬ道路上に文字通りのじゅうたん爆撃を浴びせかけられ、体ごと床にたたきつけられた。静かになつたので出て見たら、向かい側のDNB通信社は直撃弾で崩れ

落ち、炎々と燃え上がっている。新聞街が狙い撃ちになつたらしく、この辺り一帯が一挙に廃虚になつてしまった。小田、菊地両氏にとっては1日違いの幸運な出発であった。

## 日本大使館に臨時支局

支局は崩れはしなかったが、そのままでは使えない状態。非常持ち出し用のかばん類はそのまま支局の棚の上に置きつ放しだが、中央電信局への電信線、電話線も通じない。板張りの窓からは光は入らず、電灯もともらないから室内も真つ暗だ。仕方がない。支局前に自動車を止め、これを臨時支局として電報を書き、できたら自動車を運転してそのまま中央電信局に移動するという事になった。しかし2月8日には大使館内に机をもらつて臨時支局を再開し、その日からDNBを通じての対日放送も再開できるようになった。

もう戦局は絶望的である。3月にはベルリン東方70<sup>キ</sup>のシュトラウスベルグに持っていた週末の避難所に行くのが難しくなってきた。夜半には風に乗って砲声が聞える。闇に包まれた森の一本道を一人で車を飛ばして行くと、赤軍の落下傘兵が降りてくるといううわさが、まことしやかに伝えられ、ライトの中に飛び出してくるウサギにもどきつとする。

本社から送金不可能の状態を予想し、本社に一括送金を要望したのが2月上旬。計算してみると月平均の支局経費が1万6千円(9千5百<sup>円</sup>)であるから、10カ月分もらつておけば、どこかに籠城して仕事を続けても、まず1年は持つであろうとの推定が立った。そこで、こうした根拠を示して「16万円送れ」との要求を出してみた。今の金にすれば、8千万円以上にもなる大金であるから、とても送ってはくれまいと予想していたが、2月10日と18日の2回に分けて16万4千円送金してきたのは、

さすがに大同盟であると驚いた。と同時に、これで本社との連絡も終末に近づいたと心細くなった。

## 送金分を全員に配る

中立国に出る場合を予想して、スイスの堀口特派員に頼んで、ドルとスイス・フランの紙幣を集めていたが、本社からの送金を待って、これを全員に分割することになった。終戦の年の小さな日記帳が、ヨーロッパ従軍6カ年の唯一のメモであるが、これによると次のように配分している。

|       | マルク    | スイス・フラン | アメリカ・ドル |
|-------|--------|---------|---------|
| ・小田善一 | 1万5000 | 1500    | 180     |
| ・樽井近義 | 6000   | 1500    | 230     |
| ・菊地守  | 7500   | 1500    | 230     |
| ・友枝宗達 | 2万     | 5000    | 800     |
| ・江尻進  | 1万     | 2000    | 280     |
| ・邦正美  | —      | 1000    | —       |

ベルリン残留の友枝君には一番多く金を残した。ドイツ人の使用人がまだ2、3名残っていたので、あと2、3カ月は給料を支払い、退職手当の面倒を見てやっってもらうためだった。

いよいよベルリンの最後が近づいた4月13日、しかも金曜日の午後、ドイツ政府への随伴組は至急用意を整えてポツダム広場の宣伝省新聞クラブ前に集集せよとの連絡である。その数日前、ストックホルムの斎藤特派員から届いた椅子付きのリュックを背に、かばん一つとタイプを両手にして駆け付けた。樽井君も邦君もこれに随行する予定だったが、最後の瞬間にベルリンに残りたいと申し出たので、同盟からは私一人の参

加となった。

郊外のミッヘンドルフ駅から夜暗に乗じて出発した。これがベルリン脱出の最終列車であった。行き先は乗車後も極秘である。とにかく南下していることだけは方角で分かる。右に左に近づく砲声は敵戦車部隊だという。東西からの挟撃で、わずかに残された狭い地狭を、ラグビー選手のようにかき分けながらノロノロと南下、1週間固い座席に座ったまま屋となく夜となく走り続ける。途中数回の爆撃に遭う。雪明かりの鉄路を、荷物を抱えて5キ歩き、次の列車に乗り継ぐ。南独のガルミッシュにたどり着いたら、これは政府機関の移転先で公務員しか駐在を許されぬという。2日で追い出される。

フランス軍の進撃で、スイスへの脱出ももう不可能である。それではと、大島大使一行をはじめ、各国外交団の集結していたチロルのバートガシュタインに向かう。4月27日到着。下の村落まで米軍が迫っている。出るに連れぬ。強引にホテルのベッドを獲得してホッとした。ベルリンを出発して15日目である。

## ヒトラー自殺が最後の記事

それから4日後の5月1日の夜半には、ヒトラーの自殺が伝えられた。雪の降りしきる夜であった。大島大使やドイツ側から取材して電報を書き上げたらもう夜が明けていた。そのころは検閲の関係で英独文しか許されないの、英語で書いた電報を、深い雪路をかき分けて電信局に持参、チューリヒの堀口特派員に電報した。帰国してから新聞を見たら、これがベルリン支局長としての最後の電報となって載っていた。

間もなく米軍による抑留生活が始まった。ベルリンに残留予定の樽井君が最後に自動車で脱出して米軍に捕まり、連行されてきた。さらに小

田君がケーニヒシュタインから護送されてくる。しかし、宿舎が離れ離れで連絡がつかない。

8月4日アメリカに送られることになり、バートガシュタインを出発、フランスのルーブル港の郊外で船待ちの抑留生活をやっていたら、菊地守君がジープで送り込まれてきた。これできかく同盟の4人の安全が確認された。

あとはベルリンに残った友枝君と邦君だけである。12月6日アメリカから浦賀に到着したら、日本の終戦前に両君が無事日本に帰着しているのが分かった。ベルリン市内と近郊で、赤軍の猛攻撃と、その後の残虐行為を目の当たりに経験したが、ソ連の参戦前にモスクワ経由で送り返された。

考えてみれば、あの動乱の中で、全員が生きて帰れたのは幸運というほかはない。ベルリンで別れるときには、もう二度と会えるとは預期しなかった旧友たちと、東京で再会できたのは、不思議な感じであった。その人々があるいは死生を分かち、あるいは大きく違った道を歩くようになって今この姿はさらに感慨深い。

(新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」)

## 遭難前夜のチャンドラ・ボース

福岡誠一(元同盟通信南方総社長)

昭和20(1945)年8月17日の午後、私は、南方総軍の軍政担当参謀

をやめた直後の多田稔中佐から耳打ちされた。1、2時間後に、チャンドラ・ボースがサイゴン(現ホーチミン)飛行場を通過してソ連勢力圏へ脱出の途に上ろうとしているというのだ。

ボースが乗るはずの飛行機は、表向き日本内地に帰還することになっていたが、途中、故障か何かを口実に旅順かどこか、関東州内の空港に不時着し、ボースはソ連勢力圏内へ脱出するという筋書きであった。ボースは、あくまでインド独立の同志と運命を共にする決意だったので、この構想には頑として同意しなかったが、インド独立の素志貫徹するためにはこのほかに道がないというので、とうとう同志の説得に従うことになったというのである。

私は南方総社の後始末などで、まだサイゴンにどれくらいとどまるか分からないので、大急ぎで社長への報告や家族に対する最後の便りをしたためた。ボースの随員で旧知の人に頼んで、内地で投函してもらおうと思い、日本の切手を貼って飛行場に駆けつけた。

やがて、ボースを乗せた飛行機がバンコク経由で昭南(シンガポール)から到着した。ボースはサイゴンで別仕立ての飛行機に乗り換えるのだが、この飛行機は、内地に帰還する将官連や多田前参謀などで全部座席が予約され、インドの志士たちが同乗する余地がない。結局、多田中佐が自分の席をボースに譲って、他のもう一つの席も副官のハビブ大佐に割いてやり、ボースと副官の2人だけが乗ることになった。インド独立政府の宣伝部長アイヤーなど随員は、翌日の別便に乗ることになった。

ボースの乗り換え機は、陸軍自慢の「飛竜」で、出発までには小一時間の余裕がある。この間に私は、ボースと肩を並べてぶらぶら飛行場を歩きながら話し合った。いつものことだが、アイヤーもハビブもないので、2人きりであけすけにものが言える。ボースの話し具合から、彼は関東州で「行方不明」になる筋書きを承知していたようだし、彼の生

涯の目的はインドの独立。そのためには手段を選ばないという固い決意を私は十分に知っていたので、「ソ連圏脱出計画」はもはや疑問の余地がないものと察知した。

「いよいよ出発の時間がきた。私はボースの手を握って」「ご成功を祈ります」と力を込めて言った。「ありがとう。大いにやります。決して気落ちなどしていません」とボースは口を結んだ。「飛竜」は午後5時15分(日本時間も同じ)サイゴンを北方に飛び去った。そして、翌日の夕刻、多田中佐やアイヤーの一行がサイゴンを飛び立つときには、ボースの遭難が知らされていた。

彼の乗機は台北の松山飛行場を離陸直後、あつという間に墜落。前方の座席にいたボースは重傷、病院に入ったが、その夜、ついに落命、誠に惜しい人物を失ったものである。

この飛行機事故には数々の謎がまつわりついている。第一にどうして墜落したのかという疑問。これについて私は一つの仮説を持っている。もちろん、確たる証拠があるわけではないが、私は操縦士の自決説を心ひそかに抱いている。

私が内地への手紙の投函を懇ろに操縦士に頼んだ。若手の腕の立ちそなうな少佐操縦士であった。彼は私が手渡した手紙の端をつかんでじっと私を見つめた。彼の手と私の手が一緒に手紙を握っているのだ。やがて操縦士は「よろしゅうございます。もし、無事に内地へ着いたら必ず投函します」と半ば切り口上のように言う。異常な言い方である。私は今もなお、この瞬間の情景をはっきりと記憶している。

ボースの最期については、まだいろいろの疑問が残っている。彼が携行していたという巨額の宝石類の行方もその一つだ。

〔新聞通信調査会報〕第31号 1965年7月1日発行